14.5
661

報年亞東

輯一第 年九十和昭

14. 5-661
1200501218138

苛烈なる世界戰局

世界戰局とわが立場
大東亞總力の結集
米國戰時態勢管見
距離と量の大東亞戰局
歐洲戰局の決戰期

朝日新聞社編

始

√
89

朝日東亞年報

昭和十九年 第一輯

苛烈なる世界戰局

朝日新聞社編

14.5
661

序

戰局はいよいよ重大なる段階に突入し、太平洋正面においては、敵の物量を恃む反攻がつひに内南洋に入つてわが本土に迫り、南方洋上の島嶼地帶より、北方の基地近くにいたる廣大なる戰域に熾烈なる戰鬪が展開されてゐる。大陸よりする反攻はわが先制により挫折したものの、不遑にもわが北九州を盲爆するなど、反攻の功を一擧にかち得んとしてゐるもののごとくである。飜つて歐洲のいはゆる第二戰線も大擧西歐海岸に企てられ、これに對するドイツの報復爆碎が非常な破壞力をもつて行はれて、しばらく對峙の姿勢にあつた東西の兩戰局はにはかに決戰的情勢を著しくしてきた。大東亞諸民族の共存共榮の自覺が昨年の大東亞會議を畫期として頓に昂まるに對し、ソ聯と米英との扞格は次第に擴大して、政情の推移にも刮目すべきものがある。また航空戰力の重要度が急激に加はつて、戰鬪における速度の水準が一變したこと、科學研究の諸結果が戰鬪の各部面に數々の變化を與へてゐることと、および戰鬪の消耗性と軍需生產性の著大なる增進が、補給生產能力の戰力消長の上に占むる位置を甚だ重からしめてゐることなど、戰爭はまさに相貌を變へるにいたつた。いまや戰局はこれらの總力をあげて展開されてゐるのである。朝日東亞年報昭和十九年第一輯は「苛烈なる世界戰局」を題目として擇び、この時機におけるわが國の立場を大觀するとともに、東西兩戰局の戰略的意義と政略的意圖を各個に檢討し、さらにこれに處するわが必勝の態勢を論考することにしたのである。

本年報は昨昭和十八年版以來、四季分冊刊行に改めたが、世局の變轉が急激になつて、いよいよ分冊して急速なる刊行を要するに反し、出版事情の急變に遭遇して、かへつて刊行期日を遲延するのやむなきにいたつた。昨年は余儀なく第三輯をもつて打切り、ただちに本年第一輯にとりかかつて、昨年第四輯として收錄すべき分をもかねて速行を期したところ、これまたかへつて遲延を甚しくするやうになつたのである。しかし急轉歩の事實を個々に追

ふにとどまらず、その底に流るる動向、その動向が有する諸般の意義を考究することは、今後の推移を按する上の指針として注目すべきであり、殊に當今のごとき史上稀にみる大轉換の途上にあるときには特に深き檢討と大局的綜合觀察を肝要とする。刊行の期日は意のごとくならざるも、かやうな點に公刊の價値がなければならない。加ふるに本第一輯は校了眞際にいたり東西兩戰局に新たな情勢が展開したため、一部の稿を改めたので、さらに刊行を延期した事情もある。豫定よりおくれながらも、なほこれに最新の內容をもつて補はんがためである。

本第一輯は卷頭の「世界戰局とわが立場」につき朝日新聞社副社長緒方竹虎氏が筆をとり、ほか諸篇はいづれもそれぞれの部面を擔任する本社社員の執筆によるものである。そのうち恒川眞氏は本篇執筆ののち間もなく日本放送協會に轉じてゐる。

なほ朝日東亞年報はもと本社の東亞問題調査會において編輯したものであるが、その後同會が廢せられ、代つて中央調査會を置くにおよびこれを引繼ぎ編輯したところ、昨年末同會も廢せられたので、本第一輯よりは本社出版局において編輯することになつたものである。

昭和十九年六月

編者しるす

目次

苛烈なる世界戰局

序

世界戰局とわが立場……緒方竹虎……一

一　第二戰線の展開と歐洲戰局——二　米國の主正面は飽くまで日本——三　ニミッツ作戰は對日反攻の根幹——四
太平洋民族鬪爭の將來と日本

大東亞の戰局と總力結集

大東亞總力の結集……本郷賀……一〇

一　政治的大攻勢の展開——二　總力戰における國民精神の問題——三　「聖戰」における團結の基礎——四
團結を阻害するもの——五　大同團結の根本方針——六　大東亞會議の成果——七　世界觀の政治化——八　東亞の叛逆者——九　共同宣言の實踐

距離と量の大東亞戰局……天藤明……二八

一　敵の反攻主軸線——二　東印度の資源を狙ふ——三　航空基地の好適地を狙ふ——四　航空機の量による反攻

目　次

——五　西南太平洋戰線——六　中部太平洋戰線——七　北部太平洋戰線——八　在支基地化による米の反攻——九　印緬戰線——十　時の利に立つわが防備態勢の强化

南方火線の示唆……門田圭三……四五

一　南太平洋の激鬪……1　ラバウル戰局總觀……2　ソロモン戰線の展開……3　ラバウル戰局の急轉……4　ラバウル戰局の展望——二　敵の戰術と技術の檢討……1　南太平洋における敵の戰法……2　航空機の量……3　飛行場設定の技術……4　電波探信儀——三　技術と量の問題を克服

印緬戰線の意義と特性……根津菊治郎……五六

一　その重要性——二　「ビルマ奪回」の內幕——三　戰線の特異性……1　地形の克服戰……2　熾烈なる航空決戰——四　印度解放戰の新展開——五　印度進攻の意義……1　英陣營の狼狽……2　米、蔣への打擊……3　印度への影響——六　國民軍の祖國進軍——七　敵反攻の動向

歐洲戰局と反樞軸の政情

米國戰時態勢管見……細川隆元……七一

一　米國民の戰意——二　生產力の問題——三　選擧戰と對戰爭態度——四　戰時社會の問題——五　人の給源が弱點

歐洲戰局の決戰期……聽濤克己……八四

一　對獨決戰の展望——二　歐洲反攻の場所と時期——三　米英ソの政治攻勢——四　ソ聯の進出と米英の讓步——五　遲延する第二戰線——六　決戰に引摺られる米英

不拔なるドイツ戰力の基底……濱田常二良……九九

一　ドイツ國民の士氣と團結——二　ナチス黨および國防軍の組織力——三　島政策と前線兵士の數——四　國防軍と青年層の兵士との關係——五　農業および軍需工業の勞働力——六　銃後勞働力の配分と食糧上の安定——七　軍需生產の躍進と理性的な態度——八　科學による戰鬪力增强と新規資源の製造——九　指導者の政治と國民の氣魄

カイロ、テヘラン會談と反樞軸の意圖……恒川眞……一一二

一　カイロ、テヘラン會談の意義——二　カイロ會談と日本處斷の白晝夢——三　いはゆる戰後における支那の地位向上——四　テヘラン會談と第二戰線——五　ヨーロッパ支配についてのソ英の對立——六　次に來るべきもの

國內總蹶起の措置

國民總蹶起の態勢……田原恒男……一二五

一　議會運營の戰時体制化——二　運用の適正に論議集中——三　國民運動の强化を力說——四　國民運動發展の方向——五　決戰非常措置要綱——六　三位一体の總蹶起へ

本年の財政と國民生活……松井透……一三九

一　五百九億圓の決戰財政……1　十九年度豫算の規模……2　一般會計も準軍事費……3　臨軍への他會計繰入れの增加——健全性の指標……4　共榮圈共通財政の躍進……5　臨軍、一般會計の一体化——二　戰費充足に大增稅……1　十九年度增稅の靈期性……2　稅率引上げに重点を指向……3　新興所得階層をも捕捉……4　勤勞所得擴稅者新に二百萬人……5　少額預貯金の非課稅撤廢……6　間接稅は禁止稅色を濃化……7　今後の趨勢は大衆課稅——三　國民生活水準の確保……1　國民所得六百億圓……2　消費資金更に十五億圓壓縮——消費の戰時的組織化……3　食糧確保が戰爭意志の中核……4　貯蓄增加の基底は生活の安定合理化

日滿食糧計畫の一體性……柴田敏夫……一五六

一　戰爭完遂の二大要件——二　日本の措置——三　內地の食糧事情の輪郭——四　朝鮮および台灣の增產計畫——

目次

五　滿洲國の食糧計畫の發展……1　戰時緊急農產物增產方策の確定まで……2　緊急農產物對策の內容……3　荷對策……4　大農地造成計畫の全貌——六　食糧確保の日滿一体性

資料と解說

グルーの「東京報告」批判……岡本鶴松…一六八

一　米國政府、國民への影響多大——二　戰爭の原因を日本に轉稼——三　對日戰の困難を强調——四　日米交涉を歪曲强弁——五　自ら矛盾に陷る——六　反間苦肉の言——七　遂に日本侵攻の暴言——八　米國の世界征覇思想

獨立前夜にある印度の民族と經濟……岸　克己…一八〇

一　獨立への途ひらく——二　民族的桎梏の深刻性——三　寶庫印度と英の搾取……1　農業國印度と農村の窮乏……2　印度工業と英の阻害策——四　大戰の影響と民衆生活——五　獨立氣運の醞釀

朝日東亞年報日誌……一九二

世界戰局とわが立場

緒方竹虎

一　第二戰線の展開と歐洲戰局

スターリングラード以後ほとんど膠着狀態を示してゐた歐洲の戰局は、六月六日午前一時、米英の反樞軸軍が西部ヂイ灣とセーヌ灣およびフルマンディー半島に向つていはゆる第二戰線を展開してきたことによつてバランスが破られた。米英の希望は、なんとか第二戰線の實施にいたらずして戰爭を終局に導くことであつたらう。一九四〇年、得意の鼓舞激勵政策のみでフランスの倒るゝを見殺しにしたことからでもそれは想像されるし、テヘラン會談で第二戰線を確約したロの下から、英國の新聞が「第二戰線をつくるためには山脈を一つ奪取するだけでも數箇月戰ひ、多數の死傷者を出さねばならぬが、これを英軍將兵に問へばなんと答へるであらうか。かうした條件のもとに第二戰線をつくることは馬鹿氣たことではないか」……デーリー・エキスプレス……と平氣で書いてゐたのでも想像されるのである。もちろんソ聯は行懸りからも矢の催促であつたが、結局鼓舞激勵政策の線を超えて希望せざる第二戰線を賭けねばならなくなつたのは、反樞軸側が神經戰に破れて、米英らしからぬ乾坤一擲の決戰に乘り出したとみるべきであらう。戰爭開始後に判明したところによれば、最初の豫定は六月五日

で、天候のため二十四時間延期を余儀なくされたのであるが、アイゼンハウアーはこのうへ延期してはもはや士氣が保たれないといつて骰を投げたといふ。それは要するに神經戰の破綻であるが、同樣のことは第二戰線の決行全般についてもいひ得ることであらう。

この稿を草するまで、獨軍總司令官ルントシュテット元帥は、反樞軸軍の主力の鷹ふところを見究めるために滿を持していまだ十分の作戰を展開しない。隨つて戰局の歸趨は豫斷し得なかつたが、大局からみて第二戰線の開始がドイツのために「久しい待望の機會」であることは言を要しないところで、五月末わが大島大使が總統大本營を訪問したときも、ヒットラー總統は六月上旬第二戰線の來ることを綜合判斷的に豫想し意氣軒昂たるものがあつたとのことである。ヒットラー總統の方略は、要するに全力をあげて第二戰線の擊滅に邁進することである。それがために東部戰線も豫め可能の最大限まで縮小した。イタリアにおいて反樞軸軍を擊破することは、わづかな援軍の增强によつて少しも困難でないが、わづかの援軍にしろこれを割くことは、反樞軸の牽制にはまることにほかならないので、古都保存の名のもとにローマから軍を撤收する。すべては第二戰線擊滅に全力を注ぐためであり、作戰のうへにも新機軸を出して斷じてこの神機を逸しないつもりだと、自信滿々であつたと傳へられる。

この場合最も興味をひくのは、ソ聯の態度である。第二戰線と名づくる以上、定石としては西部と東部の兩戰線が相呼應してドイツ擊摧に協力しなければ意味をなさない。しかるに何人の豫想にも反して、ソ聯が第二戰線展開とともにまづ行動を起したのはフィンランドのカレリア地方で、その後漸次東部戰線全般に動きをみせてはゐるが、これはそも〳〵何を語るか。

元來米英とソ聯は、その政體からも、支配階級の思想からも、到底永く提携し得る間柄でない。一九四二年獨ソ戰爭の勃發とともに三國の間に提携ができたが、それはドイツといふ共同の敵に對する一時的の苟合で、戰爭目的を達した後において米英とソ聯と相容れないのは、改めて說明を加へるまでもない。したがつてこれを米英よりすれば、獨ソの死鬪は兩虎俱に傷く意味において思ふ壺であり、第二戰線がテヘラン會談以後も久しく懸聲ばかりで遷延に遷延を重ねたについても、多分に政略的意味があつたと考へられる。ソ聯側においても同樣の懸引は戰線の蔭に隱顯してゐる。第二戰線を執拗に督促する半面には、戰後あるひは次の戰爭の準備を少しも懈らない。米英となんらの交涉なく出し拔けにバドリオ政權を承認し、十年ソ聯に亡命してゐた伊共產黨領袖エルコーリを遣二無二これに割込ませて、實質的にイタリアを赤化しようとしたのも、その對土政策と相まつて將來地中海に發言權ないし出口を確保せんための準備であり、最近南コーカサス地方の防備をしきりに增强し、イラン方面に軍需工場の建設を急ぎつゝあるなども、明かに對獨戰備ではなくて對米英の準備としか考へられない。戰後の國際情勢を思へば、米英が獨ソ相鬪ふことによつて兩虎俱に傷つくのを內心冀つてゐると同樣に、ソ聯も第二戰線の展開によつて米英が相當程度消耗することを希望してゐるのになんの不思議もないのである。今度は米英が東部戰線の活潑化を督促する順番であるが、問題は極めて微妙で、第二戰線の進展いかんによつて米英對ソ聯の關係がどうなるかは容易に逆睹を許さない。

かうした背景のもとにおける戰爭は、戰爭であると同時に外交であり、戰後處理に關する見通しと算盤とが確然と立つまでは、戰局はなか〳〵決定的動きを見せるものでない。それは第二戰線展開前も展開後も同じである。商人國たる英國にとつては、戰爭の勝敗は最後の帳尻の赤か黑かのみである。したがつて同盟とか共同戰線とかいふものも、その英國の利益のために利用價値の存する間のみの拘束で、帳尻を黑字にするためには同盟國を見殺しにすることもやむを得ないとする。しからば英國の、あるひは反樞軸の狙ひはどこにあるか。

この意味から、英國の月刊雜誌「十九世紀とその後」の昨年九月號にあらはれた「集成か分散か」といふ卷頭論文はきはめて興味多いものである。すなはち

勢力均衡を、もうお拂箱になつた政策だと相手にしないのは近頃の流行だ。しかしこれは政策ではない。英本國および英帝國にとつては自存のために必要な不易の條件である。歐洲本土において無敵の主人公となる國は同時に英本國の主人公ともなるであらう。これは古い眞理で、前代の英國人には親しい考へ方であつたが、いまやだんだん忘れられようとしてゐる。萬一この考へ方が英國民の意識のうちから消え去つて國策を啓發しなくなれば、英國の時代はすぎ去つてしまふだらう。英國は大陸において同じ一國を宿敵とする理由がない。英國の唯一の敵は歐洲を支配しようとする國家または國家の聯合である。この敵に對し英國はいつでも用意し、いつでも同盟國を持つてゐねばならぬ。敵が變ると同樣味方も變つて行く。昨日の敵は明日の同盟國となり、昨日の同盟國は明日の敵となるであらう。

英帝國の力に歐洲大陸における同盟國の力を加へれば、英帝國が強くさへあれば、制覇を狙ふいかなる列強に對しても勢力の均衡をとることができよう。この簡單な機構が「勢力の均衡」である。一九三九年九月英國は均衡機構を發動してここに第二次世界大戰がはじまつた。英國は全くこの均衡を保全するために戰つたので、他の理由で戰つたのではない。……（後略）（註）

「十九世紀とその後」の卷頭論文が果してどれだけの權威を有するかはもちろん問題であるが、保守的な英國の、そのまた保守黨的雜誌の卷頭に、英國の支配層と全く思想的に沒交涉の論文の現れることは想像されない。一文の趣旨は、英國の戰爭目的はポーランド救援でもナチスドイツ打倒でもなく、歐洲における「勢力の均衡」にあるといふのであるが、「英國は大陸において同じ一國を宿敵とする理由がない。英國の唯一の敵は歐洲を支配しようとする國家または國家聯合である」と喝破してゐるところに、もちろん英國の注文通りにはいかぬまでも、今後における米英ソ關係の含み、それに關聯する歐洲政局の波瀾を想像せしめるのである。そして、これは第二戰線の展開後においても何等修正を必要としないであらう。

（註）同盟通信「海外電報」長谷川才次氏譯

二　米國の主正面は飽くまで日本

この歐洲戰局をめぐる空氣は明かに太平洋の戰局に反映してゐる。太平洋戰局と歐洲戰局とを通じ、米國の主正面が日本であることは少しも疑問の余地がない。テヘラン會談で米英ソが歐洲第二戰線の打合せをしたといつて、米國の主正面が大西洋にあるごとく錯覺したり、近ごろ有名なニューヨーク・タイムスの軍事評論家ハンソン・ボールドウィンが日本難攻論をとなへ、その論文が一九四三年のピュリッツア賞を得たといつて、少しでも安易な觀測に耽つたら、それこそ非常の危險である。それは西歐の第二戰線と呼應して、サイパン方面に對する反攻が曾てない熾烈さを示してきたからいふのではない。米國は華府會議以後、さらに溯つていへば一八九九年の支那に關する門戶開放機會均等宣言以後、國策として東洋制覇の野望を露骨にし來つた。それは決して一政府の思ひつきによる政策でない。掘下げていへば、それは二十世紀とともに民族主義の時代のきたことを意味し、太平洋が民族鬪爭の中心となつたことを意味するのである。米國で最初に太平洋時代のくることを豫言したのはブカナン大統領のもとの國務長官シュオードで、爾來ヘイの支那に關する門戶開放機會均等宣言もその後の對東亞政策もみなこの線に副つて發展してをり、今回の戰爭も、これを單なる全體主義對デモクラシーの鬪爭のごとくみるものがあれば、それこそ皮相の觀察といはねばならぬ。アメリカ民族は傳統的に西進の波に乘つてゐる。同時にその無作法な資本主義が支那四億の消費力と地下資源に目をつけたときに、こゝに太平洋をめぐつていつかは世界史的に激烈な民族戰爭を展開せざるを得ないのである。

華府會議はたしかに一時期を畫した。當時英國は大戰の創痍から、たゞその世界最大海軍國の面子を保維するに汲々たるのみで、米英海軍の均等主義のためには他のすべての條件を犧牲にしたが、米國はこれを機會に英國をして日英同盟を廢棄せしめて日本を東亞に孤立せしめ、九箇國條約を締結してその年來の門戶開放機會均等宣言を成文化し、さらに五・五・三の比率によつて西太平洋における日本海軍の絕對的優位を封じ去つたのである。華府條約以後日米の衝突は必至の運命であつたといふも過言でない。少くともその後における米國の對東亞政策は、形はいろ〳〵であるが、東亞の盟主たる日本の地位を覆すことに向けられたといへる。ルーズヴェルトの增長慢は、世界の兵器廠を以て自ら任ずる一方、英國の頽勢に乘じ、アフリカ、西亞、印度などにまで米國の勢力圈を設定しようと焦つてゐるのがみえるが、これは差當り資本主義の進出で、米國の世界政策の重點がどこまでも東亞にあり、したがつて戰爭の主正面が太平洋にあることは、決して見誤つてはならない。さればこそ、スターリンの强要に對し、第二戰線の準備は一應進めてはきたが、日本に對する侵攻は「ニミッツ作戰」の名においてその全海軍を傾けんとしてゐるのである。

三　ニミッツ作戰は對日反攻の根幹

しかるに、英國はこの點事情を異にする。英國にとつてはどこまでも歐洲が主正面である。印度を有する英國はその防衞のためにももちろん東亞に對し强い執着を持つてゐるし、支那に多年植ゑつけた勢力も容易に後退させようなどとは考へないで

あらう。幸にして英國が今度の戰爭に生殘つたならば、彼らは必ずやその傳來の執拗さと手練手管とをもつて東亞における失地回復をはかるであらうことは、想像に難くない。しかし歐洲の戰線だけでも受け應へのできない英國としては、いま米國の尻馬に乘つて乏しい武力を太平洋の戰線に割くことは全く不可能である。それで英國はなんとしても太平洋正面に消極的たらざるを得ない。

米國太平洋艦隊司令長官ニミッツは短期の前線視察を行つたのち、二月九日眞珠灣の艦隊司令部において記者團にがニミッツに對し「われわれの主要目標は太平洋をまつすぐに橫切り、支那沿岸を目指して安全な海洋路を啓開するにある」と語つた。ニミッツ作戰なる言葉の喧傳され出したはじめである。このニミッツ作戰は、いふまでもなくガダルカナルの反攻以來、敵將マックアーサーによつて指揮されたいはゆる島傳ひの北上作戰に對し、一氣に中央進攻路をとつてフィリピンを衝き、ついでフィリピンを根據として東南支那海岸にいたる海洋路を確保、それによつて支那大陸に基地を獲得し、日本に對し全力をあげて總反攻を展開するといふのである。このニミッツ作戰はマックアーサー作戰の捗々しくない今日、米國の對日戰略の根幹をなすものと斷じて差支ない。この稿を草する頃ニミッツは眞珠灣にあつて、サイパン强襲作戰を種にいろんな放送を飛ばしてゐるが、東南支那海岸にいたる海洋路の啓開を戰略の根幹となしてゐる點は二月九日も今日もなんらの變化なしとみて誤らない。なんとなれば假りにサイパンに基地を得たとしても空襲のみでなん決定的結果をあげ得るものではないからである。

ニミッツ作戰はいはゞ常識作戰で、もし東南支那にいたる海洋路の啓開が容易であり、注文通り支那海岸に十分の空軍基地を獲得できるものなれば、マックアーサー作戰に優ることといふまでもない。しかしながら、それは日本海軍が悉く海底に沈んだのちのことであつて、日本海軍が滿を持して健在するかぎり、支那海岸にいたる海洋路の啓開といふことのごとき、全くの夢物語りにすぎない。のみならず、英國はクエベック會談の結果によりマウントバッテン軍を編成したが、米國の希望するビルマ公路の奪回も企てず、背面からの支那進出は愚か、皇軍のために無殘の敗衂を重ねつゝあることは周知の通りである。これは印度の國內情勢に鑑みマウントバッテン軍の氣勢昂らざるにもよるが、そもそも根本において米英の根幹戰略の間に甚しい不一致がある結果にほかならない。

いはゆるニミッツ作戰に對しても、三月十六日のタイムス紙はその「東亞反攻論」といふ社說において

最近東亞戰略を說く人々は、反樞軸軍が支那に十分な軍需資材を送つて空軍基地を建設し、そこから日本を爆撃するならば、日本を仆すことができると信じてゐるやうだが、對日戰にとつてこれほど奇妙な迂り路はない。なぜなら日本は島嶼を基地とする海國であり、大陸にどんな基地を設けたところでかゝる海軍國を擊破することは不可能だ。一九四〇年ドイツは英國に近接する歐洲大陸全域を支配し、英國を爆撃圈內に收める多數の空軍基地を有してゐたが、つひに英國を破ることができなかつた。かうした例で明かなやうに、支那に空軍基地を建設したところで日本を破る望みは全然ない。英國の歷史が訓へるやうに、島國は周邊の制海權を確保してゐるかぎり絕對に敗れることがないのだ。日本本土は島嶼群より成り、支那大陸と日本との地理的關係は英國と歐洲大陸ほど密接ではない。對馬海峽はドーヴァー海峽より五倍も廣いし、支那の空軍基地と日本との間の距離はドイツ空軍基地と英國間の距離よりもずつと大きいのだ。（註）

と論じてゐる。ミニッツ作戰がいまでは米國の對日根幹戰略であり、そしてタイムスが多くの場合英國の官邊の意嚮を代表する新聞であるだけ注目に値するといはねばならぬ。それはひとり英國の新聞のみでない。米國の軍事評論家ハンソン・ボールドウィンもまた「大陸攻勢論」といふピュリッツア賞を獲得した論文のなかに

……支那において日本に決戰を挑むためには、米英兩國が支那に對して多大の武器その他の軍需品軍隊を送ることが緊要である。支那大陸において日本軍に對し勝利を收めんがためには、われわれは支那に大軍を駐屯せしめねばならず、日本本土爆撃のための飛行場を幾つかつくらなければならない。しかしこゝに問題となるのは補給であつて、これはまたほとんど解決困難とみられる…（註）

と論じてゐる。假りにニミッツ作戰の支那にいたる海洋路が啓開されたとしても、支那大陸のほとんどすべての海岸近い要衝を占據してゐる日本軍に對し勝算は立たぬではないかと嘆いてゐるのである。

（註）同盟通信「海外電報」

しからばニミッツ作戰は眞に不可能か。作戰家でないわれわれはこれ以上ニミッツ作戰の可能か不可能かを穿鑿するの要もないが、いづれにしても現實の戰局は苛烈深刻の度を加へつゝある。われわれはこれに對し、絕對に天皇の御統帥に信賴しながら、水のごとき冷靜さをもつて、たゞ、來るなきを恃まず、待つあるを恃めばよろしいのである。待つあるを恃むの道は

これを一言に盡せば必勝の信念を堅持することである。二月十日の英紙デーリー・メールは、その社說に

日本を徹底的に破るためにはわれわれは二つのことをしなければならない。その一つは日本人をして日本が不敗でないことを知らしめることで、第二は戰爭が採算のとれる事業でないことを覺らせることである。日本人はその祖國がいかなる攻撃に對しても敗れないと信じてゐるが、この信念を擊破するためにわれわれは歷史の判決を逆轉せしめねばならない……

と論じてゐる。「戰爭が採算のとれる事業でない」とは商人國英國のいひさうなことであるが、日本人の必勝の信念を難物視してゐる點は、いさゝか敵を知ると稱しても差支ないであらう。すなはち、假りにニミッツ作戰が支那にいたる海洋路を啓開し得たとし、しかして支那に基地を建設するに成功したとしても、その大規模の日本空襲に、日本人が天壤無窮を信じ、神州不滅を信じ、必勝の信念を微動だもさせなかつたら、どうするといふのであるか。兵器をもたぬ重慶軍ではお話にならぬし、懸軍万里大部隊を米英より輸送し來るごときは好んで太平洋の魚腹を肥すもので、すなはちニミッツの支那基地よりする大規模空襲は、それが米英最後の希望をかけた日本反攻法であるだけ、あたかも反樞軸が歐洲の第二戰線について感ずると同樣の乾坤一擲的危機を內包するものにほかならぬ。この意味でデーリー・メールの社說はまさに日本に必勝の道を敎へるものといつてもよろしいのである。

（註）朝日新聞

四　太平洋民族鬪爭の將來と日本

しかしながら、戰局はなほ前途幾多の曲折を孕み、勝利への道は遠い。假りに戰爭がなんらかの形で一段落しても、民族鬪爭の渦卷は今後ますます深刻な樣相を呈するのである。不幸なる歐洲は、今日の各民族が抹殺されぬかぎり、宿命的に第三次大戰第四次大戰をくり返し、一歩々々「西歐の沒落」に近づくほかはないであらう。なんといつても今後における世界政治の中心は太平洋である。日本を取卷く民族を見よ。米國は一億三千万、ソ聯は二億、支那は四億五千万、印度は三億七千万。この十二億の民族鬪爭のなかに立つて日本が大東亞の經綸を行つていくのは決して容易な業ではない。今回の戰爭がいかなる局を結ぶにせよ、米國がその戰爭の創痍を癒すとともに再び支那を目指してその資本主義と民族鬪爭の爪牙をのばしてくることは、あらかじめ想像に難くない。米國民族がその西進を思ひとゞまるのは、大東亞の新秩序が確立され、その爪牙を經濟的にも文化的にも打ち込む余地を失つたときのみであらう。それまでの間、この奔放な野望を抑へて大東亞の安定をはかるためには、日本はいまから明確な國策的方針をもつて東亞の足許を固めねばならぬ。いふまでもなくそれは支那とソ聯とに對する關係である。この間の調整が十分にできなくては、日本の大東亞に對する經綸は立たない。日支間の調整は「支那問題解決」の名のもとに兩國の間における七十年來の懸案であり、しかも見方によつてはいまだ解決の緖を得ない問題である。日ソ間の問題は、ソ聯の標榜する共產革命主義のゆゑに、半ば國內問題化して、これこそ玄關口から一歩も足を踏み入れてゐない。しかし、太平洋をめぐる民族鬪爭の將來を考へるとき、この調整の問題はもはや一日を緩うするを許さない。これは戰後の問題でなくて、今日卽刻の問題である。第二の太平洋戰爭に備へるためである。對支對ソの問題は從來とかく單なる日本對支那、日本對ソ聯の問題として考へられがちであつた。しかし今後は太平洋を中心とした民族鬪爭の問題、もしくは大東亞戰爭後における日本の世界政策の問題として考へられねばならない。そこには從つて、幾多の切り捨つべきもの、切り換へを要するものがあり、眞の大略と雄斷とを必要とする。歐洲戰局の歸趨いかんにかゝはらず、世界の中心は太平洋に移りつゝあるが、それだけ日本の立場は重大であり、多難である。（六月二十八日）

大東亞の戰局と總力結集

大東亞總力の結集

―政治的大攻勢の展開―

本鄕賀一

「戰爭を行ふとは、常に攻擊を行ふことである」とフリードリッヒ大王はいつてゐる。積極的行動こそ戰爭の根本原理である。

開戰第一年において、わが國は一大軍事攻勢の展開によつて太平洋上における敵の軍事的據點を覆滅し、米英蘭の侵略的勢力を大東亞の天地より一掃して、侵略者の手より大東亞を解放した。第二年には、この軍事攻勢の大戰果の上に立つて、一大政治攻勢が展開された。すなはち一月九日の新中國の參戰と日を同じうしてわが對華新政策が强力に推進され、十月には日華

同盟條約が締結されて、兩國の關係はその本然の相貌に立ち還つた。八月にはビルマに、十月にはフィリピンに獨立が許容され、インドネシアの住民に對しては參政權が賦與された。タイ國には廣大なる地域が讓渡された。自由印度假政府はたゞちに承認されたのみならず、これにニコバル、アンダマン諸島を與ふる用意があると聲明され、その國民軍編成には强力なる援助が與へられつゝある。これらの諸事實はいづれもアジア諸民族を支援してその自主獨立を回復せしむるといふわが國の道義的外交を最も端的に表現したものであり、またそれゆゑに同時に敵米英に對する雄渾なる大政治攻勢であつた。十一月の大東亞會議はこの開戰第二年における政治的大攻勢の項點に立つものであつた。

わが國の戰爭目的からいへば、開戰第一年において米英蘭の軍事勢力を東亞から一掃したことは大東亞新秩序建設のための地均しにすぎない。米英蘭の羈絆から解放された諸民族を糾合して、アジア本然の姿における統一を確立しなければならぬ。これを經濟的に裏打ちするために、米英的に歪曲された經濟を有機的な一體として再編成しなければならぬ。さらに進んで米英文化の殘滓を拂拭してアジア獨自の文化を興隆しなければならない。これがわれらに課された當面の最大責務である。

この任務を遂行するためには軍事的に敵の反攻を擊摧するとともに、政治・外交・經濟・思想・文化の全分野にわたつてアジアの總力を結集し、その提携協力を一層緊密にして、アジア諸民族の一體化を急速に推進しなければならない。これが開戰第三年の歷史的任務である。その最高の指導目標として宣布されたのが實に大東亞共同宣言であつた。

政治的大攻勢は第一年の軍事的成果の上に展開された。中國に「水到渠成」といふ言葉がある。水が流れてくれば、自然に溝ができるといふのである。だが政治的な障壁が水の自然の流れを閉鎖してゐるときには、まづかゝる障碍を除去することが先決問題である。「時」の要素が絶對的に重視されねばならぬ戰時下にあつては、溝渠が自然にでき上るのを待つ餘裕はない。まづ渠を掘つて、水を到らしめなくてはならぬ。溝渠を掘つて水を通ぜしめたものは御稜威の下皇軍將士の善謀勇戰の賜である。アジア十億の民族を合流せしむる大渠は、第一年の軍事的攻勢によつて開鑿された。大東亞會議においてビルマ代表バー・モウ氏が「日本帝國の恩惠によつてわれわれの失はれた傳統と血とをこゝに再發見することができた」ことを力說して、皇軍に滿腔の謝意を表明した。第一年の軍事的勝利は第二年の政治的攻勢展開の基礎をなした。第二年の政治的攻勢の勝利は第三年における全面的攻勢の勝利を約束するであらう。

二　總力戰における國民精神の問題

現代の總力戰においては、武力戰と並行して外交戰・經濟戰・思想戰が戰はれる。戰爭の勝敗を決定する主たる要因はもとより武力戰にある。外交戰・經濟戰・思想戰はリンネンバッハの言葉をかりると、武力戰の肩の上に立つものであるが、戰爭が總力戰の樣相を帶びてくればくるほど、これらの補助戰が勝敗決定の上に占むる地位は相對的に高まらざるを得ない。第一次世界大戰において勝敗を一擧に決するやうな勝利が、協商國側および同盟國側のどちらにも得られなかつたことからして、日露戰爭までの數千年の間戰爭の勝敗を決定してきた武力戰は、もはや勝敗を支配する決定的な要因ではなくなり、經濟戰および思想戰がこれにとつて代つたとの新しい戰爭論さへ擡頭するにいたつたほどである。

大東亞戰爭においても第二年の政治攻勢は、第一年の軍事的攻勢の成果のうへに展開されたのである。リンネンバッハの言葉をそのまゝ、政治戰・思想戰は「武力戰の肩の上に立つ」たのである。第三年目たる本年度は政治戰・思想戰が、これまでの武力戰の成果を擴大するとともに、今後の武力戰にいよいよ戰力を發揮する基礎を形づくる。かくて政治戰・思想戰・文化戰が武力戰と並行して有機的に統一された總力戰を强力に推進して、敵を全面的に擊推しなければならぬ。

大東亞戰爭はいふまでもなく大東亞の解放のための戰である。大東亞の各國家がその自主獨立のためにたゝかふ戰である。祖國の自主獨立は、その血によつてたゝかひとられなければならぬ。大東亞共同宣言は大東亞各國が共同の意志をもつて、大東亞の總力を結集し、大東亞の解放をたゝかひとることを宣明したものである。大東亞共同宣言の第一義的な意義は、大東亞戰爭が大東亞の總力戰であることを大東亞各國が改めて公式に確認し、大東亞の物心兩面にわたる總力をあげて戰爭を完遂することを盟約したことにあると思ふ。

ルーデンドルフ將軍がその著「總力戰」において特に强調してゐるところは、總力戰が著しく國民の精神力を必要とすることである。總力戰は國內のすべての人的・物質的資源、なかんづく特に精神力を戰爭遂行のために、極度にまで發揮せしむることを要する。國民の一人一人が、「最後の汗の一滴、最後の血の一滴までも絞つて戰ふところの國民生存のための戰爭の戰士」であることを要する。一國の總力戰においてなほかくのごとしとすれば、數國の共同によつて戰ふ聯合戰爭において、數國があたかも一國のごとく、强固に團結して、共同の戰爭目的のために戰ふためには、各國民の戰爭意識は一國の場合に比してさらに幾烈なるを要する。

戰爭が長期にわたる場合、國民の團結の强弱いかんは、戰爭の勝敗に最後の斷を與ふるものである。國民の精神力は、團結の基礎をなすものである。敵を一擧に壓倒殲滅し得るならば、國民の團結はそれほど決定的な意義をもたないといへるかもしれない。だが、近代戰においてはかゝる速戰卽決を容易に期待し得ない。いはんや敵が優勢なる場合においては、短期間に敵を壓倒することは決して容易なことではない。戰爭が長期にわたればわたるほど、國民の精神力の强弱は、實に戰爭指導上の根本問題となつてくる。

このことは大東亞戰爭についてみる場合一段と切實なるを覺ゆる。大東亞共榮圈內各國民、各民族の團結を强固に維持し、强化することは、政治の重大なる任務であり、各國の戰爭指導者に課された刻下緊急の實務である。

しからば、團結の基礎はどこに求むべきであらうか。强制によつて表面上は團結してゐるやうに見えても、それでは總力戰の苛酷な試煉に耐へ得るものではないことはいふまでもない。ルーデンドルフ將軍は一國の總力戰においては、國民の共通の民族的生活と信仰生活とにもとづく精神力に基礎がおかるべきものと說いてゐる。それならば、大東亞の總力戰においては、その團結の基礎をいづこに求むべきであらうか。

三　「聯合戰爭」における團結の基礎

タイゼンは「ナチス戰爭論」においてかういつてゐる。「多數の國家がある目的のために同盟を結び、一ないし數個の敵國に對して共同の鬪爭を起す場合に、聯合戰爭が成り立つ。聯合戰爭の利益は、一般的にみて、同盟國の資材、兵員を利用し得ることである。反對にその微妙なる弱點は、同盟した各國相互間の利害ないしその戰爭目的が緊密にかつ永續的に結ばれてゐることが稀れなことである。また同盟せる各國が各自勝手に働き、あるひは忽ちにして對立する點である。」

前大戰も聯合戰爭であつたが、双方の陣營において、聯合戰爭に最も肝要である戰爭目的に對する信念が完全なる一致をみなかつた。前大戰の教訓からわれらがこの場合學ばなければならない最も重要な問題は、實にこの點である。前大戰では聯合國の協同いかんが、戰局を左右する重大なる要素をなした。同盟側は、戰局がドイツにとつて有利に發展しつゝある場合には、ドイツの指導のもとに緊密に協同したが、一たび情勢が惡化すると、たちまち同盟各國の足なみが亂れ、協調を失つて對立を來たし、ブルガリア、トルコはつひに戰線から脫落するにいたつた。タイゼンの說くやうに、同盟した双方の利害ないしその戰爭目的が緊密にかつ永續的に結ばれてゐなかつたし、またかゝる狀態をつくり出さんとするドイツの努力が缺けてゐたことが一般に指摘されてゐる。

大東亞における各國・各民族の協力は、タイゼンのいふ聯合戰爭においては、まつたく「稀にみる」ところであらう。今次のヨーロッパ戰爭においても、ドイツはフランスに進擊するためには、オランダ、ベルギーの抵抗を武力で制壓しなければならなかつた。皇軍は佛印へも、タイ國にも平和裡に進駐したのである。皇軍に戰を挑んできたものは、米、英、蘭軍のみである。これは住民につて、これらの支配下にあつた住民は、文字通り簞食壺漿して皇軍を迎へ、皇軍の作戰に挺身協力したのである。これは住民がわが戰爭目的が大東亞の解放にあることを正しく認識し、この目的達成のために自ら奮つて協同したことを示してゐる。

ルーデンドルフ將軍は、前大戰においてドイツが西部戰線において大攻勢をとつたことは、ドイツ國民をして、その戰爭が侵略戰爭であるかのごとく解釋せしめ、ドイツ民族死活の戰爭であるとの自覺をもたせることができなかつたことを深く遺憾としてゐる。國民は自國の死生存亡のための戰爭には身命を拋つが、好戰的侵略的戰爭に對しては、熱意を昂揚させることが少いからである。大東亞戰爭の當初にあたつて懸念されたことの一つは、大東亞戰爭が大東亞各國・各民族の死活のための戰爭であることを、大東亞各國民・各民族に十分に認識せしむる準備なくして勃發したことである。しかしながらそれにも拘らず、大東亞各國家・各民族は大東亞戰爭がたゞちに大東亞各國家・各民族の死生存亡の戰であることをその全心全靈をもつて感得したのである。大東亞會議におけるビルマ代表の言葉をかりるならば、「大東亞人の傳統と血の繋り」が、米英が必死に企てた隱蔽、歪曲、虛構の宣傳にも惑されず、明確に事態の本質を辨別し得たのである。

大東亞各國家・各民族はその死生存亡を同じくする。まことに同生共死こそ、大東亞全民族の運命である。これよりも强く深い利害關係があるであらうか。大東亞の各國家・各民族は全東亞の保存獨立のうちに、はじめてその生存を全うし得る。個の生存は全體の生存によつて、はじめて可能である。從つて大東亞の保全がまた各國家・各民族の目標でなければならぬ。かくて大東亞の各國家・各民族は、その戰爭目的をまつたく同じくする。タイゼンが同盟戰爭において弱點としたところは大東亞にはまつたく存在しない。「同盟した各國相互間の利害ないしその戰爭目的が緊密にかつ永續的に結ばれ」てゐるのである。從つて大東亞においては同盟戰爭の利點と强味とのみが殘される。さらにこれを敵側の弱點のみをもつ同盟戰爭と對置するとき、大東亞同盟の威力は一段と增大するわけである。

四　團結を阻害するもの

大東亞共同宣言の宣布に先立つこと七日、昭和十八年十月三十日、日華同盟條約が締結された。新條約はその精神において共同宣言とまつたく根柢を同じくするものである。共同宣言に盛られた理想を顯現するうへにおいて、最も重大にして困難な問題は日華關係であらう。支那事變は七年にわたつて戰はれ、なほ現に戰はれつゝある。大東亞十億の民族を結集するうへにおいて最大の障碍となるものは、大東亞の內部に叛逆者が割據し、共同宣言の實現に執拗なる妨害を試みつゝあることである。大東亞十億の民族を打つて一丸とするためには、まづこの內部の叛逆者の猛省を促し、眞の東亞的自覺に徹せしめなければならぬ。われらは重慶もまた東亞の同胞なるがゆゑに、大兵を進めて屍山決河の間にその覆滅をはかる前に、敢てその反省を要求する。日華同盟條約は、この意味においては、重慶に對し東亞的自覺への跳躍板を突きつけたものといふべきであらう。

新條約は、いふまでもなくわが肇國の大精神に出發してゐる。大東亞諸國が相互に善隣としてその自主獨立を尊重しつゝ緊密に協力して、道義にもとづく共存共榮の秩序を大東亞に建設し、もつて世界全般の平和に貢獻することは、わが國が多年冀念し來つたところである。こゝに日華關係はその本然の姿にたち還へり、兩國はその永遠にたどるべき大道を踏み出したのである。

孫總理は大アジア主義において、「世界文化の發祥地たるアジアは百年來米英の侵略のために衰微した。この時にあたつて日本が勃興したのはまことにアジア復興の出發點である。アジア各國は日本に協力して米英の侵略勢力を一掃し、强固なる團結をつくつて各國の自主獨立をはからねばならぬ」と力說してゐる。この孫總理の言葉は、大東亞共同宣言の精神と、まつたく符節を合はすものがあるではないか。青木大東亞相は第八十四議會において、このわかりきつた眞理が今日までどうして顯現することができなかつたかといへば、それは米英の東亞侵略の野望のためである、といつてゐる。われらもまた大東亞の團結を阻止してきたものは、地理的條件よりも、むしろ政治的原因によるものであると思ふ。それは米英勢力の驅逐によつて、かゝる政治的原因が撤去されるとともに、いはゆる水到り渠成つて各國家・各民族の大同團結の基盤ができたことによつても明かである。

大東亞の諸民族は、高山峻嶺や廣大なる海洋によつて隔離され、相互の接觸を阻止されてゐた。支那と印度との間には、高山高原が介在して兩民族の交通を阻んでゐた。兩者の交通は、その中間地帶に介在する諸民族の活動によつて、斷續的に行はれたにすぎなかつた。日本と南方諸島または印度との交通は大海に隔てられて、相互に影響し合ふほどの接觸を保ち得なかつた。從つて東亞を一つに結合する强靱な紐帶を缺いてゐたことは事實である。しかしながら大東亞諸條件を克服して相互に交通接觸し得る時代に入るに先だつて、ひとりわが國を除くほとんどすべての大東亞諸地域は、歐米諸國によつて侵略され、政治的にも孤立せしめられてきたのである。アジアが侵略者のために隸屬され、壓迫され、搾取された所以のものは、決してアジアが弱かつたためではない。團結し得なかつたからである。そのために各個に擊破されたのである。相倚るべきものが相離れ、相助くべきものが相背いたためである。

大東亞會議においてフィリピン代表ラウレル大統領は、大東亞民族が一堂に會する會議が開かれなかつた三つの原因をあげてゐる。その第一は、米英の大東亞に對する政治的支配および經濟的搾取、第二は、米英が分割統治主義により大東亞諸民族の分割をはかり、大東亞諸民族の士氣、生活力を弱めることに努めてきたこと、第三には、各民族に對する對日增惡心の鼓吹である。「日本は征服慾に燃えた貪慾な帝國主義的國家であり、橫威、聲望の擴大を望む國である。もしわれわれが日本と接觸すれば、たちまち搾取、壓迫は免れ得ない。日本はわれわれの朋友・同胞にあらずして、仇敵なりと信ぜしめられた」と語つてゐる。大東亞の諸民族は、互に他人としてよりも、仇敵として存在せしめられてきたのである。いまや東亞における米英勢力は一掃されて、アジア諸民族の相互の友情と信賴とを通ずる一大溝渠が開鑿されたのである。かつての仇敵は隣人となり、家族となり、分離・隔絶されたアジアが一つになる日がつひにきたのである。

五　大同團結の根本方針

政治は人間の集團を取扱ふ。問題は人間の集團がいかにして魂を與へられた統一體として編成されるか、といふことである。

總力戰における政治の任務は、總力を戰爭遂行の一點に結集することにあるといはなければならぬ。昨年十月の第八十三議會において、國內決戰體制は一應の完成をみた。ついで日程にのぼる問題は大東亞の決戰體制を可及的速かに確立することである。

第八十三議會はビルマ、フィリピンが相ついで獨立し、大東亞の建設が一大進展をとげた直後に開かれた。この情勢を反映して、議會の外交問題に關する論議が大東亞建設問題に集中したことは當然である。十月二十七日の衆議院豫算總會の劈頭、中島彌團次氏は大東亞總力結集問題をとり上げて、「帝國はいまや大東亞諸國家・諸民族の自主獨立を實現し、帝國と諸國家との關係を闡明しつゝある際、大東亞渾然一體、大同團結せしむるところの根本方策を樹立するの要あり」と强調し、私案として、(一)人種的差別の撤廢、(二)民族の平等互讓、(三)互惠的經濟提携、(四)文化の交流、(五)資源の開發、共存共榮、(六)大東亞共同防衛、の六項目を提唱した。

これに對して重光外相はつぎのごとく答へてゐる。

「大東亞建設は、もちろん大東亞全域の諸民族・諸國家の自發的な協力が基礎となるのである。從つて各民族・各國家が自發的に喜んで自分のために協力するといふ風にもつて行くためには、しばしば宣明されてゐる帝國の精神、平等にして互惠の觀念をもつて、すべてこれに接して行く。各民族・各國家の要望を十分に達成せしむることが根本になるのであつて、

かかる要望を達成し得られなかつた從來の關係はこれを打破する。すなはちこれが大東亞の解放である。」

「さやうにいたして、互に互讓敦睦の關係をもつて、一家としての親和の境地を開いて行くならば、必ず大東亞各構成分子は自覺し、奮起して建設の聖業に協力するものと考へるのである。」

「しかしながらかやうな精神は、もちろんわが肇國の大精神であつて、これがたゞちに大東亞だけに獨占的のものでは無論ないのである。世界に向つて古今東西を通じて、何人も承服する立派な天下の公道でなければならぬのであつて、さやうな心構へで政策を進めて行きたい。」

外相の答辯を長々と引用したのは、ここに大東亞共同宣言の基本方針の萠芽をみることができるからである。外相は大東亞團結の根本原則がわが肇國の大精神に出づべきことを强調し、これを平等互惠の觀念をもつて表現してゐる。

大東亞の總力結集は强力なる政治主體の主導によらなければならない。この場合においても、戰爭遂行の主體が建設においても、主導的な役割を果さなければならないことは當然である。從つて大東亞はこの主體を中心として結集されなければならぬ。總力を最大限度に發揮するためには、一つの中心を有する圓でなければならない。二つの焦點を有する楕圓であつてはならない。大東亞圈は日本と同心圓でなければならぬ。從つて大東亞圈もまた、わが肇國の大精神によつて團結せしめられなければならないことも自明の理である。大同團結の根本方針はすでに確立されてゐる。問題はただこれをいかに表現するかといふことである。歷史・傳統を異にし、風俗・習慣を異にする各國家・各民族をして、いかにせば正しく理解せしむることができるかといふことである。

昨年八月新京で開かれた日滿華三國の興亞團體第二回會議は、はからずも興亞理念の確立について論議が沸騰した。それはわが國を理解すること最も深き滿華兩國においてすら、わが肇國の大精神もわが國民に對して說かるゝがごとき表現形式では、その理解を得ることが容易でないことが滿華兩國代表より指摘されたからである。興亞理念も各國の國情に應じて、それ〴〵適切に表現することが肝要である。わが肇國の大理想をいかに表現して、各國家・各民族を通ずる大東亞の大理想とするか、問題は實にその表現にあつたのである。重光外相の答辯はこの問題に對する解答として注意に値する。

、翌十月二十八日衆議院は院議をもつて左のごとき大東亞總蹶起に關する決議案を可決した。「東亞十億打つて鐵火の一丸となり、共同の仇敵米英擊滅に猛進し、東亞を永遠に解放し、もつて世界恒久の平和を確立せんとす」。東條首相は「御決議の趣旨はもとより政府の意圖いたしてゐるところと、まつたく符節を合するもので、實に力强き限りである」とのべた。「政府の意圖するところ」はこの日より旬日を出でずして早くも大東亞未曾有の盛觀をもつて出現したのである。

六　大東亞會議の成果

大東亞會議に陪席した自由印度假政府首班スバス・チャンドラ・ボース氏は、「ビルマ代表が會議における演說で「アジアは一なり」と叫んだが、これこそ正しく大東亞會議を一言にして盡したものと思ふ」と評してゐる。

大東亞會議は、ボース氏も適切に指摘してゐるやうに、近代世界史上のあらゆる國際會議とまつたくその趣きを異にしてゐる。ナポレオン戰爭後のウィーン會議、クリミア戰爭後のパリー會議、第一次世界大戰後のヴェルサイユ會議、一九二一年のワシントン會議は、ボース氏の言葉をかりると、悉く戰勝國が戰利品を分捕りするための會議であつた。「會議は踊る」との言葉をそのまゝ、これまでの國際會議はすべて陰謀と虛僞と恫喝とに滿されたものであつた。しかるに大東亞會議はバー・モウ氏のいふ通り「有史以來はじめて東亞の國民は、東亞は一にして分離すべからずといふ眞理にもとづく、自由にして平等なる同胞として會合した」のである。そこには、なんらの陰謀も虛僞も恫喝もない。それは解放された諸國家の平等互惠、相互援助、緊密協力の道義にもとづく會議である。さうして大東亞における新しき國家間の秩序建設の基礎として道義にもとづく諸原則を確立し、しかもでき得る限り速に實現すべく努力することに固き決意を表明したのである。

大東亞會議の成果について、東條議長は閉會の挨拶において三つの點をあげてゐる。第一は、同會議が東亞の歷史、いな、人類の歷史にはじめてみる盛儀であつたこと、第二に、各國代表の隔意なき意見の交換によつて、戰爭完遂の決意、大東亞の建設、世界平和の確立に對する理想と熱意とが、完全に一致することを相互に確認したこと、第三に、特に重要なことは、いふまでなく、大東亞共同宣言の採擇をみて、明確なる共通の目標が得られたことである。

大東亞會議は、「東亞の民族がその歴史はじまつて以來、はじめて結合することができた」（バー・モウ代表發言）事實を、具體的に表現するとともに、會議を通じて、その協力がいかに相互の信賴と友誼との上に築かれたものであるかを表明してゐる。「いまや大東亞は、もはや單に地理的な名稱ではなく、確固たる基礎の上に立つ共榮圈を標示する」（タイ國代表發言）。

ビルマ代表は十一月二十五日ラングーン歸還後發表した談話において、東條議長のあげた第二の成果を敷衍してつぎのごとく語り、大東亞會議によつて、大東亞諸國家の協力がさらに一段と强化されたことを體認した點を、特に强調してゐる。

「會議は數々の成果を得た。……第二の成果は、大東亞史上はじめて各民族の指導者間に個人的接觸ができたことである。余個人としても汪主席にはじめてお會ひしたが、その結果、余には支那問題の深さがわかり、その解決がいかに複雜微妙をきはめてゐるかを諒解することができた。また滿洲國とビルマの關係も、意想外に密接なことがわかつた。これに對しビルマが接敵地區としての困難を冒して健闘してゐる事實を、各國代表はわがことのやうにビルマの第一線政策を諒解してくれた。この際特に强調したいのは印度問題の解決こそ、アジア問題の解決を意味し、印度の自由なくしてアジアの自由はあり得ないことを各國代表に完全に納得せしめたことである。」

七　世界觀の政治化

大東亞共同宣言は、「全アジア人共同の心を全世界に宣明したもの」（東條首相の新年交驩放送）である。「宣言は大東亞各國の戰爭觀念を簡潔强力に宣布せる大憲章であつて、世界歷史の新なる一章はこゝに書き下されたのである」（東條議長閉會の挨拶）。

共同宣言の原理的な問題については、政府首腦部からも公私の機會においてしばしば說明されてゐるし、各新聞雜誌上でも指導的立場にある人々からほとんどいひ盡されてゐるやうである。ここでさらに蛇足を加へる必要をみない。われらはただ思想戰の立場から、共同宣言の基調をなす彼我の世界觀について一言するにとどめたい。

實際、政治はこれを行ふものの精神態度に遡るものである。ある世界觀の行爲への轉化が、すなはちここにいふ世界觀の政治化である。

大東亞戰爭第二年の最も顯著な特質の一つは、彼我の戰爭目的がきはめて尖銳な形で表現されたことである。對華新政策の推進による新中國の自主獨立の支援、タイ國への領土割讓、ビルマおよびフィリピンの獨立、インドネシアに對する政治參與權の許容、自由印度假政府に對する援助等々の諸事實によつて、わが國のなすところは、すべてこの戰が仁義のみいくさである本質を明かにしてゐる。わが國は興亡を賭し、鮮血をもつて得たるところを惜みなく與へて、ひたすら大東亞解放の實を具現しつゝある。これは米英的な戰爭觀をもつてしては、つひに理解し得ないところである。「眞の政治はまづ道德に忠誠を誓ふことなしには、一步も踏み出すことはできない」といふカントの言葉は米英に對しては、所詮、馬の耳に念佛である。

思想戰は世界觀の戰であり、戰爭目的に對する主義主張の抗爭である。萬邦の互惠敎旨を基調とする世界恒久平和を確立せんとするわが道義的世界觀と、利己的野望の達成、世界、なかんづくアジアの永久的隷屬化を目的とする侵略的な米英の戰爭目的とを比較するとき、その善惡、正邪はあまりに明白である。思想戰における最大の强味は道義に立つことである。この點からいつて、われわれは思想戰においても絕對的優位に立つものといはなければならない。

米英がその戰爭目的の規範としてゐる大西洋憲章は、冒頭に領土不變更の原則を揭げ、米英支配にもとづく現狀維持を宣言した以外には、世界における不公正、不正義を是正して戰爭の起因を絕たんとする主張を缺き、また世界人類の福祉を增進すべき積極的方策をまつたく有してゐない。消極的にも世界平和の樹立に貢獻すべき建設的綱領を含んでゐない。しかもこの原則すら、その後の事態の進展にともなひ、彼らの手によつて弊履の如く捨てられつゝある。昨年夏以來敵陣營の首腦者は頻りに會合して、決議あるひは宣言を公表してゐるが、いづれも勝者と敗者とを對立せしめ、戰勝國が戰敗國に强制すべき和平條件をのぶるにとゞまり、建設的な構想にいたつてはその片鱗だに示すことはできない。米英の戰後案なるものが、しばしば發表されてゐるが、これは戰勝を既定の事實であるかのごとく宣傳せんとする一流の謀略にすぎぬ。カイロ宣言といひ、スマッツ案といひ、ともに全世界を悉く自己の獨占的支配下におき、特にアジアにおいては過去數百年にわたる壓制・搾取をさらに永久に繼續强化せんとする意圖を露骨にさらけ出したものである。東條首相は第八十四議會の衆議院豫算總會において、「他民族

は、米英にとつては、自己の繁榮追及のための一片の具にすぎない。カイロ會談は明白に、彼らの戰爭目的が侵略と他民族隷屬にあることを告白したものにほかならない」と喝破してゐる。

第八十四議會衆議院豫算總會は大東亞共同宣言に關し、四つの點につき政府の見解をのべてゐる。

大西洋憲章の本質的相違については、東條首相自らつぎのごとく政府の見解をのべてゐる。

大東亞共同宣言においては、單に大東亞民族だけの幸福を冀つてゐるのではない。すなはちその第五項に「大東亞各國は萬邦との交誼を篤うし、人種的差別を撤廢し、普く文化を交流し、進んで資源を開放し以て世界の進運に貢獻す」といふことを宣明してゐる。人種的差別撤廢の原則は、今日まで遺憾ながら米國の飽くなき侵略搾取のために一片の反古として葬られてきたのである。いまや世界の世紀を畫するこの大戰に、この正義の叫びを着々實現しつゝある。これが完成は一に大東亞戰爭の成否いかんにかゝはるのである。戰爭の目的は、帝國の自存自衛を確保することはもちろんだが、しかし廣義においては全世界に對し攻者・被攻者、强制・隷屬の關係なき狀態を作りあげるといふことにも存するのである。米英の假裝的自由とは、そこに根本的に異る大きなものがある。

宣傳は政治行動に先行すべきであるといはれてゐる。宣傳もまた政策の實踐の一つであるから、政策と密接に結びついてゐなければならないし、さらにまたでき得べくんば、現實の施策よりも一步先んずることができればなほ上乘とする。それだからといつて、大東亞會議が一年前に開催されてゐたら、その效果はさらに偉大であつたらうとはいへない。それは宣傳は現實の問題を解決するために行ふ精神的武器であつて、その宣傳を必要とさせる現實の事態と密接に結びついてゐることが必要だからである。正しい現實的な生活認識を基礎として、民衆の行動を導いて行くのが宣傳の任務であるから、そのためには、まず現實の事實として侵略者の桎梏より解放され、あるひはビルマやフィリピンのごとく獨立し、あるひはインドネシアの住民のごとく政治參與の權を與へられてゐるといふ事態の嚴存することが必要である。大衆は物を具體的形態で考へるものである。抽象的な觀念といふものは、それだけでは大衆を行動に導く力をもち得ない。一般に利害關係に觸れないものは、感情を觸發する迫力をもたない。從つて大衆の行動を支配し得ないものである。今は苦しくとも後で樂になる。今は少し損するが後で大儲けができるといふ現實の利害なり、將來の希望がなければ、大衆を行動にまで導いて行くことは困難である。米英の戰

爭目的が現實の利益も、將來の希望も與へ得ないに反して、わが國は第一年において米英蘭の繩絆から解放し、第二年の政治攻勢の展開によつて大東亞共榮圈における創造的協力者たらしむるために、あるひは獨立を許容し、あるひは政治參與を賦與して現實に利益を與へ、將來の希望を約束したのである。實現すべき事態は現實にすでに完成の過程にある。しかも正しいといふ自覺と信念とは、思想戰においても、われらに情熱的な宣傳をなさしめずにはおかない。大東亞の諸國民・諸民族が物心兩面の總力をあげて戰爭完遂に挺身協力しつゝあるのは、興亞の理念がすでに大東亞民族を把握したことを、明示してあまりある。

八 東亞の叛逆者

大東亞十億民族の總結集に洩れてゐるものに印度と重慶とがある。印度は武器なく、侵略者に屈從を餘儀なくされてゐる。重慶は武器をとつて米英を助け、東亞におけるその尖兵たるに甘んじてゐる。印度は救ふべく、重慶は斷乎として擊滅しなければならぬ。

「大東亞會議より歸國の途次南京に立寄つたスバス・チャンドラ・ボース氏は十一月十八日つぎのごとき聲明を發表して、中國の統一と印度獨立との相關性を强調した。

「アジアの團結にはつぎの二點が要請される。一は中國の統一であり、二は英國よりの印度の解放である。中國の統一は印度におけるわれわれの解放に力强い效果を與へ、われわれの努力を一層容易ならしむるであらう。事實中國々民の統一が印度におよぼす影響は極めて大きく、余はもし中國が統一されるならば、英米の勢力は最後的に、かつ最も效果的にアジアから一掃されるであらうことを固く信じてゐる。

西アジアの米英よりの解放は、一にかかつて印度の獨立にある。従つて、アジアの解放と團結のための運動を促進せしめるか、いなかは、まさに中國々民の手中に歸せられてゐる。」

ボーズ氏は南京において、今回中國を訪れてその心を悲しませた一事は、中國がいまだその統一を完成しないことである。

従つて自由にして團結せるアジアの創造のために、一段と力をいたさねばならぬことを痛感した、と語つてゐる。殊に中國軍隊が重慶政權によつて、英國の印度に對する支配を繼續し强化せしむるために、印度に派遣されてゐるといふ事實は、氏の心を暗くした。もし蔣介石が果して國民的指導者であるならば、なにゆゑにビルマならびに印度における國民運動を强壓するために、英國を援助したのであるか。印度はかつて中國に反抗したことはなかつたではないか。そればかりではない。印度は却つて重慶に同情を寄せてゐたのである。昭和十三年ボース氏が國民會議の議長であつた當時、最初の醫學使節を重慶に派遣して、同情と厚意とを表明したくらゐである。しかるに蔣介石はこの同情に對する返禮として、英國政府とともに印度民衆を打倒するために、印度に軍隊を派遣したのである。

ボース氏は南京から重慶に呼びかけて、蔣介石に懇へていふ。

「余は蔣介石に期待する。中國軍隊に對し、英國政府とともにわれわれを擊つためではなく、われわれが米英擊滅のために印度に向つて進擊する日に、われわれの印度軍隊とともに固く手を握るやうに命ずることを。もし團結した中國民衆をわれわれの味方に得たならば、われわれの義務は遙に容易にならう。余は中國の統一はアジア統一の輝く一ページとなることを確信する。東亞の全國民は日本とともに手を握り合つて、自由かつ團結せる大東亞の實現に邁進せよと呼びかける。」

十月二十一日昭南に自由印度假政府が樹立されて以來、印度獨立運動は不退轉の精神をもつて世紀の進軍を開始し、印度を東亞における最後の牙城と賴む米英に對して果敢なる鬪爭を開始した。東條總理は大東亞會議において、印度假政府にニコバル、アンダマン諸島を割讓する用意ある旨を聲明したが、この二つの島こそ幾多の愛國の熱情に燃ゆる印度の志士が苦難の時を過し、英國の惡虐非道なる壓制に悲憤の血淚を流して倒れた地である。

自由印度假政府は一月七日ビルマに進出して、「印度における米英軍を殲滅し、印度を段階に一歩を畫した」（自由印度假政府聲明）。印度國民軍が國境を越えて進軍を開始するとき、政府が國民軍と行動をともにして前進することは當然である。三月二十二日休會明けの衆議院において、東條首相は皇軍占領下の印度は自由印度假政府の行政下に歸屬せらるゝ旨聲明した。アンダマン島の舊英國知事官邸に翻へる三國旗は、やがてデリーの總督官邸の屋上高く揭げられる日が遠からず訪れるであらう。印度獨立成るのは日は、すなはちアジア解放の日である。中國の奥地にも諒じて大

東亞の叛逆者の蹶起を許さないのである。

九　共同宣言の實踐

大東亞の建設は實に今後の實踐によつて、はじめて到達すべき彼岸である。このことは大東亞會議の席上でも各代表者から交々强調されたところである。すなはちビルマ代表は「新しき東亞の建設は一に大東亞戰爭の鐵火の下で行はるべく、アジアにとりて勝利か、然らずんば滅亡の二途あるのみ」と叫んだ。自由印度假政府の首班は「印度は英國に勝つか、然らざれば永久に屈服するか、二者一のほかはない」と斷言した。フィリピン代表は「大東亞戰爭に日本が完勝して、はじめて大東亞共榮圈の確立が可能である。さればこそ、大東亞戰爭完遂のためには、軍事的協力とのみいはず、あらゆる物資を投げ出すことこそ、大東亞諸國家・諸民族の義務である」と喝破してゐる。戰爭に勝つことが第一の要件である。共同宣言の前文にも「大東亞各國は相提携して、大東亞戰爭を完遂し」とある。敵を制壓して、はじめて五原則も現實のものとなる。五原則による共榮圈は、あくまで戰ひとるべきものである。まことに共同宣言こそは、大東亞戰爭完遂卽大東亞建設の原則を打ち樹てたものであり、この大原則の實踐こそ、アジア十億民族の崇高なる義務といはなければならぬ。

大東亞共同宣言は、たしかに世界的なヒットである。野球でいへば胸のすくやうなヒットを放つて一壘に出たやうなものである。だが續いて走者を二壘に送り、三壘から本壘に送り込む手が打てるか、どうかといふ點が問題である。第二、第三のヒットが連發されなければならない。

大東亞の結集といふことは、結局大東亞民族が、アジア民族としての自覺に徹し、わが國の道義的精神に信賴して、わが國とともに大東亞戰爭完遂に協力することである。從つて大東亞民族をしてその信賴感を深めるやうに指導することが肝要である。敵はいまや大東亞の强固な團結によつて、わが戰力が日一日と增强することをおそれ、必死の謀略宣傳を試みて大東亞諸國家・諸民族を離間反目せしめんと企てつゝある。敵の謀略はイタリアにおいて成功して以來、いよいよ執拗露骨となり、大東亞地域に對する內部攪亂工作はますます活發となつてきてゐる。この敵の謀略を徹底的に破摧することがアジア民族結集のた

めの第一の任務である。この任務を果すためには逆說のやうであるが、まづ内部の結束を固めなければならぬ。圈内各國がそれぞれ自國々民の戰意を昂揚し、盟邦との協力を緊密にすることに努めなければならぬ。内部の結束を強化することと、外敵の謀略を粉碎することとは、二にして一である。共同宣言を貫く精神を滲透せしむることは、敵の謀略を防ぐ最も堅固な要塞を築くことである。

共同宣言の精神をいかにして徹底せしむべきかについて、青木大東亞相は一月二十六日衆議院豫算總會において、つぎのごとくのべてゐる。

「現地においては大東亞會議後、各國代表が歸國していづれも聲明を出し、あるひは議會において報告演說をしてゐる。その他諸般の方法をもつてそれ〴〵の國民に呼びかけ、大東亞共同宣言の理想滲透に努力してゐる。新聞その他の言論機關もこれに呼應して國内の結束に一段の氣勢をあげてゐる。しかしながら各國の情況は一樣でなく、中には建國早々であり、國民の思想を統一し、經濟を安定し、もつて國民を擧ゐて共榮圈建設運動に足並を揃へて行くことに、相當に困難な事情にあることは深く察せられる。私どもは各國指導者の立場に同情し、その政治力强化には、あらゆる協力をいたしてまゐりたい。」

そのためには、現實の施策において、共同宣言に盛られた理想を事實によつて具現することである。共榮圈の理想を說くことはもとより必要であるが、大東亞の實情からみれば、まづ生活の安定を確保しなければその效果は期待できないであらう。戰時下における國民の生活は窮屈を加へてゐるが、殊に大東亞圈内各地域においては、米英の搾取政策の犧牲として國民生活の自給度が非常に低く、米英蘭などの侵略者の本國に依存せしめられてゐたため、その影響は今日においてもなほ相當に深刻である。從つて戰時下の一切の惡條件を克服して現地に產業を興し、物資や技術や資金を送り、あらゆる手段をつくして各地域の民生の確保に協力することがなによりも急務である。寺内南方方面最高指揮官が大東亞戰爭第二周年記念日に際し「軍政方面においても、關係諸員の熱誠とその陣頭指揮、ならびに現地民衆の奮起とにより、治安の確保はもとより、作戰協力、開發建設などは着々軌道に乘り、いまや南方地域總力體制は將に完成の域に到達せんとしつゝあることは同慶のいたりにたへない」との談話を發表してゐることは、まことに力强きかぎりといはなければならぬ。

二月三日の衆議院決算委員會において、山本大東亞次官は共同宣言を現實に實行に移すためには、各國政府機關の提携によるばかりではなく、宣言の趣旨に徹して各國民・各民族のうちに自ら盛りあがる國民運動の連繫によらなければならぬと思ふが、その具體的措置についてはなほ研究中である、とのべてゐる。共同宣言それ自體が各國々民運動を連繫する紐帶である。しかしながら困難が豫想されないわけではない。それは各國の興亞運動はそれぞれの歷史と傳統と、その據つて立つ主義・主張とをもつてゐる。從つて運動を推進するにあたつては各國の特殊性を考慮し、この特殊性に卽應する方策を樹立することが必要である。しかしながらその特殊性を强調するのあまり、各團體がバラバラの行動をとることは、もちろん嚴に戒めなくてはならない。各國興亞團體は共同宣言に示された指導原理にもとづき、それぞれの特殊性を考慮して、その實踐綱領を決定すべきである。さうして統一ある運動を展開するために、興亞團體の橫斷的な組織である興亞總力體制を確立し、主觀的な必勝の體制へ躍進することが、刻下喫緊の急務である。

距離と量の大東亞戰局

天藤明

一　敵の反攻主軸線

昨年十一月二十一日中部太平洋の小島ギルバート諸島マキン、タラワ兩島に對する敵アメリカの上陸作戰によつて、最もアメリカ國民が待望してゐるところのいはゆる對日中央進攻作戰なるものが開始された。しかして十二月十九日にはニューブリテン島マーカス岬、同二十六日にはグロスター岬、明けて一月二日にはニューギニア島グンビ岬とそれ〴〵上陸、ビスマルク群島、ニューギニア島方面へわが注意を集中せしめつゝ、一月三十日すなはちギルバート來襲からわづかに七十日にしてわがマーシャル群島の要點クェゼリン島ならびにルオット島に上陸を敢行し來つた。かくてこれを確保するや二月十七日には內南洋の最要點でありビスマルク、ニューギニア方面への扇の要ともいふべきトラック島に對して機動部隊をもつて攻擊を加へ來り、さらにわづか五日を置いた同月二十二日その背後の要點たるマリアナ群島方面に同樣機動部隊によつて襲擊し來つた。

かく敵が中部太平洋において打つてきた手をみると今度はわが本土への空爆であらうと一應考へられる。また敵もこれを呼號しその氣勢さへみせてゐる。だがわれ〳〵はこゝに冷靜に敵狀を判斷し、敵の眞の企圖をしつかりと把握これに對處するところがなければならぬ。敵のわが本土空襲は地味な作戰、あるひはまた長期戰に飽きやすい米國民衆を引つぱつて行くためにどうしても行はなければならぬ手である。いはば政治的作戰である。されば多大の犧牲を拂つてもあるひはこれを敢行するかも知れない。しかし空襲によつてわが日本を屈服せしめることができないことは彼らといへども自らよく承知してゐる。對獨爆擊のごとく熾烈なる空襲を敢行してもなほ空襲による勝利は望むことができないのである。ましてわが本土に對しては地理的條件、航空機の性能からして對獨爆擊のごとき大空襲の不可能なるにおいてをやである。われわれは中部太平洋において敵が打つてきた手に眩惑されて敵反攻の本筋を見逃してはならない。

敵反攻の主要作戰はあくまでソロモンからビスマルクを經てニューギニアの北岸を西に進む線である。わが最前線の重要據點ラバウルを攻略してニューギニアから東印度のわが資源地帶に迫らんとするマックアーサー攻勢であるといふことができる。しかしてこれが促進をはかりわが兵力の分散を行はしめ、いはゆるわが內線作戰の利たる隨時隨所に兵力集中を行ひ得る態勢を採らしめざらんとするもの、具體的にいへばわがあらゆる兵力をソロモン、ビスマルク、ニューギニア方面にのみ集中せしめず、他に引きつけてマックアーサー反攻の主要作戰を容易ならしめんとするものが

一、中部太平洋から空母を中心とする機動部隊によるニミッツ反攻、いはゆる中央進攻

一、アラスカ、アリューシャンからする北方進攻

一、ビルマ、スマトラ方面を狙ふマウントバッテン反攻

一、在支米空軍の蠢動、支那本土からの空の反攻

などである。これらを稱して敵は總反攻といつてをり、各個の反攻においてそれ〴〵獨自の狙ひと意義をもつてゐることはいふまでもないが、これを大局的にみるに、ソロモン、ニューギニア方面からするマックアーサー反攻を主軸に動いてゐるとみてよからう。右のほかに特定の反攻と名づくべきものではないが、わが戰力低下を狙ふ潛水艦戰の强化を見逃してはならない。また敵の空からする反攻中最近特に注目すべきは、

一、空母の大型化による双發中型陸上爆擊機の艦載計畫で、これによつて遠距離海上からするわが本土爆擊

一、B29といふ超重爆擊機による遠距離基地からのわが本土空襲

の二つの大きな動きのあることである。

二　東印度の資源を狙ふ

敵の反攻態勢は大體右のごときものであるが、さてしからばなにがゆゑに敵はソロモン、ニューギニア方面の反攻をもつて主要作戰とするか、それにはつぎのごとき二つの現代戰特有の理由があり、現代戰の本質に徹するならば敵の企圖はおのづから判然とするのである。すなはちまづ第一の理由はマックアーサー反攻は資源作戰である。第二の理由は航空機作戰であることを銘記すればよい。

資源作戰とはわが戰力の根源をなす資源地帶である東印度を奪回せんとすることである。現代戰は大消耗戰である。いまいづれの國をみてもストックによつて戰つてゐる國は一國たりともないことはいふまでもない。飛行機にしろ艦船にしろ戰車、重砲、彈藥にしろ、すべて前線の大消耗に對して十分なる補給を行はなければならない。補給の不十分が戰ひを不利ならしめたるは獨ソの東部戰線をみてもまた樞軸軍のアフリカ戰線撤退をみてもわかる。補給とは銃後の策源地から前線へこれらの軍需品を持つて行くといふそれのみではない。銃後において前線の需要に應ずべく生産し、かつ送るといふことである。現代戰は生産しつゝの戰ひである。いはゞ生産戰である。從つてこの生産に必要なる資源に不足を來せば戰の勝敗は自ら決する。マックアーサーいな敵米英はこれを狙つてゐるのである。われらの手から東印度を奪回し、軍需資源を枯渇せしめ、しかして逆に自らの戰力に大增强をはからんとしてゐるのだ。たとひ帝都が廢墟と化さうとも地方の生産施設さへ健在であり南方から資源を運び得るならばわが戰爭遂行力には微塵も動搖を來すことはない。だがもしかりに東印度を奪回されたなら、いな奪回されないまでも油田地帶が敵爆撃のため潰滅に瀕したらどうであらう。我に飛行機が幾萬台あらうとも、不沈軍艦が幾百隻あらうとも、さらにまた幾十萬の戰車があらうとも油なくしては動かすことができない。玩具同然と化してしまふ。こゝに東印度確保、その前衞たるソロモン、ニューギニア、ビスマルクにおける敵進攻企圖破碎の重要性があり、敵のマックアーサー反攻をもつて地味ながらも最重視する所以があるのである。さらに一步進んで考へるならばこの東印度こそは永遠の寶庫である。たとひアメリカ加州における石油を掘り盡してしまふ時代がきてもこの東印度には太陽と黑潮の惠みを十分に吸收し、液體燃料の原料たる砂糖、ゴム、パーム、コプラなどの資材植物は永遠に繁茂し、これを大東亞共榮圈に供給してくれる。將來有機物をもつて無機物に代へる時代がきても東印度で十分であらう。さらにまた東印度を制してをればおのづから西南太平洋と印度洋を制し得る。結局東印度を確保することは大東亞諸民族が永遠に繁榮する資格を有することである。これはまた敵米英にとつて不愉快きはまることである。世界制覇の野望をいだく米にとつて全く我慢ならぬことである。かゝる意味においても東印度が彼らに重要であるといふことはわれ〳〵以上に彼らの方がよりよく知つてゐるといふことも見逃せない事實である。

三　航空基地の好適地を狙ふ

現代戰は航空機戰であるといつても過言ではないほどその重要性が加はつてきた。今次の戰爭において陸上戰における航空機の重要性を全世界に知らしめたのはドイツであらう。ポーランドを席卷し、またゝく間にフランスを降したあのドイツ軍大活躍、大勝利の主因は航空機の壓倒的優勢にあつたのだ。しかして航空機が海洋作戰においてもまた絶對性のものであることを全世界に知らしめたのはわが海軍航空隊である。ハワイ海戰にあの大戰果をあげ、マライ沖海戰では不沈を誇つた英戰艦プリンス・オブ・ウェールスを海底に叩き込んだ大勝利こそ世界戰史に航空機の重要性、海戰における必須性を刻みつけたのである。アメリカもイギリスも敗者の立場において航空機の絶對必要性を味はつた。特にアメリカにおいては太平洋艦隊の大部分が眞珠灣底に屠られてしまつた。艦船よりは飛行機の方が短時日で大量に生産できるといふ考へも手傳つて、たゞちに對日大反攻は飛行機によるべきであるとなしてこゝに大量航空兵力による反攻が決せられたのである。年產六萬台から十二萬台へと大量生產を企圖し一方には學生を總動員、搭乘員の急速養成に乘り出した。わかき純眞なる血は彼ら指導者の巧みなる宣傳に躍り、そして祖國のために高鳴つた。二十數萬に達する學徒が續々と航空隊に入隊、こゝに質においては劣弱とはいへ量において我にはるかに優る大量航空兵力の蓄積に成功した。かくて彼らはいざ反攻を考へたとき、こゝに航空機の弱點に氣づいた。それはなんであるか。いふまでもなく飛行機は飛び出すべき滑走路を必要とする。そしてまた持つて行くべき爆彈、魚雷を貯藏すべき施設、飛行機そのものを置くべき格納場所、さらに飛ぶために缺くべからざるガソリンを保存すべき施設、搭乘員、整備員の宿舍を必要とする。さらにこれを護る高角砲陣地もなければならぬ。そしてこれらすべてが敵の爆彈に破壞されざるやうできるだけ堅固なものにしなければならない。いはゆる航空基地が必要なのである。これらの諸設備を巧みにまとめあげて海上を自らの意圖するところへ思ふまゝに機動し得るやうにしたのが航空母艦である。だが空母は自ら搭載機數に制限を受ける。大量航空兵力を活用するためには大量空母を建造しなければならぬ。だが空母の建造には相當の日數が必要である。これではたゞちに大反攻を起すには間に合はぬといふのが開戰後間もないアメリカ作戰首腦部の考へであつた。そこで陸上にこの基地を求めそこから反攻の第一步を踏み出さねばならなくなつた。しかしさらに深慮するに現代

で航空戰は陸上飛行場を作つてもそれが滑走路一本のみでは十分でない。いざ敵機空襲の場合、あるひは多數の飛行機、——戰鬪機も攻擊機も一齊に飛び出し舞ひ上れるやうにできるだけ多くの滑走路を必要とする。さらに滑走路が多ければ多いほど、一本二本と敵の爆撃にやられても他の滑走路を使用することができて、敵機の跳梁にゆだねずにすむのである。また滑走路が多ければいかなる方向の風が吹いても離着陸に不便を來さない。かゝる飛行基地をつくるには相當の廣地域を要し、條件も備はらねばならない。さらにもう一つ留意すべきことはかゝる飛行場ができてもこれが一箇所では十分でない。一飛行場のみでは何百何千といふ大量航空兵力の展開ができない。そしてまた一飛行場のみの場合はこれが敵の大空襲によつて制壓されたならば、これを修理し飛行機その他を再整備するまではもう航空兵力による戰鬪は不可能となり、敵に制空權を把握されてしまふことになる。從つて滑走路を澤山持つ飛行場が集團をなしてゐなければならない。甲飛行場が空襲されてゐる間に乙丙の飛行場から飛び出して戰鬪を行ふことができ、甲、乙、丙の各飛行場が制壓されても丁、戊の飛行場から飛び立つて戰鬪を經續し、その間に甲、乙、丙をそれ〴〵復活することができる。しかして飛行場が多ければ多いほど、大量航空兵力が展開できる。アメリカが

自らの大量航空兵力を活用するための作戰計畫を練つたとき、おそらくソロモン、ニューギニアの線をとることに一致して決定したにちがひない。アリューシャンをみても大量航空兵力を展開するにはあまりにも島が小さくまた岩山が多く飛行場設定に不便である。中部太平洋をみても同樣である。ウエーキにしろマーシャル方面にしてもいづれも小さな珊瑚礁で大空軍の展開は不可能である。されば支那本土の日本軍非進駐地帶はどうであるか。なるほど大飛行場を建設し得る地が無數にある。これを建設して飛行機を印度方面からどしどし空輸することもできる。だが最も肝要なガソリンと爆彈をいかにして運ぶか。唯一ともいふべきビルマ・ルートは完全に日本軍に押へられてしまつてゐる。空輸するには數千機といふ輸送機を必要とする。これまた不可能なことである。從つて支那本土も當分駄目といふことになる。かくして唯一の途はソロモン、ニューギニア方面のみといふことになつた。ソロモン群島はほとんど海岸からすぐ山岳地帶に入るか、さもなくば濕地帶であるが、彼らの土木技術をもつてすればどうやら飛行場の設定が相當箇所にできる。ニューギニアにおいては平時金鑛開發のため山中ならびに海岸に幼稚ながらも多數の飛行場がある。これを整備すればよい。さらに好適地が相當ある。こゝに大量航空兵力の展開ができる。しかも日本の最も重要地帶とする東印度の資源地帶に接近してゐる。かくて彼らの本格的反攻はわが資源地帶の奪回と航空機の大量使用といふ二點からソロモン、ニューギニア方面に向けられ、昭和十七年八月七日ガダルカナル島ルンガ飛行場攻擊によつて開始されたのである。

四　航空機の量による反攻

しからば彼らはいかにして大量空軍を活用し來つたか。彼らは個々の戰鬪ならびに航空技術は劣弱である。だが劣弱なるまゝにこれを大量使用することによつて目的をある程度達し來り、これが同方面におけるわが軍の押され氣味なる主因をなしてゐるのである。彼らの空軍用兵をつぎに二、三檢討してみることとしよう。

一、　敵がまづ敵前上陸を行はんとするとき、わが飛行基地に對して連日大擧空襲を敢行し來る。たとへば昨年十月三十一日ブーゲンビル島トロキナ岬に上陸を行つてきた際における敵空軍はニュープリテン島ラバウル、ブーゲンビル島ブイン、あるひは同島南方に位する小島飛行場バラレ、同北方のブカ島ブカ飛行場などに對し百機二百機、ある時は三百機を超える大空軍をもつて襲撃し來つた。この際敵は小型爆彈をもつてわが飛行場における飛行機の破碎を狙つてきた。これを飛行場あたり一面ばら撒くときいかに上手に掩蔽中に格納しておいても爆彈の貫通しない地下格納にあらざるかぎりその都度幾分かの損害を被る。バラレのごとき小島に對しては全島に小型爆彈を撒きちらして行つた。また時限爆彈を飛行場附近一帶にところかまはず落して行く。そして飛行場の修理を延滯せしめる。設營隊員が夜を徹して辛苦の末修理すればもう夜明けとともに飛來、またも破壞して行くといふ狀況であつた。これを行ふ飛行機は決して一機よく一艦を屠る名手でなくてもよい。たゞ飛行場上空まで指揮官に追從し來つてその命令一下投彈すればよいのである。しかもかゝる多數の爆彈を投下するにはどうしても多量の航空機を必要とするのである。かくして殘念ながらわが基地ブイン、バラレ、ブカは敵のため制壓されるところとなり、つひに敵はラバウルから飛び立つたわが海鷲により多大の犧牲を出しながらもトロキナ上陸をなし得たのである。

一、　十月三十一日未明、敵輸送船團が護衞艦隊と直衞機を配してトロキナに迫り來つた。これを發見した哨戒機は觸接を保ちつゝたゞちに基地に打電する。わが海鷲はあるひは魚雷をいだき、爆彈をいだいて相ついで基地から發進、戰爆連合の編隊はまづ敵の護衞艦隊に突擊、敵直衞機の抵抗を排

除しつゝ痛烈なる雷撃戰を敢行、多大の戰果をあげた。つゞいて敵輸送船をも相ついで撃沈し去つた。だがこの間に打ちもらしたのがトロキナにたどりつき、そして上陸を開始した。わが海鷲は二度三度と魚雷、爆彈を搭載しては攻撃に向つた。この間に殘念ながら自爆機も出る。多數の被彈機が出る。自爆は免れたが敵彈のためやうやく基地に歸りつく機が多い。かゝる機はたゞちに魚雷、爆彈を積んで再び飛び出すことはできない。修理に時間を要する。あるひは永久に使用不可能なものも被彈機の中には多いのである。かくて二回、三回と同じ機で攻撃を操りかへすうち、機數はだん〳〵と少くなる。いかに世界最優秀のわが搭乘員とはいへ一日に三回も四回も攻撃に行くことは死よりも苦しいことである。かゝるとき敵はさらに新しき船團に新手の航空兵力を配してトロキナ上陸地點目指して北上し來つた。敵の北上が判明してをりながら、これを攻撃に行けない。それは航空兵力が寡少であるからである。とにかく敵はトロキナ上陸作戰において多數の艦船と航空機を失つた。この大戰果が大本營から發表され、國民のうちには戰ひの本質を摑まないでこの戰果のみをみてわが大勝利と喜び、戰果はあがるが戰局は不利となりつつあるを把握せずに心に緊張を失ふ結果を來すことになつたのである。いづれにしても大量航空兵力さへあれば敵をしてトロキナに上陸せしめずして撃退し得たことは間違ひないのである。

一、　トロキナ岬においてわが陸海の守備部隊と敵上陸軍との間に痛烈なるジャングル戰が展開された。戰鬪が激烈になればなるほど兵力の增強、食糧彈藥の補給が必要となつてくる。わが方も敵もこれに對し補給の途を講じなければならぬ。だがそれにはやはり制空權を確保しておかないと輸送船が接近するとき敵機のために撃沈されてしまふ。そこでトロキナ上空において制空權の獲得に大空戰が展開される。わが戰鬪機隊はたちまち敵戰鬪機を撃墜し敵機を追ひ散らし、攻撃機は敵輸送船に命中彈を加へて大損害を與へる。だが飛行機はいつまでもトロキナ上空にとゞまることはできない。基地に歸らねばならぬ。わが機が基地に歸ると敵はたゞちに新手の船團と新手の飛行機をもつて北上し來る。この飛電一閃わが海鷲はたゞちに出撃、赫々たる戰果をあげて歸る。だが敵はさらに他の船團を他の航空兵力が直衞して出動し來る。かく新手々々が出撃し來つては空戰そのものにおいてはわが方がつねに勝利を得ても、トロキナ上空において時間的に制空權を握つてゐる間は敵の方が多い結果となる。下手でも數量の多い方が時間的制空權を握ることができるといふ結論となり、結局トロキナに對しては敵の補給の方が十分に行はれる結果を招來することになるのである。

一、　あるひはまたわが艦船を攻撃し來る場合においてもわが機のごとく一機一發必中でなくても、多數の飛行機をもつてをれば戰果をあげることができる。すなはち數十機、數百機をもつてわが艦船の上空に覆ひかぶさつてしまふ。この際指揮官機一機のみ優秀であればこの大群を巧みにわが艦船上空に誘導することができる。かくて指揮官の命令一下投彈するならばいづれかの爆彈がわが艦船に命中する。かくて劣弱なる航空機といへどもかゝる方法によりある程度の戰果をあげ得るのである。

以上は數例にすぎないが、敵はかくのごとき大量航空兵力の活用によりてじり〳〵とソロモン方面から押しあげてきた。ガダルカナル、コロンバンガラ、ニュージョージア、ベララベラ、モノ、ウッドラック、トロブリアンドの島々に多數の飛行基地を設營し、飛行機を展開した。ニューギニア方面においても東端のラビからブナ、モロベ、サラモア、ラエ、フィンシハーヘンと海岸づたひに基地を進め、さらに密林地帶に數へ切れぬほどの飛行場を建設した。こゝにおいて敵はこれらの基地から飛ばす大量機によつて、あるひはブーゲンビル島へのわが補給を斷たんとし、さらにラバウルへの補給路を脅かし、そしてまた連日連夜わが基地ラバウルに大空襲を敢行し來つた。わが海鷲は寡兵よく怒濤のごとき敵大空軍をがつちりと受け止めて、大撃墜戰を展開した戰果は偉大であつた。だがわが基地航空兵力は次第に減少せざるを得なかつたのである。この機逸すべからずと敵は昭和十七年十月南太平洋海戰に保有空母大半を失つて以來默々として建設しつゝあつた艦隊航空兵力をくり出してきたのである。わが基地航空兵力をもはや殲滅し得たりと信ずるや、わが基地航空機の威力圈内に堂々と空母を中心とする機動部隊を出撃せしめてきた。基地航空兵力と艦隊航空兵力の兩刀をもつて一擧にラバウルにおけるわが航空兵力はもちろん、水上艦艇、地上陣地、あらゆる兵力の一擧潰滅を期して一大攻勢を展開し來つた。しかしてトロキナを足場にラバウル奪回を狙つたのである。だがそこにわが作戰の妙、兵力集中の用兵の至妙さが遺憾なく發揮されて、敵の企圖は完全に破碎され、ハルゼー艦隊は遂に潰滅の運命をたどつたのである。これが六次にわたるブーゲンビル島沖航空戰である。ハルゼー艦隊は大半ソロモンの海底に消えても彼らのソロモン、ニューギニアから東印度への意圖は決して消え去つたわけではない。いなそれどころかます〳〵鬪魂を燃やして狂氣のごとくこれを貫徹せんとしてゐる。彼らはさらに一段と基地航空兵力を强化してまたも制空權下に一歩一歩と陸上基地の推進をはから

んとするブーゲンビル島沖航空戰以前の着實なる戰法に立ちかへつた。こゝにおいて注目すべき現象は艦載機の使用である。いかに尨大なる輸送力を有するアメリカとはいへ連日何十機といふ消耗に對しては、思ふやうに米本土から前線へ陸上機を送ることはできない。しかもこの連續大攻勢の手を拔いたのではそれまでの犧牲と勞苦が無に歸する。そこで最も早く輸送できる艦載機を補給し、これを陸上にあげて使用しはじめたのである。艦載機は組立てたまゝ輸送空母に積み、前線基地に近づくやこれを艦上から飛ばせばたゞちに使用でき、陸上機のごとく荷揚げしてさらに日數を要して組立てる必要がないから急速補給には最も都合がよいのである。焦る敵はつひに艦載機を陸上に揚げて大攻勢を繼續しはじめた。しかして彼らの當面の目標であるラバウル攻略を果さんと必死の反撃をラバウルに集中し來つた。なにゆゑにラバウル攻略にあらゆる犧牲を敵は惜まないのであらうか。

五　西南太平洋戰線

ラバウルは航空機をはじめ水上艦艇その他あらゆる點において最前線における要衝である。敵がニューギニアの北岸を西進して東印度に達せんとするにはいかにしてもこのラバウルを攻略しておかないとこれを敢行することができない。なんとなれば西進すればするほど補給路は伸び、ニューギニアが密林地帶で陸上補給が不可能であるため、この補給は海路に賴る以外に方途がない。しかるにラバウルが健在なるかぎり彼らはこの補給路を斷ち切られ、しかも彼らの前進部隊は腹背に敵を受けて自滅のほかはなくなるのである。さらにまたラバウルは特に飛行機の展開力においてすぐれてゐる。この方面における隨一である。彼らの土木技術をもつてすれば數千機を悠々常置できるであらう。これを手に入れることによつて敵の大量航空兵力はます〳〵活用度を上昇せしめることができる。だが逆にわが國力が充實し、航空機の大量生産が可能となつた曉には、またこゝに大量の航空兵力を展開し得る。絶對に優秀なる航空兵力を多量に展開されたのでは敵は一たまりもなからう。一瞬の間に敵航空兵力は制壓され、ソロモン、ニューギニアにおいて反攻どころか後退を餘儀なくされてしまふ。こゝに敵が〝日本に時を與へるな〟と呼號し遮二無二ラバウルを奪回せんとする大きな理由がある。だがいかにしてもラバウルは堅固であり、攻めても攻めてもラバウル上空において敵機は大損害を被る。こゝにおいて彼らが考へたのは第一にわが兵力の分散であり、第二にラバウル包圍態勢を完成して直接この强固な陣地を衝かず、この補給路を遮斷してその自滅をはからんとする方法をとり來つたのである。

その第一策たるわが兵力分散を狙ひ、同時にブーゲンビル島沖航空戰における敗戰をも糊塗せんとの意圖をもつて打たれた手が中部太平洋におけるニミッツ攻勢で、昨年十一月二十一日のギルバート諸島タラワ、マキン兩島の上陸作戰となつて現れた。敵はこゝにおいても、艦艇においてまた兵員においてハワイ海戰、ブーゲンビル島沖航空戰に比すべき大犧牲を餘儀なくした。だがとにかく上陸に成功し、一應わが注意を引きつけておきながらたゞちにニュージョージア方面においてラバウル包圍態勢の第一歩ともみるべき手を打つてきた。すなはち十二月十九日ニュージョージア島マーカス岬に上陸を開始し、さらに一週間おいて二十六日にはマーカス岬と反對側のグロスター岬へと出擊し來り、またニューギニアにおいてフィンシハーヘン方面において對峙するわが陸上部隊の背後へ廻つて、一月二日グンビ岬へと矢つぎばやに上陸を敢行し來つたのである。かくして彼らはいづれも上陸地點に飛行場を設定し航空基地によるラバウル包圍態勢を着々と進めつゝある。ラバウルを敵が奪回することはニューギニアの北岸を西進することを最も容易ならしめると同時に、この線を西進することはまたラバウル包圍態勢を整へることであつて、そこには相關性がみられる點も留意すべきであらう。しかして敵の作戰を視るに、敵はわが强固なる陣地を直接衝かずして、つねにその背後に迂回し、こゝに航空基地を急速に設營してその補給路の遮斷を狙つてゐる。ソロモンにおいてはニュージョージア、コロンバンガラ島の背後ベララベラ島への上陸、あるひはブーゲンビル島ではブインの背後トロキナへの上陸、ニューギニアにおいてはラエ、サラモアの背後フィンシハーヘン上陸、さらに前述のグンビ岬上陸、北方においてはキスカの背後アッツ上陸など、いづれも類を同じくするものである。この作戰は彼らの中央進攻路においても現れてきた。すなはちマーシャルへの進攻において敵は最も敵基地から近いマロエラップ環礁や、ミレ島、あるひはまたヤルート島に來らずして、マーシャル群島の中央部背後に位するクェゼリン環礁に上陸戰を行ひ來つたのである。これはマーシャル方面における制空權確保によつてクェゼリン環礁以外のわが地上部隊への補給路を斷ち、自らは犧牲を出さずしてこれを收めんとする意圖にほかならぬ。さらに敵の中央進攻を大局的にみるとき、そこにはわが兵力分散の企圖があると同時に、マーシャル上陸からトラック島、サイパン、テニヤン、グァム、パラオの諸島攻擊へと打つてきた敵の一聯の作戰は、大きくラバウルを迂回しその補給路を痛めるこ

とによつてこれを孤立化せんとする組織的戰法であるとみられる。最近敵はまたラバウル東方の洋上に位するグリーン島にも上陸し來つた。また二月二十九日にはラバウル西方のアドミラルテイ島に有力なる兵を上陸せしめた。かくてラバウル周邊においても包圍態勢の手を打ち、また大きくその背後からも中央進攻の名において手を打ち、あらゆる方途をもつてその攻略に意を用ひてゐるのである。しかしてこのラバウル攻略戰の根本はあくまでニューギニア西進の意圖から出てゐることを忘れてはならぬ。それはすでに敵國内の評論にも現はれはじめサンデー・タイムスのごときは、〝西南太平洋の主力はニューギニア作戰に集中し、ニューギニア西部に對する攻撃を開始すべきである。同方面の日本軍はすこぶる強力であるが、强烈な空襲と背後への上陸敢行によつて案外はやく前進できるであらう〟、などとのべ彼らの眞意を吐露してゐる。

六　中部太平洋戰線

さて敵の中央進攻はあくまでマックアーサー作戰の推進的作戰とみるが、たゞこの中央進攻なるものを單獨的にみるとき、敵の謀略的意圖も含まれてゐるが、そこにはまたほかに

派生的意圖が存する。それはわが本土空襲への足掛りであるといふ點と、このわが防衛線を突破して支那本土との連絡路を達成、同時にわが本土と南方共榮圈との連絡を切斷しつゝ支那本土を基地にわが本土の爆撃に專念せんとする野望を成就せんとするの二點である。その可否は後述するが、この敵の中央進攻において注意すべきことは、敵がギルバート諸島についでマーシャルに上陸し得たこと、さらに空母をもつてトラック島あるひはマリアナ諸島に攻撃を加へ來つたことで、これは相當の犧牲を拂へば大空母群を動員しての大艦隊航空兵力を用ひることによつて、これ等の諸島にたとひ航空基地があつても作戰し得るといふことである。わが内南洋の島々はいづれも小島である。從つて大航空基地の設營は不可能で、大航空兵力の展開は困難となつてくる。ゆゑに敵の多數の空母から飛び立つた大航空兵力に對抗するには限度が生じ、自然その制壓を受ける結果となる。そこで敵のこの大空母群を破るには、どうしてもわが方においてもこれに對抗し得るだけの空母群の充實をはかるべきで、空母は空母によつて制壓しなければならないことを痛切に感ずるわけである。

さて彼らのいはゆる中央進攻に對する結論をのべねばならないが、その第一點たるわが本土空襲については、おそらく犧牲を覺悟のもとにこれを敢行すればでき得るであらう。だがサイパン、テニヤン、グアムのごとき小島に迫つてさへも敵は大した戰果をあげ得ずに空母多數を犧牲に供してゐる。まして全國いたるところに基地を有するわが本土に接近するや、いづこからでもこれを攻撃し得る態勢にあるにおいては、わづか一度の空襲において敵出撃空母の大半を失ふであらう。いかに米が空母陣を誇るといへども、よほど空母不沈の成算がなければその愚は敢て行はないとみるのが至當であらう。米空母の現有勢力は海軍次官フォレスタルの說明をそのまゝ受けいれてもエセックス級の制式空母はわづかに六隻で、インディペンデンス級の改裝巡洋空母が九隻、ほかの五十隻は商船その他高速船の改裝による輸送または商船護衞用の空母である。まだ〳〵わが本土空襲を連續的に敢行するにはあまりにも兵力が寡少すぎる。地中海において伊の要塞パンテラリヤ、ランペヅーサを空爆と艦砲射撃のみによつて降伏せしめ、ローマその他イタリア主要都市を空爆することによつてつひに伊をして降伏せしめ得た當時は、米もいかに空母を犧牲にしてもわが本土を大空襲することによつて降伏までとは行かなくても、空母の犧牲と差引きプラスだけの效果を收め得ると信じたに違ひない。だが猫額大の珊瑚島タラワに連日二日にわたる艦砲射撃に引續いて大空襲を敢行、三千トンの彈丸を叩きこんでなほ降旗も揚げないのは日本軍全滅と敵は信じたであらう。しかるに敵が上陸を開始するや殘れる全員が立ちあがりあらゆる防禦手段を講じ、敵をして未曾有の損害を被らしめて一兵殘らず玉碎し、マキン、クェゼリン、ルオットにおいてもかり、敵は降伏を知らざる大和民族にいまさらながら戰慄を覺えてゐるであらう。かくのごとく物心兩面において爆撃效果の少くしていたづらに犧牲の多い空母よりの本土空襲は、政治的空襲以外には彼らも斷行するにいさゝか躊躇の體といふのが眞實であらう。最近强氣のニミッツも「日本を最も有效に爆撃するにはなんといつても支那本土の基地を利用することである。航空母艦による日本本土爆撃も不可能ではないが、歐洲戰域における經驗に徵すれば陸上の目標物に對しても相當の爆撃效果を與へるためには大量の爆彈を必要とすることがわかつた。しかしながら米海軍は機會さへあれば必ず日本に一撃を加へるであらう」、とのべ、暗に空母からの大擧空襲による多量爆彈投下、また連續爆撃の不可能を認めてゐる。しからばつぎに中央進攻路による支那本土への連絡の第二點についていかんといふに、ニミッツはまた「太平洋戰域の米海軍は艦船も兵員も十分であるが、直面する最大の障碍はきはめて廣大な太平洋の廣さである」、とわが制海範圍を突破して行くことの困難さを率直に認めてゐる。敵がマーシャルに上陸し得たからとてたゞちに

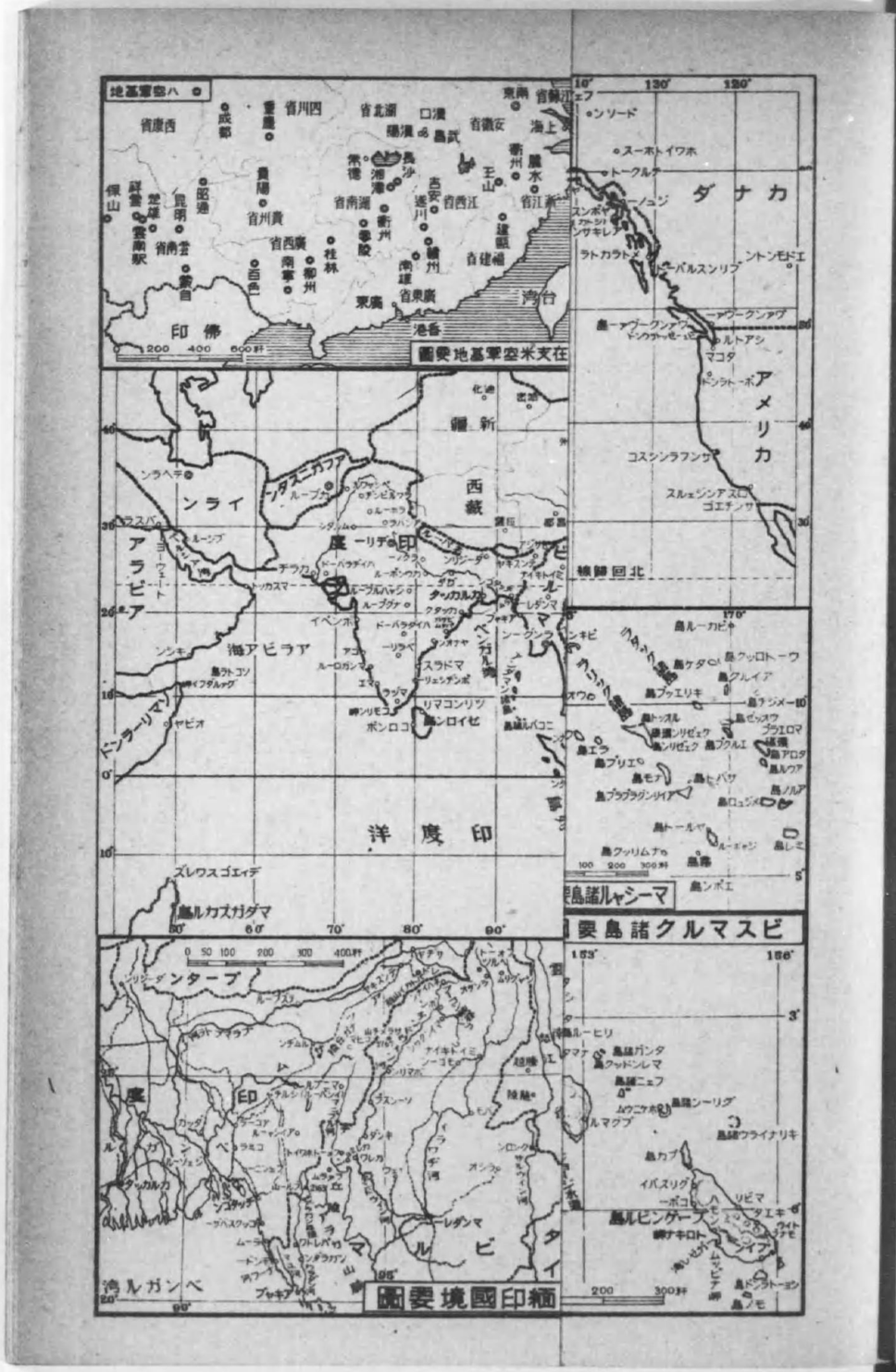
トラック島にあるひはマリアナ諸島に上陸し得るとは決していひ得ない。マーシャルからさらに何百マイルといふ距離の防禦がある。速力のおそい輸送船團がのろ〳〵とやつてきたのではたゞちにがわ哨戒網に引つかゝり、いかに護衛が強固であらうとも撃沈の憂き目に逢ふことはいふまでない。敵はマーシャル上陸に成功したが、トラックは空襲のみに終つた。そしてマリアナ攻撃においては空襲を敢行する前にすでに數艦は撃沈され、わづかに申譯的に空襲を行つて殘餘の艦隊は倉皇と逃げ去つてしまつたではないか。領域の尨大さは敵の長略を最も困難ならしめる。たとひ敵が外郭第一線を破り得たとしても、その推進力は波紋のごとくいくばくもなく迫力を失ひ、再び均衡狀態に入り、たとひさらに攻勢が伸びたとしてもさらに數倍の威力が加はらないかぎり、これをいま一段と進めることは不可能である。攻勢の末端はナポレオンにもシーザーにもあつた。國力とその用兵に比例して限度がある。獨ソ戰においても電撃の威力を以てしてもソ聯の尨大なる領土を遂に制し得なかつた。敵米の物量の威力もわが制海領域を簡單に破り得ることはできまい。中央進攻により支那本土との連絡をとると稱するは彼らの希望であり、戰略論の理想といつてよからう。タラワ、マキンの戰鬪に鑑みマーシャル上陸作戰は相當なる用意と覺悟をもつてした。すなはちクェゼリン環礁に對しては二箇月前から爆撃を開始、前後十七回におよぶ空爆によつて地上陣地破碎に努めた。しかして侵攻の三日前から艦砲射撃をなし來り戰艦、巡洋艦などの六インチから十六インチにいたる砲彈を一千發も打ち込んできた。艦砲射撃の間には空母から艦載機が飛來して投彈した。かくてクェゼリン環礁の三小島に一万五千トンといふ戰史未曾有の砲爆彈を集中してきた。しかして、上陸し來つたのであるが、よく生き殘つたわが將兵は破壞されたトーチカや海岸砲の下から敢然と躍り出て戰つた。善謀勇戰クェゼリン島においては敵は一度は撃退され、彼らは再び戰艦、爆撃機を呼び戻して砲爆撃を加へねばならなかつた。かくて南海の小島においては四日間にわたつて激鬪は續いたのである。敵がこの作戰に使用した艦隊は北阿上陸作戰に匹敵する。開戰當初英國が保有した戰艦と同樣の量が出動したといはれる。またマーシャル攻撃に參加した艦船量は少くとも米軍二十個師團を歐洲へ輸送し得るものであると稱してゐる。かくてやうやく彼らはこれに成功した。マーシャルからさらに作戰を敢行するには彼らがいかなる努力と物量をもつてしなければならぬかゞほゞ判明する。この中央進攻が彼らのいふ支那本土への途たり得ると何人が正直に考へ得るであらうか。彼らはソロモン、ニューギニアのマックアーサー反攻があまりにも遲

遲たるに忽懈の情禁ずる能はず、思案の末窮餘の一策としてこれが採用を行つたにすぎないのである。

たゞこゝに誰もが注目し疑問に思ふのは敵はなにがゆゑに西北濠から直接東印度を衝きあげて來ないであらうかといふことである。しかしこれは濠洲の地理的條件を考慮するならばおのづから判然とする。すなはち米本土から東岸のシドニー、メルボルン、ブリスベーンなどに一應兵力軍需品を送り得ても、こゝからさらに西北濠へ輸送すべきなんらの輸送力もない。あまりにも大作戰を展開するには補給條件において缺くるところがあり、その上わが防備態勢が强固であるからである。

七　北部太平洋戰線

さてつぎは眼を北方に轉じて見よう。アッツ島から北千島までの距離はわが北海道から千島北端までの距離より近いといふ事實は一應考慮すべきことであらう。米本土のわが本土に最も接近してゐるのが北方である。從つて米國民がその進攻に最も期待をかけるのも宜なるかなといへる。しかしそこには風雪、濃霧、流氷と自然の障碍が横はつてゐる。これをいかに征服するかに彼らの北方進攻の成否いかんがかゝつてゐるのだ。苛酷な自然の力にのみ信賴してをれない狀況たらしめんとする敵米の動きが、最近北方におけるわれ〳〵の最も注目すべき現象といふことができよう。しからば彼らの自然克服の動きとはいかんといふに、まづ第一には一月二十日以降五日間連續夜間爆撃をいづれも數機編隊で、また二月四、五、六の三日間同樣夜間爆撃を北千島に敢行し來つたことで、その機種は速力、防備、攻撃力ともに弱いコンソリデーテッドPBYおよびPB2Y飛行艇であつた。しかも安全性の多い夜間を狙つたことはおそらく試驗飛行に違ひない。敵機の耐氷裝備の試驗に重點がおかれたものとみられる。第二にはついで二月四日夜間に乘じて我監視の目をかすめて北千島沿岸に現れた艦艇數隻が午後九時半から約四十分間にわたつて砲撃を加へて立ち去つたことで、わが兵力の偵察と、わが防備圈への偵察的潛入などを狙つたものとみてよく、これらは彼らが空からあるひは海上から何事かなすあらんと企圖しつゝあるものとみてわが方においてもこれに備へるに如くはない。彼らの北方に集中せる兵力をみるにアッツ、アダク、ダッチハーバーをはじめ各基地に集結したとみられる第一線機は、長距離爆撃機、哨戒用飛行艇、中型爆撃機と攻撃機に重點をおき五百ないし六百機が待機してゐる模樣である。アラスカ、カナダの後方基地における機を算入すればお

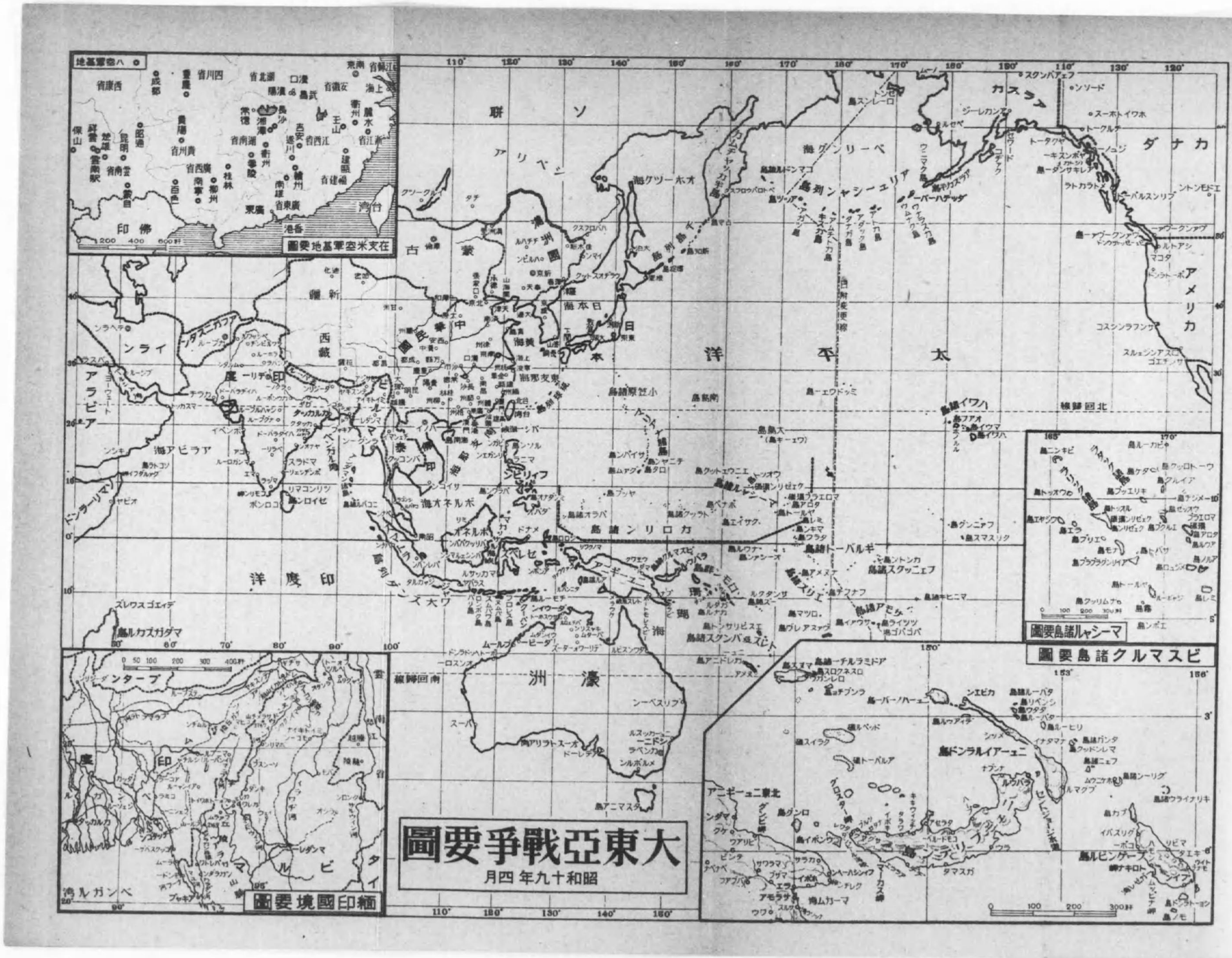


そらく千數百機とみてよからう。ついで陸上兵力はアラスカ、アレウト山系において訓練されたと稱する山岳部隊、落下傘部隊、戰車、裝甲車などの機動部隊を含む五、六個師團十二、三萬の兵がをクルック島を中心に配備されてゐる模様である。また海上兵力はダッチハーバー、コヂャックを根據地とし新司令官フレッチャーのもとに各種艦艇を相當數保持してゐる。だがこれらの兵力をもつてしては到底わが千島に來襲することはもちろん不可能で、彼らが千島上陸を敢行するにはおそらく全太平洋艦隊を動員しなければ目算は立つまい。こゝにもわが領域的防備の利があり、彼らがいま千島上陸を呼號するならば、それは彼らの現兵力に徵するとき謀略的宣傳以外になにものもないといへるのである。

八　在支基地化による米の反攻

マリアナ群島を攻撃して失敗した敵は海上機動部隊による日本本土空襲の困難さをしみ〴〵と味つた。海上からわが本土空襲が困難なとき最も考へられるのは支那本土からの空襲で、爾來アメリカ軍部内において在支米空軍重視論が擡頭しはじめてきた。ニミッツは日本を撃破するには支那大陸から攻撃を加へる以外に手がないとのべ、しかも在支米空軍の强化策いかんについては〝麾下艦隊を率ゐて太平洋を横斷進撃する〟、とわが戰略態勢や海軍力を無視した暴論を吐き、むしろビルマルート再開不能を告白してゐるが、いづれにしても支那大陸に飛行機はもちろん軍需品を送り、重慶政權のいはゆる最大動員力五千二百三十餘万に武器を與へて、支那大陸からわが兵力を驅逐しなければ勝利の途はないといふ考へ方が强くなつてきたことは事實である。また陸相スティムソンもまた〝武器貸與を强化して重慶軍を第一線において活潑なる戰ひを行はしめねばならぬ〟、とのべ、ニミッツ同樣重慶重視を認めてゐる。これらの考へ方はむしろ現在までの彼あのとり來つたわが防備戰への反撃があまりにも犧牲が大きく、これを繼續せんか、アメリカの尨大なる軍需生産力をもつてしてもこれに耐へることができないといふ點を認め、ある意味において彼らの作戰の失敗を吐露してゐるともみられるのである。ともあれ目下のところ重慶重視のもつ最も大きな意義は在支米空軍の强化で、これによつて從來のゲリラ戰から對日本格的空襲を狙つてゐることは間違ひない。しかしてつぎのごとき主なる動きがみられるが、たゞ增强ルートがわが軍に押へられ、彼らの意のごとくならないことはいふまでもなからう。

一、わが在支部隊の戰力低下、和平地區主要地の孤立化



八　在支基地化による米の反攻

マリアナ群島を攻撃して失敗した敵は海上機動部隊による日本本土空襲の困難さをしみ〴〵と味つた。海上からわが本土空襲が困難なとき最も考へられるのは支那本土からの空襲で、爾來アメリカ軍部内において在支米空軍重視論が擡頭しはじめてきた。ニミッツは日本を撃破するには支那大陸から攻撃を加へる以外に手がないとのべ、しかも在支米空軍の強

る意味において彼らの作戦の失敗を吐露してゐるともみられるのである。ともあれ目下のところ重慶重視のもつ最も大きな意義は在支米空軍の強化で、これによつて從來のゲリラ戦から對日本格的空襲を狙つてゐることは間違ひない。しかしてつぎのごとき主なる動きがみられるが、たゞ増強ルートがわが軍に押へられ、彼らの意のごとくならないことはいふまでもなからう。

一、　わが在支部隊の戦力低下、和平地區主要地の孤立化

を企圖し、主要地をつなぐ鐵道、揚子江、南支沿岸を航行するわが船舶を目標に出撃、わが後方交通線の遮斷を行はんとする。

一、敵の最も望むわが本土空襲もわが航空部隊の活動に意のごとくならず、こゝにおいて敵は戰意を旺盛にしわが航空部隊に挑戰せんとしてゐる。

一、江西省では遂川、福建省では建甌などわが航空部隊にいかに叩かれても、これを整備せんと懸命の努力をつゞけ、前進基地の强化をはかつてゐる。また一方桂林、昆明などの後方基地の擴充にも努め、B29のごとき長距離機の離着陸に備へんとしてゐる。前後方合せて二十數箇所の基地が米人指導のもとに整備擴充され、一大航空要塞化を行はんとしてゐる。

一、B24、B25などをもつてしてはその前進基地はつねに叩かれてゐる現狀では、わが本土心臟部の爆撃は困難なので後方基地から爆撃可能なるB29、B32などを配置せんとしてゐる。いはゞ新銳機による本土空襲の企圖が漸次濃化されてきた。しかしこれも目下準備中といふ程度で、われに對處するだけの時の利は十分にあることを銘記しなければならぬ。

九　印緬戰線

英國の人氣男マウントバッテンを東南アジア軍司令官に任命、大宣傳につとめたビルマ反攻も全く意のごとくならずといふのが現狀である。本格的ビルマ反攻は地理的條件の最も悪い陸上作戰ではあるまい。彼らの企圖は東部印緬、北部印緬、雲南の三國境から一齊に反攻進軍をなし、この方面にわが兵力を集中せしめておいて海上からベンガル灣を經てラングーン方面へ、あるひはアンダマン、ニコバル方面へと上陸、これを基地化してわがビルマ軍の補給路を斷ち、一擧にビルマを奪回しようといふにあつた。だが陸上においてはいづれもわが陸軍部隊の先制攻撃に逢つて敗戰につぐ敗戰をつづけ、これに加へてベンガル灣の上陸作戰は目下全く望みうすとなつた。海上よりの上陸作戰實行困難の因は種々あらうが、まづ第一にはイタリア戰線が案外手間どつてゐること、第二は歐洲第二戰線問題などから艦艇、船舶、兵員、航空兵力などのビルマ方面への增强困難となつたことによるものとみてよからう。ビルマ戰線は地勢からして陸上交通はきはめて困難で、敵が陸上大兵力をしてわが軍と接觸せしめるためには、どうしても海路を擇ぶよりほか途がない。しかしてわ

が軍は今日まで道路その他に非常な改善を施し、兵力の急速なる移動を斷行し得る狀況である、從つて彼らが上陸作戰を斷行すればたゞちにわが軍の大兵力と衝突しなければならぬ。ゆゑに彼らの兵力もわが大軍を壓倒するに足る大兵力の上陸を行はねばならぬことになる。上陸作戰を斷行する前にはわが航空兵力を押へておかないと、島影一つさへ視野に入らぬ紺碧のベンガル灣において彼らの船團はたゞちに發見されて恐らく擊滅の運命をたどるであらう。そこに基地航空部隊の增强、空母を中心とする大艦隊の增派が必要とされ、大船團、多數の上陸用舟艇また必要缺くべからざるものである。これがいまだに準備ができない。しかしこのまゝ腕を拱いてゐるわけにも行かない。わが軍の防備陣の完璧を期せしめないため、あるひは兵力を分散せしめるため、現在能ふかぎりの努力を拂はねばならぬといふ彼らの狙ひが、今回東部印緬國境の蠢動となつて現れた。だがこれもブチドン正面シンゼイワ盆地、モンドウ方面において敵第七師、第五師がまさに潰滅に瀕するの憂き目に逢ひ、インパールは將に陷んとしてゐる。われ〳〵がビルマ戰線において最も注意すべきは敵の航空兵力である。目下東部印緬國境においては逐次增强されてテンスキア、インパール、パレル、シルチヤ、タラバザー、アユーラ、フェンニー、チッタゴン、コックスバザーなど大小百箇所に約一千機が集結してゐる。また空母も逐次廻航されつゝあらう。だがこれくらゐの航空兵力ではまだまだ大反攻を行ふには十分ではない。彼らの航空大兵力が東部印緬國境に集中しはじめた時こそ彼らの本格的反攻が開始される秋である。

十　時の利に立つわが防備態勢の强化

B29、B32の長距離爆撃機もわが本土に對して連續的大爆撃を敢行するにはいまだ性能において數量において十分でない。大型空母はいまなほ建造中であり、大型空母からする双發爆撃機による空爆もゲリラ的空襲以外になにものでもあり得ない。時の利はまだ〳〵我にある。「時の利」あるがゆゑにゆつくり防備態勢を備へてよいといふことではない。時の利を一刻も無駄にできないのが現狀である。わが國はじまつて以來いまほど時の重要なることはあるまい。一刻千金、万金以上に値する秋である。彼らの謀略宣傳に耳を藉すことなくいまこそすべてをあげて防衛線の强化に、銃後決戰態勢の强化に努めねばならない。

南方火線の示唆

門田圭三

一　南太平洋の激鬪

1　ラバウル戰局總觀

敵米が最大戰力を傾けて大反攻を企圖しつゝある太平洋正面の戰局は、トラック爆撃（十九・二・十七―十八）および同じ敵機動部隊によつて行はれたサイパン、テニヤン爆撃（十九・二・二十三）を境として、さらに重大な新段階に突入するにいたつた。ガダルカナル戰の口火が切られて以來、ソロモン戰局が太平洋における最も重要な戰場としての地位を占めつゝあつた。ギルバート反攻作戰の開始（十八・十一・二十一）によつて中部太平洋突破を試みんとするニミッツ攻勢の企圖は、漸くその鋒先を現しはじめたとはいへ、なほソロモン戰局の重大さは世界の視聽を集め、ラバウル攻防戰の歸結いかんは太平洋における彼我の戰略態勢に至大の影響を與へるものとして最大の關心をひきつけつゝあつた。ラバウルを死守し强靱なる航空要塞であるこの地點を確保することは、第一にガダルカナル以來押してきた敵に一擧に反撃を加へ、わが態勢挽回の一大痛棒を與へるための最大の據點を確保することであり、第二にトラック方面を中心とする內南洋への關門を堅守することである。この二大戰略的要請からラバウル戰局に對しては依然最大の戰術的重點がおかれてきたのである。

一月末日から開始せられたマーシャル諸島、クェゼリン、ルオット上陸作戰によつて戰火は內南洋に及ぶにいたり、敵のニミッツ攻勢は容易ならぬものであることが漸く明かになつたのであつたが更に兩島守備皇軍部隊の壯烈なる戰死後一旬にして大艦にも敵が機動部隊を驅つて決行し來つたトラック爆撃サイパン、テニヤン爆撃は、中部太平洋のわが堅壘を脅

かすにいたつた。中部太平洋に點綴する一連の島嶼群は太平洋正面におけるわが本土防衛の戰略戰であるとともに、大東亞共榮圈を內懷にいだく海洋要寨線でなければならぬ。その戰略的重要さは改めていふをまたない。この中部太平洋が敵の脅威を受くるにいたつて、戰術的重點は一擧にしてこゝに移行せざるを得なくなつたのである。

內南洋における諸戰闘の展開と時期を相前後してニューアイルランド島の東方グリーン島（十九・二・十五）、續いて北方アドミラルティー諸島（同、二十九）に上陸し來り、常套の捲き揚げ戰法—敵の表現をもつてすれば蛙跳び作戰といふ—によつてラバウル、カビエン包圍態勢を着々進めるにいたり、これらの上陸地點に航空基地を設定することによつてラバウル方面の制空權は敵手に歸するにいたつた。さらに敵はグリーン島アドミラルティー諸島を結ぶ中間のタバール島（カビエン東方）、エメラウ島ムッサウ島など一連の諸島嶼に上陸し來り、カビエン、ラバウルの包圍を整へるにいたつてゐる。

上述のごとく中部太平洋の新戰局と、ラバウル包圍態勢によつて、南太平洋戰局の重大な轉機はもたらされ、別異の段階に入るにいたつたのである。

2 ソロモン戰線の展開

陸海空に亙る皇軍の血戰によつてガダルカナルの戰闘に半年余（十七・八—十八・二）の時日を費した敵は、その後中部ソロモン作戰の開始まで約五箇月に及ぶ準備を積んだ上、レンドバ上陸（十八・六・三十）の擧にいで中部ソロモン戰の火蓋を切つた。レンドバ上陸よりムンダ攻防戰の展開を中心として、ソロモン戰局はまたしても慘烈な陸海軍の血闘を見るにいたつたが、結局激戰三箇月余にしてコロンバンガラ島よりの無血轉進作戰の成功（十八・十・五）を最後の花として、わが方の轉進完了によつて中部ソロモン戰は終幕をつげるにいたつた。ガ島に反攻を開始して以來實に一年二箇月を要して敵はガ島からムンダまで、僅々の距離を漸く進出しえたのみであつた。敵が拂つた巨大な損耗、犧牲と時日の空費、これに對するいふに足らぬ戰略的なわづかの進出が、敵國內に喧しい議論と非難を呼び起したことは周知の通りである。

しかしながら中部ソロモン戰の終了によつて敵はガ島からムンダに航空基地を前進せしめ、わが第一線となつたブーゲンビル島ブインに對する空襲を熾烈に開始した。一方ガ島轉進と期を同じくして皇軍が轉進せるニューギニア島ブナ地區に航空要塞を設定し、また中部ソロモン轉進と相前後したラエ、サラモア戰の終了によつてニューギニア島方面において

もさらに航空基地を前進せしめたことによつて、該方面の航空兵力をもつて直接ラバウルのわが航空部隊に闘ひをいどみ、十八・十・十二の大空襲を皮切りとしてラバウル空襲を大規模に開始するにいたつた。

かくして制空權を伸展せしめつゝ、その制空權下に敵は爾後着々新しい作戰の手を打ちはじめ、コロンバンガラ島轉進と同じ月のうちにはやくもモノ島に上陸（十八・十・二十七）、續いて敵はわが堅城ブインを素通りしてブーゲンビル島トロキナに捲き揚げ上陸作戰を强行（同・十一・一）してきた。トロキナ上陸作戰に當つては敵が容易ならぬ決意と準備を持つてゐたことは上陸部隊への補給增强のために大機動部隊をくり出し、これが海軍航空部隊の邀撃に遭つて累次のブーゲンビル島沖諸航空戰の展開をみるにいたり、わが方はハワイ海戰以來の大戰果をあげたことは周知の通りである。しかし敵はこの大きな犧牲をも脈はず執拗に補給をつゞけ、トロキナ地區に三箇所の飛行場を設定するにいたつたのである。

ついでニューギニア戰線よりはダンピール海峽を越えてつひにニューブリテン島西端にとりつき、マーカス上陸（十八・十二・十五）、ツルブ上陸（同・二十六）を敢行、上陸後ただちに飛行場を設定し基地を推進してきた。

かくのごとくラバウルを挑むごとく南、西兩方面より基地を進めてきた敵は、ソロモン系、ニューギニア系、兩系空軍相呼應してラバウルおよびカビエンに對する空襲を熾烈にくり返しはじめたのである。十八年の歲末以來四月下旬にいたる間においてラバウルに對する敵の晝間大空襲がなかつた日は、僅々兩三日を數へるにすぎない。もつてその規模と執拗さを知るべきである。このやうに敵が連續空襲を行ふことによつて意圖するところは、主としてトロキナ方面のソロモン系空軍をもつてするラバウル空襲による「ラバウル航空撃滅戰」（敵の表現をもつてすれば）の展開であり、他方ニューギニア系空軍によつてはカビエン、アドミラルティー空襲とカビエン——ラバウル方面のわが海上補給路を遮斷せんとすることにあつた。トロキナ基地の完成をまつてラバウル空襲は主としてソロモン系敵空軍の擔當するところとなつたものと推察されるのであるが、從來よりも著しく敵基地とラバウルの距離が短縮せられたために、從來の大型機の編隊に加ふるに、艦爆（急降下爆撃機）、戰闘機など小型機が多數に交つて來襲するやうになつた。この大型機、小型機集團をもつてする來襲によつて、敵は二月中にわがラバウル航空隊を撃滅せんとする目算を有してゐたもののごとくである。海軍戰闘機隊が寡勢をもつてよく邀撃につとめ、連日六十機、七十機と

いふ大量の敵機を撃墜し、輝かしい戰果を記錄してゐたのはこの前後のことである。

ソロモン、ニューギニア兩系統空軍をもつてする叉狀空襲の激化は、ラバウル周邊の海上交通を著しく制御し困難ならしめるにいたつた。ラバウル――カビエン、ラバウル――ブーゲンビル、カビエン――アドミラルティーなどの近海補給路も、晝夜を分たぬ敵大型機の綿密な海上偵察爆撃によつて發動機艇にいたるまで捕捉攻撃される狀態にいたり、各基地との連絡は急激に困難となり、海上輸送路の遮斷といふ方面よりして、まづラバウル戰局の情勢は緊迫の度を高めるにいたつたのである。

3 ラバウル戰局の急轉

かゝる叉狀空襲の熾烈化はいづれ敵が新しい作戰の手を打つであらう機運の近きを思はせ、中部太平洋におけるマーシャル侵攻作戰の開始(十九・一・三十)とにらみ合はせて底氣味の悪い底流を藏してゐたのであるが、敵はブーゲンビルよりさらに北に捲き揚げて、ニューアイルランド東南方グリーン島に上陸してきた(十九・二・十五)。同島には若干のわが守備隊があり奮戰したが遂に通信連絡も絶えるにいたつた。グリーン島はラバウルとブーゲンビル島ブカとの海上連絡路の要衝にあたつてをり、敵の同島上陸はブカ輪送の遮斷をはかるとともに、敵魚雷艇基地、航空基地を北上推進せしめんとするものである。特に我が方でも十分警戒してゐたところであつたがニューアイルランド東側海面の衞星的な一連の島嶼群を傳つて基地を進めんとする島傳ひ北上作戰の企圖を明かにしたものとして重視すべきものがあつた。

それより二日經て二月十七日、敵機動部隊は突如として內南洋の堅壘トラックに急襲を加へてきた。これが南太平洋戰線のわが背後を脅かすに恰好となるとともに戰術的重點の移行を來さざるをえなくなり、ラバウル戰局に重大な影響をもたらすこととなつたことは、さきに略述した通りである。

敵は「航空撃滅戰」の目的を達するためにこれまで執拗にくり返してきたわがラバウル飛行場に對する爆撃戰より一轉して市街地帶、兵舍地帶の爆撃を開始、焦土戰術を採るにいたつた。(十九・二・二十八)。敵機を邀撃するものは地上高射砲火であり、優秀な隊員と機材を擁しかつ高い練度を有する陸海軍高射砲隊はいまやラバウル戰の花であり、敵大編隊を迎へて連日敵機撃墜破の戰果をあげ、敵の心膽を寒からしめてゐる。市街爆撃に加ふるに、敵艦また頻々とラバウルに迫つて艦砲射撃を加ふるにいたつて、ラバウルの樣相は一變し、南太平洋の戰相も急激に變容した。

市街爆撃の開始と期を同じくして敵はアドミラルティー諸島に上陸、反攻を開始した(十九・三・二十九)同島は中部太平洋、ニューギニア、ラバウル、この三戰線に亙つて重大な影響をもつ戰略的な要衝である。すなはち敵が同島に侵攻し航空基地を進めることは、第一にトラック―ラバウル間の補給連絡路に重大な脅威を與へる。第二に同島からトラックまではおほむね六百五十浬の近距離であるからトラックあるひはメレヨン方面まで爆撃圈內に入ることとなる。これは戰略的に新段階を畫するものであることいふまでもなく、現在既に敵はアドミラルティー基地を利用して內南洋方面に連續爆撃を開始してゐるのである。第三にニューギニア北岸を西進せんとする敵にとつてアドミラルティーの皇軍の存在は橫腹に匕首をつきつけられてゐるやうな恰好にあるが、同諸島への侵攻はこの側面の脅威を除くことになるのである。第四にカビエン、ラバウルの包圍を目指す大きな布石であり、あたかもその退路を絶つがごとき態勢を整へうることなど、數へ來ればその戰略的意味は輕視すべからざるものをもつてゐるのである。

かくのごとき情勢の展開によつてラバウルの制空權が敵手に歸すると同時に、この必然的結果としてラバウル周邊の海上交通路は敵機の跳梁下に暴されることとなり、海上交通路の管制――制海權はまた不安なものとなり、海上補給は一段と困難を加へるに至つた。ラバウルの孤立的情勢はかくして急調子をもつてもたらされてきたのである。敵はさらにつゞいて矢繼ばやに前記タバール島、エメラウ島、ムッソウ島などカビエン外郭の島嶼群に上陸、さきのグリーン島上陸をもつてすでにその片鱗を示してゐた島傳ひ北上作戰によるカビエン、ラバウル包圍作戰の企圖は一應その目的を達したものと認めざるをえない。

4 ラバウル戰局の展望

上述せるところにおいて中部ソロモン戰より南太平洋の現戰局にいたるまでの經過はおほむね明かとなつたであらう。敵は熾烈な空襲をラバウル、カビエンに一日の休みもなくくり返してゐるのであるが、ラバウルの陸海軍部隊は軒昂たる士氣をもつて儼然たる守備についてゐる。同地は現在では橫穴式防空壕が完備し、防空要塞としての設備を整へてをり、空からする敵の反復攻撃による被害はいふに足らぬほど僅少である。また食糧、彈藥は相當豐富に蓄積してあり、かつ空爆に備へて分散格納の措置が講ぜられてゐる。殊に同地區は廣大な地積を有してをり、ある程度の食糧自給も可能である。補給は困難であるとしてもこのやうな食糧事情はなんと

いつてもラバウルのもつ强味であらう。加ふるに同地の守備に配せられた陸海軍の部隊は精强をすぐつた大軍である。戰局の將來は固より逆睹するを許さない。しかしながらこのやうな條件のもとにある同地の將來はつぎの二つの場合に分けて考へられるであらう。

もし敵がその常套戰法とするやうに、堅陣に猪突するを廻避してもつぱら補給路の遮斷と徹底的空爆による防禦力の破壞をもつて、戰力の低弱化戰法——よりわかりやすくいへばぢり貧戰法——をとるとすれば、わが方の堅固な防空設備と豐富な食糧事情は十分かくのごとき敵の企圖を空しくせしめるであらう。ラバウルが擁する航空基地群はいづれわが航空兵力の增强が着々實現した曉、再び强力な航空部隊の進出をみるとき、前進基地として敵陣破碎、敵に對する徹底的打擊を與へるべく制空權奪回の根據地として至大の戰略的價値をもつものであるが、敵が上述のごとき持久戰法をとるならばこれこそ願つたりといふべきで、ラバウル航空基地群は將來のわが逆攻勢に際し戰局逆轉のうへに重大な役割を演ずることになるであらう。

これに反してラバウルの强靱性に怖れをなす敵がもし强引に奪取戰に乘り出すとすれば、敵はその最大の弱點とするところを衝いてもらひたいと自ら進んで出てくるやうなものであらう。といふのは敵米が最も恐れてゐるのは兵員の損耗である。戰死傷による人的損耗は最も嫌惡するところであり、その最大の弱點であるがために、極力回避してゐるところである。敵がラバウルの皇軍に對して決戰を挑んでくるならば、その結果のいかんにかゝはらず、巨大な人命の犧牲を覺悟しなければなるまい。精强な皇軍の布陣の前に果して敵にその覺悟があるか。

敵は以上二者のいづれを擇ぶであらうか。南太平洋戰線はラバウル包圍によつて新しい段階に入つたとはいへ今後における該戰局のなりゆきは戰略的にも政治的にもなほ多大の波瀾を藏してゐるのである。

二　敵の戰術と技術の檢討

1　南太平洋における敵の戰法

ソロモン反攻を開始してから中部ソロモン戰の終了までに敵は一年二箇月余の長時日を費したが、その後の敵の作戰の速度は相當にはやく、トロキナ作戰から四箇月ないし五箇月でもつてラバウル包圍の態勢に達するに至つてゐる。敵の侵攻速度がこのやうに速度をはやめたことは、冒頭において觸れたやうに中部太平洋における新しい戰局の展開が大いに影響してゐるのではあるが、南太平洋戰線のみに局限して考へてみても敵の戰法にも多々檢討すべき點があるのである。

敵の戰法はまづ第一に制空權の前進である。このためには航空兵力局地絕對優勢主義を採り、量的に優勢な航空兵力をもつて制空權を前進せしめる。第二に制空權の前進にともなふ制海權の前進——わが補給路の遮斷である。第三に制空權と制海權の掌握のもとに海上輸送兵力をもつて上陸作戰を試み、上陸に成功すれば、たゞちに飛行場を設定し制空權をさらに前進せしめる。この基地の前進のために急速な飛行場設營技術をもつてゐるのである。要約するならば以上の三者に盡きるのであるが、かくのごとき戰法は皇軍が創始し、緒戰期たる第一段作戰において範を示しかの大戰果をあげたものであつて、この戰法をそのまゝ踏襲してゐるにすぎないといひうるのである。たゞ最も注目すべきものとして第一に航空機の壓倒的な量的優勢、第二に基地設營技術、第三に航空戰、海上作戰、補給戰などあらゆる戰の分野を通じて戰術上の革命をもたらしてゐる電波探信儀の活躍がある。この三者は特に南太平洋戰局の進展上決定的な役割を果してきた戰略戰術上の重大な要素であり、大東亞戰爭の前途にまた至大な影響をもつてゐる。從つてこれらに對する對策は分秒を爭つて講ずべきはもちろん、一日もはやく敵の水準を凌駕することが刻下の急務となつてゐるゆゑんであり、特に檢討を要するところであらう。

2　航空機の量

開戰當初の慘敗によつて主兵力としての航空兵力の重要さにまづ誰よりもさきに目覺めた敵米は、たゞちに航空機の大量增產にのり出してきたのであるが、その大增產の結果はソロモン戰線における壓倒的ともいふべき航空兵力の量的優勢となつて現れてきたのである。島嶼の點綴するソロモン方面では基地航空兵力の活躍舞台となることは當然であつて、敵は絕對優勢の基地航空兵力を當方面に配してきたが、トロキナ作戰にあたつてはそれでも足らずとなし、機動部隊をもくり出して艦隊航空兵力と基地航空兵力の協同作戰を展開し、局地絕對優勢主義を愼重にとつてきたことはブーゲンビル島沖諸航空戰の經過において周知の通りである。トロキナ飛行場完成後は對ラバウル空襲のための第一線機として、ムンダ、トロキナ兩基地に約八百機內外を配備し、これをもつて交代に出動せしめてゐたやうである。

これに對しわが航空部隊は寡勢ながらもラバウルの邀擊戰に、また敵海上部隊の攻擊に着々戰果をあげてきたが、ラバ

ウルを若干離れた友軍基地にあつては味方機の姿をみることはほとんど絶無で、もつぱら敵機の跳梁にまかせ、制空權、制海權を握つてゐる敵が、上空および海上よりする護衛のもとに、思ふがまゝに眼前に上陸してくるのを切齒しつゝもいかんともすべき方法がないといふ狀態がこゝかしこに現出する狀態であつた。航空機の量的優勢が戰鬪部面をいかに支配するかといふ一例として、ツルブ地區の上陸作戰（十八・十二・二十六）の模樣をあげてみよう。

敵が上陸作戰の準備としてツルブに本格的の大爆撃を開始したのは上陸にさき立つ約一箇月前からで、延べ六百機から少い時で二百機ぐらゐをもつて連日來襲、友軍機の使用を不可能ならしめるために飛行場の爆撃にまづ力を注ぎ、つぎに兵站地區、海岸沿ひの陣地を綿密に爆撃、味方機の邀撃がないためノース・アメリカンのごときは五百メートルないし千メートルぐらゐの低空で悠々爆撃を加へてゐた。殊に海岸沿ひの密林はことごとく燒野原と化し、波打際から百メートル―二百メートルの間は人一人歩いても上空からみえるやうに一木一草をも殘さず燒き拂つた。敵の上陸を阻止すべき海岸の友軍陣地を狙つたものである。敵の來襲は一日五、六回にわたり、味方陣地附近および展望のきゝさうな重要地點を燒野原としたあとは、哨戒を嚴重にし、陣地構築の暇を與へないし。敵機が上空に飛來したとき、地上からでも應射しようものなら、それこそたちまち爆彈と機銃でその附近は一木をも殘さぬ狀態となる。夜間はたえず二機づつ交代で海岸線およびボンゲン灣上空を往來し、夜闇を利して海上よりするわが補給の遮斷にあたつた。かくのごとく陸上の行動、海上の行動の自由をことごとく奪ひ、ほとんど無抵抗狀態に近いまで徹底的な爆撃をくり返したあげく、上陸作戰を敢行してきたのであるが、これも數百機の敵機および海上よりする艦砲の射撃によつて完全に制壓しつゝ、堂々上陸してきたのである。

航空機の絶對優勢はかくのごとく戰鬪を一方的ならしめうるのであり、困難な上陸作戰も著しく容易となるのである。精强な皇軍は上陸し來つた敵軍を邀撃し、敵の制空權下にあらゆる惡條件を排して敵につねに多大の損害を與へてきたことはもちろんであるが、"飛行機さへあれば"と切齒扼腕したといふ多くの事例はことごとく敵機の壓倒的な量と、これに對する友軍機の寡なさを物語るものにほかならない。ラバウル戰局の急轉も彼我の航空兵力量の差が招いたものであること、いまさらいふまでもないことであらう。

3 飛行場設定の技術

新占領地における飛行場の設定は、占領地點の防禦のためには早急に航空兵力の進出が必要であり、他方敵を急追撃せんためにも味方機を一刻も早く進出、集結せしめ、敵に余裕を與へず制空權を伸展せしめることがまた必要であり、防禦、攻撃いづれの要求よりみても敏速さを要求される。航空兵力が主兵力的な地位を占める今日、前進陣地の構築は飛行場の設定が中心となるといへるであらう。從つて敵機の來襲下に飛行場をつくる場合も多く、この點にみてもその敏速さは作戰上の至上命令である。

敵米にあつては戰前より飛行場構築工事が機械化されてゐたのであるが、別に道路をつくる機械が著しく發達してゐたこと、大農式農業經營のために農耕用の機械を多く使つてゐたことなどによつて、土木機械および土木機械工業が非常に發達してゐたことのために、飛行場設定工事はことごとく機械化せられてゐる模樣である。これに對してわが國にあつては道路構築は多く失業救濟的なものが多く、その機械化のごときは論外であり、また農業經營も零細的小農經營を主體としてゐたために兩者ともつぱら人力によつてゐたのである。從つて土木機械の發達は著しく遲れてをり、飛行場設營の規模も從來の土方請負工事の範圍に止まり、鍬とシャベルをもつてする原始的作業を主體としてゐたのである。飛行場設營は從來のごとき滑走路一本と附屬建物をつくればいゝといふ素朴な考へ方から飛躍して、いまや飛行場を中心とする航空要塞の築城であり、規模の大にして複雜な施設戰となつてゐるのである。

敵はその機械化された設營力によつて、驚くべき短時日をもつて飛行場をつくり、航空要塞を構築しつゝある。グリーン島のごときも面積狹少な珊瑚礁で、飛行場の構築は困難とみられてゐたのであるが、その困難を克服し、しかも一週間ほどの短時日でつくりあげてゐる。エメラウ島のごときも十日間位でつくつたやうである。その技術の高度と敏速さはまことに侮るべからざるものがあるといはねばならぬ。從つて敵は新上陸地點にはたちまち堅固な航空要塞を構築するので、爾後のわが方の攻撃は非常に困難となるのである。

飛行場滑走路設定工事は伐開作業、整地作業、輾壓作業、鋪裝作業の四段階に分ち得るのであるが、伐開作業には機械鋸、ブッシュカッター、ブルトーザー、トラクター、整地作業にはブルトーザー、スクレイパー、トラックショベル、ダンプトラック、輾壓作業には自動ローラー、被牽引式ローラー、振動搗固機、鋪裝作業としてはソイルセメントのためには機械ミキサー、敷きならしのためにモーターグレイダーなど、各作業ごとに種々の機械が使はれるのであるが、土木用

トラクターが大體においてその主體をなしてゐるのである。

敵は機械力をもつて急速に航空基地を整備し、つぎ〳〵に基地を推進せしめて量を恃む航空兵力を進出せしめ、もつてその制空權を伸展せしめ、航空機をもつてする制壓圏を擴大しつゝラバウル作戰を急速調をもつて進めてきたのである。

わが國でも航空基地施設工事の機械化は急がれてゐるし、敵をこの技術方面においても凌駕する日は遠くないと信じられるのである。

4 電波探信儀

電波探信儀―電探は各方面の戰術に革命をもたらした。これの用途を目標別に簡單に分けて考へてみよう。

（イ）對飛行機。遠距離にある敵機をいちはやく檢知し空襲を早期に探知し、邀撃態勢をはやく整へ得るといふのが最も初歩の電探の效用であるが、さらに電波標定機による高射砲の射撃は、暗夜あるひは濃霧中のまたは雲上の敵機への射撃を可能にした。從つて夜間空襲などの隱密作戰は著しく困難となつたのである。

（ロ）對艦船。電探による艦砲射撃は、暗夜の海上または霧中の海上における海戰で、從來は想像もされなかつた正確な命中率を示すにいたつてゐる。從來夜陰に乘ずる驅逐艦の肉薄戰法のごときは高度の訓練を要し、その壯快さにおいて海戰中の花と謳はれてゐたのであるが、電探射撃の發達によつて夜戰に對する從來の觀念は根本から覆へらざるをえなくなつた。從つて敵の制海權下に暗夜に乘じて躍りこみ奇襲をかける、あるひはとり殘された味方基地に補給をするといふやうな離れ業は非常に困難となつたわけである。さらに飛行機が小型電探を備へつけることにより、暗夜でも海上の艦船の發見捕捉は容易となつた。從つて飛行機をもつて綿密な哨戒網を張つてゐる場合、その海面を小型艇などによつて夜陰隱密裡に補給せんと行動してゐても、忽ち捕捉撃沈せられることとなる危險性が增加してきた。

かくの如くして敵機または敵艦の行動圏内における隱密行動は絶望となり、海上隔つた前進基地への補給のごときはわが完全な制空權、制海權のもとに非ざる場合、著しく困難となつたのである。

（ハ）對潛水艦。主として飛行機にそなへつけられた小型電探は、潛水艦が夜間浮上してゐる場合或ひは海面に潛望鏡をのぞかせた瞬間に潛水艦の存在を探知し、これへの攻撃を可能ならしめる。これは對潛水艦作戰に畫期的な變革をもたらしたので、潛水艦の行動を著しく制約するにいたつた。

逆に潛水艦が電探を備へてゐると從來潛望鏡をもつて敵艦船を捕捉してゐたより遙か遠距離の敵を捕捉しうることとなり、その活躍範圍は著しく擴大し、戰果もまた飛躍的に增加するにいたるのである。

かくの如き優秀な兵器がもし一方的に利用せられてゐたとすれば、他方の飛行機、軍艦、船舶、潛水艦などの活躍は封壓されてしまふこととなるのである。

この電探、殊に小型電探は敵側において相當進歩してをり、わが飛行機、驅逐艦、潛水艦なども相當苦しめられたことはいなめない。殊に夜戰を得意とするわが航空部隊、海上部隊がその戰術に若干にもせよ變更を來さざるをえなかつたことはおほひがたく、南太平洋戰の展開において相當の影響をおよぼしたことはいなみがたいところであらう。

この電探も現在着々敵に劣らぬものが完成されつゝあることは喜ぶべきことであり、海軍においても電波兵器の改良と增産のため畫期的の措置が構ぜられてゐることは戰爭の前途のため慶賀すべきであらう。

三 技術と量の問題を克服

以上ラバウル戰局の現段階を明かにするとともに、今日の情勢に立つにいたつた戰術、技術上の彼我の差異の主要なるものについて檢討を加へた。上に檢討した航空兵力の量、基地設定の機械化、電波探信儀はいづれも喧しく論議され、すでに着々とその改善を見るにいたつてゐる。南太平洋戰の戰訓はまた至大なものがあつたといふべきである。

しかしながら上の三者のごときものは早急を要する點において最も重要なものであることはもちろんであるが、もとよりこれのみでいゝのではない。陸上兵力の裝備の問題、艦隊兵力の增強の問題、對潛水艦問題など、同時に着々解決してゆくべき點は數へるにいとまはない。殊に中部太平洋において敵機動部隊の出沒をみるとき、艦隊兵力、殊に艦隊航空勢力の緊要なること今日にまさるものはない。この點は本年報昭和十八年第一輯においていちはやく指摘した通りである。要は相對的な兵力量の急速な增強と質的の改善が必要なのである。敵の戰法はさきにものべた通りわが第一段作戰の踏襲にすぎない。わが方においてラバウル戰局の示唆に鑑みて技術的、量的な諸點において飛躍をとげてゆくならば、大東亞戰爭の完勝はわが手にありといひうるであらう。

印緬戰線の意義と特性

根津菊治郎

一　その重要性

印緬戰線は、太平洋戰線が海上の基地爭奪戰として發展してゐるのに比して、陸戰の集約される戰域であり、支那事變の必然的發展としての大東亞戰爭本來の性格も、多くの樣相をもつて彩つてゐる。しかも東亞の最前線としてのこの戰線は印度および印度洋をめぐつて、世界戰爭における東西戰略線の相交叉する微妙な戰域でもある。

すなはち英帝國最後の戰略基地であり反樞軸陣營の兵器庫としての印度の防衛、對日反攻の基地としての支那大陸の强化——この二つの戰略目的に要請される敵のビルマ奪回企圖は、反樞軸軍の東亞總反攻に相呼應して空陸よりするビルマ反攻の連續となり、わが派遣軍および航空部隊の不斷の先制攻擊によつて幾烈なる攻防戰を展開しつゝあるのである。

ビルマこそはわが南方の最重要資源地帶たる東印度諸島を守るうへに對敵の一大障壁であり、政戰兩略上の重要性を具備してゐる。從つて世界戰局の動向はこの戰線に密接不可分の影響をもつとともに、印緬戰線の一擧一動はたゞちに印度、ビルマ、支那大陸に一貫する大陸戰線にひゞき、世界戰局に微妙にして甚大なる波動を傳へるのである。

二　「ビルマ奪回」の內幕

敵が久しく呼號しつゞけた「ビルマ奪回」こそは敵陣營にとつてはクヱベック會談以來の重大なる戰略となつた。この會談において創設された東南アジア反樞軸軍司令部の目標がビルマ・ルートの再開にあり、これによつて重慶の抗戰力を培養するのみならず、在支米空軍の擴充强化によつて對日攻擊基地たる支那大陸における全面强化を狙ふものである。

しかも最近ニミッツの中部太平洋攻勢の進展と呼應して米軍の太平洋戰略目標は支那大陸への到達にあり、この目的達成を前提とする場合、米軍に對する南方からの補給を確保するためにビルマ奪回が絕對に必要であるとし、ビルマ・ルートの再開論が新しい角度から擡頭するにいたつたのである。

從來歐洲第一主義を固執してきた英國が對日攻勢を策するにいたつたのは、このクヱベック會談以來の米英對日共同戰略にもとづくものであり、對米迎合も含まれてゐるが、英は印度防衛に關し現狀のまゝ推移することを許されぬ內外情勢に直面してをり、對日正面攻擊は米國に擔當させておいてむしろその間隙に乘じてビルマを奪回し、英帝國の威信を示すとともに印度防衛を確立するといふ意圖であつた。

米國はビルマ攻略によつてビルマ・ルートを再開し在支米空軍の補充を容易にし、わが本土ないしは南方補給路を制壓下におさめ、わが戰略要線に全面的に脅威を與へるためには是が非でも英國を對日正面攻擊に引入れようと畫策し、一面米英の援助促進をさけぶ重慶の戰線脫落を防止する唯一最大の謀略であつた。

英國はこの奪回作戰に失敗すれば最後の寶庫を失ひ英帝國の崩潰をたどるのは必至である。それゆゑにビルマの奪回が英國にとつて全生命であるのに對し、米國のビルマ・ルート再開のための反攻は局地的な戰略といへよう。こゝに英の愼重な態度があり、米の拍車をかける態度が見られた。しかし利用し利用し合つても敵の「究極の目的一致」となつたのである。しかしてクヱベック會議で「大東亞反攻」として決定し、カイロ會談においても確認されたといはれるビルマ奪回作戰計畫なるものは、ビルマの周邊に大兵力を集中し內線に立つわが防衛を包圍攻擊によつて打ち崩し新輸血路「レド公路」の打通によりビルマ・ルートを再開、もつて印度——ビルマ——重慶をつなぐ一大戰略要線を完成し、南太平洋戰線に呼應して對日反攻の長大なる西部戰線を實現せんと企圖するものであつた。

かくてクヱベック會談直後、東南アジア反樞軸軍司令部の創設と總司令官にマウントバッテンの任命を發表した。マウントバッテンは英海軍々令部長を勤めた元帥ミルフォード・ヘヴン侯を父に持ち、ヴィクトリア女王の曾孫にあたる名門出の提督で、昨年八月赴任を前に海軍大將に進級した。當時わづかに四十三歲の彼を、對日本格作戰の總帥に据ゑた狙ひは、彼が米國で人氣を博してゐるところから、彼によつて英國の印度支配の地位を保持し、米國の野望を巧に牽制せんとする狡英の魂膽も織込まれてゐたのであるが、表面の宣傳は昨年三月敵英が上陸專門の「奇襲部隊」（コマンド）を編成

したとき彼はその初代司令官となり、北阿作戰に成功したいはゞ奇襲上陸作戰の名將だとおだてあげてゐる。そこでマウンドバッテンが昨年十月ニューデリーの本據に着任以來、印度およびセイロン島を基地とする西からの對日攻勢準備に着手するや、印度洋を渡つての一大上陸作戰、ビルマ反攻の海陸同時作戰などが世界的に印象づけられ、彼とともにビルマ戰局は大きな焦點となつてきた。一面、在支在印米軍司令官スチルウェルを總軍の副司令官とし、相ついで東南アジア方面の米英空軍を合体、これを英空軍大將リチャード・ペイアースの指揮下におくと同時に在印英空軍、米第十航空隊を單一司令部の下において司令官に米少將ストラッド・メイヤーを任命するなど總司令部の編成完了とともに一應敵陣營に期待感を與へてゐた。マウントバッテンはこれよりさき、クェベック會談で任命を受けるやワシントンにいたり米陸海首腦と二週間にわたり協議し、ロンドンに歸つてウェーヴェルや印度相アメリーとも打合せ、重慶に飛んで蔣介石とも作戰協議するなど慌しい動きをみせ、十月ニューデリーに着任、必死の攻勢準備にとりかゝつたのであつた。

三　戰線の特異性

1　地形の克服戰

ビルマ國境戰線ないしは印度進攻作戰の特異性は「地形の克服戰」である。作戰指導のうへからみれば放膽絶妙なる各個擊破に出で、敵脫出路および補給路を遮斷して孤立化せしめ、これを包圍殲滅するといふ典型的な作戰方法で推進されたが、皇軍部隊の進擊は一面において山岳、密林との戰ひであり、濕地と水との戰ひであつた。これら地形の克服戰こそ全戰線に通ずる戰の樣相でもあつた。

南部のアラカン戰線では、ビルマ國境の屋根である海拔三千メートルのアラカン・ヨマをはじめモウドク、マユの三山脈が並行屹立して峻嶮なる樣相を形づくつてゐるうへにカラダン、マユ、ナーフの三大河川が南北に流れて二、三キロから五キロの河幅におよぶ奔流のほかに幅一キロ前後の支流は無數の網の目に流れてクリークをつくり、濕地デルタ地帶の連續である。しかもベンガル灣の海洋に臨んだデルタ地帶では潮の干滿にさへ大きな制約を受け干滿は河川に二メートルないし四メートルの水位差をもたらし、十キロの上流までもおよぶ。これがため舟艇によるわが機動は絶大な苦心をともなつた。また全山はジャングルに覆はれ道といふのは野象の通路ぐらゐで山谷かあるひは河底を通らねばならず、地形が作戰を支配してゐた。實にこの面の作戰は渡河、濕地通過、ジャングル突破の三つの特異性を點綴し、この自然の克服、利用によつて激鬪がつゞけられたのである。

昨年の敵の第一次アラカン反攻においてはわが軍は小部隊をもつて英印軍第十四師團の大軍を阻止する一方、有廷挺身部隊はアラカン山系三百キロの大迂回作戰を强行、モウドク、マユ兩山脈を横斷、大密林を突破してマユ河からベンガル灣岸に到達し敵の退路を遮斷、これが包圍殲滅に成功したのであつた。いかなる地形をも克服して放膽なる大迂回戰を敢行するわが絶妙さと精强さを身を以て體驗したはずの敵は大兵力をもつて第二次反攻に出で滲透戰術によつて出擊したが、わが軍の敵の裏をかく迂回作戰により、またしても殲滅の憂目に遭ひ、敵は再び「アラカンの悲劇」をくり返したのである。

アラカン・ヨマの北の別稱パトカイ山系の分脈が厚く光つて山岳重疊たる大高原地帶がチン丘陵である。雄大なる新戰場と化した中部國境戰線の中心となつたチン丘陵は、このパトカイ山系の最高峰ケネディ・ピークの二千六百メートルを王座として二千メートルから千メートルの峻峰と溪谷の連接によつていたるところ大密林に掩はれてをり、丘陵の東麓にはチンドウィン河の支流ミッタ河、中央にマニプール河が流れ、幾多の深谷を形成してゐる。印度領マニプール溪谷とともにアジアの祕境であつたのが、いまや世界戰局の焦點となつて大きく浮び上つてきた。

チン丘陵の東側に沿ひ山谷を縫つて印度領マニプール侯國へ通ずる自動車道路があり、今次わが印度進攻作戰における進擊路をなしてゐる。わがビルマ撤退作戰によつてビルマから敗走した英軍はチン族を懷柔してマニプール道路の建設に酷使し國境一帶に半永久的な陣地を構築したのであつたが、一年余の窩心まやわが攻擊據點となつた。しかしこれらの大小の山系深谷には橫斷路としては數へるほどしか殘されてゐないし、チークの樹海、千古の大密林を突破して印度へ電擊的の進擊をつゞけたわが將兵の苦鬪また思ふべしである。

北部ビルマ作線および雲南怒江の戰域は地勢が邊境であり、南部國境に比して氣象がもたらす環境的な樣相が著しく相違し雲南國境の嶮、高黎貢山系は白雲をいたゞき、昨年二月の重慶軍擊滅作戰に際しては、わが派遣軍將兵は山麓の高原に咲く櫻花に送られつゝ白雪を蹴つて高黎貢を制壓した。一方北ビルマのフーコン地區一帶はビルマの母といはれるイラワジ河の上流から西の大河チンドウィン河に挾まれるタルン、タナイ兩河流域一帶の低地で、密林と濕地の「死の谷」とさへいはれる邊境である。敵は兵站線に惱みつゝ道路建設

に躍起となり、反攻軸軍の輸血路いはゆる「レド公路」打通のため、パトカイの嶮を越え海抜わづかに二百メートル内外のフーコン低地に到達したが、雨季には全く氾濫して一面の濕地と化し、瘴氣滿つるあらゆる惡條件に阻まれてゐる。日印軍のインパール制壓によつてこの樹海群林に孤立した米英重慶混成軍を「死の谷」に自滅の運命に追ひ込んだ。

かくて雲南、高黎貢からフーコン、インパール、チン丘陵、アラカン地區にいたる戰線實に一千餘キロ、この長大なる陸正面に戰鬪を展開する皇軍鐵桶の布陣は天の時、地の利、民族の和を具備して印度大陸の一角深く進攻しわが軍が主動的戰局を把握せる現段階において、勝利のわが將兵に滿腔の感謝をいたさねばならぬ。

2 熾烈なる航空決戰

印緬の空に展開される彼我の航空決戰はます〳〵熾烈さを加へてきた。しかも昨年から本年にかけての航空戰の樣相は飛躍的な新段階に突入したことを注目せねばならぬ。

在印度の敵空軍勢力は約〇〇機といはれる。昨年五月には英空軍七百機、米空軍四百機、印度人空軍百機の計千二百機と稱せられてゐたが、輸送機、練習用および印度人訓練機などをのぞき實際の第一線兵力は米英合して〇〇機内外であつた。しかし昨年來敵はビルマ反攻に備へて航空兵力の增强に狂奔した結果、現在東部印度だけでも米英機〇〇を超え飛行基地は〇〇にあまる。米英兩空軍は任務を分擔し、英軍機は戰爆をもつてフェンニイ、アコーラ、シルチヤ、チッタゴンなどベンガル州の印緬國境周邊を基地として近距離出擊を專任、米空軍はカルカッタ周邊および北アッサムの各基地に蟠踞してラングーン、モールメン、マンダレーをはじめビルマ各地の遠距離爆擊をくり返してゐたが、南部の英空軍が脆弱なため現在では米空軍がベンガルにも現れてゐる。一時盛んにビルマに出擊してきた英の爆擊機ウェリントン・ブレンハイムなどは次第に姿を消し、これに代つて米軍機のコンソリB24、ノースアメリカンB25などが出擊し來り、戰鬪機もスピットファイアのほかは米のP40、P34、P38などに代つた。

かくのごとくビルマ戰線に出擊する機種、機數からしても米空軍が英空軍に代位してゐることは確實で、在印空軍の指導權も米側が掌握してゐる。

一昨年の雨季明け以來、敵機はラングーンをはじめビルマ各地に出擊し、昨年末頃まではわが兵站基地、輸送路、船舶埠頭、市街地などの爆擊に終始してゐたが、本年一月ごろからビルマ總反攻に先行して來襲頻繁となり、大膽にもわが地上部隊の最前線や作戰地區にも來襲、戰爆併用による超低空攻擊戰法を採用してきた。かくて一月中の敵機來襲延機數は三千五百機、二月は實に四千七百機といふ激增ぶりを示し、わが陸軍航空部隊の擊滅戰も激化して印緬航空戰は熾烈化の一途をたどつた。

しかるに三月に入つて皇軍の電擊的な印度進攻作戰が開始されるや敵機の蠢動は一時全く鳴りをひそめたかに激減するにいたつた。敵は三月五日以來アッサムのハイラー飛行場から米英印支混成の四個旅團約五千の空輸挺身隊を北部ビルマに降下させ、大東亞戰爭最初の畫期的壯擧であるとマウントバッテンをして特報せしめたのであるが、わが軍の火中に飛込んだ虫のやうに全く包圍され、密林の弧兒と化した。この敵のいはゆる「壯擧」のために敵は東部印度に配した空軍の全力をあげて空挺部隊に協力させ、空中補給、掩護にあたらしめたもので、わが誘引作戰にまんまと乘ぜられ、無謀な企圖は失敗に歸し、敵空軍の大兵力を全く徒勞に終らしめたのであつた。

しかし暫をたのみ、反攻の主力となす敵空軍の動向は輕視を許さぬものがあり、印緬の彼我航空決戰の激化は航空性能の發達、戰術の進化とともに、その樣相を急激に變貌しつゝある。彼我ともに兵力の增强、新銳機種の登場、電波兵器の急激な發達などがもたらす戰法は著しい變遷を呈してきた。

最近の敵空軍にみる戰法を檢討してみよう。

彼我ともに防空陣の强化に對し優越せんとする要求は「超高度へ」「夜間奇襲へ」の二分野を急速度に開拓しつゝある。昨年一二月ごろわが在緬荒鷲の印度航空作戰に挑戰した敵ハリケーンは當初二、三千メートルの高度であつたが、回を追うて五、六千メートルに高め、五月ごろには優に八千メートルを突破する高度をとつて反擊してきた。空中戰鬪の主動性を握るためには優位たる高度に立たねばならぬ。この必要が生む高空戰への關心と努力は彼我ともに異常なものとなり、互に高度を競ひつゝ昨年の雨季明け以來の空中戰は飛躍的な高空で展開されるにいたつた。敵英はハリケーンに代るに高空性能の優秀なスピットファイヤーさらに新銳機、敵米もムスタングP51などを增强し、昨年末以來アラカン戰線およびカルカッタ、テンスキア進攻作戰における彼我の戰鬪は八千ないし九千メートルの高々度で行はれた。從つて爆擊機の爆擊高度も著しく高まり、ラングーン上空に晝間來襲するコンソリB24のごときは六千メートル以上の高度をもつて侵入してゐる。偵察機の高度も速度の威力とともに成層圈に肉薄してをり、敵の木製機モスキートなどはラングーン方面に一万メートル内外で侵入するのである。

つぎに從來空の隘路とされてゐた夜間空襲の本格的强行で

ある。ラングーンのごときは一昨年末ごろから敵機の夜間爆撃が連續的に行はれてゐたが、敵はむしろ神經戰的效果に重點をおき、甚しいときは一夜中ぶつ通しに飛び廻り都市盲爆を行つたことも幾度となくあつたが、昨年末ごろ以後は晝間よりも夜間の本格的爆撃に轉じ來り、夜間專門の飛行隊まで編成してゐると傳へられる。しかし來襲の都度わが制空部隊に捕捉され痛撃を受けてゐるが、無線航法の發達、照明、照準具の進歩を利して敵は將來ますく夜間空襲を强行するであらうことを豫想せねばならない。

すでに印緬の空には高々度ないし成層圏内の空中戰が現實に展開されてをり、夜間空襲の諸困難も漸く克服されてきたことを明瞭に看取するのである。しかも世界に卓越せるわが優秀新銳機に對し幾烈なる挑戰の意慾を示しつゝある事實を嚴に監視せねばならない。

四　印度解放戰の新展開

敵陣營が共同の目標とするビルマ奪回を呼號し、いまや東亞に殘された唯一の寶庫印度を防衛するためにも敵英にとつて今次反撃戰は必死の戰である。しかも昨春のアラカン作戰と異り、太平洋作戰と同工異曲の構想をもつて展開されたのであるが、勇戰善謀の皇軍はビルマ國境の各戰線で敵反攻の布陣を各個撃破しつゝ印度國民軍とともに印度へ進攻した。いまや新戰場はビルマの山野を離れた印度の天地に移行し日英大決戰が展開されんとしてゐる。こゝにいたつて戰局は大波瀾を卷き起し皇軍のビルマ防衛は尖銳なる印度解放の一大攻勢作戰に轉じて根本的に性格を一變し、大東亞戰爭に重大なる新段階を畫するにいたつた。

印度進攻作戰こそは敵のビルマ反攻策源を覆滅するにあり、意義深き印度解放戰の緒戰でもある。それ故に目指すところはあくまでも米英打倒であり、斷じて印度民衆を敵とするものでない。從つて印度に對しなんら領土的野心なきはもちろんである。東條首相は三月二十二日印度國民軍の祖國への進軍を機に談話を發表し

「帝國の目的とするところは敵勢力を撃碎し印度を完全に印度人の手に委ねんとするものであつて、國民軍の進撃する祖國印度の地は直にことごとく自由印度假政府の行政下におかるべし」

とて領土的意思なき帝國の正義を改めて中外に宣明した。またビルマ方面陸軍當局も雄大なる印度作戰の新展開を聞明し

「印度民衆を敵とするものでなく、毫も領土的野心を有せず、我軍進駐の寸尺の土地といへども眞の自由印度のものとなす用意あり」

と公約した。さきの印度獨立に對する支援の帝國の公約はいま如實に實証され皇戰の本義を顯現しつゝある。いまや新生獨立の歡喜に燃えるビルマ國軍も共同の敵撃滅に全面協力し、日緬印三軍一體となつて三億五千万民族解放の大進撃を續ける。こゝに大東亞戰爭本然の姿を見るのである。

五　印度進攻の意義

1　英陣營の狼狽

印緬國境の隨所に英印軍を孤立せしめ輝かしい戰果をあげつゝ印度國民軍とともに奔流のごとく印度へ進撃した皇軍はマニプール高原を席卷し侯國の首都インパールを包圍するにいたつた。インパールは東部印度における敵の陸空軍の最大基地であり、チッタゴン、テンスキア、レドを結ぶアッサム・ベンガル鐵道の要衝である。本作戰、特にインパール制壓の戰略的意義は敵唯一の兵站線を脅威し、特にレド公路打通の使命を帶び、鳴物入りで宣傳につとめたフーコン地區出撃部隊と呼應する雨季前の積極作戰の續行は不能となるばかりでなく、この方面の敵は「死の谷」に自滅の運命に曝される。英本國方面では印緬戰局の推移を憂慮の色をもつて見守り、外電の傳へる英國軍部筋の觀測は

「日本軍の北印度國境方面に對する攻勢は、單に防禦戰略の一部をなす作戰的攻勢にすぎない。日本軍の進攻はいまだ印度に對して重大脅威の程度にはいたらず、スチルウェル軍の進撃がはかどれば雨季前にイラワジ河上流へ滲透することができるであらう。マニプール方面の戰局は疑ひもなく英軍に不利であるが、マウントバッテン軍は優勢な空軍を利して第一線への補給をつゞけるであらう。」

と米蔣軍に一縷の希望をとどめてゐるが、前線の英印軍司令官オーヒンレックの發表は

「日本軍の有力部隊はインパール街道を進撃しつゝあり。もしこの進撃を阻止できなければ兵站線は斷たれ、前線飛行基地は孤立化する危險あり。」

との赤信號をかゝげ、東亞および伊戰線の派遣印度軍を急遽召還轉進せしめる方針といはれる。

事實、敵の印緬防禦線深く打込んだ楔が將來いかなる役割を演ずるかは敵側が最もよく知つてゐるだけに敵陣營の衝動と混亂は蔽ふべくもない。日印軍にとつては、將來、北部アッサム、あるひは南のベンガルに對する行動の自由を確保する一大橋頭堡ともなり、戰略的地位を一段と强化したのである。

今次作戰はわが先制攻擊によつて火蓋を切られたものであり、戰局の主動性は儼として皇軍の掌中にあつた。現に帝國は太平洋において敵の苛烈なる反攻に對し決戰を戰ひつゝあるが、しかも作戰の要請に應じて隨時隨所に攻勢の主動權を發動し得るのであつて、印度進攻にまで進展し移行した事實は、わが戰力の大なる保有を實証するものである。

奸惡なる敵英國は太平洋において日米相戰はしめ、戰局の發展を待つて印緬國境に反攻し、米英の挾擊によつて對日總反攻を形成せんと企圖したのであるが、いまや重大挫折に遭遇しつゝある。

2 米、蔣への打擊

敵陣營がビルマ反攻を企圖せる重大要因の一たる北部ビルマにおける對支輸血路の打通企圖もこの作戰によつて挫折に瀕した。印度アッサム州のレドからビルマ北邊のフーコン地區を拔けて怒江に達し、舊ビルマ・ルートに連絡する新對支輸血路「レド公路」の打通計畫は敵米が最も熱意を示してゐたところで、米がこの輸血路打通によつて援蔣強化を實現し、重慶軍による對日大陸第二戰線の戰力を昂揚、在支米空軍を飛躍的に擴充して對日本土空襲の野望を達成し、もつて太平洋戰線を牽制せんとの意圖であつた。

このため米は在印重慶軍三個師に指導將校ならびに米式裝備を入れ、訓練を與へて自己藥籠中のものとし、最近では雲南遠征軍をも米の指揮下に入れんとの野望を起し、これがため陳誠は遠征軍司令官を辭任して引揚げる騷ぎを演じた。他民族の犧牲において人的資源の損耗を回避せんとする敵米はこゝでも重慶軍を日本軍の前に立たしめ輸血路打通に狂奔してゐる。

蔣介石また現在の窮狀を打開する唯一の途は北緬輸血路の實現によつて米英物資を仰ぐことにあり。英印軍による西からのビルマ反攻の曉には米の指導に雲南軍を同調せしめ反攻作戰に轉移せんとする氣勢を示した。しかるにビルマ周邊の反攻はことごとく瓦解し、かへつて皇軍の印度進攻の現實に直面して重慶の窮乏打開、米の要求する支那大陸第二戰線の强化のいづれもが畫餅に歸するほかない。

3 印度への影響

わが印度進攻作戰が軍事的に敵の東南アジアにおける最大の反攻基地たる印度に重大脅威を與へつゝあることはいふまでもない。印度は敵陣營の作戰基地としてのみならず、兵站基地としても重要性をもつてをり、敵英國の反攻戰力の源泉であることを指摘せねばならない。

英國は印度の尨大な國土、人口、資源を利用收奪し、前大戰と同樣の「對英貢獻」を印度に課し、全印度の國土と民族をあげて對日戰の一大據點たらしめんと企圖した。この野望を實現するため、推定最高動員能力三百五十萬のうち、すでに二百万の印度兵を徵募せるほか、英の鞭と米の器材とにより印度の兵器廠化を着々進め、最近の進捗ぶりは想像以上と傳へられる。

すなはち軍事工業化計畫の成果が示す兵器、彈藥の大生產力がそれである。ロンドン・タイムス紙が宣傳する「兵站基地印度の武器生產」は昨年度においては石炭と輸送の隘路があつたにかゝはらず、火砲と彈藥は從來の水準を抜き、小銃は戰前の十倍、火砲は九倍、機關銃十二倍、彈藥は二十七倍に達し、高射砲、裝甲車なども豫定通り生產されたといふ。航空機工業のごときも發動機以外の部分品はほとんど生產され、バンガロール、ボンベイ、ニューデリーなどにあるフォードの航空機製造組立工場の强化、コンソリデーテッド航空機會社がマイソールに大規模な製作工場を新設した實狀などは對日戰に、援蔣に印度が果しつゝある役割の大きさを窺ひ得よう。從つて印度の寄與いかんは反樞軸陣營にとつて全く死活の問題である。日印軍の進軍がこの印度の兵器廠に點火する役割をもつものであることを銘記せねばならない。

さらに今次大戰の過程において昂揚された印度民衆の民族意識はもはや英の恫喝や懷柔によつてもいかんともなし難い域に到達しつゝある情勢下に、日印軍の進攻が及ぼす政治的影響は甚大であらう。英國の狼狽に比例して全印度の抗英獨立機運は漸次濃化し、最近ではアッサム、ベンガル地方で軍用米の强制供出を拒否したり、米國管理のアッサム、ベンガル鐵道に非協力を表明するなど驕然たるうちに、最も刮目すべき動向は印度中央議會と回教徒聯盟の抗英的態度がある。

すなはち國境突破の十日後、三月二十七日印度中央議會に提案された國防費增額案および戰時新增稅案の政府原案を五十六對五十五票で否決し去つたことで、しかも親英派、懷疑派が多數を占める議會において、會議派と結んで原案不成立の誘因をなしたのは回教徒派であつたといふ事實である。從來印度獨立のための戰線統一を標榜してきたガンジー、ネールらの國民會議派と常に對立して英國の走狗に甘んじたジンナー一派の回教徒聯盟が、國境より起る新事態を映して反英的性格を明かに示したことは印度國內の代表的新動向として注目すべきである。「印度進攻」の波動はまさに親英の牙城をも搖がし、印度の獨立運動が內部的に一大變化をとげ、その方向が積極的に一元化されるであらうことは疑ひないところである。

一七五八年英の侵略がベンガルに魔手を伸ばして以來實に二百年、いまや三億五千万の印度人のための印度に黎明が訪れて、大英帝國の太陽沒せんとするを如實にみるのである。

六　國民軍の祖國進軍

今次の攻勢作戰に印度國民軍およびビルマ國防軍が共同戰列に立つて皇軍とともに進擊しつゝあることは最も注目すべき歷史的快事である。特にチャンドラ・ボース最高指揮官の率ゐる印度國民軍が皇軍精銳と肩をならべて印緬國境を越え祖國印度へ武力進軍した事實は、世界の現戰局・政局に絕大な渦紋を投げるであらう。

東條首相が「印度獨立については帝國政府は實力を以てこれを十分援助する」と、印度解放に對する帝國の決意を表明したが、果して印度國民軍は皇軍の實力をもつてする支援を力强い後盾として、印度解放の宿願達成のためデリー目指して進軍を開始し、いまや獨立三色旗を祖國印度に翻へしたのである。ボース首班の自由印度假政府樹立以來、印度の救世主へ心寄せてゐた印度民衆は國民軍を迎へて熱狂しつゝあり、その感激思ふべしである。

ボース首班は三月二十一日、印度國民軍の國境進擊にあたり聲明を發表

「印度國民軍は日本軍の密接なる協力により聖なる使命に發足せり」

と冒頭して

「いまや待望の自由を實現すべき絕好の機會なり。同胞諸君にしてこの機に乘じ任務を遂行せば自由は遠からず達成されん」

と在印度同胞に呼びかけ飛檄した。

またビルマ國バー・モウ國家代表も三月三十日、對世界放送をなし世界につげた。

「印度進擊こそは、この數世紀にわたり英國の武力と戰ひ敗れてきた印度人、ビルマ人にとつて世紀の事件である。敵がいかなる欺瞞宣傳をいはうとも日印軍の印度進擊は儼然たる事實である。」

國民軍の進駐にともなひ假政府本據も印度の解放地域に設置すべくたゞちに準備が進められ、自由印度行政長官には假政府財務相チャタージ氏が任命され、ボース首班も解放地に理想政府の樹立を言明し「解放卽建設」の工作が押し進められた。

インパール攻略の迫つた四月四日、ボース首班は「印度進攻の第二次聲明」を發表し、「日本政府は印度に對したんら領土的、政治的、經濟的、ないしは軍事的野心を有せざることを確信する」と、改めて帝國の立場を闡明し

「自由印度假政府は唯一の使命を遂行するのみ、すなはち武力により印度の聖なる地より英米軍を追放し、恒久的なる自由印度國民政府を確立することである。われらは英米軍が擊滅されるか、印度が解放されるまでは武力鬪爭を繼續するであらう。同時に解放されたる地區の建設工作に邁進するであらう。自由印度假政府は印度國民の唯一の合法的政府である。」「印度國民諸君よ、諸君は再び印度の國民、自由の國民に立還らんとしてゐる。諸君自身の政府自由印度假政府に馳せ參ぜよ。」

と烈々祖國解放戰勝利の第一聲を放つた。

この世紀の祖國進軍に應ずるかのごとく、各戰線において英軍內の印度兵の投降續出が報ぜられてをり、印度國內の抗英運動に火を點じ、印度解放戰は燎原の火のやうに廣がる原動力となるであらう。假政府ではマニプール平原に獨立戰の基地を擴大、さらに前進を期するであらうが、解放地域の金融工作、通貨問題も決定し『自由印度』の建設工作ははやくも成功を收めてゐる。

かへりみれば昨年十月二十一日昭南に自由印度假政府の樹立をみてより半歲に滿たず、印度獨立の最終の戰と叫んで祖國へ進擊した印度國民軍によつてはやくも東部印度の一角に自らの領土を確保したのである。

七　敵反攻の動向

奇襲上陸の專門家と敵が宣傳したマウントバッテンが昨夏、東南アジア軍司令官に就任の際「英國の東亞反攻作戰はあくまで海上奇襲作戰により開始され、ビルマ奪回も陸路進出に困難であるから陸路は一兵でも少くし、海上よりの攻擊に主力を注がねばならぬ」といつたことによつて敵が對日海洋二正面作戰を企圖してゐるごとく印象づけられ、雨季明けと同時にベンガル灣岸への上陸作戰と呼應し、國境より一齊に總反攻を起し一擧にビルマ作戰を決定的段階に導かんとする企圖であつたと想像される。印緬戰線は敵の最も得意とする高度の機械化作戰の活動を阻止する密林と濕地の連續で、英軍がマライ作戰において體驗した以上の苦惱をなめてゐるだけに、國境アラカンの自然の障壁に加へて皇軍の鐵桶の布陣の前に陸兵のみをもつてしては一步も進み得ぬことを知る敵が、一縷の望みとしたのは海上からの奇襲上陸併用の海陸同時作戰ではなかつたであらうか。唯一の空からの奇襲空輸挺身隊もいたづらに空軍力の空費と重慶側の「生命の浪費」にをはりマウントバッテン攻勢は最惡の失敗にをはらうとしてゐる。外電の報ずる米軍事消息筋の意見は「マウントバッ

テンはビルマ作戰に必要な海軍船舶の掩護不足のため、大作戰による危險を冒したくない肚である」といひ、米紙はマウントバッテンとスチルウェルの對立を報道してゐる。

氣象的、地勢上の多くの制約をもつ印緬の全戰線では雨季中の半年間は大兵力の自由なる行動を妨げる。その雨季はまさに五月にはじまるのである。とくに印緬國境地方は世界で最も多雨の地であり、瘴癘の地である點などから考へても、この雨季中の陸上よりの大反攻は實現不能と見られよう。

敵が敗戰を糊塗するため放送しつゞける宣傳文は「現在の攻勢は本格的作戰の豫行演習にすぎない。大規模に展開されるまでは相當な期間を要する」といふのであつて、第一次アラカンの悲劇の際、ウェーヴェルが「アラカンは本格的攻勢のための練兵場である」と嘯いたのと同義語である。

元來、敵のビルマ反攻作戰に關して英國では二つの意見があり。一はあくまで陸上より攻撃してビルマ・ルートを奪回せんとするものと、他は海上より奇襲上陸を企てんとするものである。前者の陸上作戰の困難、いなむしろ不可能については數次にわたる小反攻および今回の徹底的覆滅を體驗して如實に敵が思ひ知つたはずである。しからば敵が呼號するごとく果して海上よりする奇襲上陸併用の海陸協同作戰は實現の可能性をもつであらうか。昨年以來外電によつて報ぜられた敵のこの作戰豫想を綜合すると、まづベンガル灣の制海權を確保し

一、地上作戰に並行してラングーン、もしくはビルマ南岸モールメン方面に上陸作戰。

二、ビルマ南岸よりマライ半島西岸に對する前哨基地たるアンダマン、ニコバル諸島の奪回。

三、マライ半島西岸の最狹部クラ地峽に上陸、もしくは海上勢力をもつて直接スマトラを衝き、もつて東印度諸島と日本の連絡線遮斷。

大體右の三つに歸してをり、またデーリー・テレグラフの軍事評論家中將マーチンは、「ビルマ陸上作戰は地勢、氣候、交通の諸點からみて不利である」といひ、英の軍事評論家シリル・ファールスは「印度よりするビルマ作戰は陸海兩樣作戰をもつてせねばならぬが、それは島から島への連續的作戰でなく、大陸の一部からベンガル灣を經て同じ大陸の他の一部への上陸を意味する。すなはち陸上大兵力をして日本軍と接觸せしめるためには海路を選ぶ以外道なし」と論じ、デーリー・メールは「今後の對日戰はベンガル灣が中心となり、ニコバル、アンダマン諸島が近き將來中心戰場となるべきである」と斷じてゐる。

以上のごとき上陸作戰意欲は、あながち宣傳のみと輕視するのは危險であるが、奥地の日本軍攻撃に消耗するよりも一擧海上から後方據點たるラングーンに上陸奇襲せんとするは作戰的に全く不可能なことである。ラングーンはベンガル灣の河口からラングーン河三十マイルを溯航しなければならないからである。他の重要前進據點たるベンガルのアンダマン、ニコバル諸島の奪回意圖を敵がもつものとすれば、われを知らざるも甚しといはねばならない。この兩列島はビルマの南端よりスマトラの北端にわたり蜿蜒千七百キロ、二百數十の島々が飛石傳ひに連つてゐる。南アンダマンのポート・ブレアまで、セイロン、カルカッタからいづれも二千キロ、爆撃機で約五時間、艦船部隊なら二日間で到達し得るが、米陸軍當局が告白せるごとくビルマ作戰を決定するものは結局船舶の問題であり、マウントバッテンをして「ベンガルに大艦隊を轉用するに非されはビルマ奪回は不能である」と結論せしめた苦慮もこゝにある。しかも太平洋戰線の飛石作戰とは全然異り、アンダマン、ニコバル兩列島以外に島影一つなきベンガル、印度洋に露出した艦隊の行動がどれほど危險きはまるものであるかは敵自らが知つてゐるはずだし、英海軍は對獨決戰に備へ、あるひは第二戰線問題をも考慮に入れねばならぬ情勢下にあつては、大海軍力を印度洋に振向けることは困難なことといふべきである。

しかしながら一面、北阿戰線および地中海方面の安定によつて英海軍は戰艦、空母以下の地中海艦隊の主力を印度洋方面に回航したと外電は傳へてをり、米軍も北阿方面の航空兵力ならびに陸兵を印度に派遣增援せることを米當局が言明してゐる。印緬國境における陸上反攻の企圖挫折がもたらす敵の焦躁と太平洋戰局の進展は、敵に海陸兩面作戰を促進させぬとも限らず、われらは印度洋上に濃化される明日の戰雲を凝視しつゝ警戒すべきであらう。

飜つて支那大陸を基地とする對日反攻の新たなる展開もまた看過することのできない樣相を示してゐる。米英の企圖するところは、これによつて日本を威嚇するとともにビルマ反攻の挫折に對する重慶の不滿を慰撫せんとする政治的考慮を含んでゐることはいふまでもないが、米はあらゆる困難と犧牲をしのびつゝ在支米空軍の增强、大型機用の基地整備、印支空輸による援蔣强化などに狂奔してをり、重慶また米英に對する視察團の派遣、空軍再編成、米空軍との提携强化などによつて對日反攻の便乘を策してゐる。さらに最も注目すべき新動向は新に英空軍の支那戰線への積極的參加が傳へられてゐることで、最近重慶の對英接近、英との合作强化の諸事實の半面、重慶を懷柔して米の軍事的政治的な重慶獨占を牽制するとともに、重慶の犧牲によつて印度防衛を策さるを

得なくなつた英の媚態政策を物語るものであるが、英空軍の支那戰線參加は一應豫測されるところであり、近くなんらかの反攻を企圖してゐるものゝごとく、印度洋とともに大陸の空をも嚴に注視すべきであらう。

歐洲戰局と反樞軸の政情

米國戰時態勢管見

細川隆元

一 米國民の戰意

敵アメリカの戰時態勢を解剖するについて、四つの面からこれをみることにしたい。第一は國民の戰意、第二は生産力の問題、第三は政治情勢、第四は戰時社會の問題の四つである。順を逐うてこれを説明することにしよう。

第一に戰力の基礎といふべき國民の戰意、言葉を換へれば、戰爭遂行上における國民の精神的團結力がどの程度のものであるかといふ問題である。開戰當初と今日とを比ぶれば、アメリカ國民の戰意は非常な變化を來してゐる。パールハーバーの大打擊を蒙つた當時、アメリカ國民の間に一通りの敵愾心と對日憎惡が漲つたことはもちろんであるが、しかし國民の戰意は全

般的にみてすこぶる低調であり、政府の國民に對する戰爭指導にもかゝはらず、一向に戰意は昂揚しなかつた。それには二つの理由がある。一つはアメリカ國民といふものが、日本の實力、特に近代國民としての日本、國防國家としての日本を知らなかつたこと、すなはち日本といふものゝ實體に對するアメリカ國民の認識が缺如してゐたことが戰意低調の第一の理由となつたのである。「東洋の小國」といつた頭から日本を見下した日本觀によつて、アメリカ國民は戰爭の相手方としての日本を輕視してゐた。二つにはパールハーバーの奇襲によつて、彼が受けた大損害についても、世界一の生産力を鼻にかけてゐるアメリカ國民は飛行機でも軍艦でも船でも、つくつてしまへば損害も元通りになるから、まづドイツと戰ふ片手間に日本を叩き潰すぐらゐは、さほど困難なことではあるまいといつた、自己の生産力にすべてを賴つてゐる國民の自惚れが戰意低調の第二の理由となつた。だからこの戰爭は軍人と政治家にまかせておけば、そのうちにかたづくだらうといふのが戰爭勃發當初における國民全般の感じであつたのである。

それが二年間の經過をみて日本の强さを知るに及んで、それに基いて敵愾心も起り、またこれはうかゝしてはをれないといふ氣持になつてきた。つまり日本の戰果がどん〳〵あがつてゆくのでこれは俺達の考へてゐたやうなものでないと認識してきた。戰果の影響で國民の戰意が昂まつてきたのである。もう一つは駐日米大使グルーの歸國である。昭和十七年八月の第一次日米交換船で歸國したグルーは國民の戰意低調をみて一驚を喫したのである。爾來彼は全國を遊說して國民の對日認識の是正と、これにもとづく國民の戰意昂揚運動を展開したが、彼の所論は歸國後半歲にして彼が出版した「東京報告」といふ著書に最もよく盡されてゐる。もちろんこの著書は日本における軍民離間を狙つた謀略的宣傳を目的としたものではあるが、その著書の中で彼は「ともかく日本は强く、日本人の精神力は世界的に優秀なものである。それが集つてできてゐる日本國民の精神的團結、これは實に類ひないほどえらいものだ。また物質の面についても日本は貧乏國、持たざる國といふやうな觀念は誤い對日觀で、かういつた對日認識でこの戰爭を繼續するならえらいことになる。」と國民に向つて呼びかけてゐる。

グルーはその所說において「いはゆる精神に時を以てすれば日本の物質の面は、精神力と相ともなつて非常に强いものとなる。お前らは日本の實體を知らぬ。自分が數年間日本にをつた經驗にもとづいた具體的事實に徵しても、その精神的な力に優るとも劣らぬ物質的な力を有してゐる。この日本の持てる潛在力は絕對的に輕視してはいけない」と强調してゐる。さらに

「かういふ强大な一大强國と戰つてゐるのに、今日のやうな國民の戰意でどうするか。まるでだらしがない。かういふ調子では勝つどころの騷ぎではなく敗けるのだ」とハッキリいつてゐる。「隨つてこの際徹底的に日本を叩きつけて足腰の立たなくなるまでやつつけなければアメリカは未來永劫浮ぶ瀨がない。つねに日本は眼の上の瘤だ。だから途中で態のいゝ講和をしたり途中で戰爭を打切つたりしたらアメリカの敗けだ。日本國民といふものは七轉び八起きする國民だから徹底的に粉碎しなければならぬ。それには今日のやうな國民の戰意では問題にならぬ。國民よ、醒めよ。さもなくばわれらは勝味がない」と喝破した。

このグルーならびに同じく交換船で歸國した十數名の新聞記者がさかんに言論戰を展開した結果、アメリカ國民の日本再認識といふものは非常に强くなつて行つた。自分らは日本の實體を知らなかつた。なるほどグルーのいふやうに日本といふ國はそんなに强いのかと、日本の實體を認識することによつて、その方面から生じた國民の戰意はすつと遠つてきた。

以上は國民の自覺といふ方面からきた戰意の變化の概略であるが、一方ルーズヴェルトの戰爭指導といふ部面からみた國民の戰意はいかなる變化をみせてゐるか。最初ルーズヴェルトが戰爭目的として國民に訴へ、これによつて國民を率ゐんとした言葉は「自由主義とデモクラシーの擁護」であつた。しかしかゝる抽象的な戰爭目的をもつてしては國民の戰意を燃やすことはできなかつた。議會や言論機關からはルーズヴェルトに戰爭目的を具體的に明示せよと迫られ、日本からは大東亞戰爭といふ名稱をいちはやく突きつけられたといふ具合で、彼はいろいろ考へて、例の「生き拔くための戰ひ」といふことをいひ出した。これは彼が考へた言葉である。

彼はこの名稱によつてどういふ戰爭指導をやりはじめたかといふと、要するにアメリカの國民生活は世界一に高度なものである。もし戰爭に負けたらこの生活は壞れてしまふ。だからお前達が愚圖々々してゐるとえらいことになるぞ。お前ら自身の生活を護るために張切つて戰へ、戰に負けて困るなら負けぬやうに頑張れ、と戰爭の結果論を目的論にすりかへた指導をしたのである。これはアメリカ人の單純で實利主義的な頭を狙つたもので、生活部面に目的を結びつけられるとアメリカ人には利目がある。世界一高度な生活がなくなつては大變、これは負けられぬといふことで、かういふ方面からも戰意は揚つてきた。ところがこれではどうも消極的である。これは負けたら大變だから負けられぬといふのであつて、積極的な戰意は揚つてこない。そこで

もつと積極的な方面の戰爭目的として、つぎに彼はどういふことをいひ出したかといふと、ちやうど去年の北アフリカのカサブランカ會談の後の頃から「世界制覇の野望」といふことを國民の前にずつと暴け出した。當時におけるルーズヴェルト、チャーチルの共同聲明にもある通り、カサブランカ會談における米英兩國作戰の終局目的は「日獨伊三國の無條件降伏」にありと世界に宣傳されたが、この裏づけをなしてゐるのが米の世界制覇の野望である。もちろんルーズヴェルトの口から「世界制覇の野望」といふ言葉こそ使つてゐないが、戰後世界を支配する者は米國であるといふ國內宣傳こそは、まさにルーズヴェルトが新しい戰爭目的として國民に對する戰爭指導を展開し、今日までつゞいてゐるアメリカの戰爭目的にほかならない。

アメリカ人はなんでも世界第一主義でなければ承知できない。第二はいやである。これはワシントン、ジュネーヴ、ロンドンの軍縮會議を通じてみてもわかる通り、あの軍縮會議は要するに米英の爭覇戰であつた。さうしてジュネーヴ會議は米英の正面衝突で破れたが、結局ロンドン會議でアメリカが勝つた。なんでも世界第一でなければ承知しない。この國民的に共通な傾向といふか性格といふか、趣味といふか、このアメリカ人の世界第一主義の嗜好を世界制覇の野望に移したのである。さういふ方面からする戰爭指導はたしかに效果をもたらした。それでアメリカ人の戰意が消極的な防禦的な意味の戰意から積極的な方向に變つてきたとみておかねばならぬ。

今次の世界大戰の皮を一枚剝げば、そこには世界制覇の野望が相剋してゐるのである。一例を南米のアルゼンティン問題にとつてみよう。元來アルゼンティンといふところはイギリスの資本的勢力の非常に強いところで、現在もイギリスが大部分押へてゐる。これに對してアメリカが取つて代らう。このどさくさまぎれにイギリスの勢力を追ひ出してアメリカの勢力を入れようといふのが、現在アルゼンティンにおける英米の爭ひである。イギリスとしては、あそこから牛肉を買ひ小麥を買つてくる。この牛肉と小麥を目分の方に安全に來さすためにはこの際あくまで中立を守らせたい。アメリカとしては中立を放棄させることによつて、そのどさくさまぎれにイギリスを放り出し、南米洲を安全に自分の脚下におかうとする。こゝにイギリスとアメリカの激しい葛藤が醸し出されてゐる。西アフリカはもう大體アメリカの勢力になつてゐる。北アフリカも最近アメリカの勢力が非常に伸びてゐる。トルコにおいてさへイギリスとアメリカの爭ひは激烈でアメリカの勢力が大分伸びてゐる。イラン、イラク、インド、こゝも全く英米の覇爭場裡でアメリカがだん〳〵浸潤してゐる。このやうにアメリカがこの戰爭を利用して世界制覇の野望をなしとげようといふことは具體的に現れてゐるが、その野望をカサブランカ會談頃から國民の前にぶちまけた。戰後の世界を支配するのはアメリカだといひ出したのである。

敵愾心の問題をとり上げてみよう。アメリカの大衆宣傳のいちばん尖端は映畫であるが、この映畫なども戰爭がはじまつて半年ないし八箇月ぐらゐはドイツを目の仇にした映畫ばかりで、ドイツに對する憎しみを國民に植ゑつけるやうな映畫で一ばいであつた。それがこの半年ないし八箇月間位の傾向をみると、ほとんど日本關係のものになつた。日本に對する敵愾心を國民に植ゑつける映畫が非常な勢ひで作製されてゐる。かういふ政府の宣傳政策といつた方面、敵愾心の養成といふ方面からする戰意も揚つたとみなければならぬ。

標語についても最初は日本關係の標語はあまりなかつたが、最近ではたとへば公債賣付でも「キル・ワン・ジャップ、バイ・ワン・ボンド」（一方の手で一名の日本人を殺し、他方の手で一枚の公債を買へ）といふやうな標語をつくつてゐる。また物資節約の標語を新聞に書いてゐる例にみても、たとへば紙の節約について「セーヴ・ペーパー、キル・ジャップ」（紙を節約し、日本人を殺せ）。さういふアメリカ式の對話には必ずジャップをもつてくる。さういつた方面からする敵愾心を利用して政府の政策の運行を援けようとし、また政策の遂行に關聯しつゝ敵愾心をそゝるといつた遣方であり、この半年ないし八箇月間ぐらゐから全般的に敵愾心がぐつと變つてきた。かういつた敵愾心の面から觀察しても戰意はずつと揚つてきてゐるとみるべきである。

二　生産力の問題

第二に生産力の問題をのべることにしたい。敵アメリカの生産力の上り下りについてはいろ〳〵な議論を聞くが、これは机の上でたゞ數字を組合はして計數的に上る下ると議論してみたところが、あるひは當るかも知れず、あるひは當らぬかも知れぬ。かういふことはあまり過大評價する必要もないし、ある時は樂觀論にすぎて不覺をとつてもいけない。要するに實體を把握し、敵情勢の實相を視ねばならぬ。アメリカの生産がいかなる變化をきたし、現在の生産がどの段階まで行つてゐるかを知

り、またルーズヴェルト政權が經濟上においてどういふ手段をとつてゐるか、といふことを知らなければならぬ。

一言にしていへば、とにかくアメリカは自由經濟機構のまゝ戰爭に入つた。もちろん戰前八箇月間ぐらゐに武器貸與法によつてイギリス援助のために平和産業が軍需産業に切り換へられた。自動車工場などはところ〴〵軍需産業に切り換へられたが、本格的な軍需産業に乘り出したのは、なんといつても大東亞戰爭に入つてからである。從つて戰時經濟政策、經濟機構は大體自由經濟機構のまゝ戰爭に入つてしまつた。さういふ場合アメリカがいかなる政策をとつたかといふと、これはどこの國でも同じことで、いはゆる金の豫算によつて彼が持てる國を誇つてゐただけに、富裕なストック資材をつぎつぎに生産にぶち込んで行つた。アメリカの生産力が急上昇を來したのはむしろ當然である。しかし昨年の五月からアメリカの軍需生産に全般の頭打ちがみえてきた。これのいちばん大きな原因はどういふところにあるかといふと、アメリカが持てる國を誇つてゐるといつたところが、軍需資材が全部均等に揃つてゐるわけでない。或る物資はありあまるくらゐあるがだん〴〵ストックの少くなつてくる物もある。たとへばゴム、錫、マンガン、銅といつたやうな彼が持てる物資の中で貧弱なもの、かつその補充が困難な物資はやはりだん〴〵底をみせてくる。ゴムなどは開戰當時大抵二年間ぐらゐのストックであらうと推算してをつたが、滿二年間たつた頃からだん〴〵と底がみえ出したのはアメリカ自身で發表してゐる數字をみてもわかる。人造ゴムはまだ全般的に見て代用的なところまで行つてをらぬやうであり、ゴムが彼のいちばんの惱みとなつてゐる。さういふ風に彼が持てる物資の貧弱なストックがだん〴〵減つてきた。そこに生産資材のうへの均衡が破れはじめたのだ。いはゆる生産資材の破行狀態がアメリカの生産全般に現れ出したといつていゝ。昨年五月頃からのアメリカ軍需生産の全般的頭打ちの現象は、こゝにその最も大きな理由を發見することができるのである。

このほかに當時の生産全部門にわたる頭打ちにはさらに三つの原因が重なり合つてゐるとみることができよう。

その第一はアメリカにおける國内輸送問題の隘路である。輸送問題は戰前はすべてが自動車輸送で、スピードからいつて、時間からいつて、運賃からいつて、汽車などは問題にされなかつた。鐵道會社は機關車でも車輛でも車庫の中にぶち込んで、いはゆる鐵道重點主義におきかへられた。そこでふるい機關車を出してくる。アメリカではボロ貨車といつても相當なものだらうが、アメリカ流にいつてさういふのをうんと引張り出してきたので運轉回數がぐつと一遍にふえた。ところがあゝいふ大きな領土だと保線工事がさう簡單にゆかぬ。要するに運轉回數の急激な增加に比例して保線工事が追ひつかぬ。車輛がふるい。それに援ひ方が亂暴だから少し故障のあるやうな車は始終故障を起すといふ具合にアメリカの最近の鐵道は事故頻發である。それは新聞や雜誌にも寫眞入りで始終報ぜられてゐるものをみてもわかる通り、故障頻發とダイヤの亂雜がアメリカ國内輸送の一大惱みである。かゝる國力輸送の隘路といふものが生産におよぼす影響をみるに、ともかく生産資材が均衡を保つてゐる間は、影響があるとしても、さほど目立つた影響をおよぼさない。しかし一度生産資材の破行狀態が現出すると、輸送の隘路といふものゝ生産能力におよぼす影響は絶大である。ちやうど昨年五月頃アメリカの生産に現れた資材の破行現出にあたつて、この輸送問題が物をいひ出したのである。

第二は例の勞働爭議である。昨年の春早々ルーズヴェルトの宿敵たるジョン・ルイスによつて勞働者の總罷業が斷行された。その結果製鐵がガタ落ちをした。非常な減産をしたことは政府もハッキリ發表してゐる。鎔鑛爐の火が將に消えんとするほどの事態に陷つたので、これが軍需生産の上に非常な影響をおよぼした。

第三は昨年春の歐洲戰局の好轉にもとづくアメリカ國民の樂觀氣分が生産に惡影響をおよぼしたことである。獨ソ東部戰線においてはスターリングラードがソ聯軍の手に歸する。北アフリカ戰線においては獨のロメル軍が退却した。歐洲戰局全般の好轉によつてアメリカ國民に樂觀氣分が橫溢し、工場勞働者の缺勤續出となり、さすがに生産力を誇るルーズヴェルトをして、「當時の勞働者缺勤による飛行機生産量は一千台に相當する」と嘆ぜしめたほどである。これら三つの原因がその根本的原因である生産資材の破行と重り合つて、昨年五月頃からのアメリカ軍需生産全般の頭打ちの原因をなしたとみられるのである。

でにこれでアメリカの生産は「行詰り」とみるべきであらうか。爾來數箇月間のアメリカ生産部門の計數だけをみると、一應かゝる推定なり、判斷なりを下す理由はあつた。しかしこゝに生産力を判斷する場合において單に計數だけを机上でいぢらず、敵の施策なり、その手口をよく檢討して、その實體の實相に對する判斷を誤らないやうにしなければならぬわけがある。金の豫算と總花主義生産時代から、アメリカは物の豫算、物動計畫、重點産業の時代に入つて來た。今年度のアメリカ生産が

計畫豫定表をみると、昨年度までの總花主義とはよほど趣きを異して明瞭な重點主義に移つてゐる。これは作戰の必要がもたらした結果であることもちろんであるが、その主なる理由は金の豫算より物の豫算に移り、物資の調整統合、生産の合理化に入つて來たからであるといへよう。

物資の均衡、物動計畫といふことはあゝいふ大きな土地ではなか〳〵困難である。しかし全然さういふことを考へずにストックを減茶滅茶に金の豫算でやつた時に比べれば著しく合理化への方向をとり出した。この物資の調整が利いたならば、生産の隘路が一應開けてくるといふことも、考へておかねばならぬ。現に昨年十月頃からアメリカの生産力は、全般的にみてまた多少ながら上昇をたどつてゐることもみのがすわけには行かない。從つてアメリカの生産力は一應飽和點に達しながらも、物の豫算、物資調整、重點産業への轉換によつて早急の行詰りを豫想することは危險である。

もう一つ考慮に入れなければならぬことは、民需は前から壓縮されてゐるが、アメリカは食糧品をはじめとして、民需はなほ壓縮の余地を相當持つてゐることである。どこまで行つたら音をあげるか。かういふことは機械的にいはれないのであつて政府の施策のいかん、戰局の情勢、國民の耐久限度によつて決するが、しかし全體的にみて民需の壓縮の余地はまだ〳〵殘つてゐるとみなければならぬ。この民需の壓縮によつて生産に廻される余地といふことを私どもは計算に入れてかゝらねばならぬわけで、從つて以上の二つを睨み合してアメリカの生産がさう急に行詰ると觀測することは、あるひは誤りになるかも知れない。むしろまだ伸びるといつた方が大觀的の觀察においては當るのではないかとも思ふ。

三　選擧戰と對戰爭態度

第三に政治部門の方をみることにする。アメリカの政界を概觀すると、ルーズヴェルトの人氣が落ちた。共和黨が非常に進出をしてゐる。民主黨は仲間割れをしてゐる。この三つに盡きるが、今日から考へてルーズヴェルトが本年十一月の大統領選擧に出るかどうかといふと大體五分々々である。一昨年の暮から去年のはじめにかけて私どもがアメリカの情報をみて判斷してをつたところでは、まづ七分三分で出る方が多いとみてをつたが、最近は大分惡くなつて彼が出得られないであらうとする分の方がすつと殖えてきたとみてよいと思ふ。まづ概觀的にみて五分々々である。

彼が出得ない點はどういふところにあるかといふと、第一に共和黨が人氣を回復してきた。一昨年の上下兩院議員ならびに州知事の中間選擧において共和黨が非常に進出してゐる。そのもつとも著しく畫期的の變化といはれたのはニューヨーク州知事の選擧である。ニューヨーク州知事は大統領の登龍門といはれてゐる。あの選擧でルーズヴェルトが推した候補が共和黨の候補デューイーのために輕く蹴落された。殊にニューヨーク州は民主黨の傳統的地盤である。しかもルーズヴェルトの本邸のあるハイドパークのお膝許である。こゝで民主黨の候補が敗れて共和黨が出たといふのである。あの時は民主黨のうちでいろいろな候補者爭ひが起きた。民主黨ニューヨーク州の領袖たるジム・ファーレーがルーズヴェルトと黨内で候補者擁立爭ひをはじめ、結局ジム・ファーレーの一派が敗北したが、この内輪揉めが選擧技術上の點として民主黨敗北の一つの理由にあげ得られる。しかしその根本原因はなんといつても民主黨の凋落と、ルーズヴェルトの人氣低落の證左である。

共和黨側の大統領候補者は六月の黨大會で決するが、その有力候補であるニューヨーク州知事デューイー、西南太平洋最高指揮官陸軍大將マックアーサー、前共和黨候補ウィルキー、オハイオ州知事ブリッカーらのうちで、現在のところデューイーが最も優勢であり、結局彼に落ちつくとみてよからう。從つて今秋の大統領選擧は民主黨のルーズヴェルトと共和黨のデューイーとの一騎討ちと豫想される。當落の豫想が五分々々であるとするならば、なんといつてもこれからの戰局が大きく響くのであつて、戰局の好轉によつて、彼の人氣が多少でも回復すれば、戰況がよいからもう一遍やらせようといふ國民的の心理が彼の四選を可能にする歩合は考へられる。

では民主黨が勝つてルーズヴェルトが四選した場合と、共和黨が勝つた場合、アメリカの政治部門からみてその戰時態勢にはどういふ影響があるだらうか。ともかく今年十一月の大統領選擧前後を通じて、アメリカの政治部門は選擧をめぐり議會を中心として政爭が非常に苛烈になつてくる。その結果アメリカの政治に幾多の弱點、缺陷を暴露すると考へて差支へない。たとへばルーズヴェルトが四期出馬したとしても、十二年間の政權掌握の反面、彼はほとんど手持の人間を使ひ果さんとしてゐるし、また彼の人氣低落と相まつて彼の政治的足場はすこぶる弱體化してゐる。だから民主黨の勝利によつてもアメリカの政治は少からざる惱みに當面してゐるとみてよからう。いはんや選擧の結果ルーズヴェルトが四選されず、議會の分野が民主、

共和兩黨の地位轉倒を來たすやうなことがおこれば、アメリカ政界の混亂は相當なものがあらう。

共和黨が勝つた場合はどうか。この場合まづ考へられることは、國內政策の變更である。ニューディールに反對の共和黨によつて國內政策が變る。さういふ方面から戰時中に政策の切り換へが行はれれば、いろ〳〵な政治部面の缺陷弱點を暴露することは必至である。いづれにしても今後の大統領選擧を通じてアメリカの政治の缺陷が現れるとみてよいと思ふ。しからばアメリカ政治の惱みと缺陷を計算に入れる限度をどこまでも擴張していゝか。たとへば共和黨が出てきたら非戰論がアメリカに起る、あるひは戰爭打切論が起るといふことは考へられないので、そこまでアメリカの政治部面の缺陷を推し擴げて希望的觀測をすることはできない。殊に共和黨の政綱の第一はなにかといふと强力な戰爭の遂行といふのにある。戰前非戰論者の人氣者であつた例のリンドバーグは、ルーズヴェルトを主戰的大統領と攻擊し、主戰論的大統領のもとに大佐の官職にとゞまるを潔しとしないと、辭表を叩きつけて日本流にいへば野に下つた。そのリンドバーグが戰爭がはじまると同時に「ことこゝにいたれば自分は過去の議論を淸算して、アメリカの戰爭遂行に全面的に寄與するであらう」といふ長い聲明を發し、いまではフォード會社の飛行機工場の監督官をしてゐる。さういふ具合にあのアメリカ隨一の人氣のあつたリンドバーグさへ然り。いはんや共和黨が民主黨に代れば非戰論に變るであらうと、そこまでアメリカの政治部面の缺陷を推し擴めて考へることは希望的觀測にすぎよう。民主、共和兩黨いづれが出るとしても、今日のところアメリカの戰爭遂行といふ根本方針には變更なしとみておかねばならない。

四　戰時社會の問題

最後にアメリカの戰時社會の問題を採上げたい。第一にアメリカの戰時社會問題で、今一番大きな問題になつてゐるのは風紀の問題である。戰時下における道德低下問題は敎育界、言論界の大きな問題となつてゐる。風紀の問題がいかに戰時社會を惱ましてゐるかの例證としてつぎの一例があげられる。ボストン市の公園に「日沒後十八歲未滿の女入るべからず。ボストン市役所」といふ立札が立つてゐる。性の開放は世界第一といはれてゐるアメリカで、これまた世界のどこを捜してもないやうな珍妙無類の札が立つてゐる。アメリカの戰時社會の風紀がいかに紊亂してゐるかといふことは、これを見ただけでもわかると思ふ。一方花柳病の患者の增加といふことから考へても推察される。

男女關係の紊亂は戰爭下の結婚問題にも現れてゐる。參戰後のアメリカに結婚率が急增した。これは政府の人口增殖政策のためでもなく、アメリカ女性の戀愛至上主義のためでもない。戰爭以來アメリカ政府がことさら結婚奬勵策を執つたこともないし、またアメリカ女性は戀愛至上主義者たるべくあまりに實利的である。そこでこの結婚の增加はどういふことかといふと、出征者の妻は月額五十ドルの補助を受ける。（長男の出征は三十ドル・次男以下は二十ドル）。そこでかねて戀仲にあつた女はどしどし出征眞際の男と結婚した。五十ドルがもらへるからである。その結果、重婚や三重婚まではやり出した。また出征した夫が戰死すれば、遺族者に對する扶助金をもらつて、またどし〳〵他の男と結婚して行く。戰死が確認されなくとも、夫の行方不明の通知を受取つた妻は、すぐに他の男と同居生活や結婚生活に入つてしまふ。ひよつこり歸つてきた夫と、第二の男と妻との三角關係問題なども戰時社會の風景をなしてゐる。

もう一つアメリカの風紀紊亂の中心をなしてゐるのはアメリカの女軍である。現在女軍の數は五十萬近いであらうが、元來この女軍を志願した者の大部分は知識の低い女中クラスである。インテリもわづかゐるにはゐるが、大部分は敎養のない者が多い。この女軍は最初「女子陸軍補助部隊」：Women's Auxiliary Army Corps：と呼んでゐたが、「補助」は怪しからぬと女軍が騷いだ結果「女子陸軍部隊」：Women's Army Corps：と名稱を變へた。すなはち最初は略稱W.A.A.Cと呼んでゐたが、つぎにWACS（ワックス）と呼ぶことになつたわけである。そこまではよかつたが、まだ給料が違ふ。男と女と差別待遇をするのは怪しからぬ、とまた女軍が騷ぎ出し同じ大尉なら大尉の給料を支拂ふべきであるといふので、現在は給料も同じになつた。海軍の方は陸軍より遲れてできたが、これは海軍だといふことでワックスに對してウェーヴスといつてゐる。このアメリカの女軍であるウェーヴスとワックスを中心に非常に風紀が紊れてゐる。昨年の七月この女軍のキャンプに姙娠事件が起きたり、えらい事件が起つて議會や言論機關が女軍を痛烈に叩いた。給料を增せとかなんとかいつてゐるが、彼らのやつたことはなんだ。風紀紊亂だけぢやないか〝アメリカの戰時社會の風紀紊亂は女軍にあり〟といつた。そこで陸軍長官のスチムソンが長い聲明を出して、あれは女軍の一部に起きたことで、全般の士氣には絕對に影響がないと陳辯これ努めた。さういふわけでアメ

リカの女軍は戰時社會の風紀紊亂の因をなしてゐる、といつても過言でない。たゞこの女軍が五十萬といふ數字に物をいはせて、陸海軍の軍隊事務や沿岸警備などで、男の手を省かせてゐる點は看過できぬものがあらう。

戰死、戰病、戰傷といふことに對してアメリカの社會がどういふ感情を持つてゐるか。アメリカ人は鼻柱が強くて戰鬪力が旺盛なことは間違ひない。しかし彼らは戰死、戰病、戰傷といふことには非常に神經過敏である。非常に恐れる。特に銃後の社會、さらに出征家族にあたへてゐる影響は大きい。これは社會風景の一端をみればすぐわかるので、戰死者が出て陸海軍から通知がくる。さうするとこつそり葬式をやる。親戚友人には知らせるが一般の人にはなるべく知らせない。これなども人の戰死を聞きたくない、從つて自分の家で戰死者が出てもなるべく人に知らせないやうにする。彼らがいかに鼻柱が強くても戰死、戰病、戰場に對しては非常な恐怖心のあることを物語つてゐる。政府としてはさういふ國民性を知つてゐるから戰傷、戰病者が病院船で送られてきても、人の眼につかない夜、人がゐなくなつたのちに病院船から降して、病院列車に移し療養所に運んでしまひ、なるべく人にみせぬやうにする。國民がみればいはゆる戰爭嫌惡感が起るといふ心配があればこそ、さういふ現象があるわけで、戰死、戰病、戰傷といふことに對して非常に神經過敏であり、いやがり、恐れてゐるといふことがハッキリとアメリカの戰時社會の風景から窺ばれるわけである。

五　人の給源が弱點

以上ごく概觀的ではあるが、敵アメリカの戰時態勢の概略を說明した。そこでこれらを通觀して、彼らの弱點いづれにありやと考へてみると、なんといつても彼らの戰意はさきほど書いたやうに揚つてきてゐる。開戰當時とは比較にならぬほど揚つた。今後も揚るとみねばならぬ。ただいかに揚つても日本の國民精神の力との間にはつねに大きな差を持ちつゝ、この戰爭が續いてゆく。戰爭の終結にいたるまでこの精神力の相違はつねに彼の弱點であると斷言して憚らぬ。もう一つはアメリカの戰時經濟の弱點は人的資源の不足にある。とにかく叩く、叩くことによつて人的資源の覆滅をはかる。物質的損害もさることながら、この點はまだ造つてくるとみなければならぬ。持つてもゐるし、造つてもくる。飛行機にしても船にしても、やられてもやられてもまだ〳〵造つてくるとみなければならぬ。もうそろ〳〵この邊で音をあげるとも思はれない。ところが人的資源の方は大體が不足であり非常に窮屈である。この損害はさう簡單に解決がつかぬ。技術において誇るアメリカでも人間を作る技術は持つてをらぬ。この點はさう簡單にゆかぬから人的損害はそのまゝ實損になつてゆく。彼の弱點を大きくしてゆくことによつて、これが敵米國民の心理に與へる影響は十分計算に入れてよいと思ふ。

戰爭の見通しは誰にもわからない。たゞいかに決戰の年ないしは決戰段階であるといつても、今年中に戰爭が片付くと思ふものはおそらくないであらう。あと二年かゝるか三年かゝるか、あるひはそれ以上かゝるかわからない。であるから、われ〳〵はまづ敵の實體と敵國の實相を知ることが必要であり、またわが方としては、いはゆる必勝の信念にもとづく國民總力の發揮が肝要である。戰局の一進一退に一喜一憂するほど愚なことはない。もう一度ゆつくり坐り直して、戰爭の實體と、敵の態勢と、戰局の現階段を見直し、どつしりと落ちついた余裕ある氣持で、戰爭の現狀に對處することが、指導階級にとつても、國民全般にとつても、最も必要なことであると思はれる。戰ひは正にこれからである。

歐洲戰局の決戰期

聽濤克己

一　對獨決戰の展望

今日歐洲戰線における二つの主要な問題は、東部戰線におけるソ聯軍の異常な攻勢展開と、米英軍の西歐侵攻作戰の切迫とである。兩者は合して對獨東西挾擊作戰の展望を可能ならしめ、かくして米英ソ反樞軸軍の對獨興亡の決戰がいよいよ作戰日程にのぼつたのである。歐洲戰線の緊迫を語り、歐洲戰爭における決戰期の到來を云々するのは、この事實を指すものであることいふまでもない。

歐洲戰爭を今日の事態にまで導いた大きな契機となつたものは、昨年九月八日の伊バドリオ政權の無條件降伏である。この事件を境として歐洲戰局が急激に彼らのいはゆる對獨總攻擊といふ決戰的樣相を帶びてきたことは明かな事實である。日獨伊三國同盟を最も弱い一環において切崩さんとする敵の企圖が、これによつて一部の成功を收め、軍事的にも獨軍の側面に脅威を與へるにいたつたのである。しかしイタリアの國內分裂を惹起せしむるにいたつた米英の地中海作戰の成功は、果して米英軍單獨の戰果と認めることができるであらうか。米英が北阿、地中海においてあげた作戰的成果は、東部戰線における獨ソ主力戰の發展を土台として、はじめて可能であつたのではなからうか。いまこれらの點について少しでも疑問を抱く者は恐らくあるまいと思はれる。

そこで歐洲戰爭は依然として東部戰線における獨ソ兩軍の死鬪を樞軸として發展しつゝある、といはなければならないのである。對獨總攻擊の今日の情勢も、要するに歐洲の主戰場たる東部戰線の推移がもたらした結果である。しからば東部戰線では一體何事が起つたのだらうか。いふまでもなくソ聯軍の異常な進擊が新しい情勢を展開せしめてゐるのである。昨年二月初頭の「スターリングラードの悲劇」を頂點とする第二次冬季攻勢以來、ソ聯軍は昨年いつぱいほとんど休止する暇もなく攻勢作戰を繼續してきた。第二次攻勢においてドン河流域、ドネツ盆地に到達し、さらに一般の期待を裏切つて夏季攻勢をも開始したソ聯軍は昨年秋までにドニエプル河キエフの線に進出、さらに昨年末よりの第三次冬季攻勢においてウクライナ平原奪回を企圖し、一部は中央突破により舊國境をこえてポーランド領內に進擊、目下戰線はポーランド領內、ハンガリー、ルーマニア國境まで延びるに至つたが、いまこの戰鬪經過を詳述する必要はあるまい。要はこのソ聯軍の急進擊が、歐洲の他の戰線における軍事的可能性を生み、歐洲大陸の政情に頓に緊張感を呼び起し、米英をして對獨決戰を決意せしむるなど、刻下の歐洲戰局を動かす最大の因子となつてゐる事實を指摘すればよいのである。

米英の地中海よりする對獨側面作戰の一應の成功と、バドリオ降伏といふ政略的成功も、かゝる東部戰線の新展開が背景にあつたからのことである。こゝにおいて米英は、地中海作戰の作戰的、政略的成果をいかにしてさらに擴大するかの問題と、ソ聯軍の攻勢をいかに利用するか、ないしは急進擊を續けるソ聯軍に對しいかに自軍の地步を固むべきかの問題とに當面した。しかるに側面作戰の戰果を擴大するといふことは、その論理的歸結として當然米英を懸案の第二戰線計畫に接近せしめたし、またソ聯軍に對抗して將來の歐洲大陸における自軍の地步を固めるといふ問題は、さらに米英をして大規模な對獨攻勢の構想に眞劍ならしめたのである。兩々相まつて米英はつひに禁斷の第二戰線作戰を自ら考へ決意するにいたつたのである。イタリアの政治異變は、さういふ意味ではじめて歐洲戰局に一時期を畫するものとみることができ、久しく開かるべくして開かれなかつた米英とソ聯の最高軍事政治會談の機運が、バドリオ降伏後急激に釀成され、昨年十月下旬のモスクワ三國外相會談を經て、同年十一月末より十二月初頭にかけルーズヴェルト、チャーチル、スターリン三首腦間のいはゆるテヘラン會談の開催にいたり、對獨總攻擊の戰略が決定されたと公表されたことは、この間の事情を雄辯に物語つてゐる。

すなはちモスクワ會談では、「ドイツならびに歐洲におけるその衞星諸國に對する戰爭を短縮するためにとらるべき措置」について三國軍事專門家の間に協議がとげられ、それを基礎としてテヘラン會談では、獨軍擊滅に關し「東、西、南よりなさるべき作戰につき完全なる意見の一致をみ……その規模と時期に關し決定をみた」といふことが、敵側公表によつて明かにされてゐる。もちろんこの決定通り米英が實行するかいなかは、疑問の餘地十分であるが、米英をしてかゝる

決定にいたらしめた昨年來の歐洲戰局の推移は重視しなければならぬ。獨軍がすでに米英の上陸作戰必至とみて西歐防衛に萬全を期してゐる事實や、またテヘラン會談後昨年十二月二十四日米將アイゼンハッアーが西歐侵入作戰總指揮官に任命され、同時に以下首腦陣容が發表された事實や、また最近における米英軍の上陸作戰準備の事實などに對し、眼を蔽ふてはならないのである。テヘラン會談の決定内容はまだ開かれない玉手箱のやうなものではあるが、今後の歐洲戰局の發展を豫想する鍵であることは否定できない。かくのごとくして歐洲戰爭は本年度において決戰段階に入り、近く戰局の急展開をみること必至であるといふのが衆口の一致するところである。

二　歐洲反攻の場所と時期

從つてテヘラン會談後の歐洲においては、米英の第二戰線展開の場所と時期とが新しい課題として論議されてゐる。

これについてテヘラン會談の公表が、「東、西、南より」對獨作戰を行ふに決したとのべてゐるところから、まづ作戰の「場所」について種々樣々の觀測を生み出してゐる。第一に佛、白などの沿岸より西歐に上陸作戰を行ふとの說である。

第二に「南よりする」攻撃とは、すでに敵側の新聞や軍事評論において喧傳されてゐるバルカン上陸作戰を指すものと見られてゐる。この作戰が有力視される根據は、前大戰において聯合軍がバルカンを北上して獨墺軍の背後を衝き、西部戰線の膠着を破つて軍事的勝利の最後の機會を摑んだことがあるので、今日の米英軍もこの戰略展開に執着してゐるといふのが一つ。も一つの根據は政治的觀點によるもので、それは米英がソ聯のバルカン進出、東歐制覇、ひいては地中海への進出をおそれ、これを牽制しようとする下心を有するとするものである。

しかし第一の根據は現に西部戰線の缺如してゐる今日、左程有力ではあり得ない。むしろ第二の政治的考慮から、米英軍がバルカン上陸作戰を重視してゐるものゝやうである。だがこの作戰展開のためには、ソ聯の諒解いかんが問題であつて、この點テヘラン會談がいかなる決定に達したか疑問とされるところである。一般にはテヘラン會談で米英ソ間に或る程度の諒解が成立したと信ぜられてゐるので、バルカン上陸またその可能性は無視できない。のみならず米英は昨夏伊本土上陸以來はやくもバルカン侵入の機會をうかゞつてゐたのは疑ひないところで、それだけに米英がこの作戰に強い執着をもつてゐることを考慮に入れなければならない。しかしバルカン作戰の鍵ともいふべきトルコの中立問題の歸趨が、まだ海のものとも山のものともわかつてゐないことは、この作戰展開上の最大の未解決問題である。

第三にはこの西、南兩方面よりする上陸作戰を同時並行的に行ふといふ說である。通常上陸作戰は、その焦點を絞し、敵の防戰方法を混亂させ、敵をして應接に遑なからしめるため、同時に數箇所から行はれるといふのが常識論である。この常識論からだけでも相當根據のあゝ見方といふことができる。また米英軍の實際の配置を見ても、すでに英本國、北阿、南伊、西亞に相當兵力が集結されてゐるが、一部情報によると、さらに歐洲作戰用兵力として英本國に七十五万、アルゼリアに三十万、伊本土に十數万、サイプラスに二十五万集結を目標に、兵力配置を急いでゐるといはれるのでかゝる同時作戰の可能性なしとしないのである。しかしこの場合といへども、米英が西歐かバルカンかいづれに主力をおくかゞ問題であり、米英の第二戰線作戰は結局西歐かバルカンかの問題として呈示されてゐるといひ得る。

飜つてその時期はいかん。テヘラン會談の公表はこれについてなにごとも觸れてゐない。會談直後にはソ聯軍の冬季攻勢と睨み合せて二月說などが飛出してゐたが、その後三、四月說となり、さらに五、六月說となつて、いままで根據ある說とみられてゐたものが單なる臆測にすぎないことを暴露してゐる。この間ソ聯の新聞、雜誌はいまだに米英軍が第二戰線を決行しないことに對し、またまた不滿と非難を表明するに

いたり、果していつ米英軍がテヘラン會談の決定を實行に移すのか、謎のやうな問題になつてゐた。

たゞこの問題については、さる二月二十五日英首相チャーチルが議會で行つた報告演説が唯一の手掛りとなつてゐる。すなはち彼は「現在では歐洲に對する爆撃を反樞軸軍の一番重要な攻勢とみねばならない。」そして「春から夏にかけて反樞軸空軍の爆撃が一段と增強されよう。全面的な大爆撃こそ海を越えて歐洲上陸作戰が據つてもつて立つ基盤である」とのべたのち、「テヘラン會談で三國代表がなによりも第一に意見の一致したことは、この夏には陸海空三方面から獨軍を攻撃するといふことだ」と言明してゐる。この演説で明白にされた點は米英が現在の對獨空爆を一層激化するといふ點で、歐洲上陸作戰の時期については漠然と觸れてゐるにすぎない。それにもかゝはらずこの一言を根據として第二戰線の時期はこの夏から秋にかけての間だらう、といふ解釋がまたぞろ行はれてゐる。要するに「時期」については、なんら判斷の基礎となるべき根據はなく、唯一の手掛りともいふべきチャーチルの演説でさへも、果してそれを示唆したものかいなか、大きな疑問が殘されてゐる。

もともと第二戰線に關する敵側の觀測や評論を立入つて穿撃することはそれ自體としては無用なことである。しかしこれらの觀測や評論を通して敵側の歐洲侵攻作戰の切迫感に觸れることができる。歐洲戰局の指向するところが第二戰線を必至ならしめてゐるといふことは、もはやなんらの疑問も存しないと一應考へられるのである。だが敵側の言動をつぶさに檢討してみると、テヘラン會談後の今日といへどもいまなほ米英が第二戰線展開につきソ聯とどの程度の協定に達してゐるかにつき疑問が湧いてくる。結局第二戰線の「場所」と「時期」について確たる諒解が出來てゐるかいなか、假りに原則的諒解が出來てゐるにしても米英が果してその諒解通りに實行に移すか否か疑ひなきを得ない。特にチャーチルの演説のごときは、第二戰線の時期を暗示したといふよりも、米英が現在でも對獨空爆の戰術に力點をおき、第二戰線はまだまだ實行を延期しようとしてゐるのではないかとの印象が强い。もし米英がこの問題についてさういふ態度をとつてゐるとすれば、それは第二戰線作戰がもつ至大な冒險性と、米英の對ソ政策とがこの間に作用してゐるとみて間違ひなからう。その意味で同問題は、最近における米英ソ關係の觀點からもう一度檢討を要するが、これは特に後段において取扱ふことにしよう。

三　米英ソの政治攻勢

テヘラン會談を一期として米英ソ三國が對獨總攻撃の態勢を整へんとしてゐることは、たとひ米英側においてなほ第二戰線作戰につき躊躇の色があるにせよ、本年度の歐洲戰局を最も重大ならしめてゐることにおいて變りはない。しかしこれは武力戰一本槍で進まうとしてゐるといふ謂ひではない。現代戰においては、武力戰と政治外交戰は合して一個の巨大な戰略を構成し、兩者は全く不可分のものであるが、米英ソはまた武力戰と並行してさかんな政治攻勢を展開してゐることに着目しなければならない。

この三國の政治攻勢はもとより對獨戰略の重要な一部として展開されてゐる。それは獨衞星諸國家に對する戰線離脫工作、中立國壓迫、獨防備態勢の攪亂などの形態をとつてゐる。その結果歐洲西端イベリア半島からバルカン、トルコ、西亞にかけて、歐洲諸小國は政治的動搖と不安に襲はれ、これら諸國の騷然たる政情が歐洲戰局の緊迫感をいやが上に尖鋭ならしめてゐる。ソ聯は東部戰線において發揮した軍事的實力と、米英の對ソ妥協を利した押强い歐洲政策とによつて、東歐、バルカン諸國に獨得な政治工作を行ひ、米英は大西洋憲章と武器貸與法を武器とし、反樞軸軍の勝利を宣傳しつゝ政治的威嚇と經濟的壓迫のあらゆる手段を弄してゐる。この兩者の政治攻勢は期せずして各所に對立、紛爭を惹起せしめてはゐるが、それにもかゝはらず兩者は合して反樞軸側の歐洲政治攻勢として發展してゐる。

まづバルカンをみよう。バルカン諸國を最も緊張せしめてゐるのは、ソ聯軍のポーランド領内、ハンガリー、ルーマニア國境進出である。ソ聯はこの事態を利用して、はやくから活潑なバルカン工作を開始してゐるが、ソ聯はこの工作において、汎スラヴ主義といふ有利な思想的武器をもつてゐる。民族的同血に訴へるこの標語は、ブルガリア、舊ユーゴースラヴィアをはじめ、ポーランド、チェコスロヴァキア諸民族には特別な響きを傳へる。加ふるに汎スラヴ主義と汎ゲルマン主義との歷史的闘爭を回顧すれば、これはまた西スラヴ諸民族に反獨的思想を植付ける有力な手段ともなる。最近におけるソ波國境問題、ソ聯・チェコ友好援助條約の締結から、ブルガリアにおける傳統的ソ聯勢力の存在、舊ユーゴー領内の親ソ的チトー政權の成立などの諸事件は、それぞれ特殊な政治問題を內包してはゐるが、その背後にはこの汎スラヴ主義が介在してゐるといへよう。

バルカンにおけるソ聯勢力の政治的橋頭堡はブルガリアと

離脫の恫喝的聲明を發せしめるなど、バルカン攻勢を激化してゐる。

これら東西よりする米英ソのバルカン政治攻勢は、ソ聯軍の急速な西進と相まつて、バルカン諸國に深刻な影響を與へてゐることはいなみ難い。しかし一九四一年以來バルカン防備施設とバルカン政治戰線の統一に努力し來つたドイツは、さらにダルマチア、モンテネグロ、アルバニア、セルヴィア各國に獨立を許容してバルカンの政治强化をはかり、また軍事的にはユーゴー、ギリシアのパルチザン部隊に對する徹底的掃蕩作戰、獨軍部隊のハンガリー進駐を行ひ、新事態の發展に對處してゐるので、米英ソが政治攻勢につゞいてバルカン攻擊戰に移つた場合には、バルカン山系の峻嶮と强力なる獨軍の反擊とを覺悟せねばなるまい。

しかしバルカン攻勢の焦點はトルコにある。それはトルコの中立が米英のバルカン作戰の一大障碍であるからである。米英がはやくからトルコの中立壓迫にあらゆる術策を弄してきたことは米英の不當なる中立國壓迫の好適例であつて、こゝに詳細論ずる必要はあるまい。たゞテヘラン會談後米英の對土工作が一段と熾烈になつたことを指摘すれば足りよう。すなはちテヘラン會談の歸途ルーズヴェルト、チャーチルはカイロにおいてイノニュー土大統領と重大協議をとげた

軸側の戰鬪部隊として承認するにいたつた。ソ聯のあげた成果は對米英勝利の意味においても注目に値する。

米英のバルカン工作は最近ソ聯の進出に壓倒されてゐるとはいへ、これまたバルカンに昔の政治地盤を回復し、獨軍のバルカン防備陣を撹亂せんとして執拗に行はれてゐる。特にロンドンにギリシア、ユーゴー兩亡命政權を擁する英國は、戰前のバルカンにおける自國勢力挽回を夢みてゐる。最近では米英はブルガリアの首都ソフィア、ルーマニア油由などに對する空襲を行ひ、或は昨年十二月十二日米國務長官ハルをしてハンガリー、ルーマニア、ブルガリア三國に對し、戰線

ン攻撃戰に移つた場合には、バルカン山系の峻嶮と強力なる獨軍の反撃とを覺悟せねばなるまい。

しかしバルカン攻勢の焦點はトルコにある。それはトルコの中立が米英のバルカン作戰の一大障碍であるからである。米英がはやくからトルコの中立壓迫にあらゆる術策を弄してきたことは米英の不當なる中立國壓迫の好適例であつて、こゝに詳細論ずる必要はあるまい。たゞテヘラン會談後米英の對土工作が一段と熾烈になつたことを指摘すれば足りよう。すなはちテヘラン會談の歸途ルーズヴェルト、チャーチルはカイロにおいてイノニュー土大統領と重大協議をとげた

が、それはテヘラン會談における米英ソ間の決定内容を明示し、トルコの參戰を強要したものとみられる。米英が第二戰線作戰を控へてトルコ問題の解決に焦慮してゐることはなんらの疑ひなく、その後もトルコ强壓の手を緩めてゐない。しかるにトルコが毅然として或は巧妙に、米英の强壓を退けたため、目下米英の對土工作は全く行詰りに逢着、米英はトルコに對する經濟援助と武器貸與法の適用を停止するなど、犬養的報復に出てゐるのは笑止である。しかしトルコの態度決定の鍵を握んでゐるのは米英でなくむしろソ聯であり、その意味でテヘラン會談後の米英土カイロ會談にソ聯代表ヴィシンスキー氏が參加し、會談が米英ソ三國の名において開かれた事實はみのがせない。トルコの態度はすでに原則的に決定されてをり、ソ聯の意志次第でそれが表面化することあるべきを忘れてはならない。

翻つてイベリア半島のスペイン、ポルトガル兩中立國の地位も、米英の外交干渉により次第に修正が加へられてきた。イベリアの兩中立國といつても、ポルトガルは元來親英的傳統の國であり、問題は主として親樞軸的中立國たるスペインにあつた。米英は歐洲作戰の際のスペインの戰略的、地理的重要性に着目し、同國をして對樞軸協力態度を放棄せしめんと畫策してきた。一昨年十一月の米英軍北阿上陸に絡んで、西葡兩國間にいはゆるイベリア中立ブロックの結成をみ、きたスペインのスネル外相の退陣、ホルダナ新外相の登場をみたが、これらの出來事はスペインをしてポルトガル的中立へ接近せしめることとなつた。その後米英はあらゆる口實を設けてスペインの對樞軸協力を非難し、同國壓迫を强化し、この間昨年十月のアゾレス基地使用問題をめぐるポルトガル壓迫などのことがあり、イベリア攻勢もまた急をつげたが、テヘラン會談後米英のスペイン强壓は一段と激しくなつた。

米英は、一、スペイン青色師團がいまなほ東部戰線の戰鬪に參加してゐること、一、スペイン海港に避難した伊船舶の抑留、一、スペイン國内における獨領關の活動、一、軍事資材の對獨供給などの諸點をあげて外交的壓力を加へたほか、米國務省は對西石油輸出停止を聲明、英國もこれに追隨して小麥、石炭の供給禁止をもつて威嚇した。先年の革命の瘡痍まだ癒えないスペインは、經濟的疲弊に加ふるに、同國經濟の對米英依存度がきはめて高いことは、スペインの對米英外交に重大な困難を課してゐる。すでにスペインは米英の要求を或る程度承認した模樣で、米英のイベリア攻勢は一應鎭靜に歸してゐるが、スペインがその中立政策の内容にどの程度の修正を加へたかは、今後の事態の發展がこれを明かにするであらう。

以上概括した米英ソの政治攻勢は、いふまでもなく三國の歐洲總攻勢作戰の前哨戰的役割を演じつゝあるものとして、特に重大視しなければならぬが、この政治攻勢進行過程中に米英對ソ聯の外交角逐が火花を散らすにいたつたことは注目すべき問題である。果して三國は政治攻勢において共同動作をとつてゐるであらうか、ソ聯の立場はいかん、米英はなにを考へてゐるかなどの問題がこの中に含まれてゐる。特にテヘラン會談後の三國關係の新しい發展を檢討せずして、現在の歐洲戰局の實相に觸れることはできないのである。

四　ソ聯の進出と米英の讓歩

元來米英とソ聯とは戰爭目的と國家的利害を甚しく異にするため對立紛爭が跡を絶たないことは當然であるが、モスクワ、テヘラン會談後の三國關係は特に新しい角度から眺めなければならない。會談はこれを政治的觀點からみれば三國間の政治協力を達成せんがための會議であつた。從つて兩會談が三國の政治協力についていかなる成果をあげたかが問題であるが、これについてはモスクワ會談における最大收穫と目される四國共同宣言があるのみである。しかしこの共同宣言も、米・英・ソ・重慶の四箇國をもつて世界の四大强國であると勝手に自認し、右「四大强國」は戰後の平和機構樹立のためにも相協力するといふ獨善的聲明を盛つただけのもので、三國間の根本的對立にいかなる調整が加へられたかはもちろん知る由もない。

從つて兩會談後三國關係がいかなる新發展を示してゐるかをみる以外に方法はないのである。しかるに兩會談後の三國關係は、いはゆるソ波國境紛爭においてはやくも試驗台に乘せられたのである。

ソ波國境問題は昨年三月ソ聯とポーランド亡命政權間の外交的應酬に端を發し、つひにソ聯の對波斷交にまで發展したが、その後別段の波瀾も起らなかつた。しかるに本年一月ソ聯軍のポーランド領內進出に驚いたポーランド政權が、舊領保全を趣旨とする一方的聲明を發したことから問題は再燃した。これに對しソ聯は新國境線としてカーゾン線を新たに提議すると同時に、ポーランド亡命政權を交涉の相手と認めず、さらに、「バルト地方や國境問題はソ聯の國內問題」だとの强硬態度を持し、これより一步も退かなかつたので、同紛爭は極度に紛糾するにいたつた。もと〳〵同紛爭は一介の亡命政權の力の埒外にあるもので、質的には英ソ紛爭として發展して行つた。然も同問題はバルカン、東歐における英ソ利害の接觸の焦點たる意義を有してゐた。英國の亡命政權支持の眞の理由はヴェルサイユ體制的「反ソ遮斷線」の復活にある。そのうへ米英共通の問題としては大西洋憲章中の「民族自決」の原則をどうするかといふことであつた。しかるに本年二月二十二日英首相チャーチルは議會演說において「カーゾン線こそソ波國境として公平なるものである」と言明、英國の對ソ屈服を記錄して紛爭は梟がつけられた。

東歐における英ソ關係については、昨年十二月十二日締結されたソ聯とチェコスロヴァキア間の友好援助條約も特記に値する。英國はかねてポーランドとチェコを結ぶ國家聯盟をつくり、これを中軸として東歐一帶にヴェルサイユ體制的國家群の形成を企てゝゐた。ソ・チ條約の成立はソ聯が英國のこの東歐政策を中央部において切斷したことを意味する。モスクワ會談におけるオーストリア復活決定もまたソ聯の東歐より中歐への進出の下地をつくるものである。

さらにバルカンにおいては、共產系チトー政權の成立、親英派ミハイロヴィッチの沒落、英國の事實上のチトー政權承認が、ソ聯外交の勝利を明かにしてゐる。英外相イーデンは昨年十二月十四日、「英・米・ソ三國はバルカンにおける反獨ゲリラ部隊を極力援助するに決した」と聲明、ユーゴー領內のゲリラ部隊についてはチトーの名をあげて激賞してゐるが、ミハイロヴィッチの存在は完全に無視してゐる。しかも英國はチトー政權に軍事使節をも派遣してゐるのである。イーデンはそのうへ現在カイロに本據を移してゐるユーゴー亡命政權につき「ユーゴー解放實現の曉においては、チトー、在カイロ兩政權とも進んでその存在をユーゴー國民自身の擇ぶところに委ねんとする」ものだと言明してゐる。ギリシアの反獨部隊とギリシア亡命政權についても同樣の事態が發展しつゝあるやうに察せられる。すなはち英國がバルカン政治攻勢の主導權をソ聯の手に委ね、ユーゴー、ギリシア兩亡命政權をそのため犧牲に供したことが立證されてゐる。

米英のバルカン作戰の鍵を握るトルコに對しても、ソ聯は獨自の政策をとつてゐる。テヘラン會談後ソ聯は米英と共同步調に出で米英の對土外交壓迫に參加し、ためにトルコの中立政策は大いに搖らいだが、その後間もなく米英ソ間の政治紛爭の激化をみるや、かへつてソ土關係改善に乘出したのである。ソ聯の對土態度の變化はトルコの政情に小康を與へる結果となり、トルコはソ聯の友好態度を後押しにして最近の米英の强壓に頑强な抵抗を示してゐる。ソ聯はその獨自のバルカン工作の重要な一環としてトルコに對する發言權强化に努力してゐるものとみられる。その他西亞特にイランにおける米英ソ三國勢力鼎立の事實はこゝに紹介するまでもなく世界周知のことである。

こゝにおいてソ聯と米英の利害の接觸線は、西亞よりバルカン、東歐にいたる長大な二線を畫してゐる事實をみるのである。しかるに三國外交政策のも一つの交叉線が、西亞より北阿を經て地中海におよぶ他の一線をも畫してゐる。北阿ド・ゴール政權、南伊バドリオ政權をめぐる三國の外交角逐がそれであるが、こゝにもソ聯の逞しい進出がみられるのである。北阿政權は昨年八月二十六日ソ聯が米英に先手を打つて同政權を承認して以來急速にその政治性格に變貌を來した。モスクワ會談後舊フランスの軍人、實業家、官僚、國家主義政治家の勢力を代表するジロー派が追はれ、舊社會黨を地盤とするド・ゴール派が實權を握り、その周圍に共產黨分子が蝟集するにおよんで同政權は徹底的に親ソ政權に變つたのである。またソ聯は昨年九月四日創設された反樞軸地中海委員會に强引に割込み、地中海のあらゆる政治問題に確固たる發言權を獲得したが、本年に入つてから米英の裏をかいて突如バドリオ政權を承認し一波瀾を起した。南伊においてはバドリオ政權と伊各政黨を網羅する反ファシスト委員會との對立抗爭日を追うて激しくなつてゐたが、米英はアムゴット(占領地軍政機關)を通してバドリオ政權を支配し、反ファシスト委員會の同政權改組要求を不問に附さうとしてゐた。ソ聯は同政權を承認することにより反ファシスト委員會とバドリオ間の

抗爭に止めを刺し、委員會と政權との合流を促進し事實上同政權の「民主主義的」改組を不可避ならしめたのである。ソ聯はバドリオと委員會との双方に對する支配權を確立したのである。

ソ聯の歐洲政治進出を物語る事例はこの他數へ切れぬほどあるが、そこに現はれてゐる最も顯著なる事實は、米英ソの對立激化といふよりも米英外交の對ソ妥協と讓歩とである。東部戰線における實力行動を背景として米英に對する自己の相對的地位の向上を意識してゐるソ聯は、第二戰線展開を斷乎米英に要求し、もし米英がこれに應じなければ獨自の政治的立場から歐洲政策を遂行せんとする決意と自信とを有するにいたつた。テヘラン會談は一つにはソ聯のかゝる强硬態度に促されて成立したものである。ゆゑにテヘラン會談において、米英が三國の政治協力につきソ聯にいかなる言質を與へたかといふことは、左程重要ではない。といふのは會談そのものがソ聯の强硬態度に對する米英の迎合と妥協とにより成立したものであるからである。かくして成立したテヘラン會談の軍事、政治協力に關する決定は、その精神において偉大な拘束力をもつてゐるのである。米英がこの拘束を打破らうとすればテヘラン會談招集の意義は全く無に歸するのである。またテヘラン會談の開催を必要としたやうな歐洲戰局の

現實に背馳する結果となるのである。

米英ソの政治攻勢といつてもソ聯の立場との間には、根本的な相違があることはいふまでもない。しかるにテヘラン會談後においては、米英はその欲するとにかゝはらず、テヘラン會談の決定の精神に則つて行動せざるを得なかつたのである。それが必然的に米英の對ソ妥協の方向をもたらしたのである。從つてテヘラン會談後米英ソの對立激化を示唆する新しい事例が續出したが、それにもかゝはらず米英ソの歐洲政治攻勢は、「ソ聯の進出と米英の讓歩」の線にそつた共同攻勢として展開されてゐるといひ得る。

五　遲延する第二戰線

しかし米英の對ソ讓歩の外交はルーズヴェルト、チャーチルが三國關係の現實的把握の上からやむを得ないと觀念してゐるかも知れないが、兩國內に幾多の反動を起さないわけはない。現に露骨な反ソ論、政府の戰爭指導に對する非難、歐洲亡命諸政權の不滿などが著しく擡頭し、決戰を前に兩國々內戰線に多少の危機的症狀を呈せしめてゐる。勿論これらの政治的反動は兩國內に常に存在してゐた。而してテヘラン會談の招集によりルーズヴェルト、チャーチルが歐洲總攻擊を決

意したと時期を同じくして、兩國國民の間に根據なき樂觀論が流布して國民士氣を著しく低下せしめ、そこに國內反動が表面化する大きな間隙がつくられたのである。決戰期に現れた米英兩國の國內政情の異常現象は畢竟決戰を苦慮する米英の心理的動搖と解される。いひかへればこの心理的動搖が、再び第二戰線展開の決意を鈍らせ、決戰を躊躇せしむる素因となつてゐる。

米英國民が決戰期の到來と同時にいはれなき樂觀論に陷つたのは、要するに政府の戰爭指導の結果が現れたのである。米英兩國政府は戰爭の長期化による國民の疲勞と倦怠をおそれるあまり、米英の戰勝近しとの國內宣傳によつて國民士氣の弛緩を食ひとめようとした。しかしそれが架空宣傳であつたことは、兩國政府がこの國內宣傳に大童になつた時期こそ、第二戰線ないしは大軍事行動による決戰を回避し續けた時期である。ゆゑにこの國內宣傳は決戰回避を糊塗する方便であつたともいへる。しかるにテヘラン會談においてとにもかくにも歐洲總攻勢が決定されるや、過去の國內宣傳の結果たる國民の樂觀論は國內反動の擡頭の地盤となり、政府の戰爭指導に大なる障碍を與へるにいたつた。

この傾向の特に顯著に現れてゐるのは英國であつて、まづソ波國境問題にからむ政府の對ソ屈服を、大西洋憲章毀損の

面からとり上げた反ソ論が急に勢力を擴大した。保守黨議員はもちろん勞働黨議員もこれに參加し、有力な新聞雜誌もこれに唱和して、大西洋憲章中の「政治形態選擇の自由」と「民族自決」の原則が蹂躙されたといきまいてゐるが、その鋒先はソ聯の歐洲進出に向けられてゐる。中には第二戰線の無謀と無用とを主張するものもある。この空氣を助長するのは歐洲亡命諸政權の對英不滿である。バルカンにおいて對ソ讓歩の必要上英國によつて犧牲に供されたユーゴー、ギリシア兩亡命政權はもちろん、その他英國に亡命中の歐洲各小國政權は、英國外交の趨勢に驚き將來の不安におびえて英國內の反ソ勢力と合流したのである。

一方英國民の間には戰爭早期終結の要望と並行して、將來の國民生活復興の要求が强く現れ、しかもこの要求から當然生れるべき戰爭遂行への熱意の上昇は現れずに、逆に將來の不安からくる戰爭努力に對するサボタージュの傾向が强い。最近における大規模炭礦罷業の發生はその著しい例證である。英國では「炭坑夫の罷業は政治問題だ」といはれるほどである。かつて一九二六年炭坑夫と、鐵道從業員、交通勞働者の三者同盟により全英的勞働總罷業を勃發せしめた事實、炭坑夫が英勞働運動の前衞闘士たる傳統を有してゐることは、この言葉の正當さを立證してゐる。前大戰全期における英國の罷業件數は二千八百七十六件で、戰爭後期において勞働罷業の續發が英國內に革命的社會情勢を招來し、やがて軍隊と國民にこの空氣が傳播してゆゝしい情勢を呈した。しかるに今次大戰においては、一九四三年九月までの罷業件數はすでに四千八百五十三件に達してをり、前大戰時の社會情勢がさらに大規模に發展する下地は十分につくられてゐる。もし今回の炭礦罷業が他の產業部門に波及した場合には英國の混亂は收拾できないものとなつたらうが、政府の干涉が奏功してどうやら一應この危機を脫したやうである。

米國においても事態はほゞ同樣である。今年秋の大統領選擧をめぐり、共和黨、民主黨內の反ニューディール派、孤立派は猛然反ルーズヴェルト運動に乘出し、過般の增稅案における大統領の敗北、議會の勝利のごときはこれらの反大統領派勢力の擡頭を物語つてゐる。しかもこれら勢力は實質的には反ソ勢力を形成するものであつて、大統領選擧前哨戰の激化とともに、政治家、言論機關の露骨な反ソ言說は注目に値する。ソ聯機關がウィルキーの言動を論難し、孤立派を反ソ派と非難し、ハースト系新聞をヒットラー御用紙と罵つてゐるごとき、米國內の反ソ論に對するソ聯一流の反擊である。

かくしてルーズヴェルト、チャーチル兩政府が、テヘラン會談において對ソ協力による歐洲總攻勢を決定した瞬間、國內において重大な難關に立つたことは明白である。それは問題の最も單純な形においては、第二戰線決行をめぐる政府と反ソ勢力間の抗爭といひ得る。政府はいかにしてこの國內的紛糾を切拔けることができるか。また反ソ勢力に對していかなる政治勢力と社會層とを背景として對抗し得るか。きはめて困難な問題が發生してゐるのである。ルーズヴェルト、チャーチルはこの紛糾を切拔ける最善の方法は、卽時第二戰線を決行することだといふことをよく知つてゐる。これは弛緩した國民の士氣を引締め、國民大衆の廣汎な支持によつて反ソ勢力に打勝つことができるからである。しかしチャーチルは自らが保守黨首領であり、保守黨こそは反ソ勢力の母體である。しかも第二戰線決行を支持するものは、左翼親ソ勢力なのである。ルーズヴェルトは大統領選擧を目標にはやくも大衆迎合の姿態を整へつゝあるが、それは方便にすぎない。彼もまた左翼政治勢力と勞働組合との支持を受けて財閥と議會とに對し、正面抗爭を敢てするごとき戰爭指導の方向を決して好むものではない。ルーズヴェルト、チャーチルはこゝに疑ふべからざる進退兩難に陷つてゐる。その當然の結果として第二戰線展開の遲延とならざるを得ない。ソ聯がはやくもこの空氣を察して第二戰線卽時展開の要を指摘してゐるのは、なによりもこの間の事情をよく物語つてゐる。

六　決戰に引摺られる米英

以上において米英ソ三國の對獨總反攻態勢が展望されその前哨戰として三國の歐洲政治攻勢が展開されてゐるのが歐洲現戰局の特徵であることをのべた。しかし歐洲政治攻勢の過程中に三國の政治的對立抗爭は一層激化し、かへつて米英の決戰心理をかき亂すやうな國內事情の發展がみられることをも併記した。その間いさゝか矛盾が存するやうに思はれるので、結語として歐洲戰局を大觀的に特徵づけ、本論のしめくくりとしたい。

第一に東部戰線における戰鬪が、米英の第二戰線展開の有無とは無關係に重大な局面に達したことが、歐洲戰局の現在を決定する主因となつてゐること。ソ聯はその軍事行動を背景に、米英の第二戰線不履行の場合には獨自の歐洲政策を推進せんとする決意を示すにいたり、米英は對ソ政策の最終的決定を迫られた。

第二に伊バドリオ政權の降伏に現れた米英の地中海作戰は、今次大戰における米英軍最初の戰果であると同時に、米英軍が漸く大規模軍事行動に移りはじめたことを物語つてゐた。米英は地中海作戰における成果をさらに擴大せんとして

バルカン作戰を企圖したが、それにはソ聯の諒解が必要であつた。しかしこのときの成果擴大の方途はバルカン作戰に限られるものではなく、ソ聯の要求する西歐第二戰線が戰略構想として最も合理的なものであつた。かくて米英は期せずして第二戰線作戰に自ら接近して行つた。

第三にこれらの事情によりひに開催をみたテヘラン會談は、元來の成立事情からいつても米英ソ間の政治協力と軍事協力の方式を決定すべき會談であつた。從つて同會談の決定は、米英の欲するといなとにかゝはらず、兩國に對し侵すべからざる拘束力をもつにいたつた。おそらく同會談では三國協力の原則的討議があつたのみで、具體的實踐的項目についての諒解はなかつたらうとみられるが、そのことはそれほど重要ではなく、會談を必要ならしめた歐洲戰局の客觀的條件と米英側の主觀的條件とがすべてを決してゐる。

第四にテヘラン會談後の三國政治攻勢の實際の發展は「ソ聯の進出と米英の讓歩」といふ線にそひ、その限りにおいてテヘラン會談における決定が實踐されてゐる。すなはち米英ソの共同攻勢が推進されてゐる。

第五にその間三國間の政治的對立は激化し、米英兩國內に反ソ勢力著しく擡頭、兩國政府に進退兩難的苦汁を味はゝせてゐる。しかし米英の行動を決する絶對的力として、兩國軍事生產が昨年上期より下期にかけてすでに頂點に達し、これ以上決戰を回避しても軍事生產の增强は期待されないのみか、かへつて國內經濟上の諸困難を累增させるのみだといふ事實をあげることができる。戰備は軍事行動を促すとでもいはうか、それが戰爭の論理である。また現在の米英國內の政治的紛糾、國民士氣の弛緩は、特に英國において深刻でありこのまゝ放置すれば前大戰末期におけるごとき社會不安の情勢がさらに大規模に發展する可能性がある。勞働者の戰爭努力に對するサボタージュとしての罷業の增加、その軍隊への傳播、および國民一般に對する影響などは、前大戰に實際に起つたことであり、今次大戰においても起り得る可能性は十分にある。かゝる危險を脫却し、かへつて國民士氣を昂揚せしむる方法は、決戰を敢行する以外にはない。米英は必然にこの方向を採ばざるを得ないであらう。

不拔なるドイツ戰力の基底

濱田常二良

一九四三年初頭から一九四四年へかけての歐洲戰局は、實のところドイツにとつて有難いものではなかつた。スターリングラードの悲劇、バドリオ政權の裏切行爲にともなふ南歐戰線への配慮、米英空軍の對獨爆擊の激化等は、この時期における惡材料の著しいものにならう。それでもドイツは事態の推移を率直にみとめ、ひろい視野でもつて歐洲の大局を見渡し、一面では突發的な事態に關する對應策を講じ、他面では歐洲新秩序の樹立とゲルマン民族の生存とのために不撓不屈の戰爭を續けてゐるばかりか、隨分ハラ〳〵させるやうな事態に立ちいたつても、なほ餘裕のある態度でもつて遠き慮りを廻らせてゐるやうに見受けられる。すなはち一言にしていへば狼狽してゐないことになるが、かうした不拔なるドイツの戰力は現在の歐洲戰において大いに注目すべき課題であることももちろんである。

一　ドイツ國民の士氣と團結

ドイツの戰力のうちで、まづ第一に擧げねばならぬことは、ドイツ國民の士氣と團結の點であらう。

一九四四年を迎へるに際し武裝親衞隊と警察官とに對して與へたヒムラー內務大臣の年頭の布告は、「一九四四年のわれらの合言葉はフリードリッヒ大王が七年戰爭に際して殘した「われら何處の天地を彷徨するとも、敵をして和を乞はしめるまでは絶對に矛を收めず」といふ言葉である」といふ短い文句であつたといふが、これは戰時下ドイツ國民の氣持を端的に表現したものだといへる。

一九四四年の年頭にドイツ國防軍に與へたヒットラー總統の布告には、「ドイツが今日採びとることのできるものはただ一つあるのみだ。それは勝利を得るまで闘ふことだ。いか

なる戰爭といへどもその終結はあるもので、今次の戰爭もまた永久に續くといふことはあり得ない。……今日われ〳〵に殘された仕事は、戰ひに勝つことのみである」と述べてをり、またゲッベルス宣傳大臣は、一九四四年一月三日日本新聞記者團との會見において、「ドイツ軍としては、米英空軍の對獨爆撃に對して、漫然報復を延期してゐるわけでなく、適當な時機に斷行する決心である。報復攻撃は非常に大規模であつて、いよ〳〵決行する場合には、英國民はドイツ諸都市に對する盲爆について必ずや後悔するであらう」と語つてをり、さらにヒットラー總統は、同年一月三十日のラジオ演說において「歐洲諸國家の救濟の問題は、ナチス・ドイツ國民ならびにその武裝兵力とドイツ同盟諸國によつてのみ解決される」と說いてゐるが、これらはいづれもドイツ國民の不撓不屈の精神を代辯したものだとみてよい。

換言すれば、ドイツの指導者階級が右のやうな強固な意志を表明し、九千萬人のドイツ人が、指導者階級の指示のまに動いてゐることはドイツ國民のもつ強靱な士氣に由來するものであり、この强靱な士氣がドイツ戰力の重要々素になつてゐることを認めねばならぬ。ところでかうしたドイツ國民の士氣は、今次の戰爭においてはじめて發揮されたかといふに、さうでなく、ヒムラー內務大臣も引用したやうに、ワイマール共和國時代の一九二三年、ルール地方の諸都市やハンブルグないしはベルリンが、あれほどしば〳〵大規模な空爆を受けてゐるに拘らず、ドイツの銃後が、なほ毅然としてこれに堪へ忍んでゐることは、單にドイツ國民の强靱な性格あるひはドイツ指導者階級のとる適切な善後處置のみによるのではなく、ナチス黨のもつ整備した細胞組織の力にもとづくとみねばならぬ。すなはちナチス黨の組織の力がドイツの戰力を大いに强化させてゐることになる。

右と同樣のことは戰局の推移についてもあてはまると思ふ。といふのはたとへば一九四三年初頭以來、ドイツ軍は東部戰線において思ひ切つた撤收作戰を行つたが、ウクライナ

リードリッヒ大王の時代においてすでに顯著に現れてをり、また多少の異論はあらうとも、第一次世界大戰當時においても、大體同樣の事實をみとめ得るであらう。といふのは第一次世界大戰の末期においては、ドイツの都市では一人當り一週につき、一千百二十グラムの穀附き雜穀、百三十五グラムの骨附き獸肉といふがごとき乏しい食糧配給でもつて頑張つたのである。この食糧配給を、現にドイツ全國にわたつて實施してをる一人當り一週につき二千五百グラムのパン、三百五十グラムの獸肉といふ食糧配給に比較すると、一方では今次戰爭におけるドイツ戰力が、第一次世界大戰當時よりも餘程好條件にあることをみとめるべきだとともに、他方ではドイツの銃後が、甚しい飢餓線上に彷徨しつゝもなほよくがんばつたといふ民族的士氣を證明することにならう。

そこでかうした强靱な士氣はなにに由來するか、どの程度に根强いかといふ點が問題になるが、これはゲルマン人が中央ヨーロッパの地に移住して以來、乏しい太陽の光線と痩せた土地とに嚙りつきながら、たえず周圍の異民族と鬪爭して來た結果だといはねばならぬ。すなはち惡條件の自然と異民族の脅威とに對して鬪ひ續けるといふゲルマン人の傳統は、近代文明に入つてからは豊かでない資源を科學の力によつて補ひつゝ、强固な民族的團結でもつてスラヴ民族ないしはアングロザクソン民族との間に、大掛りな試煉をくり返してゐるとみてよく、したがつてゲルマン民族としての鬪爭生活は昔も今もほとんど變つてゐないといへる。不撓不屈の精神はむろんドイツ人だけのもつ特性ではないが、ドイツの戰力を觀察するにあたつては、ドイツ人のもつ强靱な國民性をまづ注目する必要がある。

二　ナチス黨および國防軍の組織力

米英空軍の對獨銃後爆撃を一例として觀察するに、一九四三年春以來ルール地方の諸都市やハンブルグないしはベルリンが、あれほどしば〳〵大規模な空爆を受けてゐるに拘らず、ドイツの銃後が、なほ毅然としてこれに堪へ忍んでゐることは、單にドイツ國民の强靱な性格あるひはドイツ指導者階級のとる適切な善後處置のみによるのではなく、ナチス黨のもつ整備した細胞組織の力にもとづくとみねばならぬ。すなはちナチス黨の組織の力がドイツの戰力を大いに强化させてゐることになる。

右と同樣のことは戰局の推移についてもあてはまると思ふ。といふのはたとへば一九四三年初頭以來、ドイツ軍は東部戰線において思ひ切つた撤收作戰を行つたが、ウクライナ方面等から撤收するに先立ち、撤收すべき地域におけるすべての家畜と大部分の住民を西に向つて移動せしめ、しかるのち人間の使用し得べきあらゆる施設を徹底的に破壞し、その上で戰線を西に移動させるといふ有樣であつた。そこでドイツ軍の撤收した地域に殘つてゐるものは、燒野原と破壞された家屋や橋梁などと少數の住民といふことになり、このことは一九四三年秋スターリン首相が、ウクライナ住民を西にもち去つたドイツ軍の作戰に感嘆したといふ噂が傳へられ、またソ聯新聞が同年十一月中旬、スターリノ、クレマトルスカヤにおける重要生産施設の受けた徹底的な破壞狀況を報道し、また同年十二月上旬、ドンバス地方の炭坑の受けた破壞について、「ドンバスのほとんど全部の炭坑は目下水浸しであつて、ポンプで汲み出すべき水の量は三億立方メートルと計算され、第一次世界大戰後北佛の炭坑における復舊工事と同じ速度で復舊するならば、十年を要するほどのものだ」と說明したことによつても裏書される。

ドイツの報告によると、一九四一年夏の對ソ電撃戰によつて獲得したソ聯の地域では、獨ソ戰直前における住民數の六割五分から八割が殘つてゐたといふ。だがソ聯側の報告によると、一九四三年九月一日、赤軍がハリコフを奪回した時には同市の住民は二萬五千人に過ぎず、また同年十一月十一

日、キエフを奪還した際には同市の住民は十萬人であつて、獨ソ戰直前におけるハリコフ、キエフ兩市住民の合計が百七十萬人であつたことと比較して、雲泥の差であることをみとめてゐる。一言にしていへばドイツ軍は、徹底的な焦土戰術によつて徹收作戰を行つたことになるが、撤收作戰の困難であることは昔から兵家の指摘するところであり、ドイツ軍がこれほどまでの撤收作戰を敢行し得たのも、いはばドイツ國防軍の組織の力だと斷定してよいであらう。すなはち前線においてはドイツ軍部の組織力、銃後においてはナチス黨の組織力が、いづれもドイツの戰力を高めてゐるといつてよい。

ドイツの人口は九千萬人だといひ、この人口はむろん少いものでないにしても、ソ聯人口の一億八千萬人、米國人口の一億三千萬人に比較すると、決して多いものだとはいへぬであらう。それでもこの九千萬人の人口でもつて足掛け六年の烈しい戰爭を續けながら、歐洲大陸をもちこたへてゐる所以は、主としてドイツの前線銃後における組織力に歸するものと見てよい。ところで、この組織力は、實は他民族の眞似難いほどの特別な仕組みになつてゐるのではなく、九千萬人の人口と、ドイツの支配し得る物的資源と、ドイツの探究した科學上の研究とを、透徹した細胞組織に組み立て、これを刻明にかつ有機的に活動させて、ドイツ全體としての力を全面

的に動かせてゐるにほかならぬ。これを裏からいへば、ドイツでは遊んでゐる人間と眠つてゐる物質とが非常に少いといふことにならう。

三　島政策と前線兵士の數

ドイツは周圍に地續きの國境をもつてゐる關係から、主力を陸軍に注いでゐるのは當然である。元來ナチス・ドイツの考へ方は、ドイツ人の住む地域をもつて歐洲中の一つの島となし、この島の周圍においていかなる變化が起らうとも、島の中ではその影響を受けることなく安定した生活を營み得るやうにするといふのであつて、いはゞ外部から隔離した島を形成するといふ眼目でもつて、一九三三年以來、特殊な政治、經濟、社會上の政策を實行してきたが、歐洲戰の勃發後は從來の島政策を踏襲しかつ一層强化したに過ぎぬといへる。すなはち戰爭はいづれの國についても自給自足を主とする體制に導くに違ひないが、一九三三年以來、島政策をとつてゐたドイツは開戰とともに餘程便利な事態にあつたとみてよく、これもまたドイツ戰力の一要素になるであらう。

足掛け六年を戰ひ續けてきたドイツの島の內外について概觀するに、まづドイツの周圍を守るべき兵力であるが、ドイツは一九四二年秋の狀態では一千八十萬人の兵士を動員してゐたといふが、一九四三年二月には國內の勞働力に向つて果斷な再編成を行ひ、この勞働再編成によつて浮び出た男子勞働者の餘剩を前線の兵士として押し出したことになる。そこでどれだけの兵士を前線に送り出したかは不明であるが、いま假りに第一次世界大戰當時のごとく、現在においても總人口の一割七分を動員してゐるものとせば、一千五百三十萬人の兵士を出してゐることになる。他方において一九四三年三月二十一日におけるヒットラー總統の演說によると、歐洲戰勃發以來滿三年半の間に、ドイツは五十四萬二千人の戰死者を出したといふから、一年當り約十五萬五千人の戰死者であつたわけである。

つぎに歐洲戰勃發以來屢次の電擊戰に關するドイツの發表によると、大抵の場合において、傷病者と行方不明者との合計は戰死者數の三倍になつてゐる。そこでかうした戰死者數とその三倍に當ると推定される傷病者および行方不明者の數とを差引いた殘餘の兵士が、いまもなほ活潑に前線を馳驅してゐることとなるのはもちろんであるが、こゝで大いに注意してよいことは、一年當りの戰死者約十五萬五千人、それから傷病者および行方不明者と推定される四十六萬五千人を加算した六十二萬人といふ數字と、ドイツの一年當りの男子出生數との關係であらう。

いまドイツの古い出生統計の一部分を見るに、つぎのやうな數字になつてゐる（人口一千に對し何人生れたかの數である）。

	出生數
一九二六年	一九・六人
一九二七年	一八・四人
一九二八年	一八・六人
一九二九年	一八・〇人
一九三〇年	一七・六人

右の數字は舊ドイツ本國のみに關する統計であるが、オーストリーの人口は舊ドイツ本國の人口の約一割にすぎないから、オーストリーをも含めた現在のドイツ本國全體の人口に向つて、右の數字をあてはめても大した間違ひはないであらう。そこで一例として、一九二九年生れのものすなはち一九四四年において滿十五歲であるもの、出生總數を概算するに、一九二九年當時における獨墺の總人口が七千五百萬人であつたとせば、人口一千に對して十八人の出生であつたことは、總數百二十五萬人の出生であつたことになる。この半數が男子であるとせば六十二萬五千人程度の滿十五歲の男子が待機してゐる計算にならう。この點についてはドイツでは幼

兒の死亡數の甚だ少いことをも併せ考察すべきであるが、この六十二萬五千人といふ男子の數は、あれほど烈しい戰爭を續けてゐるドイツの一年當りの犧牲者總計約六十二萬人といふ數と大體トン〳〵になつてゐる。この關係を別の言葉でいふならば、ドイツが一年につき約六十二萬人の犧牲者を出す程度で戰爭を續ける場合には、前線におけるドイツ兵士の數は、年を經るとも大體同じ水準を保ち得るはずである。

一九四三年初頭以來、ドイツが東部戰線において思ひ切つた撤收作戰を行つたのも、また同年秋バドリオ政權が裏切つてもドイツが餘裕ある態度を保ち得たのも、さらに同年秋以來ヒットラー總統やゲッベルス宣傳大臣などが、米英軍による歐洲第二戰線の結成を歡迎すると聲明し得るのも、おそらく右のやうな關係を計算に入れてのことであらう。さらに九千萬人のドイツの人口數ではまだ十分ではないといふ決定的な理由があるからに相違ないが、ヒットラー總統の戰爭指導の特徵として、なによりもまづ兵士を可愛がり、兵士の犧牲を極力僅少に止めんと努めてゐる點、および戰後におけるドイツ人口の持駒を多く殘さんと考へてゐるらしい點をあげ得るであらう。すなはち一九四三年初頭ヒットラー總統がスターリングラード方面軍に對して死守することを命令したがごときは、ヒットラー總統としてはよほどの例外事實であり、大抵の場合は遮二無二な作戰を避け、これにより戰後におけるドイツ人の數をなるべく多く保有し、延いては戰後における國際競爭において有利な事態を築き得る素地を殘さんとしてゐるやうに受取れるのであり、かうしたドイツの遠き慮りは、ドイツの戰力を觀察するにあたつて見逃してはならぬ點であらう。

四　國防軍と青年層の兵士との關係

ドイツ兵士の質をみるに、三十歲以下の若いもの〻層が國防軍全體の兵士數の中で壓倒的な部分になつてゐるといひ、いはゞかうした若い兵士の層が國防軍の中堅を構成してゐることになる。ところでヒットラー總統は在野當時から極力ドイツ青少年に向つて働きかけ、たとへばヒットラーユーゲントの制度を設けたのも、一九二八年すなはち政權を獲得する五年前であつたほどであり、從つて一九二八年の頃ヒットラーユーゲントの訓練を受けてゐた滿十四歲の少年は、一九四四年には滿三十歲の働き盛りの兵士になつてゐるのであり、しかもかうした青年層はヒットラー總統を崇拜することで凝り固つてゐて、ヒトラー總統の命令ならばなんでも服從するといふ連中である。ドイツ人自體が隨分強靱な國民性を持つてゐるといふこと以外に、働き盛りの青年層がヒットラー總統一點張りになつてゐることは、ドイツの戰力をよほど高めるものと見てよい。

だがこの點については別の反面の存することを否み得ないであらう。といふのはドイツ國防軍は、一九四二年秋までの作戰においては第一線では三十五歲以上の兵士をあまり使用せず、老年兵は大抵占領地の警備などに振り向けてゐたといふ事情がある。すなはち一九四三年はじめまでの三年半の期間における戰死者五十四萬二千人といふ數字の大半は、三十五歲以下の青年層であつたといふ推定がつくであらうし、またこの期間における傷病者ないしは行方不明者の大半が、同じやうな青年層であつたものと考察するならば、この間の事情について大體の見當がつくであらう。が、今次大戰では、ドイツの犧牲者數が前大戰の場合に比して格段な少數である點、五十四萬二千人といふ數が推定動員數一千五百三十萬人に較べてよほどの少數である點を銘記すべきだらう。

五　農業および軍需工業の勞働力

つぎにドイツの銃後がいかに戰つてゐるかといふ問題であるが、總人口九千萬人のうち、約一千五百三十萬人の男子が前線に出てゐるものとせば、約二千九百七十萬人の男子と約四千五百萬人の女子、すなはち合計約七千四百七十萬人の男女が銃後に殘つてゐる計算となる。そこでこの約七千四百七十萬人がどの程度に戰爭に寄與してゐるかといふ點が重要になるが、ドイツは一九三九年秋、一九四二年二月および一九四三年二月において、逐次大規模な企業整理と勞働力の徵用とを强化した結果、一九四三年夏の狀態では、勞働についてゐるもの、すなはち十六歲以上六十五歲までの男子と十七歲以上四十五歲までの女子の數は、合計して少くとも三千七、八百萬人になつたと推定される。換言すれば銃後に殘つてをる人口のうち、約半分は勞働し、約半分は勞働しない狀態だとみてよからう。もつとも勞働に徵用されない年寄といへども、率先して勞働についてゐるものが相當にあり、少年少女でも農業等の勞働を手傳つてをり、また國民學校の上級生が學習しながら高射砲隊の補助員となつてをり、さらに勞働しなければならぬ年齡のものであつても、姙產婦や多數幼兒の母親などが特に勞働しないでよいといふがごとき例外はあるが、こゝではかうした例外を計算に入れないでおきたい。

約三千七、八百萬人の勞働力がいかに働いてゐるかといふに、約五百萬人は農業勞働に從ひ、その他はほとんど全部軍需工場に働いてゐるのであつて、しかも軍需工場に働く三千二、三百萬人は、男女を問はず、旋盤を動かすといふ工合

に、現實に機械を相手にして軍需品を生産しつゝあるのであり、事務所の從業員としてタイプライターをたゝくがごとき類を含んでゐないのである。女子が大量に軍需工場の勞働に從ひ得るにいたつたのは、歐洲戰の勃發前後から、ドイツが軍需工場の工程を簡單化するに努め、女子の不熟練工でも容易に工場勞働を操作し得るやうに改善した結果だといひ、この點は特に注目してよいであらう。また約五百萬人の農業勞働力が、ほとんど全部女子である點をも見逃してはならず、同時に前線で血をもつて防衛に當つてをる男子および銃後で農業と軍需工業とを引受けてをる男女を差引いた殘餘の約三千七百萬人は、次代のものとして待機してゐるか、老齡のためやむを得ず餘生を送つてゐるかであつて、勞働力をもちながら漫然と遊んでゐるものでないことをも注意してよく、かうしておそらくゲルマン民族はじまつて以來といつてよい程の團結の態勢を整へ得たのは、主としてナチス黨の組織力と國防軍の組織力とによると見てよい。

六　銃後勞働力の配分と食糧上の安定

第一次世界大戰當時においてさへ一人の前線兵士が戰鬪を續けるためには、銃後において數人ないし數十人の勞働者が

軍需工業についてゐて武器製造に當つてをらねばならなかつたといふのだから、今日のごとく一千何百萬人といふ機械化されたドイツ兵士が前線において引續き戰鬪するためには、三千二、三百萬人程度の勞働者が銃後の軍需工業に從つてゐるだけではまだ十分でないことはもちろんである。そこでドイツはかうした軍需勞働力の必要を補ふため、歐洲戰勃發の前後から逐次多數の外國人勞働者をドイツ本國に移入して農、工業に使用し、また屢次の電擊戰によつて得た捕虜をしてドイツ本國における農、鑛業ないしは土木事業に勞働させてゐる。ドイツ側の報告によると、一九四三年春の狀態では、約七百萬人の外國人勞働者と約五百萬人の捕虜とが、ドイツ本國における勞働についてをり、またこの合計約一千二百萬人のうち、約半數を農業勞働に振り向けてをり、さらに軍需工業においては捕虜を使つてゐないといふ。

そこでドイツ本國の農業は、約五百萬人のドイツ女子と、主として男子より成る約六百萬人の外國人とによつて運營してゐることになるが、ドイツはこのドイツ本國の農業生產によつて、現にドイツ本國に居住してゐるもの、すなはち七千四百七十萬人のドイツ男女と七百萬人の外國人勞働者と五百萬人の捕虜との合計約八千六百七十萬人に對する食糧を確保する方針であつて、前線に出てをる約一千五百三十萬人のドイツ兵士の食糧は、それ〳〵現地調辨によらしめることにしてゐる。

一九四三年十月三日に行つたバッケ食糧省次官の演說によると、一九四三年においては、ドイツ本國の耕作面積は平時に較べて減少してゐるに拘らず、前年の收穫高に比し少くとも三分の一の增收となり、開戰以來の新記錄となるばかりでなく、平時における平均收穫高をも突破したといひ、この報告演說にもとづいて一九一八年と一九四三年とにおける主なる農作物の收穫を比較すると、つぎのやうな數字になつてゐる。（單位千トン）

	一九一八年	一九四三年
裸麥	六、一〇〇	七、四〇〇
小麥	二、三〇〇	四、二〇〇
馬鈴薯	六、三〇〇	二一、三〇〇

現在のドイツは、一人當り一週につき、二千五百グラムのパン、三百五十グラムの獸肉を配給してゐて、この配給量では、肉類は十分でないとはいへ、パンは食べきれないほどの分量であつて、大抵のドイツ人はパンの切符を食べ殘してゐる實情である。すなはちこの配給量は、各人の主食物に對して、餘分ができるほどに確保してゐるといふ點に强味があるが、このパンの配給量と、右にあげた一九四三年の收穫高との關係を考察すると、餘程注目すべき事實の存することがわかる。といふのはパンの配給量が、一人當り一週につき二千五百グラムであるといふことは、一人當り一年につき百三十キロであることむろんであり、ドイツ本國に居住してをる人口、すなはち約七千四百七十萬人のドイツ人、約七百萬人の外國人勞働者、約五百萬人の捕虜、合計八千六百七十萬人に要する一年間のパン配給量は、一千百二十七萬一千トンといふ數字にならう。他方においてドイツのパンが、一九三五年頃から以降は小麥や裸麥のみで製造してゐないことは周知の通りであるが、いま假りに小麥と裸麥のみによつて贅澤なパンを製造するとしても、一九四三年における小麥と裸麥の收穫は、合計して一千百六十萬トンになつてをり、右にあげたパン配給の推定所要量と比較すれば、大體の見當がつくであらう。

ゲッペルス宣傳大臣が一九四三年十月三日に演說したやうに、「パンと武器とは、戰爭を遂行するための最も必要な前提要件である」に違ひなく、ドイツが右のやうな收穫を得たことは國民に對する主要食糧の供給を確保したばかりでなく、軍需工業に對する原料の供給、家畜類の飼料などにも餘裕ができてくる筋合である。しかもかうした收穫は乏しい太陽の光線と痩せた土地といふ自然上の惡條件、および戰時下

の不如意といふ事情があるに拘らず、ドイツが農業に關してたえざる人爲的努力を拂つてきた結果である。また前にも觸れたやうに、ドイツ國民全般が開戰以來、パンのごとき主食物について食べ切れないほどの配給を受けてゐることは、銃後の食生活が大體安定してゐることになり、かうしたことで行列買ひや買出し群等の必要がないことだけでも、ドイツ銃後人口の節約する時間と努力は大きいものであり、それだけにドイツの戰力が高まるはずである。

さらにウクライナの穀物收穫を考察するに、一九四二年には、同地域の住民に對する耕地の分與、種子の配給などに手間どつた關係から、十分の收穫を得るにいたらなかつたが、一九四三年には、天候の好條件と相まち非常な收穫を得たといひ、しかもこの收穫は、家畜や住民とともに一切西に向つて輸送し、その上でドイツ軍を西に撤收させたといふ。だから一九四三年にウクライナで得た收穫は、そつくりドイツの食糧貯藏となつてゐるといつてよく、この貯藏がドイツの戰力の上に大きな役割を果すべきことも想像されよう。

七　軍需生産の躍進と理性的な態度

一九四三年十月三日に行つたゲッベルス宣傳大臣の演說によれば、「反樞軸軍は爆擊によつてドイツ軍需工業を全滅せんとしたが、この企圖は全く失敗に歸した。シュペーア軍需大臣は、廣範圍にわたる企業の合理化と再編成とによつて、逆にドイツ軍需工業の生産を增強した」といふ。

シュペーア氏は、一九四二年二月トッド氏の死去の後を襲うて軍需大臣となり、强化された軍需大臣の權限でもつて軍需生産に努力し、綜合的計畫によつて量の上において極度の軍需優先を斷行し、たとへば一九四二年まで殘存してゐた輸出向生産を一切打切り、これを軍需生産に編成替へし、低能率の軍需工場を閉鎖して高能率の工場に生産を集中するといふわけで、フンク經濟全權も、經濟の運營を簡素にしながら軍需生産力の擴大に貢獻した。シュペーア軍需大臣は一九四三年六月五日の演說で、「武器生産高は一九四三年五月にいたり、あらゆる分野において記錄的數字を出し、またドイツ本國および占領地における軍需金屬の生産も增加しつゝある。一九四一年における每月平均の生産高を百とすれば、一九四三年五月の生産高はつぎのごとき數字に躍進してゐる。

武器の種類	一九四一年の月平均生産高	一九四三年五月の生産高
機關車	一〇〇	三〇〇
彈藥	一〇〇	六三〇
各種口徑の火砲	一〇〇	四〇〇
重機關銃	一〇〇	三〇〇
對戰車砲	一〇〇	六〇〇
戰車	一〇〇	二〇〇

さらに飛行機生産は數倍となつてをり、重戰車の數をみるに、一九四三年五月には、一九四二年の一年中の生産高總數を超過してゐる。そこで一九四三年下半期から一九四四年春にかけて、武器全體の生産についてさらに飛躍的な成績をあげるであらう」とのべたが、いふまでもなくかうした生産をもたらし得たのは、主としてドイツの組織力とドイツ女子の奮鬪と外國人勞働者の協力にもとづくとみてよい。

なほ米英空軍の對獨爆擊に對應して、シュペーア軍需大臣は、一九四三年春以來、ドイツ各地の軍需工場の疎開を斷行したと傳へられるが、かうした疎開も一九四三年中には完了したに違ひなく、したがつて一九四三年暮以降の軍需生産はよほど好都合な條件を得てゐるであらう。

ドイツの工業地帶としては、ルール地方のそれが古くから有名であるが、ナチス・ドイツは、一九三三、四年からマグデブルグ地方に巨大な工業地帶をつくり、また一九三九年頃から舊ドイツ本國の南東に位するブレスラウ地方に、大規模な工業地帶を建設しはじめた。ことにブレスラウ地方は現在の大ドイツの眞中になつてゐて、外部からの襲擊に對して最も安全だとして戰時下ドイツの最も力を入れてゐるところであり、加ふるにこの地方が豊富な石炭産出地であり關係から、この地方の工業地帶はすばらしい發展をとげつゝあるといふ。同時に米英空軍の對獨爆擊があれほど頻繁になつても、ブレスラウ地方に對する爆擊があまり傳へられない點をも見逃し得ないであらう。

つぎにドイツ本國に屬しない地域であるとはいへ、獨ソ戰の結果ルーマニア領となつたトランス・ドニエストル、すなはちオデッサ方面の地域には、一九四二年以來、大規模な工業地帶を設けつゝあるといひ、この地域が獨ソ戰線のすぐ背後になつてゐるだけに、このことはルーマニアないしはドイツの戰力の上から大いに注目すべきものと思ふ。

現在のドイツ銃後を概觀すれば、國民の一切の勞働力を農業生産にあらされば軍需生産に集中してゐるといふ姿であり、これがためにはしば〳〵思ひ切つた政策を合目的に斷行しつゝあり、たとへば人口問題に關する政策にしても詳言することを憚るが勞働力の確保といふ觀點から、果斷な轉換をしたといふほどである。同時に一九四三年九月上旬のフランクフルター・ツァイツング紙上の論文が、ソ米英三國の物質的な兵力が量の上ではドイツに優ることを率直にみとめ、ド

イツとしては質の上でその開きを補ひつゝ、量の點でもでき得る限り追ひつかんとしてゐることを指摘してゐたがごとく、ドイツはよほど理性的な態度でもつて事態を觀察し、これにもとづいて案出した對應策を果斷に實行しつゝある。それだけに軍需生産といふ點だけからみても、ドイツの戰力には彈力性と將來性を備へてゐるといへよう。

八　科學による戰鬪力增強と新規資源の製造

物的資源の部面からみるに、ドイツ本國および占領地において多量の鐵、石炭などを產出し、南東歐のアルミニューム、マグネシューム、クローム、マンガンなどの產出と相まち、軍需工業の基礎が安定してをり、また同盟國ルーマニアの石油などが、ドイツの重要な戰爭資材になつてゐることは周知の通りである。殊にドイツは占領地または歐洲友邦における資源を利用するにあたつてこれらの地域がほとんどドイツ本國と地續きになつてゐて、輸送上に受ける便宜が甚大であり、これによつて得る戰力增强上の好條件を看過できぬであらう。それでもドイツはなるべくドイツ本國の資源だけでやりくりせんとする態勢を忘れてゐない。それは科學によるやりくりであつて、人造石油、人造ゴム、石炭から摘出する人造綿、石炭から採取する食用油、各種の人造纖維、ないしはガラス製の布といつたものがその例にならう。すなはちドイツの科學は、各種の新兵器を製造することにより直接的な戰鬪力を高めてゐるばかりでなく、新規の資源をもつくり出してゐるわけで、ドイツの戰力の上では大きな役割を受持つてゐる。

ゲッベルス宣傳大臣が、一九四三年十月三日の演說で「空中戰は、ドイツ科學陣と反樞軸學界との抗爭である。目下のところでは、ドイツ科學陣が非常な勢ひで反樞軸學界に追ひついてゐるから、將來は反樞軸軍が人員と器材との兩面において甚大な損害を受け、戰果と損害とが釣り合はぬ時期が必ず到來するであらう」と說いたのは、科學に關するドイツの自信と戰力との關係を物語るものであらう。と同時に歐洲戰勃發以來優勢を實證してゐたドイツ空軍を前にして、一九四三年以來米英空軍が頻繁に對獨爆擊を行ひつゝある事情は、十分檢討すべき問題であらう。

九　指導者の政治と國民の氣魄

ドイツは周知のごとく、米英およびソ聯を相手として、史上かつてみないほどの大規模な民族的總力をあげて戰ひつゝ

あり、歐洲の事態は、もはや一局部における戰局の推移によつて大局を制するやうなことが不可能になつてゐるとみえるほどに、大掛りな力の均衡問題になつてゐる。換言すればナチス・ドイツが早くから採用してゐる島政策が、どこまで發展し得るか、またソ米英の勢力がどの程度までドイツの島政策を妨害し得るかといふ民族的角逐になつてゐる。

他方においてヒットラー總統の政治は、一九四二年十一月八日に行つた同總統の演說の中で、「この戰ひはドイツ國民のための戰爭である。余は、ドイツ將兵に對し、余自らなさうとする以上のことを決して要求せず、ドイツ國民に對しても、現在余がやつてゐることに以上のことを斷じて要求しない」とのべてゐることによつてもわかるやうに、ドイツ國民を可愛がるといふことに終始してゐるといつてよく、同時にナチス黨と國防軍との組織力によつて、ドイツ國民を强固に團結してゐる。またドイツ國民は、傳統の强靱な國民性でもつて指導者の指導に從ひつゝ、現在の戰爭の要請に應へてゐるが、一例を食糧問題にとつてみても、相當餘裕のある日常生活を營んでゐるといつてよく、ドイツ全體としての戰力にはなほよほどの彈力性をもつてゐる點は前にも觸れたところである。

卑近な例ではあるが、一九三九年九月歐洲戰の勃發した直後、ベルリンに在住する某外國人がその下宿のドイツ主婦に向つて、「戰爭がはじまつて食糧が窮屈になるだらうから、いまのうちに砂糖のごときものを買つておくがよからう」と話したところ、その主婦の答は、「そんなものを買つておいたところですぐに費つてしまふものであり、まさか一年分の砂糖などを買つておけるものでない」といふのであつて、平常と變らぬ態度でもつて、戰時生活に入つたといふ。このドイツ主婦は特別な教育上の經歷をもたぬ普通の市民であるが、普通の市民にしてこれだけの達觀と氣魄をもつてゐる點を見逃してはならぬ。すなはち普通一般のドイツ人は聞こえよがしに體裁のよいことをそれほどに巧言しないが、國家の緊急必要に對應した無駄のない日常生活を合目的に實行してゐることになる。いふまでもなくかうした氣魄のある國民の團結は、冒頭においても觸れたごとくドイツ戰力の根本的な源泉であり、またドイツの戰力をして不拔のものたらしめるといへよう。

カイロ、テヘラン會談と反樞軸の意圖

恒川眞

一　カイロ、テヘラン會談の意義

一九四三年十一月から十二月にかけて反樞軸國側が開いたカイロ、テヘランの兩首腦者會議は、軍事的、政治的、その他いろ〳〵の意味において意義深いそれであつた。カイロにおける會談は十一月二十二日から二十七日まで六日間にわたつて行はれ、出席者は米大統領ルーズヴェルト、英首相チャーチルに加ふるに重慶の獨裁者蔣介石およびその介添役としての宋美齡であつた。米英兩國とも軍關係の主な指導者をほとんど網羅し、隨員は英が二百一名、米は一千名以上といふ多數にのぼつた。重慶からは元外交部長王寵惠、海軍部長陳紹寬、陸軍報道部長鄭章成ら二十名であつた。テヘラン會談は十一月二十八日から十二月一日まで四日間にわたつて開かれ、米英の出席者はほゞカイロ會議と同じで、重慶の代りにソ聯邦からスターリン人民委員會議長、モロトフ外務人民委員のほかヴォロシーロフ、チモシェンコ、ジューコフらの諸元帥が出席した。

英首相チャーチルはかつて、戰爭の激化とともに米英その他樞軸側首腦者の會議はいよ〳〵頻繁の度を加へるであらうと語つたが、前記の兩會議はこれら連鎖的會議の一つにほかならない。もちろんこれら一連の首腦者會議のうちにもおのづからその重要度に一定の差が生ずるのは當然であるが、カイロ、テヘラン會談は一九四一年八月のルーズヴェルト、チャーチル大西洋上の會談、同年十二月ワシントンにおける反樞軸諸國二十六箇國の會議、一九四三年一月のカサブランカ會談、同年八月のクェベック會談、同年十月のモスクワ會談とともにもつとも重要な會談の一つであつた。

カイロ、テヘラン兩會談の重要性は、蔣介石が東亞の一角からルーズヴェルト、チャーチルら西歐の政治的首腦者と直

接會談のためはる〳〵とエジプトまで出かけ、從來一步も國外へ出たことのないスターリンが、やつと腰を上げてテヘランまで出向いたこと——すなはち、これまで重慶およびソ聯が戰爭遂行について、米英からなんとはなしに疎外されてゐるかの感があつたのを、その障壁がこれによつてとり拂はれ、東西の四國が戰爭遂行ならびに戰後處置について意見の交換をなしたといふことにあつた。從來數次にわたつて行はれたルーズヴェルト、チャーチル會談は、主として戰爭遂行の方法についてのそれであり、それに關する限り或る程度の成果をあげてきたことは決して輕視を許されない事實である。しかし最近における情勢の推移は會談を兩國にのみ限ることを許さなくなつた。戰局の推移はぜひとも重慶、ソ聯の協力を必要とするのであるが、戰爭遂行上に重慶、ソ聯の協力を確保するためには重慶、ソ聯の政治的要求を充足せしめる必要があり、かくて戰爭對策は戰後對策にまで複雜化され、米英會談に重慶、ソ聯の參畫が必要とされるにいたつた。

一九四三年一月のカサブランカ會談（地中海作戰について協議した）においてスターリンの參加が要請されつゝも實現されなかつたに反し、カイロ、テヘランに蔣介石、スターリンの出馬をみたことは、以上のごとき會談內容の推移深化を物語るものであらう。

では、戰爭對策をかたる前に、なぜ政治問題の處理、戰後對策の決定が要請されるのであるかといへば、それは米英とソ聯、重慶との間に巨大な疎隔があり深刻な背反があるゆゑである。米英とソ聯、米英と重慶との提携は決して本質的に相合致するものがあつてのそれではなく、むしろ反對に深刻に相反する利害の上に立つてゐるのである。米英と重慶の關係は搾取者と被搾取者、侵略者と被征服國のそれであり、一時的、形式的に米英重慶の提携を可能ならしめてゐるのは日本と重慶の對立、日本と米英の利害の對立が併在するといふ偶然であり、米英とソ聯との關係は資本主義とこれを敵視しこれを打倒潰滅せんとする社會主義のイデオロギー的對立、むしろ不俱戴天の仇敵にほかならないのである。從つて米英對ソ聯の關係は前者が商人的利害の打算によつてソ聯に接近しようとした場合のほか本質的には對抗關係を持續したのである。第二次歐洲大戰勃發の直前英國とソ聯との接近は、ドイツ抑制のためにソ聯を利用せんとした英國の老獪政策であつたし、現在米英ソ聯の提携聯合は、たま〳〵ドイツを共通の敵としてゐるといふ偶然および便宜上の關係にすぎないのである。

かやうなわけで戰爭協力における重慶、ソ聯の米英に對する紐帶はきはめて弱いのである。米英對重慶、ソ聯のかやう

な一抹安定を缺く關係は、反樞軸側諸小國および中立諸國の動向に少からぬ影響を與へ、彼らの必勝の信念の樹立を阻んでゐるのである。戰局の推移とともに重慶、ソ聯の戰爭協力の强化を切實に必要とし、自國側陣營の動搖を防止するために米英は重慶、ソ聯との關係を再調整、强化し、その紐帶の强靱性を爾餘の聯合國および中立國に示威せねばならないのである。

カイロ、テヘラン兩會談の意義はこゝにあり、會談の結果は一應四國の協力を確保し、これを世界に宣傳する役目を果し得たものゝごとくである。

二　カイロ會談と日本處罰の白晝夢

カイロ會談における主要な論議題目は左の三點であつたとみられてゐる。

一、太平洋方面における戰略の決定
二、戰後における日本處分問題
三、戰後における支那の地位向上問題

日本に對する戰略の大綱は、戰爭勃發當初における歐洲第一主義、カサブランカ會談におけるこの方針の强化から、ケベック會談における歐洲、太平洋兩戰線並行主義への移行があり、それがさらにカイロ會談の新對日戰略にまで發展したのであつた。

ケベック會談において、對日反攻作戰は米英兩國の間に受持ち區域が畫定され、スマトラ、マライ、ビルマ以西が英國に委託され、英國はマウントバッテンを總司令に任命し、在支米軍、重慶軍の協力によつて西から反攻を開始し、米軍はアリューシャンより濠洲にいたる廣大なる海面より飛石戰術をもつて日本に迫らうとし、相まつて東西から日本を挾撃せんとする方法が決定された。

米國の對日進攻路は海軍機動部隊と空軍を中心として推進される、いはゆる飛石作戰で、これは北（アリューシャンから千島へ）と南（濠洲、ソロモン、ニューギニア、ビスマルク群島、內南洋の順路をとる）の兩方面から日本に對する攻撃を企圖するとともに、長距離爆撃機ボーイングB29によつて中部太平洋からたゞちに日本本土空襲を行はうとするものであつた。昭和十九年三月初旬における戰況は、敵は北千島へ數度の爆撃を加へ來るとともに、南においては、空母、戰艦よりなる强力なる機動部隊によりマーシャル群島へ上陸し來り、さらにトラック島およびその附近の島嶼、およびさらに北上してサイパン、テニヤン、グアムなどに空襲を試み、隊あらば一層日本本土に迫り來たらうとする態勢を示してゐた。他方、ビルマからの敵の戰略は、幾多の障碍によつて遲滯を餘儀なくさせられてゐた。障碍の主なるものは、印度國內政情の不安、ベンガル州など東部印度における大飢饉、在印英軍の進撃準備の未整などであるが、さらに一層大きな障碍は、統帥首腦部における內部的對立であるといはれる。それは米英重慶の寄合ひ世帶からくる必至的現象であるといへよう。對立は總司令たる英人マウントバッテンと在支米軍司令スチルウェルのそれとが全く相反してゐること、兩者の個人的反感などからきてゐる。マウントバッテンの作戰は海正面からの進攻であり、ニコバル、アンダマンの兩群島を經て、スマトラ、ビルマを海上から攻撃しようといふのであり、スチルウェルのそれはまづ北部ビルマに進出し、印度と重慶との連絡路（レド公路と呼ばれてゐる）を開いて完封下の重慶の苦境を救濟し、重慶軍を利用して日本軍を撃破せんとするにある。スチルウェルの言葉によれば、この作戰は一つには、日本による完全封鎖によつて呻吟しつゝある重慶政權に多少とも軍需品を補給する手段となるし、二つには、これによつて日本軍に對する攻撃を行ひ、これに打撃を與へる機會が得られる、といふにあつた。

對日作戰における米英兩軍間のこの意見の對立こそは、敵の軍事行動を遲延せしめ、これを不成功に終らせてゐるもつとも大きな原因とみてよいであらう。米英本國においては大體マウントバッテンの戰略が支持されてゐるものゝごとく、米誌の報道によれば、ワシントン、ロンドン、ニューデリーなど反樞軸側主要都市においてスチルウェルが批判の的になつてゐるといはれてゐた。

しかし三月から四月にかけて北ビルマにおいて試みられた敵の反攻企圖は、明白にレド公路再開のためまづミイトキイナを奪還し、バーモに出て舊ビルマ公路を再開せんとするものであり、明かにスチルウェル作戰の實施で、敵はこのために北ビルマにおける反撃を激化し、數千の空輸部隊を送つたりした。しかしまた、在緬皇軍の機先を制する反撃作戰の展開と、その善謀勇戰とは敵のこの作戰の潰滅を招來した。もつともこの作戰は敵の本格的なビルマ作戰とはみるべきでなく、一層猛烈深刻な反撃がその後に展開され來るべきことも豫想されたが、局面は皇軍の優勢のうちに、彼我双方の作戰行動を全く不可能にする雨季がはやくもはじまらうとしてをり、いまやビルマからの對日反攻は十月頃までは不可能とならうとしてゐる。かやうな反攻作戰の停滯により總司令マウントバッテンに對する本國側の評判は極度に惡化し、その更迭も必至とみる向きもあるくらゐである。

從來米英首腦者間の會談は、大なり小なりなんらかの結果

を生み出してゐたものであつた。ところがクェベックおよびカイロにおける會談の結果たる對日作戰の失敗はおよそかくのごときものがあつたのである。これら兩會談においてはやくも顯著に認められてゐた敵の對日焦躁は最近の戰局の不振に促されて一層その度合を深化せしめてゐる。

戰後における日本の地位についてのカイロ會談は、全く敵米英の宣傳以外のなにものでもない。それは戰局の不利を隱蔽せんとするために、ことさらに戰爭の結末ははやくも彼らに有利に確定されてゐるかの感を無知なる世界の大衆に與へ、これによつて腰の弱い味方の陣營に活を入れ、自信なく不動の方針を持たぬ中立諸國を左右し、あわよくば樞軸側諸國民心の動搖をも併せて招來せしめようとする苦肉の策なのである。

傳へられるところによると、米大統領ルーズヴェルトは米國の戰爭目的は日本帝國を永遠に抹殺するにあると言明し、このため米英が戰後（戰爭が敵に有利に終るものゝごとく假定して）日本に與へようとしてゐるものは、

一、日本の無條件降伏によつてのみ戰爭を終結せしめる
二、日本屈服の後は日本を第三流國に蹴落す

ことにあるとのことである。日本を第三流國に蹴落すとは、海外電報によれば

一、日本から植民地を浚渫する
二、日本から軍事力を奪ふ
三、日本の對外貿易を極度に制限して日本の經濟的生存を窒息せしめる

などであらうとのことであつた。これに對し重光外相は本年一月、休會明け第八十四議會劈頭の外交方針演說においてこれに言及し、米英首腦は「帝國に對し假借なく攻擊を加へ、無條件降伏を强要すべしと稱し、本土以外の帝國領域は悉くこれを奪取して、あるひは自己の領土とし、あるひはこれを支那に分ち與ふべしと約し、重慶政權の離脫を防止せんと致したのである」と喝破した。

以上がカイロ會談において米英重慶の間で決定したところの、日本に與へんと欲した大體の相貌なのである。全計畫が米英重慶側の自分勝手な妄想からきた白晝夢にすぎぬことは問題を一瞥しただけで諒解されるであらう。敵がなぜこのやうな愚にもつかぬ計畫を案出するためにその首腦者をはるばるカイロまで出動させ、その痴人の譫語にも似た希望案を臆面もなく世界の前に發表してゐるかはすでにのべた通りである。われわれはそれに對して一顧を與へる必要もないのである。むしろかゝる小策によつて自己內面の焦躁を暴露しつゝある敵の狼狽振りを嗤つてやればよいのである。現實はかやうな空想によつて少しでも動かされるやうなものでは決してないからである。

三　いはゆる戰後における支那の地位向上

カイロ會談はいはゆる戰後における支那の地位向上についても考慮を拂つた。これは昭和十八年十月のモスクワ會談から持越された問題であつた。モスクワ會談において支那の國際的地位は非常に向上された。といふのは、この會談（米英ソ三國間に開かれた會談）の結果たる共同宣言に重慶の名が加へられ、一見重慶政權は反樞軸側の四大國の一に數へられるにいたつたかの外觀が與へられたからである。しかしこのことを一層綿密に點檢してみると、この事件がきはめて不可解、奇妙なものであることがわかるのである。會談は三國の間に行はれ、宣言は三國によつて起草されたに相違ないのである。いはゞ重慶は三國の決定を事後承諾させられたにすぎないのである。この會談參加者の一人たる英外相イーデンは「これ（重慶の參加）はハル米國務長官の大きな外交的成功であつた」とその議會への報告でのべてゐる。それはハルの重慶勸誘がなんらかの政治的目的をもつてなされたものであり、その目的が重慶に空疎な名目的地位向上を與へた代償によつて易く獲得されたことを、イーデンの聲明は裏書してゐるのである。現に米國內においてさへ、重慶の實力が他の三國と肩をならべてこの宣言に署名するに足るほど强力なものでないことが指摘されてゐることをもつてみても、いはゆる支那の地位向上の本質が窺ひ知られるのである。

戰後重慶の地位がいかなるものであらうかは、米英當局者の外交的、政治的お世辭によつては推知し得られず、むしろ自由な立場に立つ人々の言葉によつてその眞實を摑み得るといへよう。南阿首相スマッツ將軍および米國の評論家ウォルター・リップマンの言葉はその代表的なものであらう。スマッツはカイロ會談進行最中（昭和十八年十一月二十五日）ロンドンにおける演說において、明確に「將來世界には三つの大國が殘るであらう。米國、英國、ソ聯がこれであり、この三國は戰爭か平和かを決する指導權を確保し、これは武力によつて支持されねばならぬ」とのべてをり、重慶は全く無視されてゐるのである。リップマンはその最近の著書「米國外交——共和の樞」の中で、「米英ソ三國の協働は三國各自の安全を保障するに不可缺のものであり、一層廣範圍な安全體制を建設することを得しめる唯一の前提條件である」とのべ、重慶のことは全く忘れ去つてゐる。またいさゝか舊著で

はあるが、エリー・カルバートソンはその著書「世界聯合案」の中で、スマッツ、リップマンらとは違ひ、支那（すなはち重慶）の存在を認めてゐる。彼は世界平和維持のため國際警備軍の組織を提唱してゐるが、警備兵數は米の二割、英ソの一割五分とともに、支那、獨、佛、ポーランド、トルコ、印度などいづれも四分を割當てられてゐる。これが米英人の重慶に對する評價の實相なのである。

ハル國務長官以下米英官憲の對重慶媚態がいかなるものにせよ、戰後の重慶が彼らによつてどんなに取扱はれるであらうかは、前述によつて明瞭に豫知できるのであるが、それを一層明確にするものは戰後支那における米英の立場がどうなるであらうかといふことであらう。戰後支那において米英の求めてゐるものは支那事變以前の狀態——すなはち、半植民地への復歸である。たとへば香港は英國が再び掠奪せんとするであらう（カイロでは蔣介石からその言質が與へられたと傳へられてゐる）支那における門戸開放、機會均等主義の維持（そのため日米交涉において米國がどんなに無理をいつたかを想起するとよい）が强要されるであらう。それは米英の對支經濟侵略、引續いて政治的侵略の端緒となるであらう。

カイロ會談によつて約束された戰後重慶支配下の支那の地位向上の本體はまことにかくのごときものにほかならないのである。それは被搾取國としての向上なのである。

四　テヘラン會談と第二戰線

カイロ會談に引續いて行はれた米英ソ三國のテヘラン會談が、同年十月モスクワにおいて行はれた會談の延長であつたことは周知のとほりである。カイロ會談が太平洋における戰爭に關聯したものであつたと同じく、テヘラン會談はヨーロッパ戰線についての協議會であり、ソ聯對米英間の第二戰線展開についての折衝と戰後におけるヨーロッパ支配についての英ソ間の論爭が中心問題となつた。カイロ會談においては米英が重慶を自由に引廻したが、テヘランにおいてはソ聯が完全に牛耳をとつた。

第二戰線の問題は、東部戰線の開始、ソ聯と米英との軍事提携成立以來、ソ聯側からたえず、しかも强硬に要求してゐたものであつた。これに對する米英の行動は遲滯に遲滯を重ねるばかりであつた。一九四三年一月になつてやつとカサブランカ方式を採用し、ヨーロッパ第一主義を再決定、ついで北阿進出作戰および地中海作戰を開始し、これをもつて第二戰線たらしめようとした。これは米英の狡猾な策略からきたものであり、大陸における戰鬪を主としてソ聯の犧牲において遂行せしめ、獨ソ兩國とも傷き倒れるにおよんで、最小の自國の犧牲をもつてドイツを征服し、あはせてソ聯をも容易に再起不能の狀態に陷れようとしたものであつた。ソ聯がかやうな老獪手段に瞞着されるはずはなかつた。

米英はこのためバドリオ政權の降伏ののち、道をバルカンにとり、こゝから第二戰線を展開する形を示さうとした。しかしこれはソ聯を滿足せしめないばかりか、ソ聯を一層不機嫌にした。それはこの方面における米英の作戰はソ聯の利害に牴觸するからであつた。ソ聯はバルカン半島一帶を自國の勢力圈と考へてゐる。そこへ米英軍が第二戰線に名をかりて進出し來つてその勢力を扶植することは、ソ聯にとつて好ましいものでないことは當然である。このゆゑにソ聯はあくまで第二戰線は西部戰線より開始されるべきことを主張し、米英がバルカン戰線展開の第一步としてトルコを參戰せしめんとするのにも、最近は反對態度を示してきてゐる。一時極度に米英側に傾いてゐたトルコが突如豹變して、英國の軍事的要求を蹴つたのも、かやうな背後關係を暗示するものなのである。

テヘラン會談において米英はソ聯より、米英のバルカン戰線開始に對する反對と西部戰線における第二戰線の速時開始を、改めて——しかも强硬に要求された。第二戰線展開は米英がソ聯に對して負うてゐる債務であつてみれば、ソ聯の要求に對して返す言葉もなかつた。最近の機會において大規模作戰が展開されることが改めて約束され、十二月二十四日には歐洲方面反樞軸軍總司令としてアイゼンハウアーが任命され、麾下の幕僚、司令官らも同時に發表され、大規模作戰への準備進捗が誇示された。米英においてはたゞちに第二戰線展開がいまにも開始されるかの宣傳が流布されはじめ、スマッツのごとき要人さへ、本格的第二戰線の開始は三月であらうなどと言明し、これをもつとも遲く見積る者も五月頃か、遲くも夏のはじめ頃には開始の運びになるものと豫想した。最近のソ聯側の發表によれば、第二戰線展開の時機はこの會談において四月十五日と確約され、それに對しソ聯側もなんらかの反對給付を提供したとのことであつた。

攻擊はおそらく英佛海峽、または地中海側からの上陸作戰によると豫想されてゐるが、この方面におけるドイツ軍綴補の守備は、米英側に多大の損害——豫想もできないほど大きな損害を與へずにはおかないであらう。老獪な英國は他人の犧牲において自國を肥すといふ傳統的政策によつて米國軍を先に立てようとするであらうが、暴虎馮河の米軍といへども、この大冒險には少からず躊躇せざるを得ないであらう。しかしこの際ソ聯の戰線離脫をおそれるあまり、米英はおそ

らくなんらかの形において攻撃を開始せざるを得ないであらう。また米國における本年の大統領選擧戰對策としても、十一月以前になんらかの形において作戰を開始する必要があるであらう。しかしその犧牲をできるかぎり小さくとゞめるため、十分の準備を整へ万全を期しての攻撃であらうから、その準備には相當の時日を必要とし、攻撃開始は豫想されてゐるよりはずつと遲くなりはしないかと想像されるのである。第二戰線に關しては、かやうに米英側の完全な讓歩によつてテヘラン會談はをはつたものとみられてゐる。

五　ヨーロッパ支配についてのソ英の對立

將來のヨーロッパ處分の問題については、さう簡單な解決は許されなかつた。戰線の問題はドイツ倒滅といふ共通の目標によつて統一されてゐるし、第二戰線への要求に對し、米英はこれを拒絶または延期せしめる口實をもたないが、政治問題の解決は各國各樣の政治的背景をもつてをり、それ〴〵の立場と利害關係をもつてゐて、これはさう單純な解決を許さないからである。

はじめ米英は提携してソ聯に對した。彼らの論據は大西洋憲章の原則であつた。大西洋憲章の本質は、巧に迷彩されてはゐるものゝ、結局において米英の勝手な世界處理の手段である。彼らにとつてもつとも有利な將來の世界の在り方は、小國の分立と、これによる勢力均衡である。米國はかやうな狀態が自國にとつていかに有利であるかを、中米における實驗によつてよく知つてゐる。大西洋憲章の最初の數箇條は、それを東亞において實現せんためのものであり、民族自決はこれをヨーロッパにおいて實現するための口實なのである。米國は東亞において半植民地支那の再現を希望し、この間に自己の經濟的、從つて政治的勢力の擴大をはからうとし、英國はドイツ、フランスなきのちのヨーロッパにおいて諸小國の族立による自國支配權力の擴大を目ざしてゐるのである。このことをもつとも明瞭に示してゐるのは、十一月二十五日南阿のスマッツがロンドンでの演說でのべてゐる「英國は群小民主々義國をその傘下に叫合することによつてその他位を深化しよう」といふ言葉であらう。

米英のかやうな野望が、彼らのつぎの假想敵たるソ聯の主張と對立せざるを得ないことは當然である。さうして主としてヨーロッパ處理の問題がとり上げられて、ソ聯對英國の對立となり、米國は英國を支持する態度をとつた。この結果、米英側からの報道によれば、この問題についての折衝は、ス

ーリン、チャーチルの正面衝突にをはり、ソ英の對立が明白化されたまゝに會談はをはつたのであつた。

もつとも公平な立場――一應敵味方といふことを離れて考へて見るとき、米英ソがかやうな將來の問題の論議から氣まづい關係を招來しつゝあることは不可解といはねばならぬ。なぜかといへば、彼らの前には共通の大敵ドイツを討つといふ焦眉の急があつて、將來の問題などは當分問題にしてゐる餘裕はないはずだからである。しかもいづれも練達堪能の政治家である三人が、この問題についてそのやうに固執しつゝあるのはなぜであるか。

それはソ聯と米英との對立があまりにも大きく、あまりにも重要だからである。本文の冒頭に、米英とソ聯とはなんら共通の利害をもたぬとのべたが、それどころか彼らの間には絶對に越えることのできぬ巨大な間隙――利害の背反があるのである。

第一に資本主義と社會主義との對立である。ソ聯は新宗教政策採用、コミンターン解散などによつて、米英への和協的態樣を示してゐるものゝ、米英は決して油斷をしないばかりか、今次の戰爭が假りに彼らの希望どほりの結果にをはつた場合は、たゞちにつぎの機會をとらへてソ聯――社會主義體制の倒滅をはからうと心ひそかに覺悟してゐる。ソ聯がその十六の自治國に外交自主權を與へたことが、米英にあれほど大きな衝撃を與へた理由は、米英側のかやうな心構へによるのである。最近のヨーロッパにおける戰局、政局の動きは、かやうな心構へをもつた英國の神經を一層強く刺戟するもののみである。

東部戰線におけるソ聯の成功は、ソ波國境問題を惹起した。ポーランド亡命政權が舊國境の回復を主張するに對し、ソ聯は一九一九年のカーゾン線による國境を要求する。カーゾン線は一九三九年の獨ソ國境とほゞ同じものである。これによればポーランドの面積は戰前の約半分に縮小される。ポーランドをその配下におき將來ソ聯に對する防塞たらしめようとする英國はポーランドの弱體化を喜ばず、民族自決と領土不擴張主義の大西洋憲章の原則を楯にとり、ソ聯の主張に反對した。テヘラン會談におけるソ英對立の最大直接原因はこれであつたが、その後の情勢では、米國がまづ英國支持から手を引き、英國もつひに屈服した。本年二月二十日英國議會における戰況報告において、チャーチルはカーゾン線容認の意を表示した。

かうして英國公認のもとに、ソ聯の奪ポーランド領一部に對する勢力擴張が豫定されるにいたつた頃、同じ東歐の一國たるチェッコ亡命政權とソ聯との政治的提携が成立し、前者

が後者の勢力下にはいることが明示された。

バルカンにおけるソ聯の勢力擴大も目覺しいものがある。ユーゴースラヴィアにおけるゲリラ戰線は二つに分裂してゐるが、ソ聯の支持してゐる左翼派チトーの勢力が漸次增大されてをり、戰爭がもしも樞軸側に不利に赴くやうなことがあれば、ユーゴースラヴィアの運命はソ聯の手に握られようとみられるにいたつた。ブルガリア、ルーマニアの將來についても同じことがいはれるし、最近の英國とトルコとの交涉決裂の事實は、トルコにおける英勢力の衰退、ソ聯勢力の急增を示してゐる。西亞特にイランにおいては、テヘランのソ聯大使館をもつとも安全としてそこに滯在したルーズヴェルトの行動によつても知られるとほり、ソ聯勢力の絕對優勢を示してゐる。北歐についてみても、スカンヂナヴィア半島における動向は決して英國に有利なものとはいひ難いのである。

かやうにみてくると、ヨーロッパ大陸において英國は全面的退却に當面しつゝあることがわかる。しかもその對立者たるものは本質において相容れることのできないソ聯なのである。かうして英國のソ聯に對する態度は、同盟國としての信賴から底の知れない恐怖と警戒へと變りつゝある。そして表面的には事毎にソ聯に讓歩しつゝも、その內心において、ソ聯抑制の希求に燃えてゐる。

これがテヘラン會談によつて招來された米英ソ——主として英ソ關係の新展開である。それは三國連帶の强化ではなく、むしろ相反する利害關係の明白化、表面化であつた。この直接的な利害關係の衝突にもかゝはらず、米英がなほソ聯に叩頭し、ソ聯の要求に屈服せざるを得ないのは、さもなければ、ソ聯の戰線離脫が必ずしも不可能ではないからである。

六　次に來るべきもの

さてつぎに起る問題は、カイロ、テヘラン兩會談の直接的結果として、戰線の上に、政治的動向の上に、どのやうな變化、新展開が豫想されるかといふことであらう。敵の今後の大戰略、政略を豫言することはむろん不可能である。しかし勢を按じて大體の傾向を豫測することは、間違ふ場合が多いとしても、まるきり意味のないことでもあるまい。

まづ太平洋戰線においてはつぎのことがいへるであらう。

一、印緬國境戰線　日本側の先制的反擊によつて、この方面の米軍、重慶軍の策動は完封されるとともに、はやくも雨季に近づきつゝあつて、敵はなほ蠢動をつゞけてゐるものゝ、本年度における大反攻は不可能となりつゝある。

一、中部および西南太平洋　ニミッツの飛石作戰は相當の成績を示してゐるかにみえる。しかしそれは敵の補給路の長大化、日本側基地への近接化といふ重大な不利を伴つてゐる。それは日本軍得意の誘引作戰を豫想せしめるのである。現に日本軍ははやくも敵の占領島嶼に對して猛反抗を開始した。ブーゲンビル、アドミラルティー、ブラウンなどの諸島嶼における皇軍の反攻開始とその戰果が傳へられはじめた。それは一層廣大な面において、一層徹底的に行はれることが豫想される。

一、日本本土空襲　飛石作戰の多少の成功と米國における長距離爆擊機の生產增加とは日本本土空襲を必至ならしめてゐる。しかしニミッツ自身も認めてゐるやうに、機動艦隊や長距離機による空襲の規模および效果にはおのづから一定の限界があり、それによつて一億國民の鐵のごとき決意の前になにほどの效果をあげ得るかすこぶる疑問であらう。

一、政治的工作　蔣介石に對する物質的援助の繼續によつて、重慶の崩潰および戰線脫落を防止し、他方で、大東亞圈內の諸國に內部攪亂運動を繼續することであらう。特にビルマ、タイ、東印度などに對してはその魔手が執拗に延ばされてくるに相違ない。もちろん米英の野心と東亞民族共通の理念に目覺めた共榮圈各國の決意は毅然として微動だもするはずがないが、それにしても敵の政治工作の惡辣さは十分の警戒を要するであらう。

ヨーロッパ戰線においては

一、第二戰線の開始は早晩實行されざるを得ないであらう。しかしすでにのべたやうに、準備不足と敵が犧牲を極小にせんとする態度とは、その時期を相當遲らせることと考へられる。ことに米國がその主力を太平洋に向けてゐる現在一層しかるを覺えるのである。もし早急に開始されるとすれば、それはさう大規模なものではあり得ないのではあるまいか。

一、政治戰線においては、ソ聯勢力の一層の擴大が豫想される。トルコの參戰はおそらく當分の間は實現されないであらう。從つてバルカンにおける作戰はソ聯の手へ委任されるであらう。

英國とソ聯との對立は、ソ聯勢力の一層の增大とともにますゝ深刻となり、それは戰爭遂行に大なる障碍となり、戰爭がいかに片づくにしても、英ソ間における大なる痼疾となるであらう。

特にビルマ、タイ、東印度などに對してはその魔手が執

米國の世界各方面に對する經濟的、政治的進出は一層

顯著となるであらうし、方面によつては領土的侵略が企圖されるであらう。それは米國建國以來の傳統的政策である。現在米國の甘言に乘つて、その自由になつてゐる諸國が氣がついたときには、完全に米國の毒手に掌握されてゐて、もう逃避の餘地もなくなつてゐるといふやうなことが起つてくる懸念が多分にある。アルゼンチン、ボリヴィアなどの反米態度はこの情勢に對する遠慮深謀に發足してゐるのである。

國內總蹶起の措置

國民總蹶起の態勢

田原恒男

一　議會運營の戰時體制化

戰爭は畢竟意志と意志の戰ひである。最後の勝利はあくまでも最後の勝利を固く信じて鬪志を繼續したものに歸するものである、と東條首相は第八十四議會再開劈頭における施政方針演說において喝破して、一億國民の必勝信念の堅持と米英擊滅への戰意の昂揚とを訴へた。首相の右の發言こそは單に耳になれた言葉として受けとるべきでなく、現下の時局の要請する核心を衝いたものである。

敵の反抗はいよ〳〵熾烈猖獗となり、大損害を反復受けてゐるにも拘らず、ひたすら物量を恃んで逐次基地を進め來つてをり、戰局はまさに深刻苛烈である。いまこそ一億國民の盡忠報國の精神力とすぐれた資質とを最高度に發揮し、こぞつて何物をも燒き盡さずんばやまざる勢ひを以て總進軍すべきときである。強力に民意を暢達し、國民の底力を徹底的に動員し、眞に官民一體の總蹶起が要請される。これまでやゝもすれば陷りやすかつた徒らに將來を豫想しての機構いぢりや、机上的な革新論を振り撒くときではない。のみならず事實、わが國の戰爭政治はすでにかゝる段階をすぎ去つてゐる。戰爭遂行に直接必要な機構的改案はおほむね斷行された。從つてできれば現在あるがまゝの機構を極限的に活用し、適材適所を得しめ、各人の持つ才能を十分に發揮せしめることに最も留意すべきときである。本年こそ一億國民各々の職域に恪遵しつゝ各自の地力を最高度に發揮せねばならない。本年の國民總蹶起體制はこゝに立脚して推進されねばならない。

大東亞戰爭勃發以來議會の召集されること七回におよんだが、今次の第八十四議會は明確に時局的要請を把握して運營された。その政治的意義は明瞭なものであつた。今次議會に對する準備においてまづ政府は右の見地に立つて特に愼重な態度で進め、政府提出法律案件は三十二件に壓縮した。これを前二回の通常議會、第八十一議會の八十九件、第七十九回の八十四件に比較すればほゞ三分の一であつた。これは戰時下急速審議の必要上戰爭遂行に直接必要の最小限に止めたこと、必要あればいつでも臨時議會召集を奏請する用意あることにもとづいてゐることは固よりであるが、將來の事態を慮つて豫め法律を用意して置くやうな從來の措置はこれまでの例に徵してもいたづらに摩擦を多くすることに留意しなければならない。第八十一議會における東京都制法案、市町村法案、農業團體法案の審議經過は、決戰下敵前議會としてみるとき遺憾な點が多かつたことは否定できない。また三十二件の提出法律案の內容は直接戰局の要請するものに限定され、論議の多い組織法關係のものは全く技術的改正にすぎず、政策關係法案においても八十二議會の企業整備、八十三議會の軍需省創設、航空增產問題に比すればはるかに內容の簡單なものであつた。しかしながら議場における論議は積極的に戰力增強に寄與すべく、政府も議會側も從來にない努力と工夫を拂つた。政府側についてみると再開劈頭の首相の施政方針演說にこれが現れ、必勝の信念の昂揚に基調をおき、できるだけ事實をもつて政府の施政一般の闡明につとめた。從來あまり例をみない一時間餘にわたつてのべ、今後ます〳〵

長期戰の備へを固むべきことを强く要請しつゝ、航空機の生產は昨年の二倍に達し、さらに現狀の數倍への飛躍が期待されること、食糧事情に不安のないことを確言した。しかして議會審議に對する政府側の答辯態度は從來常套手段ともいふべきその場のがれといつた調子は完全に拂拭され、議員の質問に對して眞正面から所信を表明した。長い質問に對する短い答辯といふ型は逆になつて、政府の答辯には、議員に答へるばかりでなく國民に呼びかける氣魄をこめた。これに對し議會側また眞劍に積極的論議に集中し、今次議會の要請に應へることにつとめた。それは衆議院豫算總會に明確に現れた。議員の質問は重複を避けて問題別に擔當を決め一人の質問時間を一時間に制限、この結果豫算審議期間の二十一日も三分の一の七日で終了した。かくして衆議院は二月五日をもつて全議案を議了してわづかに十六日、貴族院は二月七日議了して十八日がそれ〴〵の審議期間であつた。

かやうに今次議會は從來例のない短期議會にをはり、提出法律案また可及的に壓縮されたが、政府と議會の間に交はされた論議は內面的に深く掘り下げられ、かつ多岐にわたつて行はれた。論議の大筋をたどつてみても、敵の謀略宣傳に對する戰爭目的の再闡明、航空機ほか基礎資材の增產による戰力增强、食糧の確保、戰時國民生活の確保、決戰行政の刷新强化、勞務動員の强化と國民運動の展開など現下喫緊の重要問題が活潑に論ぜられた。

二　運用の適正に論議集中

今次議會において論議された問題は多岐にわたつたが、それらを通じて共通の論旨は既定計畫の强力な遂行であり、運用の圓滑適正化であつた。いたづらに機構改革に走る論議はほとんどみられず、適材適所を得せしめ、人材の登用に遺憾なからしめることが論議の中心であつた。從つて決戰行政の强化と國民運動の展開、この二課題が論議の出發でもあり結論でもあつた。この兩者は內面的に深くつながりを持つものである。決戰行政の强化問題は行政への民間人の參與、國民の政治參與の問題であるといふべく、國民運動の展開は國民の戰意昂揚による戰力增强への突進であり、この目標達成のための國民政治力の結集である。この兩問題こそは決戰下國民總蹶起體制の核心であり、今後決戰體制の强化が進展するにつれ、ます〳〵論議され、具體化されて行く問題である。

議會においては再開劈頭の國務大臣演說に對する前田房之助氏の代表質問によつて口火が切られた。すなはち行政運營の決戰化は戰時施策の根本的前提をなすものである。さきに

戰時官吏服務令の制定公布をみたが、決戰下の官界にはなほ國家の要請に副はざるものがある。割據主義はいまなほ依然として根絶してゐるとはいへない。苦しきは今日生産の臨路は官界の一部にありとの批判さへある。これら官吏の頭を戰時型に切換へることが焦眉の急務である。しかして行政査察使の實績に徴しても行政の刷新を圖つてその運營の圓滑と適正とを期するために中央地方に強力な行政監査機關を設け、特に第一線の監査に重點をおき、さらにこの機構には民間の事情に精通せる者を參與活用せしめることが急務である、といふのである。これをめぐる論議を結論して、勝田永吉氏は衆議院の最終豫算總會において總括的な質問を行つて政府の所信を問うた——

本委員會においては現下喫緊の要務である戰意昂揚、航空機增産を中心とする戰力の增强、食糧增産ならびに配給を中心とする國民生活の安定などに關して連日論議を重ねられ、必勝の年たる十九年度における國策遂行の根本は大體明瞭になつた。ところが段々つき進んでくると、これらの方策を支障なく遂行し敵米英の 非望を擊滅するためには、結局のところこれら諸政策の運用の衝にあたるところの人的構造をいかにすべきか、またいかなる組織方法によりこれらの人々をして全力を傾注して御奉公させるか、かういふ點にあると存ずる。このことは一見すこぶる安易なやうであるが、しかしその實並大抵のことではない。ひろく人材を天下に求め、適材を適所に配置し、これが指導鞭撻よろしきを得るといふことは實に戰時下における最も重要なる課題である。戰勝の鍵は實にこゝにあるといつても過言ではない。

つぎに戰時行政の運營の完璧を期するため行政全般に對する監査の態勢を確立されたい。近來世上において官吏の一部の言動に對しとかくの風評があり、また甚しきは時局柄あるまじきことのあるとはまことに遺憾千萬である。國政運營の中樞に位し、その一言一動が國民の心理に重大なる影響をおよぼす指導的立場にある官吏として一般國民に率先垂範の覺悟をもつて、國政運營の上に、平生の生活の上に處していたゞきたい。首相はさきに民間の智能經驗を取入れられ、なほ過般重要産業部面に對しては行政査察制度を實施して、戰力增强上大なる貢獻をなしたが、いま一段この種の制度を强化、その範圍を行政全體の運營の上におよぼすならば、その成果はけだし大なるものがあることを確信してやまない。

これに對して東條首相は左のごとく率直に同感の意を表し、今後具體化し行くべきことを示唆した——

第一の人材登用については申すまでもなく適材適所主義にもとづいて戰爭遂行の各面に人材を洩れなく最も有效に活躍せしめ、あはせてもつて一億國民の全智全能を發揮させ、いはゆる野に遺賢なからしめるといふことは戰爭完遂のための不可缺の要件なりと信ずる。この點については政府としても從來とも思ひ切つた處置をとつて參つたつもりである。また戰局の推移に即應してさらにこれが擴大强化を圖ることは喫緊の要務と認めてゐる次第である。しかして現實の問題として人材登用につき各種の制約がいまなほ少からず存してゐることについては、政府としては必要と認められる場合にはこの上とも遲滯なく適切な措置を講じ、いやしくも有爲の人材の手腕發揮に萬遺憾なからんことを期して參りたい。

第二の行政査察の運用であるが、申すまでもなく政府としては各方面の建設的進言に對して行掛りにとらはれず、またあらゆる障碍を排除して、從來ともこの施策の具現の上に積極的に反映せしめんことに努めて參つたのであるが、この上ともこの方針を堅持する所存である。しかして行政全般にわたる査察を行ひ、しかもひろく人材を活用すべしとの意見には同感である。今日まで査察は直接戰力增强の部面において行つたが、今後は國民生活および勤勞行政などはもとよりのこと、ひろく必要なる方面にわたつてこれを行ふごとく十分考慮して參りたい。

右の質疑應答によつてわかるやうに、戰時行政の刷新については大東亞戰爭以來果敢に斷行されてきた。軍需省、農商省の創設、企畫院の解消など機構改革は固より、中央地方を通ずる行政事務の簡素强力化、あるひは地方協議會制度の設置など畫期的方策が實行され、また民間人材の登用については內閣顧問の任命、地方行政協議會長には貴、衆兩院議員、民間有識者を起用し、行政査察使の特派はすでに六回におよんだ。今後の問題は、右のごとき從來の方針をさらに一段と强化し、官民一體を目標にして戰爭政治の基底をなす行政部面を强化するにある。

政府は二月十九日、藏相、農商相、運通相を更迭、戰爭經濟行政面の刷新の意圖を明かにしたが、つゞいて活潑な行政面の刷新がます〳〵期待されるにいたつた。しかしてその具體的方策として議會方面に行はれてゐる意見を要約すればつぎのごときものである。

一、まづ政務官制度の再檢討。　從來のごとく政務次官、參與官をおくか、あるひは新しくこれを實質的に網羅する參政官制度の採用である。たゞ參政官制を實施するには選擧法の改正を伴ふものと見られる。

一、內閣および各省委員制の問題。　現委員制は政務運行に有效であるが、委員數があまりに多數のため、また機密保持のため省務の樞機に直接參與出來ず（現狀のまゝでは）政府、翼政のいづれの側にもあまり歡迎されてゐない。

一、內閣參事官陣容の擴大。　參事官制度がおかれた當時は行政簡素化をまづ內閣自ら率先すべしとの趣旨から簡素な陣容となつてゐるが、舊企畫院の國政全般の綜合企畫調整部門を擔當するにはあまりに小陣容であり、これが擴大强化が考へられる。

一、地方官廳の民間人登用。中央官廳は企畫官廳であり、地方こそ戰力增强の實踐部隊である。地方行政協議會長に會長を補佐する參與制を設けるとか、現參事官、副參事官を增員するとか、なんらかの形で地方事情にあかるい議會人を登用することも一案である。

一、行政査察制度は六回實施され功績の著しきものがある。行政査察使は官制上國務大臣ないしは內閣顧問が勅命されるが、今後さらに國民生活、勞務行政など行政全般に査察が實施されるとすれば、有能の士をひろく內閣顧問に起用するか、行政査察隨員に任命することが必要である。

一、內閣、各省にわたり平面的に議會人を用ひるよりも戰力增强上問題別にこれが解決を圖る場合、たとへば輸送本部といふものが設けられたときそれに專門家を起用する。

一、その他すでに內閣情報局に參與、諮議制があるごとく各省にも同趣旨の顧問、參與を設ける。

三　國民運動の强化を力說

國民運動の展開についても、前記の前田氏の代表質問によつて表明された。前田氏は「わが國の國民運動の現狀をみるに、まだ改善の餘地が少くないやうである。國家存亡の岐路に立てる未曾有の重大時局に果して現在の國民運動そのものが卽應しゐるやいなや、甚だ疑問なきを得ない……從つて政府は國民運動の現狀に鑑みて速に國民運動にさらに力を致して、官民一體となり堅全にして激刺たる國民運動を起し、全國民をして心の底よりいやが上にも偉大なる精神力を振起せしむることは焦眉の急務と信ずる」とのべ、これに對する政府の所信をたゞせば、東條首相は

「全國民をして進んで奮起せしめることがなにより肝要である。その盛り上る精神力こそ前線の士氣をいよ〳〵奮起せしめ、銃後の生產能率を向上せしむるものである。つねに機會ある毎に申しのべてゐるごとく物よりは人である。機構の改革もさることながら、要は人の魂にあると信ずる。國民が進んで自發的に鞭韃が加はれば加はるほど身を鴻毛の輕きにおき、義勇奉公の誠をさゝげることはこれわが國傳統の底力でありまた强味である。この基礎の上に立つて國民運動はさらに決戰下政府の施策に應じて、一段と活潑にして健全なる展開をはかるの要あることはまた論をまたぬところである。すなはち從來の行掛りに拘泥することなく、反省すべきは反省し、また缺點のあるものはこれを改むるに吝かであつてはならない。眞に官民一體、戰爭に向つて邁進することを期して參りたい。」

と明瞭に國民運動の振起の必要を力說した。

衆議院は二月五日全議案を議了したが、この日の午後本會議に必勝決議案を上程、衆議院の總意としてこれを滿場一致可決した。これが趣旨辯明に起つた清瀨一郎氏は、國民運動强化の必要をさらに力强く主張して決議案提出の趣旨とした。

すなはち國政運行は法令と豫算と行政と、この三つだけでは事を辨じない。そこには魂がなく動かす力がない。そこには國民全體の戰爭遂行の熱烈なる意欲といふものが加はらなければ到底成功するものではない。しかしかゝる意欲は個人々々が心の中に持つて各別に行動するよりも、他の人と結合することによつて非常な力を持つ。眞に統一した國民運動が存在することによつてはじめて效果が發揮されるのである。かへりみれば昭和十五年國內新體制運動が擡頭、政黨は解消し、國民政治力を一元化せんとして翼贊會が生れ、爾來數年間國民總力の結集に苦心したが、今日の現狀をみれば國民總力の結集は遺憾ながら理想的ではない。行動意欲に燃えてゐる多數の青年、壯年が所在に澤山あるが、その行動が十分に伸暢し得らるゝ態勢にはなつてゐない。これはどうしても速に改革して國民の總力を必勝の一點に結集して無礙絕大の威力を發揮するやうにしなければならない。さうして聖戰完遂の大原動力をつくる。これが今期議會においてこの議會を一機としてわれ〳〵が考ふべき一つの具體的な大きな仕事である。

これが清瀨氏の論旨であつて國民運動强化の必要を單に力說したにとどまらず、この問題こそは本年の總蹶起體制の具體的課題であると斷じた。東條首相またこれに對して發言を求めて登壇して、決議案の趣旨に贊成し一億國民あげて必勝の一點に結集してゆくことに政府としても努力してをり、これが實行のためには從來の行掛りにとらはれず、採るべきは採り、改むべきは改め、以て決戰下いよ〳〵盛りあがる國民の忠誠心の發揚に萬全を期する旨を誓つた。かくして國民運動强化の問題は政府、議會側にいよ〳〵とり上げられ、議會

が自然休會に入るとともにその解決に乘り出すこととなつた。

この問題については右のごとき議會表面の動きに並行して、議會裏では急進代議士の間でさらに活潑な動きが進められてゐた。殊に新人代議士によつて結成されてゐた清新倶樂部系統、翼壯に關係深い議員よりなる翼壯議員同盟系がもつとも熱心に活動してゐたが、漸次中堅代議士層をも動かすにいたり、二月三日には津崎尚武氏を座長として國民運動一元化有志代議士會を開催、五日も再會して本問題について「重大戰局に即應し强力な國民運動を展開するため翼政會、翼贊會を改組更新し、以て一元的中核組織を確立すべし」との申合せを決定した。この有志代議士會は議會休會に入つても翼政會本部に連日のごとく會合、協議を進め、同時に政府、翼政會幹部とも會見して活動を續けてゐる。しかして翼政會自體としては二月十五日の常任總務會において、國民運動の强化については翼政會總務會が責任をもつて解決に乘り出すことを決定した。この決定にもとづき翌十六日總務會長前田米藏氏は翼政會衆議院部理事會に出席して右の常任總務會決定を傳へるとともに、その具體的解決策の研究について協力を求め、また有志代議士會に對しても具體案の提示方を求めるところがあつた。

しかしながら問題の具體的解決に乘り出すにつれて各人各樣の立場が露呈し、解決の方向さへ混迷狀態に陷つた觀がある。この問題推進のためもつとも足並みが揃つてゐたはずの有志代議士會さへ不統一を暴露した。有志代議士會が組織の一元化を申合せるや、有力な分子であつた翼壯議員派は早くも離脫し、その後活動を續けるにつれて有志代議士會内の主要分子はたえず移動をつゞけてゐる。かやうな始末であるので、さらに大きな翼政會全體についてみればほとんど纏りがつくまでにはいたつてゐない。

國民運動强化の問題はこれを具體的に解決せんとすれば、とりも直さず翼政會、翼贊會、翼壯の關係をどうするかに突き當る。この問題は昭和十五年近衛新體制によつて政黨解消し翼贊會結成されて以來の惱みで、さう簡單に解決され得ない重要課題である。今回の國民運動强化問題は議會側から提案された結果、翼政會が翼贊會側を壓收して國民組織を一元化する傾向に進むかに思はれた。しかしこの考へはまづ翼贊會から反撥され、翼政會内の翼壯議員から反撥された。さらにこれを冷靜に反省するとき翼政會の性格として翼贊會を吸收することには多大の疑問なきを得ない。翼政會は政事結社といふものゝ從來の政黨とは性格を異にし地方組織を持たず、中央における政治力結集體ともいふもので、さらに具體的に率直に特徴からいへば議會運營體にすぎない。從つて全國津々浦々にまで滲透する國民運動の展開は原則的にはやはり翼贊會を基盤とする。たゞこれが强力な展開には政治力の動員が不可缺である。この意味で翼政會の參加は是非必要である。そこで具體的解決の方向としては翼政會、翼贊會、翼壯とも組織は變更せず、いはゞ緊密に一體的活動を展開する方法の問題である、といふのが主流の考へ方である。過去において三者共同の國民運動が、たとへば一億敬神實踐運動のごとき、展開された事例はある。かゝる方法による運動展開を恒常的なものにすることに工夫されることとならう。

なほこれについて附言すれば國民運動そのものゝ性格について明瞭に理解しておかねばならない。國民運動とは一體なんぞや、文字通りこれを解釋すれば下から盛りあがる國民自發的運動と考へられるであらう。しかし決戰下の今日この際における國民運動はさやうなものではなく政府の決戰施策に卽應し國民の戰意を昂揚し、至上命令たる戰力增强に邁進することである。換言すれば政府の施策の國民への滲透運動といふことである。この點から考へても國民運動强化問題が前述のごとき方向に沿うて解決されるほかはないやうに思はれる。

四　國民運動發展の方向

しかし國民運動の强化が翼政會、翼贊會の組織自體には觸れず、兩者間の人事交流その他緊密な連繫を確立することによつて解決されるとしても、兩者の組織自體にも漸次再檢討が加へられ、改變されて行くことは免れないであらう。しからばこの問題はどう發展するか、それについては今日までにおけるわが國の國民組織の發展を簡易に回顧して發展的に考へてみることが必要であらう。

わが國において國民組織が問題となつたのは、昭和十二年第一次近衛内閣の當時であつて、高度國防國家の建設が要請されるとともに國民組織もしくは國民組織の再編成がとりあげられた。當時は國民組織問題を目して、單なる新黨運動と解するもの、國民の職能もしくは職域組織の確立運動とする觀方、他の一つは國民精神總動員體制强化であるとする、この三つの見解があつた。この三つの見解が相錯綜し、共通的な考へ方は現狀打開といふ根本觀念であつた。從つて現狀打開、革新が國民組織問題の實體であつた觀があつた。

ついで昭和十五年、第二次近衛内閣によつて國民組織の全貌が明かにされた。同内閣は基本國策要綱において「庶政百

般にわたり速に根本的刷新を加へ、萬難を排して國防國家體制の完成に邁進することを以て刻下喫緊の要望とす」といひ、國民組織の問題が國家全般の革新を期することを明かにした。そして新體制準備委員會第一回會議において近衞首相は挨拶をのべ新國民組織は一億國民を一體として大政翼贊の臣道を完うせしむる組織であり、國民が日常生活を通じて國家に奉公する組織であると說明した。しかして（一）國民組織もしくは再組織といふことは國家の全般革新を伴ふこと、（二）革新の指導力として强力な政治力をもつた政治的中核體であり、從來の派閥的對立的政黨とは異つた意味の中核體を必要とすること、（三）かゝる政治的中核體によつて再組織され、同時に中核體の基盤となり、國民の政治的協力の實踐場となるものが國民組織であること、などの諸點を明かにし、政治的中核體として大政翼贊會を創設し、その基盤としての各種の國民組織ないし再組織が企畫された。

かくして從來から存した各種の國民組織、たとへば農林業團體、都市商工業者の同業組合、商業組合、工業組合、あるひは青少年團體、婦人團體、町內會等々に對して種々の轉換、再編成が加へられた。

しかし政治的中核體たる翼贊會の性格には必ずしも明確を期することが出來なかつた。政治性をもつとすれば政事結社といふべきであるが、軍、官、民一體の組織である。これには憲法上の疑義もある。政府、議會との關係について明瞭を缺くこととなり、翼贊會は政治性をもつが治警法の政事結社ではなく、公事結社といふことに斷定され、引續き翼贊會に對し各種の制約が加へられるにいたつた。そこでこの缺點を補ふために政事結社としての翼贊政治會が生れた。この翼政會は政事結社であるゆゑに、公然と國民の政治的指導をなすことが可能であり、一應の解決が與へられたやうであつた。ところが翼贊會が幾變遷して政治性を稀薄化した一方には翼贊會內の中核組織として翼贊壯年團が結成された。そして昭和十七年の總選擧の際などには果敢に參加してすこぶる政治性を帶びた活動をなした。こゝにおいて翼壯を內包する翼贊會と翼政會との關係は再び混迷狀態になつて今日にいたつてゐるといふことができる。

翼贊壯年團についても總選擧當時の行過ぎは漸次訂正され、殊に昨年十一月には相當の改組が行はれた。しかし依然として會員組織であり、中核的組織であることには變りがない。

これに對し翼政會は昭和十七年五月結成されて以來、議會運營の經驗を積み漸次同志的結束の方向に進んでゐることは否定出來ない。對政府關係においては代表の意味において閣

僚を送るとともに決戰施策の立案に行政の運營に着々と發言權を持ちつゝある。對翼贊會關係では本部役員に多數の人々を送り、人事交流はます〳〵具體化してゐる。また地方に對しては地方事情に精通する代議士の影響力を持つばかりではなく、翼贊會地方支部役員を地方會員として加入せしめ、すでに地方會員數は一千余名に達してゐる。

決戰下一億國民の總蹶起が要請されるとき、翼贊、翼政の關係を現狀のまゝにおくことは許されまい。第一に國民の組織および再組織といふ難事業は政治的指導力をもつ政治團體の指導なしに實現し得るとは考へられない。第二には政府の政治力を强化するには强力な政治的推進體がなくてはならない。

かやうに考へてくるとき國民運動の强力化については翼政會、翼贊會、さらに翼壯の存在自體には觸れることなく解決されて行くであらう、しかしこれらの組織が單に並立的に存在することは妥當ではない。兩者の關係に對して改變を加へるか、あるひはその職域をさらに一段と明確化することが必要である。そしてこれと同時に翼政會自體の內部組織も檢討を加へられて行くこととならう。

五　決戰非常措置要綱

議會が自然休會に入るとともに、國民總蹶起體制の强化について政府、議會ならびに翼贊會の間で銳意研究を進めてゐたが、政府はまづ二月二十五日の閣議で「決戰非常措置要綱」を決定、國民總蹶起に關する非常行政措置を斷行することに決定した。

また東條首相は戰局の重大化に對處して國內體制を强化刷新するため藏相、農相、運通相を更迭、さらに國務と統帥の緊密化を斷行して、二月二十二日の閣議において所信を表明したが、右發言において時艱突破の要諦として

一、國家の有する物、國民の持つ力を剩すところなく米英擊摧の一點に打込み、もつて作戰において後顧の憂なからしめる。

二、いまやまさに帝國は隆替の岐路に立つてゐる。それゆゑにわれ〳〵はこの決意を一刻の遲滯もなく實行に移すばかりである。

旨をのべ、決戰に對する國民の精進を要請した。右發言を根本趣旨として決戰非常措置要綱は成案されたもので、同要綱は左のごとくである。

一、學徒動員態勢の徹底、二、國民勤勞體制の刷新、三、防空體制の强化、四、簡素生活徹底の覺悟と食糧配給の改善整備、五、空地利用の徹底、六、製造禁止品目の擴大と規格統一の徹底、七、高級享樂の停止、八、重點輸送の强化、九、海運力の刷新强化、十、平時的または長期計畫的事務および事業の停止、十一、中央監督事務の地方委任、十二、裁判檢察の迅速化、十三、保有物資の積極的活用、十四、信賞必罰の徹底と査察の强化、十五、官廳休日を縮減し常時執務の態勢を確立す。

(附)皇國隆替の岐路に際し擧國必勝の信念に徹底し、國民總動員體制を强化し、眞にその總力を竭して戰力增强、食糧增産にそれ〴〵の職域に邁進するとともに、時局突破のため國民生活を徹底的に簡素化し、あらゆる忍耐を覺悟するの眞摯熱烈なる國民運動の展開を期待するものとす。

同要綱は急速に具體化し實施するため、官廳休日の縮減、高級享樂の停止をはじめ、着々實施要綱を決定しつゝある。各項目の實施要綱をみるにいづれも徹底的にして、まさに最後の勝利に向つて突進する決戰譜である。必勝を期さんとする戰爭行政の切り札ともいはれてゐる。しかし要はその實行にある。この非常措置が迅速的確にどし〴〵實行されるには政府ならびに諸官廳自體が率先實踐することが必要である

が、國民が積極的に協力し實行することがなにより肝要である。從つて要綱においても特に末尾において眞摯熱烈なる國民運動の展開を期待する旨を明記してゐるゆゑんである。

六　三位一體の總蹶起へ

かくて國民運動强化方策が可及的急速に確立されることが必要となり、三月十日の閣議において國民總蹶起運動の展開に關する件が確定され、翌十一日その要綱が左のごとく發表された——

決戰下戰意昂揚、生産增强、食糧確保および國土防衛の態勢確立の趣旨にもとづき、國民運動を强力かつ一元的ならしめるため、政府、大政翼贊會、翼贊政治會は中央に連絡本部を設け、各委員若干名を出し緊密なる連絡提携をはかる。地方にありては同樣の趣旨にもとづき都道府縣ごとに地方廳、大政翼贊會、翼贊政治會などの關係者において適宜緊密なる連絡の方途を講ず。

右要綱にもとづき國民總蹶起運動の强化方策は逐次具體化されてゐるが、今回の成案について要約して說明すれば、まづその根本趣旨は、從來のごとく國民運動といへば國民の下からの自發的な運動のみに限られるといふやうな狹い考へ方を放棄する。官も民もなくすべてが一體となつて難局の突破にあたる。今日の國民運動はどうしても政府の決戰施策に卽應して展開されねばならない。また割據主義的な考へに凝り固つて繩張り爭ひをするやうなときでもない。あらゆる團體、組織は一丸となつて征戰完遂に邁進すべきである。從つて二大國民組織たる翼贊會、翼政會の一元化問題には觸れず、兩者の並存は現狀のまゝとし、兩者の緊密な提携、政府との協力を基調とする。政府、翼贊會、翼政會の三者一體となつて國民總蹶起を推進する。このために三者の代表によつて國民總蹶起運動連絡本部を設置する。

右連絡本部委員の構成は政府側五名、翼贊會、翼政會側各十四名、計三十三名とする。政府側委員は內相、內務次官、情報局總裁、同次長、內閣書記官長でいづれも國民運動に關係深い閣僚、官吏である。翼贊會側委員は後藤副總裁、事務總長小畑忠良、總務局長小林光政、興亞總本部本部長宮田光雄の四氏と同會の代表的役員、それに地方支部代表の意味で大分縣地方支部事務局長柏原幸一氏。ついで翼贊會、翼政會双方の總務を兼ねてゐる石黑忠篤、太田耕造、清瀨一郎、伍堂卓雄、八條隆正子、井田磐楠男、小林順一郎の七氏があげられ、翼政、翼贊會の一體的活動が期待される。殘る二委員には下村宏、正力松太郎兩氏が任命

され、いづれも言論報道の中樞人物である。翼政會側委員は前田總務會長、大麻國務相、金光政務調査會々長の主流幹部三氏、中堅屬を代表して政務調査會副會長前田房之助、衆議院部座長代理三好英之、情報宣傳部座長津雲國利、企畫部座長藤田永吉ならびに川島正次郎の五氏、國民運動强化に關する有志代議士會の代表として津崎尙武、橋本欣五郎の兩氏、貴族院代表として井上三郎侯、酒井忠正伯、瀧正雄の三氏、それに事務局長橋本清之助氏が如はり翼政會の現機構における各面の代表的人物を網羅してゐる。

今回の强化方策の運營方法は政府の決戰施策を國民の一人一人に全國津々浦々にまで滲透せしめることを目的としてゐるので、運動の展開方法は生産增强、食糧確保、國土防衛など決戰下國民の重要な任務を具體的にとり上げて直接工場や農村において國民運動を展開する。從つて地方における活潑な運動展開が重要であるが、從來地方組織を有せざる翼政會としては、地方における運動に參加するための措置として地方協議會を設けることとなつた。この翼政會地方協議會は支部でもなく結社でもない。單に地方の運動に參加のための措置として諒解され、翼政會所屬の貴、衆兩院議員、地方會員によつて構成され、必要に應じ隨時開會協議する協議體であ

る。かくして地方において各都道府縣ごとに地方廳、翼贊會支部、右の翼政會地方協議會の三者の間で國民總蹶起運動に關する連絡會議を設置する。地方の運動は中央の連絡本部の指導下にあることはいふまでもないが、その具體的な推進方法は各地方の特性に應じて決定され、活潑に運動を展開する方針である。

本年の財政と國民生活

松井透

一　五百九億圓の決戰財政

1　十九年度豫算の規模

第八十四通常議會において成立をみた昭和十九年度豫算は本豫算追加豫算をあはせて一般會計二百一億七千三百餘萬圓、臨時軍事費豫算追加三百八十億圓、この總計五百八十一億七千三百餘萬圓となるが、一般會計から臨軍特別會計への繰入れ七十二億五百六十餘萬圓の重複を控除すれば、一般臨軍兩會計の豫算純計は五百九億六千七百四十餘萬圓である。また帝國鐵道、通信事業、外地など主要特別會計も各著增を示してゐるが、しかし大體において右五百九億圓をもつて必勝の基礎を確立すべき昭和十九年度のわが戰爭財政の實體を示すものといへよう。すなはちこれを十八年度の純計額三百七十億九千餘萬圓に比較すれば百三十八億七千餘萬圓の增加となり三割七分六厘强の膨脹を示してゐる。支那事變發生前の平時豫算たる昭和十一年度豫算二十三億二千餘萬圓に比較すれば實に二十數倍の巨額に上るわが財政史上未曾有の超差大豫算である。いまや猛り狂ふ敵の總反攻はいよ〳〵熾烈の度を加へ、戰局はまさに彼我最終の決戰に近づきつゝあるが、五百九億豫算こそは米英擊滅、大東亞建設のため苛烈深刻なこの一年を戰ひ拔き勝利の礎石を築くべき一億國民の決意を盛るものであり、またわが國運の隆替を賭する文字通りの決戰財政といふべきである。

2　一般會計も準軍事費

まづ一般會計についてみれば、その編成にあたり政府は昨年七月「昭和十九年度豫算編成方針」ならびに「重要事項豫算統制大綱」を閣議において決定、前年度豫算の徹底的改編

の企圖の下に、從來よりの施設にかゝる既定經費については軍國當面の急需にかへりみ嚴正なる檢討をとげるとともに、純新規經費については閣議における先議畫定の方法により施策の重點を確定し、戰力の急速增嵩または國民生活確保のため眞に緊急やむを得ざるものにして、しかも現實に具體的な實行可能のものにかぎり豫算に計上することとし、國民生活を確保しつゝ物資勞力資金など國家經濟の總力をあげて戰力增强に集中すべき戰時財政經濟の要請にこたへ豫算の非戰時性を徹底的に拂拭した。かく豫算計上に嚴密を期するとともに、豫算外の支出の必要に備へて特に國庫豫備金を增額し戰時緊要な施策の實施に遺憾なきやう豫算の彈力性機動力の强化をはかつた。

十九年度一般會計豫算は歲入歲出ともに本豫算百五十四億一千五百九十六萬九千圓、直接間接兩稅の十九年度增稅による增收額の臨軍繰入れを中心とする追加豫算第一號四十四億九千百二十九萬七千圓、臨軍豫算追加にともなふ公債利子および發行諸費を計上せる追加豫算第二號二億六千五百八十萬八千圓にして、右合計總額が二百一億七千三百七萬六千圓である。これを今議會成立の追加豫算を含む昭和十八年度一般會計豫算に比較すれば、歲出において五十七萬一千三百十六萬八千圓、歲入において五十七萬九千九百八十六萬圓の各增加となつてゐる。

右歲出の中陸海軍兩省の經費百八十三萬圓を除く文治各省の經費二百一億七千百二十四萬六千圓についてこれを特殊經費および一般經費にわけてみれば、特殊經費百四十五億四千七百五十二萬六千圓、一般經費五十六億二千三百七十一萬九千圓にして、これを前年度豫算に比較すれば特殊經費が四十八億三千四百三十九萬一千圓の激增となつてゐるに對し、一般經費の增加は八億七千八百七十七萬六千圓に留まつてゐる。すなはち臨軍特別會計へ繰入れ七十二億五百余萬圓（前年度比較二十八億三千六百余萬圓增）、國債費三十三億四千六百余萬圓（九億九千余萬圓增）、地方分與稅分與金特別會計へ繰入れ九億百余萬圓（三億二千九百余萬圓增）、國庫豫備金二十一億圓（五億二千萬圓增）、年金および恩給五億六千八百余萬圓（八千九百余萬圓增）、その他地域特別會計への經費補充金、警察費連帶支弁金、國民學校教員俸給分擔金、軍事扶助費、稅務交付金などの特殊經費が十九年度歲出膨脹の主軸をなしてゐるのである。しかして五十六億圓の一般行政經費の中新規重要經費は、外交外政强化費六千八百余萬圓、生產增强および低物價維持費十四億七千九百余萬圓、海陸空輸送力增强費三億六千百余萬圓、食糧生產對策費十一億一千三百余萬圓、國

民醫療および國民保健費六千九百余萬圓、國民生活および人口對策費一億六千五百余萬圓、軍人援護費一億六千九百余萬圓、文教刷新費四千九百萬圓、科學および技術振興費七千余萬圓、防空費一億九千三百余萬圓、企業整備費二億七千百余萬圓、災害對策費七千九百余萬圓、合計四十億九千余萬圓にして一般經費の七割强を占めてゐる。

しかしてこれら新規經費は豫め閣議の先議において施策の重點を畫定したところにもとづいて物資勞務など動員諸計畫との緊密な調整をはかり優先的に豫算化が行はれたもので、それが現下の戰局に即應し最も機宜適實なる戰時緊急政策である意味においていまや一般會計の歲出といへども直接戰費たる臨時軍事費に準じ總力戰における銃後の戰費として、いはゞ準軍事費といふべき性格を保有するにいたつてゐる。

右歲出に對する歲入の內譯は普通歲入百三十九億四千百六十六萬八千圓、公債金六十億八千九百八十六萬一千圓、前年度剩餘金受入一億四千百五十四萬六千圓、合計二百一億七千三百七萬六千圓にして、普通歲入中租稅收入は經常部八十六億八千九百九十七萬八千圓、臨時部二十億七千二百六十八萬八千圓、合計百七億六千二百六十六萬六千圓、ほかに地方財源たる還付稅收入二億三千三百四十萬三千圓、印紙收入二億一千八百七十七萬一千圓が見込まれてゐる。

3　臨軍への他會計繰入れの增加——健全性の指標

臨時軍事費豫算の昭和十九年度の追加額は前年に比しさらに百十億圓の巨額を加へ三百八十億圓となつたが、これは昭和十二年臨軍特別會計設置以後第八十一議會までに成立した臨軍累計現額七百四十一億二千八百五十六万七千圓（昭和十六年十一月の大東亞戰勃發に備へた豫備費外豫算超過支出すなはち第二豫備金支出七千四百余萬圓、國庫剩餘金支出一億

千八百余萬圓を含む）に對しまさに五割一分強に相當し、今年こそ勝利への年と期する十九年度豫算の決戰的性格を端的に看取することができる。

三百八十億圓の內譯は本費三百十億圓、豫備費七十億圓となつてをり、これが財源は公債金二百八億九百七十五万二千圓、借入金七十億圓、他會計よりの繰入れ八十五億二千二十二万三千圓、雜收入十六億七千二万三千圓、合計三百八十億圓である。從つて一般會計、特別會計、臨軍特別會計を通ずる公債發行豫定總額は二百八十五億二千三百三十八万六千圓にして、十八年度に比し六十六億四千三百余萬圓の增加を示してゐる。

臨軍財源としての他會計よりの繰入れ八十五億二千二十二萬三千圓の內譯は一般會計より七十二億五百六十四萬一千圓（前年度比較二十九億六千六百余萬圓增）、朝鮮、台灣、樺太、關東局、通信事業、帝國鐵道の各特別會計より十一億八千四百五十萬二千圓（六億四百余萬圓增）、合計八十三億九千十四萬四千圓（三十五億七千百余萬圓增）の十九年度豫算計上額のほかに、舊臘二十七日より實施された煙草値上げによる十八年度內の專賣益金の增加額一億三千七萬九千圓が十八年度追加豫算をもつて臨軍に繰入れられてゐる。

年々急調をもつて膨脹する戰時財政需要を充足する上においてもちろん政府は公債政策に依存するほかないが、國家の支出增加を原因として激增する國民所得についてはその消費的流通を可及的に抑止し、國民消費生活を最低限度にまで切詰め、國民經濟の許容する範圍において殘餘の資金をあげて國家資金として吸收するために、貯蓄增強ないし公債の消化とともに租稅の增徵をはかることが戰時財政の基礎を强固ならしめる絕對の要請であり、戰費調達手段として主要交戰各國の動向も戰時租稅政策に相當の重點をおいてゐる。わが國においても支那事變勃發直後の昭和十二年八月北支事件特別稅法による第一次增稅を斷行して以來、戰費の增大に對處するための相つぐ增稅は今回の十九年度の大增稅をもつて八回の多きにおよんでゐる。また增稅とともに交通、通信料金、專賣品たる煙草の値上げなども實施せられ、これらの增收額がすべて直接戰費たる臨時軍事費特別會計の財源として繰入れられてゐるのであつて、臨軍への他會計からの繰入れの增加はいはゞわが戰時財政の健全性の指標ともいひ得るのである。

一般會計より臨軍への十九年度の繰入れ增加額二十九億六千六百余萬圓は、直接間接兩稅の大增稅による初年度たる十九年度の增收額二十二億一千百三十二萬九千圓（還付稅收入を除く）、煙草値上げによる增收見込額五億二千八百三十二萬一千圓および森林收入增加二億一千二百六十九萬三千圓がその主なるものである。各特別會計よりの繰入れ增加六億四百余萬圓は、帝國鐵道、通信事業兩特別會計における運賃通信料金の改正、通信事業特別會計より一般會計への納付金八千二百萬圓の撤廢、內地に對應する外地會計の增收、專賣煙草の値上げなどによるものである。

しからば十九年度の一般會計、臨軍特別會計の歲出純計五百九億圓のうち、公債收入と租稅收入がいかなる比率を示してゐるかをみれば、印紙收入、專賣局益金、燃料局益金、相續稅物納收入、日銀納付金などを含み還付稅收入を含まざる租稅的收入は百三十八億一千六百萬圓にして二割七分となり、一般會計および臨軍特別會計の公債額合計二百六十八億九千九百萬圓は五割二分を占めてゐる。しかして昭和十一年以降每年度の歲入中の公債と租稅の割合はつぎの通りである。

昭和十一年度以降歲入中公債と租稅との百分比

年度	歲入純計	租稅收入	公債	其他の諸收入
一一	二、三三百萬圓	五六%	二六%	一六%
一二	五、四五四	二四	五六	一〇
一三	八、一六三	三〇	六三	七
一四	九、〇三九	二四	五八	八
一五	一一、三〇四	三八	五三	九
一六	一九、一九七	二七	六六	七
一七	二四、五六八	三三	五八	九
一八	三七、〇〇三	二六	五六	一八
一九	五〇、九六七	二七	五三	二〇

備考一、歲入純計は一般會計歲入と臨時軍事費特別會計との合計額より臨時軍事費特別會計へ繰入れたる額を控除したる額による。

二、租稅收入には印紙收入、專賣局益金、燃料局益金、相續稅物納財產收入、日本銀行納付金、競馬會納付金（昭和十九年度はなし）および特別會計より臨時軍事費特別會計に繰入れたる額を含み還附稅收入を含まず。

三、借入金はその他の諸收入に含めた。

四、昭和十七年度までは決算額（たゞし臨時軍事費特別會計は豫算額）昭和十八年度以降は豫算額による。

右によれば急激膨脹の一途をたどる戰費需要に對し、これによく追隨して租稅收入の增加をはかることがなか〳〵困難であり、歲入總額に對する租稅割合がやゝもすれば低下せんとする傾向がうかゞはれるが、同時に支那事變以來政府があるひは直接稅、あるひは間接稅を中心とする相つぐ增稅を斷

行し、また新税を創設するなどなみ〳〵ならぬ努力を拂つて來た苦心の跡をも看取し得るのであつて、歳入總額に對する公債金割合はこゝ兩三年漸減をすら示してをり、公債偏重の危險は全くない。しかして公債偏重を抑止するものとして政府の增税策とともに看過すべからざることは、公債收入租税的收入以外の借入金その他諸收入の增大せる事實である。借入金その他諸收入の歳入中の比率は前年の一割八分から、十九年度は二割に增大し、十九年度の臨軍追加豫算には既述のごとく借入金七十億圓、雜收入十六億七千余萬圓の巨額の歳入計上がなされてゐる。

4 共榮圏共通財政の躍進

臨軍財源として七十億圓の計上をみた借入金制度は、昭和十八年度の臨軍追加豫算においてはじめて實現をみたもので、大東亞共榮圏における共通財政の觀念にもとづき、共榮圏內各域がその能力に應じ大東亞戰の戰費を分擔するといふ日本財政史上一時期を畫したものであるが、十九年度の借入額七十億圓は十八年度の三十三億圓に比較し、三十七億圓の增加にして一躍倍以上となつてゐる。右は現地において南發金庫券などの發行によつて調達されるのであるが、現地の物資、勞務の調辨可能力を適實に算定したものであることは議會において賀屋藏相も言明してをり、これは共榮圏の各域の資源の開發、生產の發展增加に應じ南方現地住民の戰費負擔力の飛躍的增進を如實に示すものであり、大東亞諸民族が大東亞戰の理念に徹し東亞の自存自衞のため協力提携する力强い顯現である。同じく臨軍に計上された雜收入十六億七千萬圓は鹵獲品その他軍需品の拂下げによるもので、これと借入金の合計八十六億七千萬圓は直接わが國民負擔からは除外されるわけであり、そのわが戰時財政への寄與は輕視し得ない。

5 臨軍、一般會計の一體化

以上十九年の豫算を概觀してわれ〳〵の特に注意をひく點は、一般會計豫算が非戰時性を完全拂拭し準軍事費的性格を加へることによつて臨軍との間の實質的な區別をなくするにいたつてをり、また臨時軍事費特別會計については一般會計など他會計よりの繰入れおよび共榮圏負擔の增加により公債財源に對する依存度において一般會計などとの平準化が行はれてゐる事實である。すなはちその形式は別として實質的には一般會計臨軍特別會計の一體化が進められてゐるのであつて、臨時軍事費のいはゞ臨時性が稀釋化されつゝあるのである。今年こそは勝利の年と期する決戰卽應の態勢とともに、あくまで敵を擊摧し擊ちてし已まむ長期戰に對處する財政上の均衡についても細心な配意がなされてゐることを看過してはならぬ。

二 戰費充足に大增税

1 十九年度增税の畫期性

五百九億圓の尨大財政需要を充足するため十九年度において三十二億一千百二十二萬九千圓に上る直接間接兩税の大增徵が行はれることは既述の通りであるが、地方財源たる還附税增收をもあはせると、今回の增税によつて初年度二十二萬七千二百余萬圓、平年度二十五億七千六百余萬圓の增收が見込まれてゐる。今回の增徵がいかに畫期的大規模のものであるかは最近二回にわたつて行はれた增税と對比すれば明瞭である。すなはち十八年度の間接税など增税の增收見込額は平年度において十一億四千六百余萬圓、昭和十七年四月より實施された直接税を中心とする增税の增收見込額は、平年度において十一億五千六百余萬圓にして、これらの增徵がすでにかつてみざる巨額のものであつて、それ以前についてみれば昭和十二年の臨時租税增徵法が三億五千萬圓、同年七月北支事件の勃發とともにこれが經費に充當のため臨時議會を召集して創設した北支事件特別税が約一億圓、翌十三年北支事件特別税を吸收した支那事變特別税法が約三億圓（約一億圓の北支事件特別税吸收のため純增徵二億圓）十四年の右特別税法の改正が約二億圓、十五年には中央地方を通ずる税制の根本的改革がなされ現行制度を確立したのであるが、その增收額七億五千萬圓（地方分與税制度を採用したため國庫の純增收はその內四億四千余萬圓）、十六年の酒税など間接税の增徵が約六億圓であつて、いづれも十億圓に滿たざるものであつた。それが大東亞戰の勃發による戰費の飛躍的增大により十七、十八兩年度の各十一億數千萬圓に達する增税が行はれ、さらに十九年度には一擧に約二十五億圓と文字通り前代未聞の大增税が實現するにいたつたわけで、二十五億圓といへば支那事變以來七回におよぶ既往の增徵額の合計約四十二億圓の過半を占めてをり、今回の增税規模がいかに大なるものであるかを示すと同時に國庫收入の充實に對する政府の强固な決意を現してゐる。

2 税率引上げに重點を指向

かくのごとく今回の增税は財政强化に重點を指向してをり、その方法としては、各税種についてそれ〴〵大幅に税率

を引上げる方針をとりいはゆる新稅は實現をみなかつた。すなはち租稅體系の變更には手を觸れず專ら稅率の引上げによる增收に重點をおいた結果、民間一部に論議されてゐる財産稅もしくは一般賣上稅、および戰時意識の昂揚をはかり國民各階層に戰費負擔の機會を均等ならしめる意味において經濟聯盟などから設置を主張された人頭稅的な愛國稅ないし國民稅もかへりみられなかつた。しかして增稅の中心は直接稅における分類所得稅の大體百分の五の稅率引上げであつて、たとへば甲種勤勞所得百分の十に對し五割の增徵にあたり、綜合所得稅についても分類所得稅との均衡を保持するため稅額において約二割の增徵が行はれ、分類綜合兩所得稅の平年度增收見込額十一億四百萬圓は總增收額二十五億七千萬圓に對し四割四分三厘强を占めてゐる。直接稅では法人稅、特別法人稅、臨時利得稅、相續稅、配當利子特別稅の全面的稅率引上げが行はれ、さらに通行稅、登錄稅のほか地方財源の還附稅たる地租、家屋稅、營業稅についても增徵がなされてゐる。間接稅についても酒稅をはじめ清涼飮料稅、砂糖消費稅、織物消費稅、物品稅、遊興飮食稅、特別行爲稅、入場稅、廣告稅、印紙稅、骨牌稅の十一稅種にわたつて增徵が行はれてゐる。

3　新興所得階層をも捕捉

直接稅の關係において注目すべきは、第一に分類所得稅の源泉徵收制度を擴充し、從來乙種の事業所得として賦課課稅の對象となつてゐた日傭勞務者の報酬賃金および原稿料講演料などを新に丙種の事業所得として捕捉し、報酬賃金などの支拂者をしてその支拂ひと同時に徵稅せしめることとなつた點である。增稅で課稅が高率になるとともに擔稅の公平を期する上から課稅洩れのないやう、賦課徵收制度の適實が要求されるのは當然で、いはゆる時局の波に乘つて急激に所得の增加してゐる階層、すなはち大工、左官、石工、土工、沖仲仕、荷扱運搬夫等々日傭ないし自由勞務者についてはその實態を把握することが困難なために稅務署の認定賦課から放置されてゐてよいわけはない。今回勞務報國會乙種會員登錄の約百五十萬人を主たる對象として丙種事業所得の源泉徵收が創始されることとなつたのである。しかして基礎控除、扶養控除、生命保險料控除などについては雇傭主親方らにおいて勞務者の生活の實態を把握することが困難であるため、日給に對する一日いくらの總括的概算的な控除方法の方が便宜が多い。この一日の概算控除額は三圓と定められ、勞報乙種會員數百五十萬人のうち百十九萬人程度が稅率百分の十五の丙種事業所得の源泉徵收を受ける者と見込まれるにいたつた。すなはちこの百十九萬人の新擔稅者については所得の增加による浮動購買力の非戰時的橫行をかなり封殺することが期待できるわけで、購買力吸收に效率的な作用をおよぼすものとして丙種事業所得創設の意義は十分評價されてよいが、自由勞務者自由職業者たる新興所得階層の捕捉はこれをもつて足るものではない。しかも戰時下特に納稅を通ずる應能奉公の均衡、過剩購買力の完全吸收が絕對に要請される以上今後この點について一段と徵稅制度擴充の新構想が練られねばならない。

4　勤勞所得擔稅者新に二百萬人

つぎに一般サラリーマン層の甲種勤勞所得について百分の十の分類所得稅率が百分の十五に引上げられたが、基礎控除、扶養控除、生命保險控除の金額が据置かれたため源泉徵收の勤勞所得納稅義務者として新に二百萬人の擔稅者が登場することとなつた。假りに年收千五百圓扶養家族妻および子供三人の勤勞所得者を例にとれば、六百圓を基礎控除し舊稅率で年稅額九十圓にして扶養家族控除年九十六圓を差引き納稅義務を負はないが、改正稅率では稅額百三十五圓となり新に扶養控除の差額三十九圓の納稅義務を生ずるわけである。かくて甲種勤勞所得の新納稅者二百萬人を加へ勤勞所得の源泉徵收を受けるものは一千萬人に達する見込である。從つて今回の增稅による大衆的購買力の吸收が消費抑制とともに資金の決戰配置に資し得る面は相當のものと期待し得る。稅率改正の前後における稅負擔額を對照すれば次表の通りであつて、百分の五の稅率引上げによつて稅負擔額が從來の一躍六倍にも達するものがあり今回の增稅の畫期性をよく示してゐる。

改正前後における甲種勤勞所得の所得稅負擔額

區分	獨身者	妻のみ	妻及子一人	妻及子二人	妻及子三人	妻及子四人	妻及子五人	妻及子六人	妻及子七人
所得金額									
右改正前	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
左改正後	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓

5 少額預貯金の非課稅撤廢

少額預貯金の配當利子非課稅の制度が廢止されることとなつたのも注目すべき改正の一つである。今回の增稅によつて元本五千圓を超える普通銀行預金の利子、合同運用信託の利益に對しては百分の二十、元本五千圓を超える貯蓄銀行の据置貯金および普通貯金、產業組合などの貯金利子に對しては百分の十五課稅されることになるが、現在非課稅の元本五千圓以下の貯蓄銀行の据置貯金、普通貯金および產業組合などの各種貯金をそのまゝにしては稅引利廻りの關係から預金の移動を生ずるおそれがあるので、今回これらの非課稅預貯金利子に對しても百分の五の新課稅をなすこととなつた。同樣の意味において五千圓までの非課稅郵便貯金利子について一厘二毛の引下げがなされ貯金利子は二分六厘四毛となつた。元本五千圓以下の普通銀行預金については元本五千圓を超えるものとなんら區別なく現行稅率は百分の十五の配當利子課稅となつてゐるが、普通銀行も貯銀業務兼營など大衆資金の吸收をも行ふにいたつた事情を考慮し、元本五千圓以下の比較的少額の普通銀行預金は課稅を輕減されることとなり、貯蓄銀行の据置貯金、普通貯金および產組貯金と同率の百分の五となつた。すなはち少額預貯金にも課稅する反面少額貯蓄の增強に配慮がなされてゐる。また長期貯蓄奬勵の建前から三年以上の長期預貯金には百分の五の課稅輕減が行はれる。（この長期預貯金の優遇は元本五千圓以下のものには適用されない。）なほ國民貯蓄組合斡旋の預貯金については依然非課稅が据置かれ非課稅限度も現行七千圓が一万圓に引上げられ一層の貯蓄推進策が增稅措置に織込まれてゐる。

間接稅は禁止稅色を濃化

間接稅について稅率の引上げが行はれるとともに一部課稅

範圍の擴張をみたが、しかしながら間接稅が大體において國民各階層の平等負擔となる特質にかんがみ、國民生活に切實な關係を有する必需物資にはあるひは稅率を据置き、あるひは增稅率の緩和をはかるなど擔稅力に應ずる負擔公平に留意してゐる。しかして奢侈的不急消費に對する各高率課稅は各人の所得をその消費の機會に捕捉して國庫增收を期する一面、いまや禁止課稅の性質を濃化するにいたつてゐる。なほ一旦捕捉された稅對象についてこれが逋脫を防止し徵收の適實を期するために、脫稅犯などで再犯その他惡質のものは五年以下の懲役に處し得ることとして、新に體刑を採用し、脫稅額の五倍相當額の罰金も十倍までに引上げられた。また遊興飮食稅などにおいて消費者が業者から轉嫁されて支拂ふ稅金についての不安を除くため、業者が料金を領收したときに必ず稅金相當額の納稅證紙を領收書に貼用することとし、納稅證紙は稅務署が業者に交付し、業者が稅の申告納入をなす際同時に納稅證紙の受拂ひをも明確ならしめ徵收の適實を圖る新施策が實施される（一人一回五圓未滿の大衆的食堂の料金については稅率を五階級の定額制に改め、稅額を表示した納稅切符が領收書代用として消費者に交付せられる）。また從來小賣の段階において課稅された物品稅の品目中の一部は製造者課稅に組替へられた。これも徵稅確保の一策にほかならない。

稅收中における直接稅、間接稅の比率はつぎのごとくであつて、昭和十三年より注目すべき轉換を示してゐる。すなはち昭和十二年度においては間接稅收入の方が直接稅收入より優位を示してゐたが、昭和十三年以來全く逆となり、爾來每年この傾向を持續し、十九年度は直接稅五八パーセント、間接稅三八パーセント、その他四パーセントとなつてゐる。膨脹する國家財政の施行が國民所得を增大せしめる一方、經濟諸施策が消費統制に集中し數次の間接稅增徵がよく國民消費の抑制に作用してゐる事實を顯示してゐる。

昭和十二年度以降各年度收入額（單位百萬圓）

	直接稅	%	間接稅	%	その他	%	合計
十二年度	八七	四五	八四〇	四三	二六	七	一、九三
十三年度	一、三八	五三	九三	四三	一五六	六	二、三四
十四年度	一、六七	五五	一、三一	四三	二七	六	三、九六
十五年度	二、六四	六四	一、二八	三〇	三五	六	四、二七
十六年度	二、一六二	六四	一、五七	三一	三五	五	四、九二
十七年度	四、七六	六四	二、三四	三一	三九	五	七、五九
十八年度	五、一〇五	五六	三、六三一	四〇	三六一	四	九、〇七
十九年度	七、三六三	五八	四、八九	三八	三五六	四	三、七一八

（註）十七年度までは決算、十八年度以降は豫算

一、稅收入額は租稅のほか還附稅收入、印紙收入、專賣益金および燃料局益金を含み、北支事件特別稅を含まず。

二、直接稅、間接稅およびその他の區分左の如し。

（イ）直接稅＝所得稅、法人稅（法人資本稅）、臨時利得稅、特別法人稅、配當利子特別稅（利益配當稅、公債および社債利子稅）、外貨債特別稅、相續稅、鑛區稅（鑛產稅）、地租、家屋稅、營業稅（營業收益稅）、取引所特別稅（取引所營業稅）

（ロ）間接稅＝酒稅、淸涼飮料稅、砂糖消費稅、織物消費稅、揮發油稅、物品稅、遊興飮食稅、特別行爲稅、關稅、專賣局益金、燃料局益金

（ハ）その他＝建築稅、取引稅、有價證券移轉稅、通行稅、入場稅、電氣瓦斯稅、廣告稅、馬券稅、噸稅、印紙收入

7　今後の趨勢は大衆課稅

今回の增稅が現行の租稅體系のもとに稅率の大幅引上げを行つたことは既述の通りであるが、今後の租稅政策の見通しとしてさら稅率引上げの餘地を殘してゐるだらうか。今回の增稅によつて稅率の最高は、分類綜合兩所得稅をあはせ不動產所得の五十萬圓を超過するものは分類の二十一、綜合の七十四の合計すなはち百分の九十五の高率に達してゐる。稅率そのものが引上げ餘地をあまり殘してゐない。しかも十七年度の調査によれば所得年額六百八十二萬圓を最高峰として四十萬圓以上の高額所得者數はわづかに百八十六人にすぎない。今後の租稅政策が大衆課稅に向はざるを得ざる趨勢はおのづから明かであらう。一般大衆が負擔し稅率が低くとも集積すれば巨額となるもの、しかして抑制を强化すべき國民消費を基礎とする間接稅によらず、尨大豫算のうちに約束されてゐる資金の撒布によつて增大すべき國民所得に直接志向しなければならない。

三　國民生活水準の確保

1　國民所得六百億圓

衆議院豫算總會において藏相は十九年度の國家資金計畫の概要を明かにし、國民所得を約六百億圓と說明した。十八年度と比較して百億圓の增加である。しかして藏相の說明によれば百億圓の所得增加は、航空戰力の增强その他物的戰力增强のため、國民勤勞の決戰的增加による生產力の增加を基礎として見積つたものである。しかし戰力增强のためにはその實現に要する資本財、勞働力の供給の可能性と緊密に照合しなければならない。資金と財貨生產量との不均衡を來たさん

か、たちまち惡性インフレーションとして國民經濟を破綻に陷れる。また戰力增强のために生産される軍需財の大半は非生産的に消費されるもので、從つてそこにはつねに資金と物資との間の不均衡を惹起すべき原因が內包されてゐるといはなければならない。かゝるインフレーションを抑制し低物價政策を堅持するために、戰時經濟統制の重要方策として生産力擴充による財貨供給の增大、切符制割當制による財貨の配給統制が行はれ、貨幣部面からは非生産的な軍需財生産からの所得部分が過剩購買力として吸收されなければならない。公債消化を目標とする貯蓄運動、增稅がその方策である。しかして國民所得のうち消費資金は可能な消費財生産に對應するものでなければならない。

2 消費資金更に十五億圓壓縮——消費の戰時的組織化

十九年度六百億圓の國民所得の配分計畫は財政資金約四百二十五億圓、生産擴充資金約六十億圓、國民消費資金約百十五億圓となつてゐる。四百二十五億圓は五百九億圓の豫算から國民の直接負擔とならない借入金などを除いた額であり、このうち約百四十億圓は租稅的收入をもつて賄はれるため、殘りの公債依存の二百八十五億圓と生産擴充資金の六十億圓

が國民貯蓄によつて充足せられねばならぬ。しかして國民總所得から財政資金、生擴資金を差引いた殘りが國民の消費資金である。十八年度の配分計畫と比較して十九年度の消費資金は十五億圓の壓縮を受けてゐる。國民はこの消費資金の範圍內で國民の最低生活水準を維持確保しなければならないのである。またかゝる消費資金の樞定と並行して生活必需物資の割當配給制、切符制がよくその生産と需要とを適合せしめなければならない。

戰時國民生活は日常生活から一切の安逸と浪費を除去し、あくまで簡素質實でなければならないが、同時に戰力の人的基礎を維持培養する見地から强靱な國民生活の基底を確保すべきものである。國民生活はいはゞ鈶後の戰線である。この狀況は直接間接國家の戰力に影響するのである。すなはち國民生活における消費の抑制は眞實は消費の戰時的組織化でなければならない。この意味において最低水準においてではあるが强靱な戰時國民生活確保のため、政府は每年生活必需物資動員計畫を策定し、その內容も逐次綜合的計畫性を增し原料物動から製品物動へと徹底し、著しく高度計畫化の跡を示してゐる。十九年度生必物資動員計畫はいまだ決定されないが十八年度の計畫においては、主要食糧について、米、麥、甘藷などそれ〴〵別個の計畫對象となつてゐたものを、新に大豆、玉蜀黍、乾麵などを加へこれを綜合して主要食糧として全體的な配給基準量を確保することとなつた。家庭燃料についても、六大都府縣その他十五縣には木炭、煉炭、豆炭、ガス、薪などを綜合して熱量に換算し一定量の確保が計畫された。纖維品についても、計畫が一步前進し細別的な最終製品にまで物動化が行はれた。生活必需品中の工場製品については、必要原料の確保から製品の配給にいたるまで細密な需給計畫がつくられ、それ以外の農林水產物は、集荷配給を國家の手で强度に統制して需給の的確公平を期した。また新たに小麥粉、清酒、合成酒、燒酎、ゴム靴、地下足袋、石鹼が計畫物資に加へられた。

3 食糧確保が戰爭意志の中核

十九年度の消費統制がいかなる具體化を示すか、昨年十一月の行政機構改革によりいはゆる民需省たる農商省の誕生をみた矢先でもあり一層施策の推進が期待される。今議會においても食糧の配給、改善などについて論議されたが、食糧問題は結局は國民の戰爭意志の中核とも目すべく、今後食生活の積極的合理化について實踐努力がなされるとともに、徹底した配給機構の確立によつて闇取引、橫流れなどを防止し、全食糧を國民生活の隅々にまで公正に配給する。それによつて一般勤勞者の最低生活を確保し、明朗な生產活動を促進することが最も緊切な課題である。

衣料方面にはいまだ節約の餘地が殘つてゐるのではないか。衣料切符制の實施は昭和十七年二月からであるが、昨年八月「戰時衣生活簡素化實施要綱」にもとづいて纖維局の製造制限規則および配給消費統制規制の改正が行はれ、纖維品全般にわたり種類規格の單純化、高級不急不要品の生產抑制、衣料切符點數の改正などが實施された。十九年二月には衣料切符の更新期に際して從來の一人百點（農村は八十點）がさらに四十點ないし五十點と思ひ切つた削減がなされ、それは年齡によつて差等が附せられてゐる。

國民生活の具體的內容といへば衣、食、住のほかに保健衞生、休養娛樂等々きはめて多岐廣汎にわたるが、食糧問題の核心が定立され衣住の簡素化が確立されゝば戰時國民生活はまづ軌道に乘るといへよう。かくして國民生活費の合理的切下げが軌道に乘れば、國家資金計畫にもとづく資金の循環は完全に確保され得る。貯蓄の增强も納稅も圓滑な推移をたどり尨大戰費も支障なく調達され得るのである。

4 貯蓄增加の基底は生活の安定合理化

十九年度の國民貯蓄增加目標額は三百六十億圓と決定され

た。國家資金計畫において國民貯蓄によつて充足すべき資金需要は、財政資金のうちの二百八十五億圓および生産擴充資金の六十億圓の合計三百四十五億圓であるが、貯蓄目標額はこのほかに企業整備の進行による既設設備の單純な金錢化、すなはち生産活動には關係なく從つて國民所得を形成しないところのいはゞ資金の水平移動とみられるもの約七億圓、および通貨膨脹により意外に個人の手持現金が增加してゐる實情にかんがみ、この退藏現金の吸取をも見込んで三百六十億圓となつたのであつて、積極的に資金の吸收をはかり通貨の膨脹を抑止せんとしたのである。十八年末の日本銀行券の發行高は三十日の最高百四億八千萬圓に達し、また昨年中の年間平均發行高は七十億六千九百餘萬圓にして十七年に比して十八億千三百餘萬圓の增加となつてゐる。藏相は議會の財政演說でこれを戰時財政の運營にもとづく我國財政經濟の規模擴大にもとづくものと說明してゐる。財政規模の擴大は戰力の增强であり、その反映であるかぎり通貨流通量の增加は必ずしもおそれるにおよばないが、國民消費が資金計畫ならびに生必品物動によつて限界づけられてゐる以上、この限界以外の浮動購買力の吸收に向つて强力に國民貯蓄が推進されなければならない。貯蓄增强の基底として問題は國民日常生活の合理化と安定化に還つてくる。今議會通過の法律のうちには昭和十七年六月から實施の勞務者年金制度の改正擴充が入つてをり、會社銀行商店の役員以外の從業者は男女を問はず報酬額のいかんによらず强制的に被保險者となり、被保險者は現在の三百八十萬人から七百三十五萬人へとほゞ倍增が見込まれ、保險料（半額事業主負擔）の增額とともに保險掛金も從來の年二億圓から七億圓に增加する。右は戰時國民生活の安定とともに貯蓄增强に對する寄與は大きい。さらに國民動員の强化擴充にともなふ被徵用者の優遇援護に萬全を期し、勤勞生活の保護强化にも遺憾なきを期することが貯蓄增强の緊要策であり、要するに國家資金計畫の圓滑なる運營は單に資金面からの施策にとゞまらず、低物價の問題をはじめ政府全體の諸施策に完全に依據してゐるのである。

附記。一、二月末閣議決定の決戰非常措置要綱にもとづく奢侈追放によつて遊興飮食稅、入場稅その他所得稅などにおいて四億圓程度の國庫減收が豫想されることとなつたが、不急營繕工事の停止や物動計畫の關係から豫算の實行上において節約額を抽出することによつて彼此豫算の收支は償ふものとみられる。二、物品、遊興飮食、入場、特別行爲の四增稅は二月中旬から繰上げ實施され、たゞ徵稅の適實を期するため創設された納稅證紙ないし切符の制度は準備の都合上いまだ實現してゐないが、高級遊興飮食などの停止によつて、納稅證紙制度はその創設目的の實體を大體において喪失したやうなかたちとなつてゐる。

日滿食糧計畫の一體性

柴田敏夫

一　戰爭完遂の二大要件

大東亞戰爭完遂の基底をなす戰力增强の根本的要素は、航空機增產を中心とする軍需生產力の增强と、食糧增產を中心とする國民生活の確保の二つである。この二大要件はあたかも車の兩輪のごとく、相ともに增產の成果があがつてこそ戰力の增强は可能なのであつて、いづれが缺けるとも戰爭の完遂は期しがたいことは明白である。その一要件たる食糧の增產は、外米輸入に依存することが不可能となつた現在、是が非でも食糧自給體制を確立し、外米依存脫却の態勢を完成することが大なる要請となつてくる。內地の食糧生產力に限度がある以上當然滿洲の沃野に一大農地を造成して、日滿を通ずる綜合的增產計畫を樹立し、これを急速に實施してもつて食糧自給體制に完璧を期さねばならぬ。かゝる觀點から昭和十八年度に入つて日滿兩政府の緊密なる提携による綜合增產計畫が日程にのぼることとはなつた。

滿洲における農產物の重點は舊來大豆にあり、米その他のものは、雜穀を朝鮮、北中支に輸移出する以外は概して滿洲國內の需要を充足する程度にとゞまつてゐたのであるが、日本の兵站基地としての滿洲の役割は舊來の狀態に甘んずることを許さず、進んで水田を主とする稻作地の一大造成計畫の樹立を必至ならしめたのである。

本論においては日滿綜合食糧自給計畫の大要を明かにせんとするのであるが、順序として一應日本側のこれに關する措置の大要と、內地、朝鮮および台灣における增產の概況について、まづごく簡單に觸れ、しかるのちに滿洲における食糧增產計畫の大要に關して沿革的に具體策について論述することにする。

なほ滿洲においては土地の面積の單位はヘクタールを用ひ、收量はトンを使用する。正確を期する上から本文においては、これをそのまゝ使用するが、これを換算すればつぎの通りである。すなはち一ヘクタールは一町步弱であり、一トンはおほむね七石に當る。たゞしこれは雜穀ならびに籾の場合であつて、玄米、精米については

籾（單位トン）×0.73＝玄米（トン）

玄米（トン）×0.94＝精米（トン）

精米（トン）×　7＝精米（石）

の數式により換算して概數を得ることとなる。從つて籾から精米となると0.73×0.94＝0.6862すなはち約六割八分六厘となり、さらにこれを石單位に換算すれば0.6862×7＝4.8034すなはち籾一トンから約四石八斗の精米を得ることとなるのである。

二　日本の措置

昭和十七年一月二十四日井野農相は第七十九議會において一議員の質問に答へて、日滿支食糧交流機關の設置について考究中なる旨をのべ、つぎに同年四月七日「東亞共榮圈內の主要農產物對策要綱」が策定せられて、日滿支、就中日滿を通ずる食糧自給の問題は漸次擡頭してきた。しかしこの「主要農產物對策要綱」は內地で十年間に米千二百萬石を增產し、約八千三百萬石の收量をあげ、麥類は三千八百萬石、甘藷は二十億貫、馬鈴薯は十億貫を目標とし、おほむね主食糧は內地のみで充足することとしてゐたもので、滿洲については大豆の生產增强に力を注ぐこととし、米は滿洲國內の需要を充たして自給を行ひ、そのほかに相當の貯藏米を持つといつた程度のものであつた。越えて十八年十月つひに滿洲國側より武部總務長官以下同國政府首腦の上京となり、農地大造成計畫を示して日本政府の協力を求めた。その結果十一月二十二日の閣議において、「滿洲國緊急農地造成計畫に對する協力援助の件」が決定せられ、技術、資材、機械、資金の各方面より徹底した援助を行ふこととなつたのである。さらにまた同年十二月二十一日の閣議においては、「日滿食糧自給に關する措置要綱」が決定せられ、こゝに日本側の措置は一應整つたのであつた。この要綱の骨子は

一、農商省內に農商、內務、大東亞三省その他關係各廳の係官をもつて協議會を設置し、各年度の各地域における生產計畫および需給計畫を調整する。

二、日滿各地域の增產確保上、必要なる資金、資材、勞力、技術などについては、各地域ごとに調達をはかるものとするが、必要に應じて能ふかぎり相互に協力援助することとし、特に滿洲國に對してはその實情に鑑み、日本側に

おいて極力援助する。

三、日滿各地域の食糧農産物價格の決定は緊密なる連絡をとつて愼重な取扱ひをする。

四、日滿各地域相互間、ならびに日滿の各地域と日滿以外の地域特に北支との間における食糧の交流については、各地域と緊密なる連絡をはかり輸送配分の圓滑なる運營を期する。

の四點である。

第一の協議會については、第八十四議會に提出された十九年度追加豫算案中にその運營などに要する經費として初年度分三萬圓を上程した。第二の日本側よりの援助の具體的內容は、造成費四億圓の半額たる二億圓を豫算外國庫負擔契約によつて支出し、技術指導については農地開發營團の幹部以下百名の技術陣が參加するほか必要なる資材を適宜供給することになつてゐる。かくて日本側の打つべき措置は一應の解決を見たわけである。

三　內地の食糧事情の輪郭

十八年產米の實收高は、六千二百八十萬石である。これは平年作と比較すれば約百萬石の減收であり、また豐作であつた十七年產米の六千六百七十七萬六千石に比べれば約四百萬石弱の減收となるのである。豐作であつた十七年產米の場合でも、一方麥類の不作といふことはあつたが、なほかつ相當數量の外米を輸入せざるを得なかつた。その時よりさらに約四百萬石の不足を豫想される十九米穀年度（十八年十一月から十九年十月まで）の食糧事情は、外米を全然輸入し得ぬ以上、相當窮屈となるのであつて、內地產米の供給力の不足は、麥類および諸類ならびに雜穀の大增產と、外地および滿洲よりの輸移入によつて補塡せねばならぬのである。麥類の作付目標二百萬町步の達成はすでに成功し、またその後の肥培管理も順調に進み、生產目標たる三千萬石の收穫は十分期待される實情にある。しかし麥類の收穫は大體において、六月以降でありその本格的な供出も七月下旬以降でないとみられない。從つてこれを主要食糧として需給計畫の中に操作し得るのはわづかに七、八、九、十月の三箇月ないし四箇月にすぎない。かつ麥類としては、主要食糧以外の部面に多くの需要を持つてゐるため、その增產收量を內地の食糧不足分のすべてに補塡することはできないのである。そこで諸類ならびに雜穀類增產の要請が必然的に起つてくる。諸類のうち甘藷については、生甘藷としてすでにほとんど全國にわたつて米の代替物として供給ずみであり、今後は生甘藷のほかに千切干甘藷としての供出を期待する實情にある。しかし甘藷の生產は終つたのであるから、米穀同樣、問題はその供出いかんにあるのみである。今後の諸類の增產について期待されるのは馬鈴薯の增產であつて、春馬鈴薯の一億二千萬貫の增產は必ず達成されねばならぬ。諸類について農商當局としては、昨年度の四ないし五倍程度を、主要食糧として需給關係の中に操作せんとしてをり、その達成いかんは本年度の食糧需給に影響するところ甚大なるものとされてゐる。雜穀についても可能なものは主要食糧として綜合配給せられるが、むしろ主たる用途は自家消費にある。それによつて農家の可及的節米を行ひ米穀供出の增大をはかるものである。

四　朝鮮および台灣の增產計畫

朝鮮からは從前一千萬石前後にものぼる米穀が內地に供給されてゐた。ところが昭和十四年の大旱魃以來、內地向供給力が激減し、同十七年にはまた大凶作の結果、十八米穀年度においては朝鮮米の移入はゼロであり、今米穀年度において內地に供給すべき十八年產米も、作柄がよくないため收穫見込は一千八百七十萬石程度で平年作を二、三百萬石下廻るものである。朝鮮における米の需給關係よりみて、現在平年作ならば四百五十萬石位は內地に供給し得るのであるが、昨今の工業振興による勞務者の增大、文化的水準の向上などにより、鮮內消費は增加の一途をたどつてゐる。右の趨勢にかんがみ、總督府當局では昭和十五年を起點とする米穀增產十五箇年計畫を策定し、昭和三十年において總目標三千八百六十三萬一千石の收穫を目途としてゐる。その方途としては大水利計畫を中心とする土地改良、貯水池の增設ならびに耕法の改良などがあげられてゐるが、從來、三年に一度の割で襲ふとされる大旱魃のため、朝鮮の米穀收量は二千四百萬石を最高として實に一千萬石の振幅をもつて上下してをり、これに對する根本的對策が成功せぬかぎり、上記の增產の達成は不安定たらざるを得ない。なほ麥については、十六年以降五箇年計畫により總生產高一千九百萬石、粟は同じく十六年以降五箇年計畫により總生產高五百五十六萬一千石、甘藷および馬鈴薯は十九年以降三箇年計畫をもつて、甘藷は二億五千萬貫、馬鈴薯は三億四千萬貫のいづれも總生產高を目標として計畫を進めてゐる。

つぎに台灣の米穀生產は九百八十萬石を最高とし、二百三十萬石を振幅として上下してゐるが、こゝにおける問題は製糖業その他工業部門との關聯がいかに調整されるかである。昨年來、甘蔗畑は漸次水田に轉換しつゝあり、甘蔗畑の二割

五分を占める水田甘藷のうち約三割をすでに米作に轉換し、一萬五、六千町歩が新しく水田として二回作による增産を期してゐる。さらに甘藷についても、甘藷畑に間作を行ひ相當の成績をあげてゐる。

以上內地および朝鮮ならびに台灣の食糧事情に關しごく簡單に略述したが、右にみるごとく、現在のところ內地、朝鮮、台灣の食糧生產力をもつてしては需要の絕對額を充足することは不可能である。こゝにおいて日滿綜合食糧自給計畫の樹立とその完遂は當然日程にのぼらざるを得なくなり、日本側としても滿洲國における一大農地造成計畫を根幹とする食糧增產計畫に對し、積極的な援助を行はんとするにいたる必然性が看取されるのである。

さて滿洲國の食糧增產對策の全貌はいかなるものか、順をおうてその概略をつぎにのべることとする。

五　滿洲國の食糧計畫の發展

1　戰時緊急農產物增產方策の策定まで

滿洲國において農產物の增產計畫が、經濟建設の一翼として最初に國家統制のうちに加へられたのは康德四年（昭和十二年）の產業開發第一次五箇年計畫においてであつた。これによつて流通部面に對する整備統制と、從來輸入にまつてゐた米、小麥、大麥などの特殊農產物の增產が行はれることとなつた。支那事變の勃發とともにこれに若干の修正が加へられ、さらに米穀統制法、主要糧穀統制法、重要特產物專管法などが相ついで實施をみ、他方康德七年（昭和十五年）六月の行政機構改革に際しては、產業部の二局を占めるにすぎなかつた農業關係官廳を獨立せしめ興農部を創立するなど、農業生產の增強體制は着々整備されるにいたつたのである。さらに康德八年（昭和十六年）には全農產物の專賣的集荷配給機關たる滿洲農產公社が創立せられ、これをもつて滿洲國における農業統制はほゞ形をとゝのへた。つぎに康德九年（昭和十七年）建國十周年をトして制定せられた「滿洲國基本國策大綱」の第四章經濟綱要において、特に農業施策に關する具體的方針が明かにされた。すなはち農業施策の重點を農村振興におき、增產を徹底して自給自足の確立および日支兩國に對する食糧ならびに油料農產物の基地たる使命完遂を期するため

（一）科學的計畫性の徹底、（二）自興村に對する施策の集中普及、（三）農業技術指導網の擴充特に第一線滿系技術員の養成、（四）畜力機械力利用による新農法の採用、

（五）小作制度の改善、（六）未耕地の計畫的開拓、（七）治水利水事業の促進、（八）農產物集荷方法の改善合理化とその徹底、（九）農業關係團體の中心たる興農合作社の育成强化、（十）農業特殊金融機關の設立による農業開發および農業金融の圓滑化、（十一）農事試驗機關の强化、（十二）特用農產物の耕地擴張を停止し、主として技術改善による增收達成。

などの十二項目を定めた。この基本國策大綱中の規定こそ、その後の「戰時緊急農產物對策要綱」、「戰時農產物蒐荷對策要綱」および農地造成計畫の根本をなすものである。つぎにこの兩要綱の具體的內容の概略について素描を試みる。

2　緊急農產物對策の內容

まづ「戰時緊急農產物對策要綱」は康德十年（昭和十八年）一月二十日の國務院會議において策定せられたものであつて、康德九年（昭和十七年）を起點とする產業開發第二次五箇年計畫における、二十二地區の重點的適地適作による增產達成を基底として、それとは別個に農業施策上の當面の緊急なる實施を要する事項を、八項目にわたりごく具體的に明示したものである。

まづ第一に計畫作物の作付面積の增加をかゝげ、計畫作物について地方別の最低作付面積を定め、その確保をはかるとともに、單位面積收量の增加をはかる。第二に農地の造成改良については、地方の實情に應じ、特定の團體、會社、または有力なる個人をして、積極的に未利用地、濕地、干潟地の開拓改良を行はせ、さらに水利組合の設置による土地改良の推進を期する。第三に廢耕を防止するため、小作期間の延長および小作條件の改善を行ひ、一方荒地については縣または村で管理せしめることとする。第四に勞力需給を確保するため、青少年學徒、協和青少年團などの勤勞動員を行ひ、また離農防止の措置や、都市非生產的人口の地方疎散などを行ふ。第五に出荷量に應じ特定の生活必需物資を農民に給付し增產意欲の昂揚をはかる。第六に農業金融と計畫作物の增產集荷との關聯を緊密にするため必要なる措置を講ずる。その方法として營農資金の貸付は前年度の出荷實績を基準とし、康德十年度（昭和十八年度）の作付面積および出荷豫定量を勘案して行ふこととし、貸付總額ならびに貸付限度の引上げを行ふ。第七に化學肥料および農業藥劑を效率的重點的に配給する。第八に緊急增產の具體的處置として早蒔（早期播種）、完全除草、土糞倍加を徹底的に行ひ、最小限一割增產を達成する。

以上が「戰時緊急農産物增產方策要綱」の概貌であるが、そのねらひは最低作付面積をまづ確保し、その上に勞力、肥料、資本を集中的に投下し、さらに農業技術の注入、荒廢地、未利用地の開發、土地改良の推進などを行ふ。要するに當面の問題を最も集約的な方法論をもつて解決せんとするものである。

この緊急增產要綱にもとづいて各種の實施要領が決定され、それ〴〵さらに具體的な方策が實施されたのである。中でもつぎにのべる蒐荷對策と最も關係の深い「增產割當實施要領」はかなり徹底したもので、生產出荷責任體制を確立し、その遂行については、直接指揮にあたる官吏に大きな責任を負はせてゐる。まづ行政機關を通じて順次、縣、旗に割當てられた作物別增產量はさらに屯別に割當てられ、その遂行については屯長に責任を負はしめる。屯長は屯の割當量を地方の實情に應じて、屯內の土地所有者、または牌、あるひは牌を通じて個人に割當て、割當臺帳を整備して實績を監督する。割當の實績を確保するため、屯內有力者、篤農家、警官らを協力せしめて指導督勵にあたらしめ、また役畜、農器具、勞力などの相互融通、共同作業、學生學童婦女子の動員などを全面的に行ふ。成績のあがらぬ屯長は罷免せられる。かくのごとき強力なる責任體制の確立は康德十年（昭和十八年）の蒐荷において著功を奏したのであつた。

3 蒐荷對策

蒐荷は增產をしてさらに效果あらしめるためかなりの强力なる措置を必要とする。いかに增產の割當が强行され、責任體制が確立されても、蒐荷對策が當を得なければ、折角增產された農產物も正常なる機構に流入せず、需給計畫の操作は頓挫を來すのである。こゝにおいて滿洲國政府は康德九年（昭和十七年）十一月「戰時農產物蒐荷對策要綱」を策定し、全國の省長その他責任者を招集してその徹底を期した。こゝにおいて蒐荷についても責任體制は確立し信賞必罰の途は明かとなつたのである。本要綱は單官民一體となつて蒐荷の徹底を期するところに大きな眼目があり、割當量は必ず蒐荷するといふことを明示した點に實行上の强力な責任形態が力强く表現されてゐる。すなはちその責任形態としては官廳、農產公社などの蒐荷機關において責任量を蒐荷し得ないものは罷免の處分を受けることとなつたのである。

この蒐荷對策は、共同または集團出荷制度、小作料金納制、農村生活必需物資の特配制度などを含み、さらに農家の必要とする增產資金はすべて出荷割當量に應じてその額を決定されるなど、蒐荷を完遂するための具體的方策が盛りこまれてゐる。農家に最も直接的效果をおよぼしたのは、なんといつても生活必需物資の特配制度であつて、その具體的內容は、一トンの農產物出荷に對し綿布十五平方ヤール（夏服は五平方ヤール、冬服は十平方ヤールを必要とするから、十五平方ヤールで夏冬各一着分をつくり得る）、靴下一足、タオル一本を交付した。

右の蒐荷對策の確立遂行は必然的に副作用として行政の滲透をもたらし、官廳の擔當分野を組織的に明確にするとともに、個々の農家への行政力の滲透徹底が效果的になされたのであつた。

かくて康德十年（昭和十八年）秋の蒐荷はかなりの成績をあげたのである。それは右のごとき責任體制の確立のほかに、幸ひ豐作であり植付前に割當を行ひ、これにもとづいて作付を行つた農產物がかなりの收量を示したことによる。さらに一定量を必ず出荷させ、殘余の處分は農家が自由に處分することを默認したことも一つの效果的な方法であつた。

大農地造成計畫の全貌

さて以上で、滿洲國における農產物增產方策の進展に關しこれを沿革的にみてきた。これらの實情を基礎として滿洲國の大農地造成計畫は前面に押し出されてきたのである。思へば第一次五箇年計畫において、はじめて滿洲農業に國家的な統制力が加へられて以來、僅々數年の間に滿洲國における農業政策は急速度に進展してきたのである。大東亞戰爭完遂の絕對的要請に卽應してこゝに日滿綜合食糧計畫が、日滿兩國政府の緊急なる提携のもとに樹立せられ、滿洲國における「緊急農地造成計畫」が策定せられるにいたつた。

この「緊急農地造成計畫」は昭和十八年十月滿洲國側の自發的申出によつて登場し、すでに前述せるごとく、同年十一月二十二日の閣議において右計畫に對する日本政府の協力援助の方針が決定され、十二月二十一日の閣議においてさらに具體的なる「日滿食糧自給に關する措置要綱」が策定せられた。

さてこの「緊急農地造成計畫」とはいかなる具體的內容を持つものであるか。

まづその第一點は第二松花江地區に五萬ヘクタールの水田を拓くこと、第二點は東遼河地區に二萬ヘクタールの水田を拓くこと、第三點は既着手の鶴立崗以下十二地區の開拓地造成計畫をくり上げ實施することの三つであつて、いづれも昭和二十年度に完成することを實行上の目標としてゐる。

まづ第一の第二松花江地區は、第二松花江の河水を貯水した人造湖を水源として、下流一帶のうち最も灌漑に便なる部

分五萬ヘクタールの地域を選んで、まづ十九年度に二萬ヘクタール、二十年度に三萬ヘクタールの水田を造成せんとする計畫である。第二の東遼河地區は治水工事を行つて二十年度に二萬ヘクタールの水田を造成せんとするもの。第三の既着手地區の計畫の內容はつぎの通りで、そのうち十九年度には水田一萬五千七百六十ヘクタール、畑四萬三千二百三十五ヘクタール、二十年度には水田二萬三千二百五十九ヘクタール、畑二萬七千六百二十七ヘクタールをくり上げ完成する。

既着手十二地區農地造成目標（單位ヘクタール）

地區名	田	畑
鶴立崗	一、一〇〇	六、〇〇〇
雞江口	九〇〇	七、〇五八
太平嶺	四、八六九	七〇五
新開河	—	二、七四八
康　平	七三五	一一、〇九五
飲馬河	四八五	四五〇
呼裕原河	—	九、四〇〇
黑　台	三、八五〇	四、〇〇〇
盤　山	四、〇四六	六、六五二
甘南一期	九、七四〇	六、七七一
岔路口	三、〇〇〇	—
綏　化	三、〇〇〇	—

小　計　三〇、七二五　五四、八七九

その他

小規模地區	一七、二〇〇	三九、八〇〇
防水開發地區	一三、四二二	二〇、三八〇
總　計	六一、三四七	一一五、〇五九

從つて昭和十九年度における滿洲國の緊急農地造成實施面積は、水田が第二松花江地區の二萬ヘクタールと既着手地區の一萬五千七百六十ヘクタール、合計三萬五千七百六十ヘクタール、畑は既着手地區の四萬三千二百三十五ヘクタールであり、昭和二十年度においては、水田は第二松花江地區の三萬ヘクタール、東遼河地區の二萬ヘクタール、既着手地區のくり上げ分二萬三千二百五十九ヘクタールであり、畑地は既着手地區の二萬七千六百二十九ヘクタールである。従つて昭和十九、二十兩年度において、水田は總計十萬九千十九ヘクタール、畑は七萬八百六十二ヘクタールが造成されることとなる。これを表示すれば左記の通りである。（單位ヘクタール）

第二松花江地區	東遼河地區	既着手地區		
	水田	畑	水田	畑
十九年度	三〇、〇〇〇	—	—	一五、七六〇
二十年度	三〇、〇〇〇	—	—	三〇、〇〇〇

すなはち最も急を要する十九年度（二十米穀年度の需給計畫に算入）において粟は約五萬トン、玄米に換算して約三十萬石弱、雜穀は約三萬五千トン、すなはち約二十五萬石を生産し、二十年度（二十一米穀年度に算入）は粟は約十四萬トン、玄米にして約六十八萬石、雜穀は約九萬五千トン、約七十萬石弱を生産することとなる。

以上で緊急農地造成計畫の大要を明かにしたが、この農地造成の仕事の主體となるものは滿洲土地開發株式會社を改組擴充せる滿洲農地開發公社である。滿洲農地開發公社は滿洲國の特殊法人で資本金五千萬圓である。工事に必要なる總經費四億圓は政府において全額を負擔するが、前述した通りその半額は日本政府が出資する。

勞務關係については現地滿人苦力のほか、かなり多數の鮮農が入り込んでゐる。大體において充足してゐる樣子であるが、さらに學徒、兒童その他を動員して組織的な勤勞奉仕を行ふことになつてゐる。

幸ひこれらの地區はおほむね地質がアルカリ土壤であり、

計　三〇、〇〇〇　一〇、〇〇〇　元、〇九九　五〇、八五一

「總面積」　水田　畑

十九年度	三五、七六〇	四三、一三五
二十年度	七三、二五九	二七、六二九
總計	一〇九、〇一九	七〇、八六二

右のごとき計畫をもつて造成せられた農地は初年度において七割、第二年度以降において十割が開墾される。いま各年度別に作付面積の目標數量を示せば左表の通りである。（單位ヘクタール）

年度	水田	畑
十九年	二七、三〇〇	四六、二〇〇
二十年	七一、九〇〇	一一一、五〇〇
二十一年	一四四、八〇〇	一六五、三〇〇
二十二年以降	一七〇、〇〇〇	一八〇、〇〇〇

以上のごとき規模において造成せられた農地における粟、雜穀の收穫物は、國內必要量を見合せて可及的に日本へ向けて出すことになつてゐるが、大體の增產目標の年次別による數量は左表の通りである。

收穫目標（單位トン）

年度	粟	雜穀
十九年	四九、一四〇	三五、五七〇
二十年	一四〇、〇〇〇	九五、〇〇〇
二十一年	三〇〇、〇〇〇	一六六、〇〇〇
二十二年	三八五、〇〇〇	一九〇、〇〇〇
二十三年	四一七、〇〇〇	二〇二、〇〇〇
二十四年以降	四二五、〇〇〇	二〇五、〇〇〇

特に第二松花江地區はきはめて肥沃である。水利の便も松花江のダムや東遼河における治水事業などそれ〳〵きはめて順調に進められてゐる。

輸送の關係で注目すべきことは、昨今の情勢にもとづき從來の海運依存をやめて陸運に轉換したことで、從つて從來の大連中心の交易は少くなり、鮮滿國境の清津、羅津および釜山などが漸次地歩を固めつゝある。

六　食糧確保の日滿一體性

滿洲國は大東亞共榮圈における穀倉としてその前途は洋々たるものがあり、以上論述せる緊急農地造成計畫もすでに着着として進行してゐる。戰力增强の根本命題の一つが食糧自給體制の確立にある以上、滿洲國に課せられた使命は實に重かつ大である。

今後の滿洲農業の課題は何か。

まづ第一にあげねばならぬことは農業技術水準の畫期的な引上げである。そのためには科學的な試驗研究ないし調査が徹底的に行はれねばならない。これまでの非合理的な掠奪農法を根本的に淸算して、百年の大計にもとづく最も合理的な邁增農法が敢然として採用されねばならぬ。その具體的な方策としては、滿系技術員を大量に養成して、これを增産第一線に挺身せしめ、優秀なる指導者を配して農業技術指導網の確立擴充をはからねばならぬ。しかして農業經營形態については、畜力機械力の普及利用を徹底せしめ、滿洲獨自の農法を體系づけねばならないのである。

これと並行して重要なのは農村に對する政治力の滲透、農民に對する政治的把握であつて、全農村を組織化し、國で樹立した施策は必ず農村の末端、農民の個々人にまで徹底するごとき態勢をととのへねばならぬ。國防國家における經濟はつねに計畫經濟であり、その遂行は必ず强力なる政治力によつて裏づけられねばならない。

つぎに忘れてはならぬのは滿洲大豆についてである。本論においては當面の日滿綜合食糧自給の中心題目たる緊急農地造成計畫に關する概貌を論ずることが主體であつたため、直接大豆に觸れることはなかつたが、大豆こそ滿洲における農產物の大宗であつて、從來はもちろん、今後においても滿洲農業の首座を占めることは論をまたない。しかも現在大豆は從前と異つて主要食糧として新しい角度から再認識さるべき段階に到達してゐる。わが國においては澱粉質系食糧にはめぐまれてゐるが、植物質蛋白食糧の給源に乏しい。蛋白質榮養の補給の問題が重大化してくるに從つて滿洲大豆は優秀な蛋白質給源として新しい價値を獲得した。こゝにおいて滿洲は日滿を通ずる食糧基地たると同時に、さらに大豆の供給基地たることによつて重要性を一段と深くするものである。

ともあれ滿洲國は今回の緊急農地造成計畫の遂行によつて、日滿を通ずる食糧自給體制の確立を達成せんとしてをり、その役割はきはめて大きい。これに對する日本側の措置もおほむねよろしきを得て、資金、技術、資材その他必要部面において能ふかぎりの積極的援助を行はんとしてゐる。ここにおいて日滿の緊密なる一體化はその實效を大いに發揮するのであつて、その成果はもつて期すべきものがある。

最後に一言附加すべき事柄は、從來食糧問題に關する考へ方として、土地と人口との相關關係に立脚して考へを進める傾向が一般的であつたが、今後の考へ方としては、その地域の產業の發展形態を重要なる要因として考へねばならぬといふことである。內地において食糧問題が緊迫せる相において日程にのぼつてきたのは、諸種の要因に基くものであるが、就中、重工業の畫期的な大擴張にともなふ鑛工業勞務者軍の大量再編成による米穀消費の激增が大きいものである。朝鮮においても現在その傾向が顯著となりつゝあり、滿洲においても今後かゝる傾向が漸次强くなるものと考へられる。農民が鑛工業勞務者に移行してゆく場合、生活水準の向上にともなつて米穀の消費が增加して行く。日滿を通ずる綜合食糧計畫の遂行にあたつても、このことを十分に考慮に入れて行はなければ重大なる違算を生ずる時期が來ないとはいへないのである。

さらにまたいま一つの問題は、從前の內地の食糧需給の實情について一段と分析を加へねばならぬことである。戰前の日本の米穀事情は滿洲國の大豆、舊蘭印の油脂を五十萬トン、八十萬トンと大量に輸入して、これらを飼料として成立してきた。すなはち大量の飼料輸入を基礎として、戰前の米穀事情はなり立つてゐたのである。舊蘭印からの物資の輸入が船腹の關係から杜絕し、滿洲大豆も多方面の用途に供せられるにいたつた今日、この點においても戰前の食糧需給體制が相當な改編を余儀なくされるのは當然である。

ともあれ今後の食糧問題は相當多くの問題を持つてをり、高度の工業化が進展するにつれて諸種の問題が派生し、究極のところは南方地域をも含めた大東亞共榮圈全體を通ずる食糧自給體制の確立が、遠からずして日程にのぼることとならう。

資料と解說

グルーの「東京報告」批判

岡本鶴松

この「東京報告」は日本に十年間も滯在し、日本朝野の名士、識者と交はり、日本の習慣、民情、政治などを仔細に觀察した者の著述であるだけに、アメリカの政府當局者や、一般國民の間に多大の注目をひくにいたつた。アメリカ政府當局者がその對日戰爭遂行の方針、政策などの作成に當り、グルーのこの著述を參考として、そののべてゐる點をその政策中に織込んでゐることは、アメリカ當局者の對內宣傳と、グルーの「東京報告」とを比較すれば一目瞭然である。また一般アメリカ國民の現戰爭に對する認識もこの「東京報告」の影響を被つてゐる點の多いことも自ら首肯されるのである。それ故にグルーがこの「東京報告」でどんなことをいつてゐるかを知り、そのうちのいづれの點が日本を正解してゐるか、いづれの點が日本を誤解してゐるか、あるひは故意に事實を歪曲して、アメリカ國民の判斷を誤らせてゐるかを檢討することは日本の對米思想戰遂行の上にすこぶる重要な仕事であらねばならない。それゆゑこゝに「東京報告」の要點を紹介することにする。

「東京報告」は全篇を左の十一章にわけてゐる。(一)歸國、(二)戰爭の原因、(三)日本の挑戰の範圍、(四)いかにして日本を破るべきか、(五)何故に吾人はもはや日本を相手にはできぬか、(六)日本の青少年、(七)日本における眞理、(八)人種戰爭か否か、(九)太平洋におけるわが同盟國、(十)日本とその誓約の履行、(十一)將來の建設。

一　米國政府、國民への影響多大

前駐日アメリカ大使グルーは歸國後「東京報告」を發表し、アメリカ國民に時局の重大性を認識させようと努めた。

第一章の「歸國」において、グルーは[illegible]の東京における彼の身邊についてのべ、進んで日本がいかにアメリカ攻撃を長年にわたり準備してゐたかを國民に徹底せしめようと努めてゐる。しかしてこの戰爭を挑發したものがアメリカではなくて日本にほかならないと第一章からはつきりとのべ、これが全篇を通じていたるところに力說されてゐる。しかして。グルーの言に從へば日米戰爭におけるアメリカの主要任務は日本の巨大な軍部機構を破碎するにあるといふのである。グルーは

「日本の軍部を破り、その派閥を倒すにあらざればアメリカはもちろん、世界の同盟國民は一日も枕を高うして眠ることは出來ない。されば世界の文明、人類の福祉のためにもアメリカは是非ともこの對日戰爭に打勝たなければならないが、これは容易な業ではない。よほどの決心と犧牲を拂はなければこの目的を達することはできない」

といつて、この第一章を結んでゐる。

第二章の「戰爭の原因」においてもグルーはことさらに日本國民と軍部とを畫然とわけてゐる。また「太平洋の西岸にある諸國民については、日本人についてと否とを問はずアメリカやカナダの重大關心事である」と、グルーも一般アメリカ人のやうに、アメリカが東洋に君臨し、東洋民族を支配す

ることを當然とし、それが東洋諸國民の福祉を增進する所以であると、臆面もなく廣言してゐるのである。

かくてグルーはさらに日本がアメリカに挑戰した原因といふことにおよんでゐる。彼はこれに關し左の二問題を提供してゐる。(一)は日本は何故に巨大な工業および潛在的强力な軍事力を有する米英に挑戰したのか。(二)は狂信的ではあるが打算に富める日本の支配階級がいかにして英米、重慶その他の反樞軸國民に對し勝利を夢想したのかといふのである。第一問に對しグルーの回答はかうである。

「日本が英語國民に對し不遜の態度をとるのは日本人の優越觀および實力に關する自信と、英米の劣等と脆弱を信ずる觀念からきてゐる。しかして日本人のかくのごとき觀念は一はその有する神話の產物であり、また一は日本人の國家的虛榮の結果である。しかしこれは日本人の眼からみれば論理的かつ實際的で堅い根據を有してゐることである。日本人は一致團結してゐる。その政府當局が愚者であつても賢者であつても、これを支持してゐる。天皇を神聖なものとしてゐる日本國民は陛下を通じてその軍部を信じ、その支配をもつて正しいものとしてこれに服從してゐる。ドイツやイタリアにおいては機會だにあれば叛亂を起さうとしてゐる諸團體が存在してゐるが、日本にはかゝる團體はない。つぎに日本人はよく訓練されてゐる。彼らは公然とその武器はアメリカの武器に劣つてゐるけれども、アメリカ人はそれを實質以下に評價してゐるといふ點が日本にかへつて有利であるとしてゐる。日本人はまた節約の國民である。日本帝國はほとんど不足によつて今日の繁榮を來した。貧乏の眞只中で彼らは巨大な軍部機關を建設した。北アメリカにおいて棄てられてゐるやうな食糧は日本全人口を養つて餘りある。つぎに日本人は狂信的である。彼らは戰勝を確信してゐる。そしてこれを賭する政府を信じてゐる。この國民的信仰の源はどこにあるか。その一部はキリスト紀元以前の彼らの歷史すなはち半ば神祕的な數世紀時代に遡つてゐる。また一部は最後に蒙古の大艦隊を破つた支那民族との久しい間の鬪爭に起因してゐる。日本人は少くとも戰時に際しては全體主義國である。獨伊兩國が聯邦制度を採つてゐたときに日本はすでに獨裁制、祕密警察、「危險思想」抑壓を行つてゐた。日本はファシズムにも、國家社會主義にも轉向する必要はない。日本はすでにこの兩者を兼ねてゐたからだ。日本はヒットラーを要しない。

右のごとき諸資格を有し、右のごとき政體を有する日本の支配者が戰爭を忌避せず自信滿々として國民を戰爭に導いたのは敢て不思議ではない。日本の支配者は決して吾人が想像するほどに形勢を誤算してはゐない。日本は過去における戰勝を記憶してゐる。日本はニューオルリアンや桑港、ヴァンクヴァー、またはトロントを今次の戰爭で占領しようとは期待してゐない。日本はアジアを征服し、吾人をそこから驅逐し、吾人を弱小化させるやうな講和をなすべく余儀なくさせることを眞劍に考へてゐる。そして五年、十年あるひは五十年ののち奴隸にされた十億のアジア民族を使用し(米人自身の他民族に對する觀念をもつて日本を誣ひてゐる!)東洋の全資源をあげて再びアメリカを討つであらう。日本の征服欲には限度がない。この征服欲と、日本のアメリカに對する評價とをもつて日本が眞珠灣を攻擊したのは論理的發展であつた。アメリカ政府はことこゝにいたるべきをあらかじめ察知してゐた。日本との貿易關係を打切り、遲蒔きながらアメリカが軍備再建に乘出したのはこれがためである。

いまや何人も日本を三箇月で破り得ると信ずる者はない。日本艦隊や空軍を最早小馬鹿にはしない。吾人は一致團結したおそるべき敵に直面してゐるのである」と、

以上が第二章の要點であるが、グルーは日本の軍事機關の强力な點、および國民が陛下に對すると同じ忠誠をもつて軍部を援けて大東亞戰爭を完遂しつゝある點を重視して、もつてアメリカ國民の對日戰爭に對する遊戲的氣分、樂觀的氣分を警戒してゐる。日本に關するグルーの意見はすべてグルーが外交官として十年間日本に滯在した事實のため實際以上に評價されてゐることは想像するに難くない。最近大統領が國民徵用法案を議會に提出するにあたり、グルーの意見を利用して國民をしてこの法案を鵜呑みにさせるに役立たせようとしたのは、このためである。しかしてグルーの意見は事實を誇張してゐるのみならず、奇怪なるは日本の征服欲といふやうなことを前提に立てて、アメリカ大陸征服、いな世界の征服にまで發展するものと獨斷してゐることである。これはアメリカ國民をして莫大な犧牲をかへりみず戰爭遂行に引きづつてゆくには、戰爭目的を明確にしておかねばならないからである。なんのためにアメリカは戰つてゐるのかといふ國民の怨嗟の聲は、戰爭に拂ふ國民の犧牲が大きく、戰爭が長引くに從つてます〳〵增大するであらう。戰爭目的がアメリカの世界制覇であるやうに國民に思はれてはかへつて逆效果を來して國民の間から反戰論が擡頭すべきは明かである。そこで日本のおそるべきことを力說しなければならない。從前のやうに日本の國力をことさらに過小に評價し、陸、海、空軍を子供の玩具扱ひにしては國民が眞劍にならないから戰爭は長引くばかりである。それゆゑに日本の强さを强調し、そ

のおそるべき將來性、殊に世界征服の野心を包藏することをまことしやかに宣傳することによつてアメリカ國民の奮起を促すことを試みてゐるのである。

三　對日戰の困難を強調

第三章の「日本の挑戰の範圍」において、グルーは日本國民がいかなる貧乏の境遇をも甘受するものであることを說いて、生活に對する觀念が自由を尊ぶアメリカ國民と根本的に相違してゐる點を指摘してゐる。彼は曰く

「日本人は建國以來統制に馴らされてゐる。西洋では封建政治は數百年も以前に既に滅びてしまつたが、日本ではごく最近までこの組織が行はれてゐた。現在なほ生存してゐる日本人の中には封建時代に生れた者もゐる。すなはち彼らは大名が人民の生命の生殺與奪の權を握つてゐた時代を知つてゐるのである。日本人はアメリカ人には到底堪へられないやうな貧弱な食事で戰爭もすれば、工場でも働く。彼らはアメリカの高度の生活水準のために西洋文明が墮落し、または惰弱に陷つたと信じてゐる。かゝる考へ方を持つやうになつた日本人は、民主主義は國民を惰弱にする。生活水準の高いときは國民は弱くなる。平和は國民を弱くすると信ずるにいたつたのである。これこそ眞にアメリカに對するおそるべき挑戰といはねばならぬ。」

と、グルーはこんな調子で日本と戰ふことのいかに困難であるかを强調し、

「この困難を克服して日本を破るにあらざれば、すなはち日米戰爭にてアメリカが敗北すれば、こんどはアメリカが奴隸にされてしまふのである。しかしアメリカ人は敗北せぬであらう。なんとなればアメリカ人は自由な國土に住んでゐる自由人であつて、アメリカは自由を保存し、その家庭、その傳統、その文明、その原則、その人道主義を保存せしめようとの堅い決意を有してゐるからである。」

とのべて第三章を結んでゐる。

第四章においてグルーは日本を破る方法を說いてゐる。

曰く「日本國民は絶對に日本の軍部當局者を信賴し、これに服從してゐるから日本國民が政府當局者に對して反抗し、叛亂を起すがごときことを期待することはできない。これを期待できないうちは太平洋に永遠の平和は決して來ないであらう。しからば日本國民の軍部當局に對する信賴が薄らぐやうなことはないかといふに、それはアメリカとその與國の軍隊が日本軍を破ることによつてはじめて實現するであらう。」と。

しからば日本軍を破るにはどうすればよいかといふ問題についてグルーは戰略はこれを專門家に一任し、素人として二個の手段を示唆してゐる。

「一は日本軍をその占領してゐる幾多の島嶼や基地から漸次驅逐すること。二は日本海軍、船舶、空軍をつぎ〳〵と擊破して日本軍の戰鬪力を弱め、同時にその補給線を斷つて本國を占領區域から孤立せしめることである。しかしこれは最終の段階ではない。むしろ最終段階の第一步であらう。」と。

かく日本擊破の手段方法を示唆したのち、グルーはアメリカ國民の決心を促してゐる。それは彼が十年間日本に滯在して得た知識を基礎としてアメリカ國民に警告を發したのである。彼はドイツと日本との差異を認めてゐる。彼はドイツにも十年滯在したのであるからドイツに關する彼の知識も日本に關する彼の知識に劣るものではない。かくて彼はその豐富な知識をもつて兩國の國民性の差異を比較檢討して一つの結論を得たのである。それは、

一九一八年にドイツ國民は戰が不利になると士氣沮喪して參つてしまつた。それゆゑに今度もドイツ人は戰局が彼に不利に進展すれば一九一八年の二の舞を演ずるであらう。しかるに日本人はたとひ戰に敗れても決して精神的にも、經濟的にも參らないであらう。一杯の粥を半杯に減じても、戰ひ拔くであらう。たゞ人的および物的資源が全く盡き果てゝはじめて彼らは敗れるのである。それに日本軍は支那との戰爭で五年間の實戰の經驗を持つてゐる。この强力な日本軍を破ることは容易ではない。

とグルーがアメリカ國民に異常の決心を抱かなければならないことを警告してゐるのであるが、しかし彼は同時に日本の新占領地域が決して不敗の態勢にありとは認めてゐない。弱點も多々あるから、これを巧みに利用すれば結局日本の地位は危殆に陷る。それは日本が大東亞戰爭開始後數千平方マイルに達する地域を占領したが、しかもその防禦線の側面にある英米の有力な陣地を奪取することができなかつたのである、といつてゐる。

また日本の防禦線の弱點としてはグルーは日本の補給が海上から行はれなければならない點を指摘してゐる。海上輸送は敵の攻擊に暴露されるといふ弱點を有してゐる。日本は船舶の損失を容易に補充できる國ではないから、船舶の消耗によつて終局の敗北を喫することがないとはいへぬ。しかし以上の弱點が必ずしも日本の敗北の原因となるとは斷言できない。たゞアメリカとその與國が一大攻勢をとり、上述の日本の弱點を利用することによつてのみはじめて日本を破ること

ができるといつてゐる。

グルーは日本國民の強味は熱狂的にその政府當局者に服從することである。アメリカ國民の強味は上からの命令を待たないで自ら考へ自ら行動するにあるといつてゐる。それゆゑにアメリカ國民は政府が國民のために考へてくれるのを待つてゐてはならぬ。ワシントンの當局者はすでに非常な重荷を負つてゐる。だから勝利への途を進むに當局者は一々國民の手をとつて、それを指示するやうでは駄目だ。この戰爭はアメリカの戰爭であることを忘れてはならないといつて本章を結んでゐる。

四　日米交涉を歪曲强辯

第五章の「何故に吾人はもはや日本を相手にはできぬか」において、グルーはアメリカがこのうへ消極的態度をとることが望ましくなくなつたと感じた時がつひにきたとのべてゐる。けだし彼は當時、問題は日本の膨脹計畫を阻止しなければならぬか、どうかといふことではなく、いつかくのごとき時がくるかであるといふ意見を持してゐたのである。彼は曰く、

「日本の膨脹が繼續するときは、アメリカの生命線に對する脅威は最も重大な性質を帶びるのである。しかしてかくのごとき時期がくるまではアメリカは石油、鐵屑その他の物資を日本へ自由に輸出してゐた。かゝる時期がきてはじめてアメリカはこれらの輸出を禁止したのである。」

と說いてゐる。彼のいふところによると、

アメリカ政府が日本に對して採つた政策は「アッピーズメント」といふよりも、「建設的融和」政策といふべきである。この政策によつて日本は得るところ多くて、失ふところは一つもない。これによつて日米兩國の間に合理的な協定が成立すれば貿易は活潑になり、財政的協力が可能となり、兩國が同等の機會をもつて東亞の資源に自由に近づくことができる。日本はこれによつて生活水準を高め、將來の繁榮を保障することもできるのに、日本の樞軸派はこれに耳を傾けなかつたので、この協定は成立しなかつたのである。彼らはその同盟國ドイツがレーベンスラウムと稱するものを求めたのである。

と、厚かましくも當時の事實に反することを平然とのべ、こゝにグルーはレーベンスラウムの註解を行つてこれは生活すべき空間となんらの關係はなく、むしろ野獸的な征服と搾取のための空間を意味するとのべて、地政學の科學的論據を殊更に無視してゐるのは滑稽である。かくて彼はイギリスやアメリカが搾取のため植民地を有してゐることを忘れてゐるかのごとき口吻を弄してゐるのである。

グルーは進んで日本がこのレーベンスラウムを得るために侵略政策をとるにいたり、それがため日本の支配階級は經濟と國民の福祉增進といふ實際的な簡單な考へ方を戰爭の神話に對する考へ方に變へなければならなくなつたとのべて、いつも國民と支配階級とを隔離して論じてゐる。グルーは經濟から戰爭の神話への轉換の一例として滿洲事變をあげ、この頃から日本人の間に唱へられるにいたつた大東亞圈すなはち東亞のレーベンスラウムは經濟的の概念ではなく、征服の概念である。日本の極反動派は戰爭の目的のために自給自足を欲し、決してアメリカその他と自由貿易を欲しなかつたと說き、かくのごとき新經濟的概念をもつて、日本はその艦隊、陸軍、空軍の背後にある軍事經濟へ一切を注ぎ込んでゐるから、アメリカにとり日本は實におそるべき敵であるとのべて、いつも自分の結論へ讀者を導かうと試みてゐる。殊に本章の末端においてグルーは、今次の戰爭は一國民對一國民の戰爭ではなく、また一地方的の戰爭または、かゝる戰爭の集つたものではない。世界を征服し、これを奴隸化しようとする世界的の大軍を滅ぼさんがための戰爭であるとのべてゐる。

五　自ら矛盾に陷る

第六章の「日本の青少年」において、グルーは日本青少年の軍事教練をとり上げ、國民學校時代から日本の少年は嚴格な軍事教育を受けてゐる事實を指摘し、この事實をもつて彼は日本の戰爭準備であつたと斷言し、この準備が眞珠灣攻擊以來の日本軍の成功の原因であるといつてゐる。なほ著者は青少年の軍事訓練をもつて單なる軍事訓練ではなく、むしろ少年の精神訓練であるといひ、この精神訓練は目上の命令に對する絕對服從を目的としてゐる。しかしこの青少年の教育方針は日本の本國に限局されてゐないで、滿洲をはじめ、新たに占領した比島その他の青少年にまで適用されてゐることに對しアメリカ國民の注意を喚起してゐる。彼はヒットラーがドイツの青少年の心を把握した結果を知る者はアジア民族に對する、殊にその青少年に對する日本の計畫のいかなるものであるかについて概念を得るであらうと說いてゐる。日本今日の軍人は軍國の榮譽を原理化した結果生れたので、軍人が戰場で喜んで自分の身命を擲つことは學問的に一主義を遵奉する結果ではなく、子供の時分から國家のため身を捧げるやうその情緒を馴致する結果である。そしてかくのごとき國

民を生んだ諸勢力は家族、學校、兵役、國教、および個人に對する國體の抑壓力などである。これらの勢力によつて絶對服從と犧牲、すなはち軍國に對する服從と犧牲を自分の教養とする國民が生れるのである。といつて日本軍の强さの原因について强調してゐる。

しからばこの强い日本軍を破るにはどうすればよいかといふ問題に逢着してグルーは一のヂレムマに陷つたのである。彼はこの强い日本軍を破るにはアメリカ人自身も日本人のやうな犧牲を拂ふ決心がなければならないことを說かねばならない羽目に陷つた。彼は一個人が國家の一從屬物にすぎないやうな人生觀を排斥しながら、日本軍を破るためにアメリカ人自身もこの人生觀を持たねばならぬことを間接に認めるにいたつた。たゞこれによつて日本を破ることができれば、その時はじめてアメリカ國民はその固有の生活を享くることができるといひ、その生活とはなんであるかといふに、それは例によつて自由、正義の上に立脚した生活であるといふ使ひふるしの原理を振りかざし、あたかも日本人の生活には自由も正義もないと暴斷するところに、グルーもまた一般民主主義國人、特にアメリカ人の日本に對する認識不足の弊に陷つてゐるのである。

第七章は「日本における眞理」といふ題であるが、グルーは日本政府の政策は民をして知らしめないにあるといひ、その證據としてラジオ、書物などの統制をあげ、その統制の方法は、日本人の唯一の信仰たる神話に反するやうな思想を盛つた外國の書物は悉く輸入を禁止されてゐると極言してゐる。グルーは日本國民が全く無智で、たゞ軍部當局に盲從してゐるから、彼らが事實の眞相を知らないのは無理もない。たゞアメリカが日本の軍部機構を完全に打破するまでは日本國民の迷夢を覺ますことはできないと說いてゐるのは、各章を通じていつも彼が附會する結論である。

六　反間苦肉の言

第八章は人種問題を取扱つてゐる。彼の說によると、

「日本人は人種戰爭を說いてゐる。日本の當局者はドイツの軍部と同じく經濟的理由のために國民が戰死するやう敎へることができないのを承知してゐる。なんとなれば侵略戰爭でなんら經濟的利益は得られないからである。また宗敎戰爭へも國民を指導することはできない。なんとなれば現代人は宗敎的理由では戰ふを欲しないからである。また帝國主義そのものゝために戰ふやう國民を說得することもできなかつた。そこで戰爭の原因として人種問題をとり上げた。これは一見いかにも科學的であるからである。」

と、かくいふグルーはアメリカが人種排斥の本尊であることを百も承知してゐるので、左のごとき辯解を試みてゐる。曰く

「われらアメリカ人は『東洋的』とか『アジア的』とか、もしくは『黃色人種』といふものはたゞ單に假定として存在してゐることを知つてゐる。われらの科學者は人種の定義についてはもつと周到の注意を拂つてゐる。ドイツ人は實在してゐないアリアン主義とか、セミチズムの名をもつてしば〳〵罪惡を犯してゐる。アメリカ人もまたつねにこの言葉を用ひてきた。アメリカの新聞は日本人をアジア人と稱してゐる。しかして日本が支那をその第一の最大敵國としてゐることを忘れてゐる。」

と、のべてゐるのは、今次の戰爭を人種問題と關聯せしめられることを極力避けようとする態度を示唆したもので、これは支那をはじめ東洋諸民族が日本の味方になりつゝあることをおそれ、これが牽制策であることは明かである。それゆゑに大東亞宣言のごときはアメリカに深刻な打擊を與へたこともおのづから首肯されるのである。

第九章においてはグルーは「太平洋における同盟國」と題し、口を極めて重慶政權を稱揚してゐる。大西洋においてはイギリスとソ聯の勇氣と犧牲心を稱揚してゐるが、太平洋においてアメリカの味方として戰つてゐる國は重慶のみであるだけに、これに投じてゐる賞讚の辭は輕薄で齒が浮くやうである。たとへば支那が東洋において文化の指導國であつたから、この支那の太平洋戰爭における役割は根本的な重要性を持つてゐるとのべ、支那が敗れゝば東洋の文化は一掃されるから、アメリカ國民は東洋における最も豐かな文化の繼承國に自由を與へるために戰つてゐるといふにいたつては實に滑稽で反駁の要をすら認めないのである。

七　遂に日本侵攻の暴言

第十章は日本とアメリカとの國交について論じ、アメリカがペルリを送つて日本に開港を迫り、その後ハリスを公使として派遣して日本と通商條約を締結した經緯をるゝとしてのべ、アメリカがいかに日本を國際場裡へ導き、文明國の伍伴に入らしめたかについて、アメリカ國民の注意を喚起した。しかして日本はアメリカのかゝる恩顧に對し何を報いたかと問ひ、日本民族の自然の發展をもつてあたかも侵略政策の遂行であるごとくに國民に信ぜしめようとしてゐる。すなはち朝鮮併合からワシントン條約およびその後の日本の行動は悉

くこれ誓約の破棄であると稱し、結論として、

「いつかアメリカの軍隊は日本の沿岸に上陸するであらう。しかしそれまでに日本政府はおそらく倒れてゐるだらう。日本の支配者は征服を試みた結果その目さすゴールは幻影にすぎなかつたことを發見するだらう。その時こそアメリカが東洋の秩序を回復する時である。」

といつてゐる。グルーはさきに日本國民は絶對に政府に服從してゐるといつておきながら、この章であたかも國民にかかる不穩分子のあることを期待し、彼の說くことに一大矛盾を生ずるにいたつた。

最後の十一章は「將來の建設」といふ題で再びアメリカ國民に、日本に對する認識の足りないことに注意を喚起してゐる。彼は曰く、

「今次の戰爭でアメリカは勝利を得るだけで滿足してはならない。日本の軍事機關やそれに隨伴する政治團體を無力化しなければならない。さうしてはじめて眞の平和が來て、堅實な基礎の上に立つ新世界が出現するのである。この新世界の建設に役立つものはヴェルサイユ條約をかくも短命にした高價な誤謬や短見を參考とし、この過失をくり返へさないやうにしなければならぬ。」

とのべて彼の「東京報告」を結んでゐる。

八　米國の世界征覇思想

以上グルーの長論文を一讀して何人も感ずる點は、アメリカが世界新秩序を樹立しようとするその念願が、各ページに橫溢してゐることである。これはひとりグルーの論文ばかりではない。ウィルキーの「一つの世界」中にものべられてある。しかしてアメリカの欲する世界新秩序は、アメリカが世界の警察權を握り、その指導下におかうとするもので、これはアメリカの世界制覇を美辭麗句で示唆したにすぎないのである。しかして吾人が對米宣傳上最も注意しなければならない點は、アメリカ國民の一部分がグルーの東京報告中にのべてあるやうな日本の世界征服を眞面目に信じてゐるおそれがあることである。もし彼らがルーズヴェルト一派の支配階級の今次の戰爭の眞の目標は、アメリカの帝國主義の遂行にほかならないものであることを知るにいたれば、彼らの間に反戰運動の擡頭すべきは火をみるよりも明らかである。ルーズヴェルトの最もおそれる點はこれである。ゆゑに國民が最もおそれてゐる自由の喪失と日本の世界征服とを關聯せしめ、今次の戰爭にアメリカが敗北を喫すれば日本の世界征服が實現することになり、その結果アメリカ國民は自由、正義、民主主義を失ふであらうと說いてゐる。しかしてアメリカ國民がルーズヴェルトの思ふやうに、さう易々と日本の世界征服といふ虛構の事實を信じないので、これを信じさせようとして種々の宣傳工作をなしてゐる。その結果でき上つたのが日本の神話と世界征服とを結びつけたのである。グルーの東京報告のごときもこの宣傳の一役を承はつたものと推察される。この仕事にはグルーは最適任であることは、彼が駐日大使として十年間日本に駐在して日本の風俗習慣を知悉し、かつ日本の歷史にも相當の知識のある點が國民の信用を得るのに大いに效果的であるからである。

アメリカの帝國主義に反對し、十九世紀の後半以來アメリカの大陸防衞主義を主張してきた政治的および思想的一團がある。これを大陸派と稱し、それが後には孤立主義派となつたのである。ルーズヴェルト一派の帝國主義派は、この孤立派の言動がアメリカの政界に相當根强い勢力を持つてゐて、事毎に帝國主義者に反抗してその政策を議會で打破るに業を煮やしてゐる。そこで彼らは日獨兩國の世界征服といふ鬼面をでつち上げて、これをもつてアメリカ國民を感嚇し、同時に孤立主義者をもつてあたかも日獨兩國の世界征服を默認する賣國奴であるが如き觀を抱かしめようと努めてゐる。たま〳〵日本の輿論がアメリカの孤立主義者の正論を正當に認識するや、アメリカの帝國主義者は得たり賢しと、この事實をとり上げて、孤立主義者を槍玉にあげ、もつて彼らを國民の間に不信ならしめようとしてゐるのである。

かくてグルーの「東京報告」より吾人が得る事柄は、アメリカ國民の間に日本の大東亞戰爭に對する眞の認識を深めさせることである。それは日本が世界の新秩序樹立を欲する點は毫もアメリカ國民に劣るものではないが、一民族の指導下に世界をおくことによつて世界の平和を庶幾することは困難である所以を說き、むしろ地域的にアメリカ大陸、ヨーロッパ大陸、大東亞といふがごとき地理的區域によつて各々その圈域內の秩序を維持して、互に他を侵さないやうにするのが日本の大東亞戰爭の眞の目的であることを科學的に、論理的に諄々と說き伏せることである。かくてアメリカ國民ははじめてルーズヴェルト一派の野心に目覺め、反戰運動を展開する望みがないとはいへないのである。これわが宣傳の是非とも仕遂げねばならない大使命である。